宮城県文化財調査報告書第179集

一里塚遺跡

－第44・47次発掘調査報告書－

平成11年3月

宮城県教育委員会
宮城県土木部

一里塚遺跡

－第44・47次発掘調査報告書－

第47次調査Ⅰ区　竪穴住居群（東から）

第47次調査Ⅱ区　区画施設（ＳＡ34 a･b ・ ＳＤ33、南東から）

第47次調査　ＳＩ14ｂ住居跡出土遺物

第47次調査　ＳＤ33溝跡出土遺物

序　　文

宮城県では遠く旧石器に遡るものから、近世にいたるまで各時代の遺跡が数多く知られています。これらはいずれも私達の祖先が築き上げた歴史を究明してゆく上で不可欠な文化財であることはいうまでもありません。このような貴重な文化遺産を守り、後世に伝えることは、私達にとって大きな責務であると考えております。

近年においては、これまでの開発優先のあり方に対する反省から、文化財や自然を大切にしようとする動きが浸透しつつあります。こうした状況のなか、重要な遺跡を現状保存し、地域づくりの一環として積極的に整備活用してゆこうとする動きが広がってきていることは、文化財保護思想のより一層の普及・啓蒙につながるものであり、まさに歓迎すべきことといえましょう。

しかし、一方では頻発する開発行為により、遺跡のいくつかは記録保存の名のもとに、滅失する危機にさらされているのも実情です。このことに対し、宮城県教育委員会では、各市町村教育委員会とともに、遺跡の所在や範囲等について関係者への周知を図りながら、開発工事とのかかわりが生じた際には、十分な協議・調整を重ね、可能な限り現状保存に努めているところです。

本書は、当教育委員会が宮城県土木部との保存協議に基づき、道路改良事業に伴って実施した発掘調査の報告書です。これらの成果が広く活用され、地域の歴史の解明の一助となれば幸いです。

最後に、遺跡の保存にご理解を示され、調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成11年 3 月

宮城県教育委員会教育長

遠　藤　嘉　彬

例　　言

1．本書は県道吉岡～鶴巣線・大和～松島線の道路拡幅工事に伴う一里塚遺跡の第41・42・44・47次発掘調査報告書である。なお、第42・41次調査はそれぞれ第44・47次調査の確認調査にあたる。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。なお、第42・44次調査については大和町教育委員会の協力を得ている。

3．本書における土色の記述については、『新版標準土色帖 17版』（小山・竹原編：1996）を使用した。

4．本書の第２図は、建設省国土地理院発行の１：25,000「七ッ森」・「吉岡」・「根白石」・「富谷」を複製して使用した。また、第３・４・５図は「仙塩広域都市計画図（１：2,500）」を複製して使用している。

5．本書の写真図版１は、昭和23年に米極東空軍が撮影した空中写真（上：R1387—26）と平成５年に国土地理院が撮影した空中写真（下：CTO—93—01X—005—15）を複製して使用している。

6．本書に掲載した遺構図中に示された方位はすべて座標北を指している。なお、磁北との偏差は西に8°30′40″である。

7．本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、発掘現場で付したものをそのまま使用した（欠番あり）。遺構の種別については以下の記号を使用して区別した。

SI：竪穴住居跡　　SB：掘立柱建物跡　　SA：材木塀跡・柱穴列　　SK：土壙

SD：溝跡・河川跡　　SF：小溝状遺構群

8．本書における遺構・遺物の実測図、遺物写真図版の縮尺は原則として以下の通りである。

個別の遺構：1/60　　土器類・土製品・石製品：1/3（写真図版36—7・8、37—18・19・20は1/2）

木製品・凝灰岩の切石：1/6　　種子類：1/1　　動物遺体：2/1（写真図版38—21は3/2、写真図版38—22・23は1/1）

9．本書の遺構平面位置の表示は、各調査の原点を基準として、方位を東＝E・西＝W・南＝S・北＝Nの略記号で表示し、距離をメートル単位で示している。

10．本書の整理、遺構・遺物のトレースは、加藤道男・三好秀樹・藤村博之・佐藤由美子・村田亜弓小泉博明・鎌田泰之が行った。

11．本書の執筆は、調査担当者との協議の後に以下のような分担で行い、三好秀樹が編集した。なお、付記については菅原弘樹・西村力が執筆した。

第１章・第II章－２・第III章・第IV章－２・第Ⅴ・VI章…三好秀樹

第II章－１・第IV章－１…藤村博之

12．出土木製品の樹種同定は、㈱パレオ・ラボに委託して行った。

13．本遺跡の調査成果については、宮城県遺跡調査成果発表会・古代城柵官衙遺跡検討会でその内容の一部を報告しているが、これらと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。

14．発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに……1

1．遺跡の位置と地理的環境……1

2．周辺の遺跡……1

3．これまでの調査成果……3

第Ⅱ章　調査の方法と経過……10

1．第42・44次調査……10

2．第41・47次調査……11

第Ⅲ章　基本層序……12

1．第44次調査……12

2．第47次調査……13

第Ⅳ章　発見された遺構と遺物……15

1．第44次調査……15

① 掘立柱建物跡・柱穴列　② 材木塀跡

③ 溝跡　④ 小溝状遺構群

⑤ 土壙　⑤ その他の出土遺物

2．第47次調査……24

① 掘立柱建物跡・柱穴列　② 竪穴住居跡

③ 区画施設　④ 溝跡

⑤ 河川跡　⑥ 土壙

⑦ その他の出土遺物

第Ⅴ章　考察……114

1．第44次調査区……114

① 出土土器の特徴と年代について　② 遺構について

2．第47次調査区……116

① 出土遺物について　② 遺構について

③ 外郭に区画施設を伴う集落域の性格について

第Ⅵ章　まとめ……146

引用・参考文献……147

付記　一里塚遺跡出土の動物遺体……150

写真図版……156

付編　宮城県一里塚遺跡出土木製品の樹種同定……194

挿　図　目　次

第１図　一里塚遺跡の位置 …… 1
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第３図　調査区の位置とこれまでの調査区 …… 6・7
第４図　一里塚遺跡遺構全体図 …… 8・9
第５図　第42次調査の範囲と第44次調査区の位置 …… 10
第６図　第41次調査の範囲と第47次調査区の位置 …… 12
第７図　第47次調査区基本層序 …… 14
第８図　第44次調査II・VI・VII区遺構配置図 …… 16
第９図　第44次調査III・IV・V区遺構配置図 …… 18
第10図　SB04・05・08・10建物跡、SA23材木塀跡断面 …… 19
第11図　SD01・02溝跡断面 …… 20
第12図　SK03・21・22土壙断面 …… 22
第13図　第44次調査出土遺物 …… 23
第14図　第47次調査区遺構配置図 …… 26・27
第15図　SI01住居跡および出土遺物 …… 28
第16図　SI02住居跡 …… 29
第17図　SI02住居跡出土遺物 …… 30
第18図　SI03住居跡 …… 31
第19図　SI03住居跡出土遺物 …… 32
第20図　SI30住居跡 …… 33
第21図　SI04住居跡 …… 35
第22図　SI04住居跡出土遺物（１） …… 36
第23図　SI04住居跡出土遺物（２） …… 37
第24図　SI05・25住居跡および出土遺物 …… 39
第25図　SI06・27住居跡 …… 41
第26図　SI06・27住居跡出土遺物 …… 42
第27図　SI07住居跡および出土遺物 …… 43
第28図　SI08住居跡 …… 45
第29図　SI09住居跡 …… 46
第30図　SI09住居跡出土遺物 …… 47
第31図　SI10住居跡 …… 49
第32図　SI10住居跡出土遺物 …… 50
第33図　SI29住居跡 …… 51
第34図　SI11住居跡 …… 52
第35図　SI11住居跡出土遺物 …… 53
第36図　SI26住居跡 …… 55
第37図　SI12住居跡および出土遺物 …… 56
第38図　SI13住居跡 …… 57
第39図　SI13住居跡出土遺物 …… 58
第40図　SI14a・b住居跡 …… 59
第41図　SI14b住居跡出土遺物（１） …… 62
第42図　SI14b住居跡出土遺物（２） …… 63
第43図　SI14b住居跡出土遺物（３） …… 64
第44図　SI15住居跡 …… 65
第45図　SI15住居跡出土遺物 …… 66
第46図　SI23住居跡および出土遺物 …… 67

第47図　SI16 住居跡……69
第48図　SI16 住居跡出土遺物（1）……70
第49図　SI16 住居跡出土遺物（2）……71
第50図　SI19 住居跡および出土遺物……72
第51図　SI21 住居跡および出土遺物……74
第52図　SI36 住居跡……75
第53図　SI36 住居跡出土遺物……76
第54図　SI55 住居跡……77
第55図　SI37・38 住居跡および SI37 住居跡出土遺物……79
第56図　SI39 住居跡……80
第57図　SI40・41 住居跡および SI41 住居跡出土遺物……81
第58図　SI42 住居跡……82
第59図　SI43 住居跡および出土遺物……83
第60図　SI44 住居跡……85
第61図　SI44 住居跡出土遺物……86
第62図　SI45 住居跡および出土遺物……87
第63図　SI47 住居跡……89
第64図　SI48 住居跡および出土遺物……90
第65図　SI49 住居跡……91
第66図　SI51 住居跡および出土遺物……92
第67図　SI52 住居跡……94
第68図　SI53 住居跡および出土遺物……95
第69図　SI54 住居跡および出土遺物……97
第70図　SI80 住居跡……98
第71図　SI80 住居跡出土遺物……99
第72図　SA34a 材木塀跡、SD32・33 溝跡……101
第73図　SA34b 材木塀跡……102
第74図　SA34a・b 材木塀跡、SD32・33 溝跡断面……103
第75図　SD33 溝跡出土遺物（2層）……104
第76図　SD33 溝跡出土遺物（4～7層、その1）……104
第77図　SD33 溝跡出土遺物（4～7層、その2）……105
第78図　SD33 溝跡出土遺物（4～7層、その3）……106
第79図　SD33 溝跡出土遺物（8～10層、その1）……107
第80図　SD33 溝跡出土遺物（8～10層、その2）……108
第81図　SD32 溝跡出土遺物……109
第82図　SD50 河川跡断面……110
第83図　SD50 河川跡出土遺物（1）……110
第84図　SD50 河川跡出土遺物（2）……111
第85図　SK18 土壙および出土遺物……113
第86図　第44次調査区掘立柱建物跡の配置……115
第87図　土師器坏・鉢・ミニチュア土器、須恵器坏の各類……122
第88図　土師器甕の各類……123
第89図　竪穴住居跡の面積……132
第90図　竪穴住居跡の方向……132
第91図　カマド燃焼部の奥行き・中心幅相関分布図……136
第92図　カマド燃焼部の奥行き・焚き口幅相関分布図……136
第93図　カマド焼け面の奥行き・幅相関分布図……136
第94図　貯蔵穴状ピットの短軸・長軸相関分布図……136

第95図　円筒形土製品と焚き口構築材に凝灰岩切石を用いるカマド ……137
第96図　蓋とその据え方をもつ貯蔵穴状ピット ……139
第97図　第33・47次調査区遺構配置図 ……139
第98図　外郭に区画施設を伴う集落域の全体図 ……142
第99図　外郭に区画施設を伴う集落と近接する城柵・官衙の位置 ……144

表　目　次

第1表　一里塚遺跡調査区一覧表 …… 5
第2表　SI14a・b住居跡土層観察表 ……60
第3表　土壙一覧表 ……112
第4表　第44次調査区掘立柱建物一覧表 ……115
第5表　土器各類の出土状況 ……124
第6表　住居共伴・堆積土一括資料における土師器坏A・B類の集計 ……129
第7表　住居共伴・堆積土一括資料における土師器甕胴部外面の最終調整の集計 ……129
第8表　第47次調査区竪穴住居一覧表 ……131
第9表　住居カマド属性表 ……134
第10表　住居貯蔵穴状ピット属性表 ……135
第11表　住居共伴資料における土師器坏A・B類の集計 ……140
第12表　住居共伴資料における土師器甕胴部外面の最終調整の集計 ……140
第13表　出土動物種名表 ……152
第14表　出土動物遺体一覧表 ……152

写真図版目次

図版1　一里塚遺跡周辺の空中写真(昭和23年米極東空軍撮影・平成5年建設省国土地理院撮影) ……156
図版2　44次 調査区全景、SB04・05建物跡 ……157
図版3　44次 SB08・10建物跡、SA23材木塀跡 ……158
図版4　44次 SB04・05・08・10建物跡柱穴断面、SB05建物跡柱穴礎板 ……159
図版5　47次 調査I・II区全景 ……160
図版6　47次 調査II区全景、SI02・03住居跡、SI03住居跡カマド、SI03住居跡主柱穴礎板 ……161
図版7　47次 SI04・05・06・25住居跡、SI06・07住居跡カマド ……162
図版8　47次 SI07・08・09・10住居跡 ……163
図版9　47次 SI11・13住居跡、SI11・13住居跡カマド ……164
図版10　47次 SI14・15住居跡 ……165
図版11　47次 SI08・11・14住居跡主柱穴断面、SI14b住居跡カマド・貯蔵穴状ピット ……166
図版12　47次 SI16・36・37・55住居跡、S116住居跡カマド、SI36住居跡主柱穴断面 ……167
図版13　47次 SI42・43・44住居跡、SI36住居跡主柱穴底面の樹皮 ……168
図版14　47次 SI45・47住居跡、SI45住居跡カマド・貯蔵穴状ピット ……169
図版15　47次 SI51～54・80住居跡、SK59土壙、SI51・80住居跡カマド ……170
図版16　47次 SA34a・b材木塀跡平・断面、SD32・33溝跡平・断面 ……171
図版17　47次 SA34a・b材木塀跡平・縦断面、SD33溝跡木製品出土状況、SD50河川跡 ……172
図版18　44次調査、47次 SI01・03住居跡出土土器 ……173
図版19　47次 SI04・05・06住居跡出土土器 ……174
図版20　47次 SI06・07・09・25・27住居跡出土土器 ……175
図版21　47次 SI09・10・11住居跡出土土器 ……176
図版22　47次 SI11・12・13・14b住居跡出土土器 ……177
図版23　47次 SI14b住居跡出土土器・土製品 ……178
図版24　47次 SI14b・15住居跡出土土器 ……179
図版25　47次 SI15・16・23住居跡出土土器 ……180

図版26　47次 SI16 住居跡出土土器……181
図版27　47次 SI19・36・37 住居跡出土土器……182
図版28　47次 SI44・48・51・53・54・80 住居跡出土土器……183
図版29　47次 SI80 住居跡、SD33 溝跡出土土器……184
図版30　47次 SD33 溝跡出土土器……185
図版31　47次 SD33 溝跡出土土器……186
図版32　47次 SD32・33 溝跡出土土器……187
図版33　47次 SD50 河川跡出土土器……188
図版34　47次 SD50 河川跡、SK18 土壙出土土器……189
図版35　47次 SI14b 住居跡、SD33 溝跡出土遺物(集合)……190
図版36　木製品、土製品、凝灰岩製支脚、凝灰岩の切石……191
図版37　石製品、種子類、その他の出土遺物……192
図版38　出土動物遺体……193

調　査　要　項

遺 跡 名：一里塚遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：23019）

遺跡記号：KJ（旧柴崎遺跡の調査ではPLを使用）

所 在 地：宮城県黒川郡大和町大字吉岡字東柴崎・吉田字桧木地内ほか

調査面積：第44次調査　約1,240㎡

第47次調査　約2,230㎡

（第42・41次調査はそれぞれ第44・47次調査の確認調査にあたる）

調査期間：第41次調査　平成8(1996)年4月15日～25日

第42次調査　平成8(1996)年4月15日～25日

第44次調査　平成8(1996)年5月8日～6月4日・11月6日～8日

平成9(1997)年3月6日～7日

第47次調査　平成9(1997)年6月24日～12月24日

平成10(1998)年7月29日～8月20日

調査担当：第42・44次調査　宮城県教育庁文化財保護課、大和町教育委員会

第41・47次調査　宮城県教育庁文化財保護課

調 査 員：第41次調査　髙橋栄一、三好秀樹、吉野　武、藤村博之

第42次調査　髙橋栄一、藤村博之、藤井裕二(大和町教育委員会)

第44次調査　髙橋栄一、三好秀樹、吉野　武、藤村博之、藤井裕二

第47次調査　真山　悟、後藤秀一、佐藤則之、古川一明、天野順陽、髙橋栄一

佐藤憲幸、三好秀樹、吉野　武、藤村博之、佐藤貴志

調査協力：第42・44次調査　千田建設株式会社

第41・47次調査　大和建設株式会社

第Ⅰ章　はじめに

1．遺跡の位置と地理的環境（第1・2図）

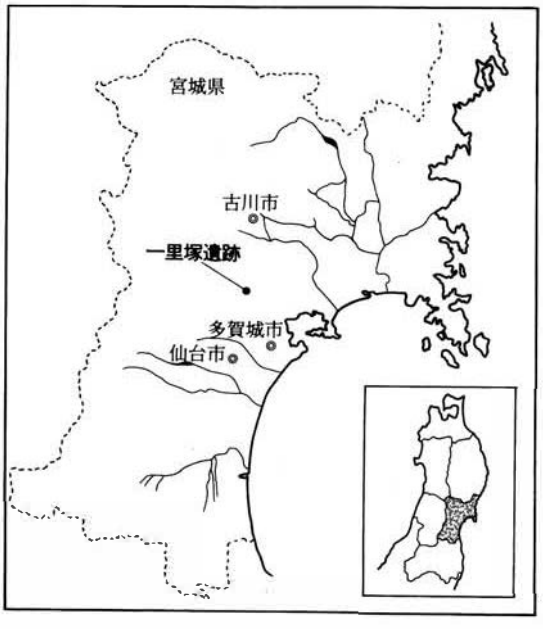
一里塚遺跡は、黒川郡大和町吉岡の中心部から南東へ約1㎞離れた国道4号線の東側に位置する古墳時代末から奈良･平安時代が中心の遺跡である。この遺跡は蛇行しながら東流する吉田川の左岸(北側)に形成された河岸段丘面上（標高16～20m）に立地しており、段丘面の北側は吉田川の支流である善川によって画され、東は吉田川低地へと連なっている。

遺跡の範囲は東西約1.1㎞、南北約0.9㎞(面積は約40ha)にも及ぶ広大なもので、その一部(第4図参照)は宮城県の指定史跡になっている。昭和23年に米極東空軍が撮影した空中写真(写真図版1－上)を見ると、遺跡内では開田が進んで旧地形が失われているものの、段丘面は南東方向へ緩やかに傾斜しており、西縁から南縁部には吉田川の流路に沿って河川氾濫原の痕跡とみられる一段低い部分が残る。吉田川が氾濫を繰り返しながら常に流路を変えて流下していたことが窺われる。

2．周辺の遺跡（第2図）

一里塚遺跡の周辺には旧石器時代から近世にかけて多くの遺跡が分布している。ここではそれらの中でも本遺跡と深く関連する7世紀中頃から9世紀にかけての墳墓跡や城柵・官衙・寺院跡、窯跡、集落跡などの様相をみてみる。

本遺跡周辺で調査が行われている該期の墳墓跡には色麻町色麻古墳群・蝦夷塚古墳群などの終末期群集墳と三本木町山畑横穴墓群・青山横穴墓群・混内山横穴墓群・坂本館山横穴墓群などの横穴墓がある。この内、色麻古墳群は7世紀中葉から8世紀前半にかけて造営された推定総数500基からなる大規模な群集墳で、直径10m前後の小円墳を主体とし、築造の最盛期は7世紀末から8世紀初頭頃とみられている（古川：1983･1985)。7世紀中葉から後半の時期を中心に8世紀初頭頃までの古墳からは関東系土師器が出土しており、その類例を含め、玄室部平面形が「胴張り」を呈する単室構造の横穴式石室をもつ群集墳の系譜を関東地方北西部に求めて、古墳群の形成にこれらの地域の人々が強く関与していたことが指摘されている。



第1図　一里塚遺跡の位置

主な城柵･官衙や寺院跡としては色麻町一の関遺跡、中新田町城生柵跡・熊野堂遺跡・菜切谷廃寺跡、古川市名生館遺跡・伏見廃寺跡、宮崎町東山遺跡などが挙げられ、最近ではこれらに付随する大規模な集落の存在（宮崎町壇の越遺跡など）も注目されている。しか

No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	一里塚遺跡	段丘	集落・官衙	旧石器、縄文、古墳後～中世	19	吉岡城跡	段丘	城館	近世	37	島畑窯跡	丘陵斜面	窯跡	奈良
2	中峯A遺跡	段丘	集落	縄文、平安	20	下草古城跡	自然堤防	集落・城館	古墳、平安、中世、近世	38	大崎窯跡	丘陵斜面	窯跡	古代
3	中峯B遺跡	段丘	集落	縄文早～中、弥生、平安	21	塚越遺跡	丘陵裾	散布地	古代	39	町場遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
4	中峯C遺跡	段丘	集落	旧石器、平安	22	熊野遺跡	丘陵裾	散布地	古代	40	寺原遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
5	北目大崎古墳	丘陵尾根	古墳？	古墳	23	古川遺跡	自然堤防	散布地	古代	41	泊遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
6	未練遺跡	段丘	散布地	縄文、古代	24	草遺跡	段丘	散布地	古代	42	日光山小塚群	丘陵	塚	中世
7	天泉寺遺跡	段丘	集落・製鉄	縄文、平安、近世	25	石神沢遺跡	段丘	散布地	旧石器、縄文晩、平安	43	島尾2号墳	丘陵斜面	古墳	古墳後
8	加美山遺跡	丘陵	散布地	平安	26	大沢遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	44	亀岡遺跡	丘陵裾	官衙(郡理集落？	縄文中・晩、古代
9	相川堤防遺跡	自然堤防	散布地	縄文、古代	27	東新橋野堂遺跡	段丘	散布地	縄文、古代	45	亀岡古墳	段丘	古墳	古墳
10	要害遺跡	丘陵裾	散布地	縄文、弥生、古代	28	岩下遺跡	丘陵裾	散布地	古代	46	豊田金沢遺跡	丘陵斜面	散布地・製鉄	縄文晩・後、古代
11	要害館跡	丘陵	城館	中世、近世	29	信楽寺跡	丘陵裾	寺院	中世	47	長基遺跡	丘陵	城館	中世、近世
12	御所館跡	丘陵	城館	中世	30	島尾八幡古墳	丘陵斜面	円墳	古墳後	48	駒場館跡	丘陵	城館	中世
13	上雲野A遺跡	自然堤防	散布地	縄文、古代	31	鶴巣館跡	丘陵	城館	中世	49	大街城跡	丘陵	城館・散布地	縄文、中世
14	上雲野B遺跡	自然堤防	散布地	古代	32	観音堂小塚群	丘陵尾根	小塚	中世、近世	50	古城跡跡	丘陵	城館	中世
15	八谷館跡	丘陵	古墳、城館	古墳、中世	33	天神館跡	丘陵	散布地・城館	縄文、中世	51	梅木遺跡	丘陵裾	集落・居宅	縄文早～中、古代、近世
16	新田古墳(1・2号墳)	丘陵斜面	古墳	古墳	34	別所横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳	52	鶴巣城跡	丘陵	城館	中世
17	新田古墳(3号墳)	丘陵斜面	円墳	古墳	35	勝負沢遺跡	段丘	散布地	縄文前・中、平安	53	門前城跡	丘陵	城館	中世
18	一里塚	自然堤防	一里塚	近世	36	日光山遺跡	丘陵裾	墓・祭祀遺跡	奈良、平安、中世、近世	54	鶴山経塚	丘陵尾根	経塚	室町

第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡

し、いずれの遺跡も大松沢丘陵を隔てた北側の鳴瀬川・江合川水系の流域に位置しており、一里塚遺跡からはやや距離がある。調査されている最も近い官衙関連遺跡は大衡村亀岡遺跡で、9世紀初頭を中心とした頃の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土器焼成遺構などが検出されている（村田：1995a)。建物と住居が共存する遺構のあり方や出土遺物に円面硯、銅製巡方、須恵器水瓶が認められることから官衙に関連する集落の可能性が考えられているが、土器焼成遺構の存在や出土土師器の製作技法が須恵器と共通する点などから須恵器工人の集落の可能性も残る。

窯跡は周辺に多く認められる。大和町鳥屋窯跡群では、三角田南地区(東北学院大学考古学研究部：1975)で窯跡2基が調査されており、8世紀前半の須恵器が出土している。色麻町日の出山窯跡群(岡田他：1970、古川：1993)は、多賀城創建期の瓦や須恵器を生産していた県内有数の窯跡群で、操業年代は8世紀前半を中心に考えられており、大崎地方の城柵・官衙への瓦の供給、加えて墳墓や一部集落への須恵器の供給も行われていた。また、色麻町内の官林・高根・土器坂の各窯跡からは多賀城創建以前のものと考えられる瓦が出土しており、これらの窯跡は7世紀末から8世紀初頭頃には操業して、製品を主に大崎地方に供給していたと推察されている。さらに、大衡村大衡窯跡群は8世紀中葉から9世紀後半にかけて須恵器を生産した大崎地方屈指の窯跡群である。この内、萱刈場窯跡A地点（村田：1995b）と彦右エ門橋窯跡（真山：1989、高橋：1996、佐藤憲：1997）では一部の調査が行われており、それぞれ8世紀中葉頃の地下式窖窯3基、8世紀後半頃の半地下式窯1基が確認されている。

他の生産遺跡としては、9世紀初頭頃に土師器を集中的に生産していたとみられる色麻町上新田遺跡（小井川：1981）や、平安時代の製鉄炉が2基検出されている大和町天皇寺遺跡（斎藤：1990）が挙げられる。上新田遺跡では、土器の特徴から須恵器工人の土師器生産への関与が指摘されている。

集落跡で発掘調査が行われているものには、色麻町色麻遺跡や大和町中峰A・C遺跡、大衡村梅木遺跡、大郷町鶴館遺跡などがあり、いずれも丘陵上に立地する9世紀後半頃を中心とする時期の集落である。一里塚遺跡周辺には7世紀中頃から8世紀代の時期の一般集落の調査例が殆ど認められない。

3．これまでの調査成果（第3・4図、第1表）

一里塚遺跡内では、これまで主に土地区画整理事業に係わる発掘調査が宮城県教育委員会・大和町教育委員会によって行われており(第3図、第1表)、その調査成果から西半部を中心に遺跡の様相が明らかになってきている(第4図)。報告書の未刊部分が多いため詳細は不明であるが、①塀で囲まれた掘立柱建物群がある遺跡中央部（指定史跡部分を含む）と②区画施設を伴う集落域が検出された南西部、③竪穴住居と掘立柱建物で構成される北西部は調査が進んでいる区域で、その内容を要約すると次の通りである（要約の内容は手塚他：1989・1990、平成3～5年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨、第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料による）。

①中央部：南側と東側に棟門をもつ東西58m、南北54m以上の方形に巡らされた材木塀で区画された掘立柱建物群があり、その外側にも掘立柱建物が計画的に配置されていて、更にそれらを囲む東西135m、南北110m以上の溝が確認されている区域である。材木塀の内部では、総

柱の建物や床束もしくは土居桁を伴う建物などが区画の中央空間地を囲む形に規則的に配置されている。これらの建物と材木塀には大きい建て替えが1度認められ、最終段階で火災を受けており、柱穴の柱痕跡埋土から多量の炭化米が出土した建物もある。また、火災以降の建物群も検出されている。この区域は、構築年代については明らかでないが、その特徴や周辺の遺構・遺物の検討からおよそ8世紀後半から9世紀初頭頃の時期に利用された官衙区域と考えられている。

②南西部：北辺で110m、東辺で150m以上の規模をもつ溝と材木塀で囲まれた竪穴住居と掘立柱建物から構成される区域で、関東系土師器も出土している。7世紀末から8世紀中葉頃の集落域と考えられており、短期間の中で数時期の変遷が認められる。区画内中央部に逆「L」字状に配された建物4棟が存在する時期があり、面積が45.0㎡を越える大型住居も検出されている。住居と建物の重複関係・配置から両者の共存が指摘されている。

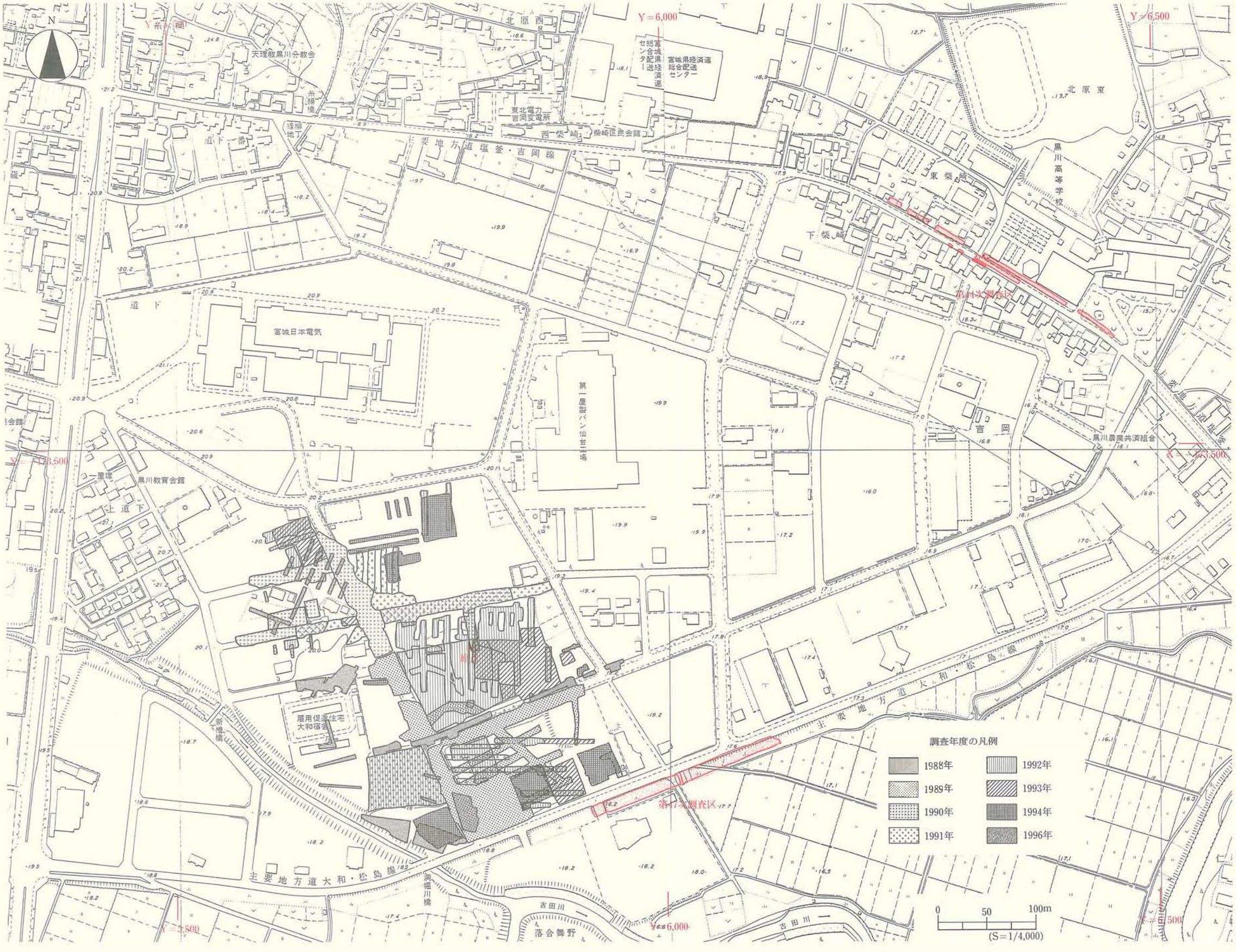
③北西部：竪穴住居と少数の掘立柱建物から構成される区域で、出土遺物からみて7世紀末から9世紀代の集落域と考えられている。現在のところ区画施設は検出されておらず、住居や建物の方向・配置にも規則性は認められない。

以上の調査成果を踏まえて、中央・南西部では遺構の性格が予察されている。

一里塚遺跡付近は、奈良･平安時代においても黒川郡に含まれる。『和名類聚抄』には9世紀頃の黒川郡が白川・新田・駅家の三郷から成り立っていたことが記されており、郡内に駅家が置かれていたことから北へ向かう官道（東山道）が通っていたことも窺われる。従って、本遺跡の中央部は郡衙、駅家など官衙施設の一部である可能性があるといえるが、建物の規模や配置、「倉庫院」とも考えられる建物群が存在する点から、黒川郡衙に付随する「正倉院」を中心とする官衙区域と推定されている。また、南西部は官衙に関連して計画的につくられた大規模集落で、関東地方からの移住者の存在が予想されている。

調査年度	次	調査地区	種別	期間	面積	報告書
昭和63年	1	土地区画整理事業(A～D)	確認	6. 6～ 7.20	3,600㎡	宮城県教育委員会 1989
(1988)	2	土地区画整理事業(C-4・5 E-1・2)	事前	10.24～11.10	1,700㎡	〃
平成元年	3	土地区画整理事業(C)	事・確	5. 8～ 9.25	10,500㎡	宮城県教育委員会 1990
(1989)		土地区画整理事業(B・E)	事前			
平成2年	4	土地区画整理事業(6－8間)	事前	5. 7～ 8.23	600㎡	
(1990)		土地区画整理事業(8地区9～14)	確認		597㎡	
	5	土地区画整理事業(8－9間)	事前	5.17～10. 3	1,050㎡	
	6	土地区画整理事業(6地区2・3・8)	確認	8.20～ 8.28	70㎡	
	7	土地区画整理事業(6－12, 8・9－12間)	事前	9.14～11. 7	2,500㎡	
	8	土地区画整理事業(11－12間 12地区)	確認	10.22～11. 9	2,170㎡	
	9	土地区画整理事業(6－8間)	〃	10.30～11. 7	340㎡	
	10	土地区画整理事業(8地区8)	〃	10.31～11. 7	213㎡	
平成3年	11	土地区画整理事業(6－8間)	事前	5. 7～ 6.19	540㎡	
(1991)	12	土地区画整理事業(11－12間)	〃	5.14～ 8.27	2,130㎡	
	13	土地区画整理事業(6地区5・6)	確認	5.22～ 5.23	200㎡	
	14	土地区画整理事業(13地区1)	〃	8.19～ 8.28	500㎡	
	15	土地区画整理事業(5地区2)	事・確	8.28～ 9.13	3,180㎡	
	16	土地区画整理事業(11地区8～10)	確認	11. 1～11. 5	1,480㎡	
平成4年	17	土地区画整理事業(11地区)	〃	4. 6～ 7.15	520㎡	
(1992)	18	土地区画整理事業(12地区)	〃		5,470㎡	
	19	土地区画整理事業(13地区)	〃		1,290㎡	
	20	土地区画整理事業(9地区10)	〃	5. 7～ 6. 1	720㎡	
	21	土地区画整理事業(9地区12)	〃	5.13～ 5.21	203㎡	
	22	土地区画整理事業(5地区2)	事前	6. 5～ 9. 1	1,290㎡	
	23	土地区画整理事業(6地区3)	確認	8. 7～ 8.20	247㎡	
	24	土地区画整理事業(13地区1)	事前	8.24～ 9.30/11.30～1.22	1,290㎡	
	25	土地区画整理事業(12地区11～13)	事・確	10. 5～12.27	6,762㎡	
平成5年	26	土地区画整理事業(13地区4)	確認	5.24～ 5.28	330㎡	
(1993)	27	土地区画整理事業(9地区10・11)	事前	6.10～11. 5	1,422㎡	
	28	土地区画整理事業(12地区11)	〃	9. 6～ 9.13	170㎡	
	29	土地区画整理事業(12地区11)	〃	9. 7～ 1.11	4,400㎡	
	30	土地区画整理事業(6－8間)	〃	10.12～10.15	120㎡	
	31	土地区画整理事業(13地区9)	〃	11.9～ 1.27	1,113㎡	
平成6年	32	土地区画整理事業(12地区9)	確認	4.11～ 4.22	60㎡	
(1994)	33	土地区画整理事業(13地区9)	事前	4.11～ 6.23	1,020㎡	
	34	土地区画整理事業(13地区11・12)	〃	4.11～ 7.22	1,179㎡	
	35	土地区画整理事業(11地区8)	〃	5.23～ 6.29	580㎡	
	36	土地区画整理事業(5地区2)	〃	5.26～ 7.29	1,250㎡	
	37	土地区画整理事業(11地区2)	〃	7.25～12. 9	1,375㎡	
	38	土地区画整理事業(5地区1)	確認	12.12～12.22	101㎡	
	39	土地区画整理事業(11地区1)	〃	3.14～ 4.21	692㎡	
平成7年 (1995)	40	宮中販数地	〃	12.11～12.13 1.25～ 1.29	153㎡	
平成8年	41	県道(大和・松島線)	確認	4.15～ 4.25	9,000㎡	本報告書
(1996)	42	県道(吉岡・鶴巣線、旧柴崎遺跡)	〃	4.15～ 4.25	2,100㎡	〃
	43	個人住宅(12地区8)	〃	4.23～ 4.25	36㎡	大和町教育委員会 1997
	44	県道(吉岡・鶴巣線、旧柴崎遺跡)	事前	5.8～6.4/11.6～8/3.6～7	1,240㎡	本報告書
	45	個人住宅(8地区3)	確認	8.26～ 8.27	18㎡	大和町教育委員会 1997
	46	個人住宅(6地区4)	〃	8.26～ 8.27	22㎡	〃
平成9年 (1997)	47	県道(大和・松島線)	事前	6.24～12.24	2,100㎡	本報告書
平成10年 (1998)	(47)	県道(大和・松島線)	事前	7.29～ 8.20	130㎡	本報告書

第1表　一里塚遺跡調査区一覧表



第3図　調査区の位置とこれまでの調査区

第４図　一里塚遺跡遺構全体図

第II章　調査の方法と経過

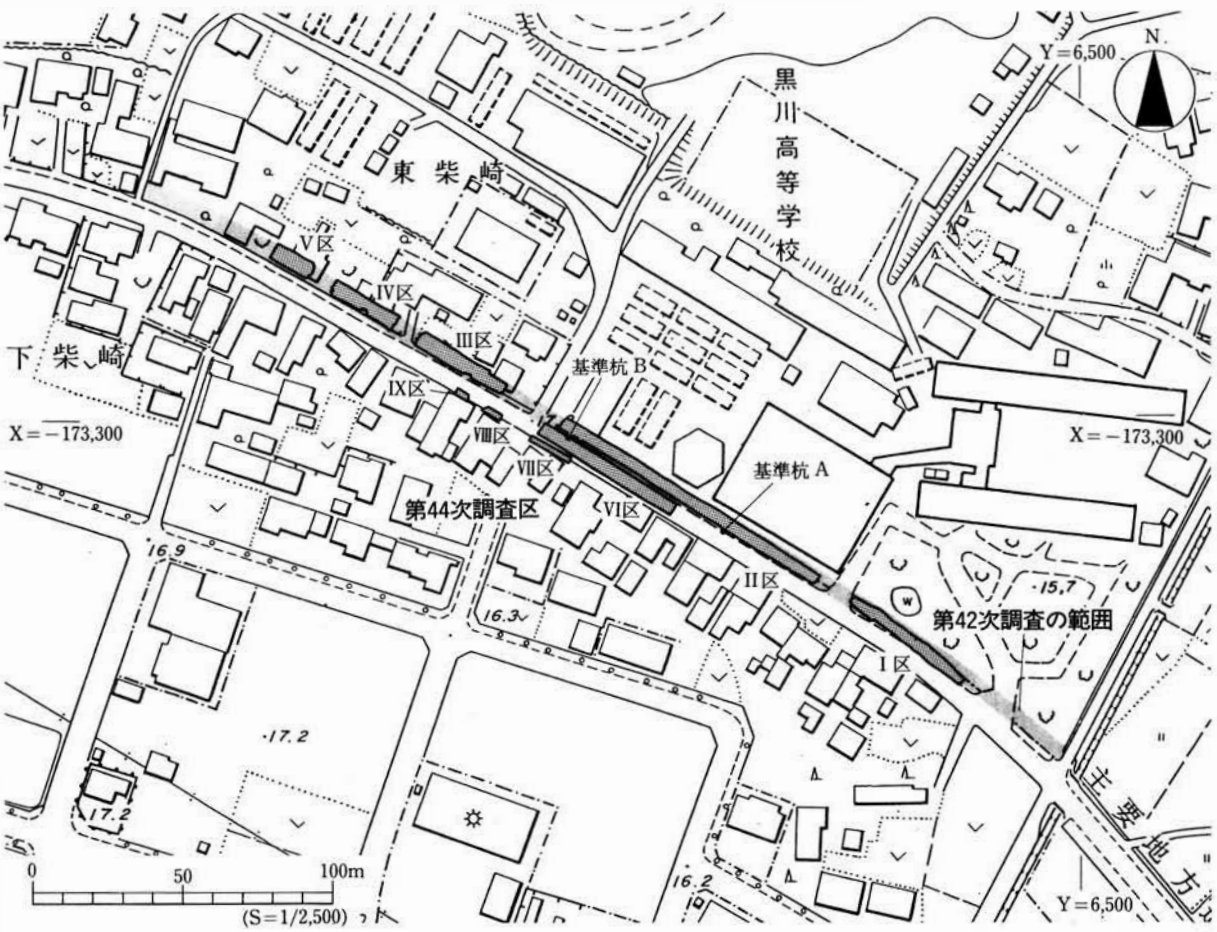
1．第42・44次調査（第５図）

第42・44次調査は、県道吉岡・鶴巣線拡幅工事に係わるものである。第42次調査が対象区域内の確認調査、第44次調査が事前調査にあたる。

平成８年度になって、本遺跡の北東部を北西・南東方向に走る県道吉岡・鶴巣線の拡幅工事計画が仙台土木事務所から提示された。そこで、仙台土木事務所、宮城県教育委員会、大和町教育委員会の３者が対応について協議を行い、両教育委員会で遺跡内に掛かる工事対象域の発掘調査を実施することとした。

まず、平成８年４月15日から25日にかけて道路拡幅部分に重機を使用して任意のトレンチを設ける形の確認調査を行った。その結果、掘立柱建物跡、溝跡、土壙などの遺構が北西･南東方向約270mにわたって検出された。遺構が確認された部分は段丘面の北東縁にあたる。これより東側は急激に低くなって湿地状で、西側は開田時に大きく削平されている。いずれでも遺構は検出されなかった。

その後、遺構が検出された範囲を対象に現道も含め事前調査を行っている。工事予定道路は交通量が多く車両の通行を妨げられない状況であったため、はじめに改修後の北側車線・歩道となる拡幅部分約930㎡（調査Ⅰ～Ⅴ区）の調査を５月８日から６月４日にかけて行い、続いて、工事と並行する形



第５図　第42次調査の範囲と第44次調査区の位置

で南側車線となる現道部分約240㎡（調査VI区）を11月6日から8日にかけて、南側歩道となる現道部分約70㎡（調査VII～IX区）を平成9年3月6・7日に調査した。なお、現道部分の調査は交通の安全を重視して主な遺構が広がる範囲に止めた。調査区は道路脇の学校・店舗・家屋への出入り口を確保するためトレンチ状の小区に分かれている。

遺構確認面までの掘り下げには重機を使用し、グリットは付け替え道路のセンター杭2点（第5図の基準杭Aと基準杭B）を結ぶ線を東西の基線とし、基準杭Aを東西南北の原点とする3m方眼で設定した。グリットの南北ラインは座標北から東へ30°51′37″偏しており、基準杭の国家座標は次の通りである。

・基準杭A　X＝－173,338.228　Y＝6,383.522　・基準杭B　X＝－173,307.466　Y＝6,332.008

検出した遺構の平面・断面図は主に1/20の縮尺で作成し、I・VI～IX区の平面図は1/100の縮尺で平板測量した。記録写真は35㎜モノクロ・カラーリバーサルフィルムと6×7モノクロフィルムを用いて撮影した。

なお、第42・44次調査地点を含む一帯は一里塚遺跡とは別に柴崎遺跡として宮城県遺跡地図・地名表に登載されていたが、同一の段丘面上で近接していることや、時期・性格とも共通するとみられる遺構が確認されたことから、この部分を一里塚遺跡の中に含めその範囲を大きく捉え直して取り扱うことにした。

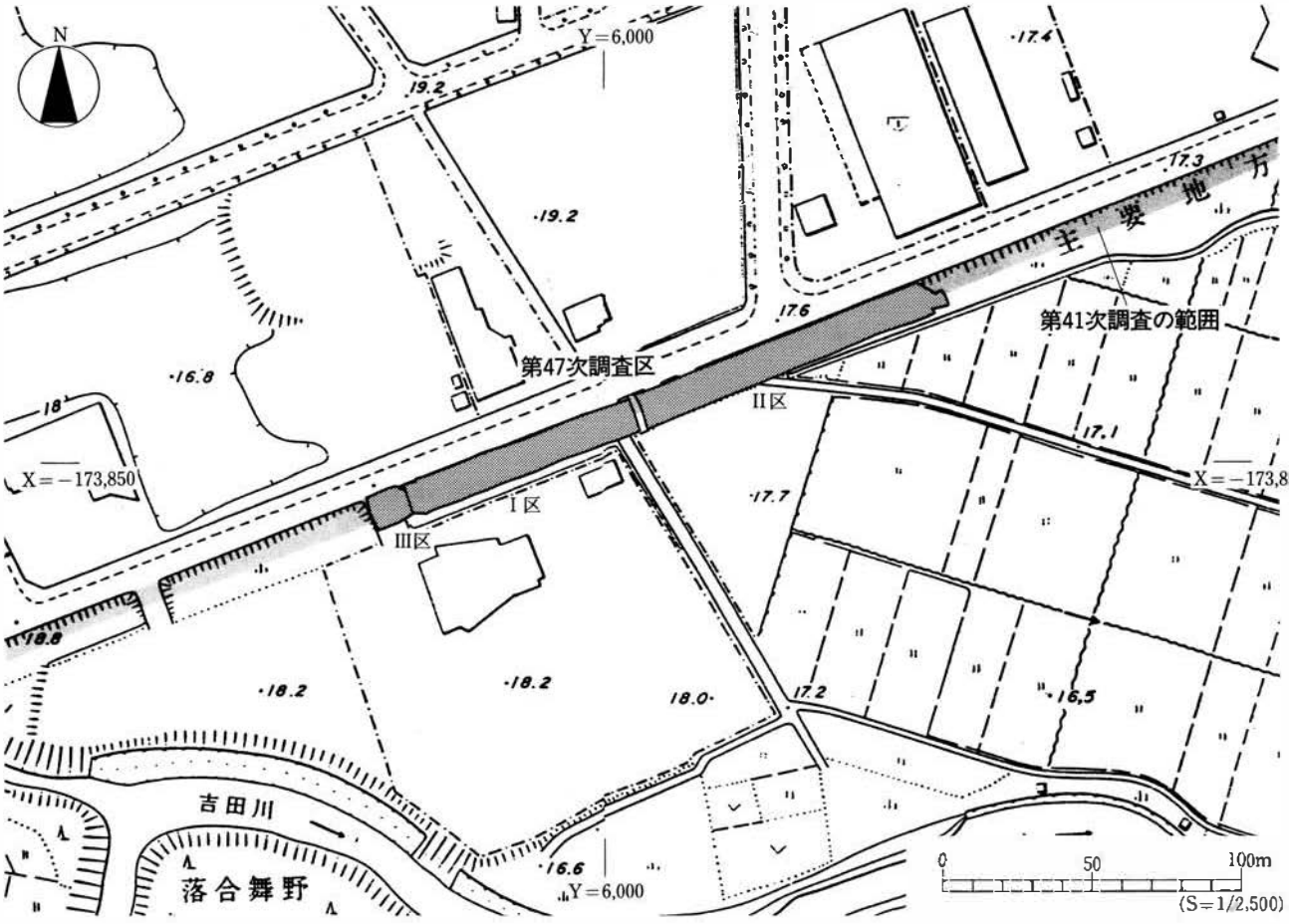
2．第41・47次調査（第6図）

第41・47次調査は、県道大和・松島線拡幅工事に係わるものである。第41次調査が対象区域内の確認調査、第47次調査が事前調査にあたる。

県道吉岡・鶴巣線と同様に仙台土木事務所から遺跡の南縁を東西方向に走る県道大和・松島線の拡幅工事計画の提示を受けた宮城県教育委員会では、遺跡内に掛かる工事対象域の発掘調査を実施することとした。

まず、平成8年4月15日から25日にかけて現道南側の拡幅部分の確認調査を行っている。工事の行程上急を要する西側から重機を使って任意のトレンチ調査を進めた結果、遺構の掘り込み面を2面確認した。上面では小溝状遺構群、下面では竪穴住居跡、材木塀跡、溝跡などの遺構が東西約205mにわたって検出されており、その西側は灰白色火山灰降灰以降の河道によって大きく壊され、東側は急激に低くなって湿地状で、遺構は検出されなかった。遺構が確認されたのは段丘面の南辺が南側へ舌状に張り出す部分で、後世にはすぐ南側を東流する吉田川の氾濫源となっており、当時も多分に河川の影響を受けていたことが窺われる。

その後、遺構が検出された範囲の道路拡幅部分約2,230㎡を対象に事前調査を実施している。調査は南側の店舗への出入り口を確保する都合上、3区（I～III区）に分けて行われ、遺構確認面までの深さが表土上面から1.0～1.5m、現道面から2.0～2.5mと深いため、調査時には矢板を打って調査区の壁を補強した。なお、現道はそのまま北側車線として利用されるため調査の対象外とした。調査I・II区（約2,100㎡）を平成9年6月24日から12月24日にかけ、調査III区（約130㎡）を平成10年7月29



第6図　第41次調査の範囲と第47次調査区の位置

日から8月20日にかけて調査しており、平成9年12月6日には現地説明会も開催している。

遺構確認面までの掘り下げには重機を使用し、検出遺構については国家座標X＝−173,700.000、Y＝5,800.000を原点とした3m方眼のグリットを設定して1/20縮尺の平面・断面図を作成している。記録写真は35㎜モノクロ・カラーリバーサルフィルムと6×7モノクロ・カラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。

第III章　基本層序

1．第44次調査

調査範囲は道路拡幅工事に伴う調査のため北西・南東方向に長く、270mにわたる。いずれの調査区でも表土を除去した段階で遺構が確認されており、全面的に表土層下が削平を受けているものと思われる。表土の厚さは30〜60cmで、攪乱されている部分が多い。表土層下の地山はI・II・VI〜VIII区では明黄褐色の粘土、III〜V・IX区ではにぶい黄褐色のロームとなっており、層序をみると前者の上に後者が堆積している。地山面は南東へ向かって低くなっており、V区とI区では高低差が2m程ある。

2．第47次調査（第７図）

調査地点は南へ向かって傾斜する最低位段丘面の南縁に当たり、常に河川の影響を受けながら堆積層が形成されている。現況では盛土されており、それ以前は湿地状で、水田として利用されていた部分が多い。調査区は道路拡幅工事に伴う調査のため東西に長く設定されており、長さ205m にわたる。調査区内は多少の微地形の相違があるものの、東へ向かって緩やかに傾斜している。基本的な堆積層は調査区内を南北方向に縦走する旧河道部分で異なるものの、大筋で基準となる層を中心に同じ層序を示す。以下、各層の特徴を記す。

①層：盛土

②層：盛土以前の表土層で、耕作されている部分（a）と湿地状の部分（b）がある。III区からＩ区の中央付近にかけては耕作されており、これより東側は湿地である。

③層：黒褐色（7.5YR3/1）のシルトで、Ｉ区中央より西側に分布している。

④層：灰褐色（7.5YR4/2）のシルトで、調査区の全域に分布している。

⑤層：III区とＩ区西部の北半に部分的に認められる灰白色火山灰層（10YR7/1）である。最も残りの良い部分で厚さ５cm程ある。なお、⑥層～⑪層には調査区全域で灰白色火山灰の染み込みが認められる。

⑥層：褐灰色（10YR5/1）のシルトで、調査区全域に分布しているが、西部では薄い。黄色味が強く、やや砂質で、上部が風化して黒味を帯びる部分もある。河川の氾濫によって一度に堆積した土の可能性がある。

⑦層：にぶい黄褐色（10YR5/4）のシルトで、Ｉ区中央より西側に厚く分布している。非常に黄色味が強く、やや砂質で、河川の氾濫によって一度に堆積した土の可能性が強い。

⑧層：灰黄褐色（10YR5/2）のシルトで、調査区全域で認められる。黄色味が強く、やや砂質で、河川の氾濫によって一度に堆積した土の可能性がある。この層の上面で、小溝状遺構群の掘り込みを確認している。上面の標高は15.3～16.0m で、緩やかに東側へ傾斜し、東端部で低くなる。

⑨層：Ｉ区の東部からII区の西半にかけて分布する褐色（10YR4/4）の砂質シルトで、調査区ほぼ中央を南北に縦走する旧河道の堆積土最上層である。この層の上面では、古墳時代末期の竪穴住居跡などの遺構の掘り込みが確認されており、少なくともこれ以前に埋まりきっていたものと考えられる。上面の標高は15.5～15.7m である。

⑩層：褐灰色（10YR4/1）の粘土質シルトで、旧河道部分以外に分布している。河道東側では西側に認められる⑪・⑫層の黒色粘土・砂の小ブロックが混じる状況で、層がやや乱れている。この層の上面で、古墳時代末期の竪穴住居跡などの遺構の掘り込みを確認している。上面の標高は15.1～15.9m で、緩やかに東側へ傾斜し、東端部で低くなる。

⑪層：黒色（N1.5/）の粘土で、III区からＩ区中央にかけて分布している。

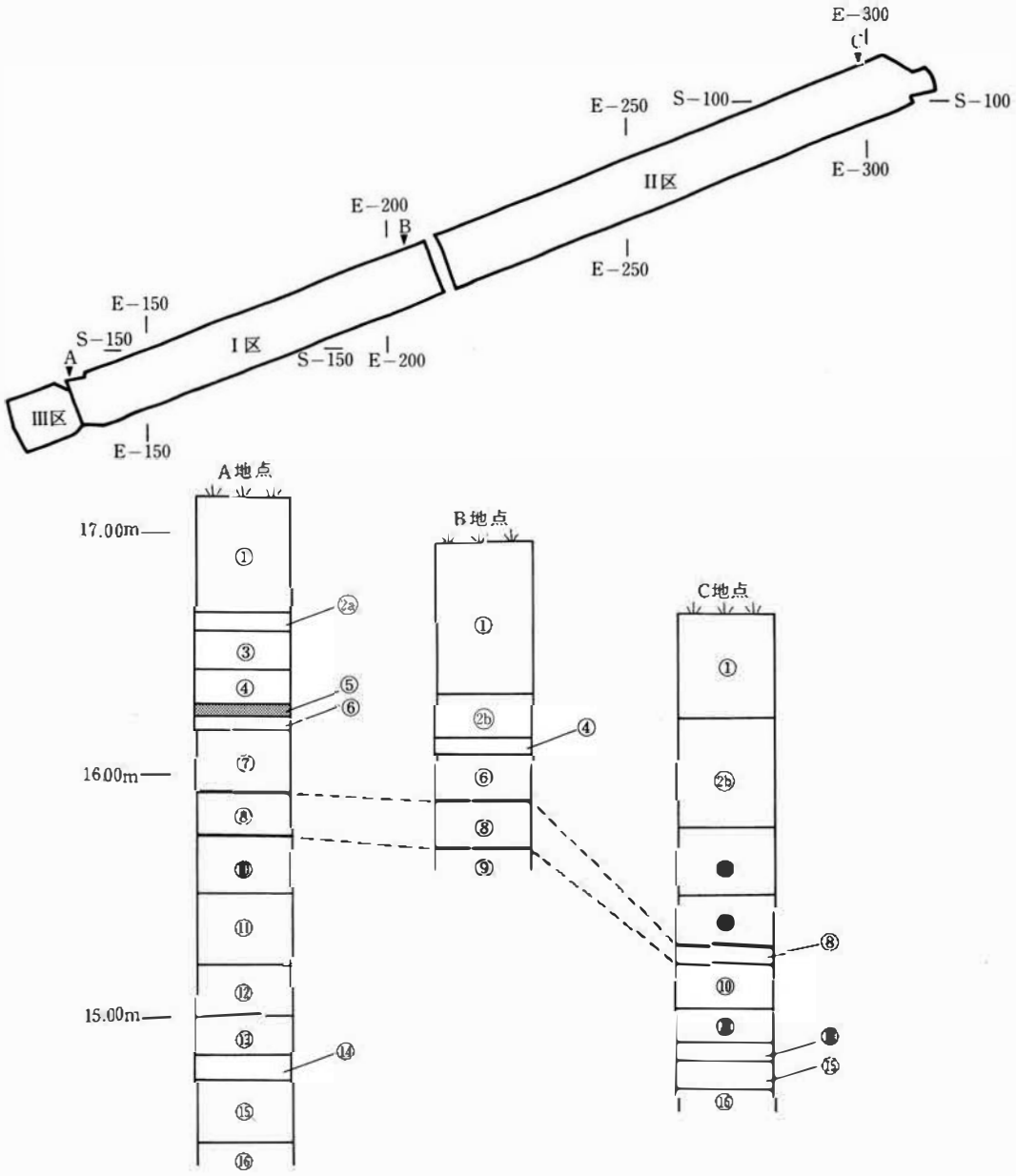
⑫層：グライ化した青灰色（5B6/1）の砂層で、III区からＩ区中央にかけて分布している。

⑬層：暗緑灰色（10GY4/1）のシルトで、旧河道部分以外に分布している。

⑭層：黄灰色（2.5Y4/1）の粘土で、旧河道部分以外に分布している。

⑮層：緑黒色（10GY2/1）の粘土で、第40次調査（宮中販敷地内）で縄文土器が出土した層に対応すると考えられる。調査区内では旧河道部分以外で確認されており、上面の標高は14.7～14.9mで、西側がやや低くなっている。今回の調査では遺物は出土していない。

⑯層：淡黄色（5Y8/3）の粘土で、旧河道部分以外に分布している。



第７図　第47次調査区基本層序

第IV章　発見された遺構と遺物

1．第44次調査（第８・９図）

検出された遺構には、掘立柱建物跡６棟、柱穴列２列、材木塀跡１条、溝跡６条、小溝状遺構群２面、土壙５基などがあり、土師器、須恵器、石製品などが出土している。遺構の確認面は全て地山面である。以下、主要なものについて説明する。なお、調査Ⅰ・Ⅷ・Ⅸ区については検出された遺構がピット数個のみのため、調査区の位置を示すに止める。

① 掘立柱建物跡・柱穴列

【SB04 建物跡】（第８・10・13図）

II区の中央部に位置する東西１間以上、南北１間以上の建物で、南西部が調査区内に掛かっている。柱穴は３箇所で検出されており、いずれの柱穴でも柱抜き取り穴が掘方のほぼ底面まで及んでいる。南西隅の柱穴下部には直径20cmの円形の柱痕跡が残る。

柱間寸法については正確に測り得ないが、抜き取り穴の中心でみると、南側の柱列で2.8m、西側の柱列で1.9m ある。建物の方向は西側の柱列でみるとおよそ N—2°—W である。柱穴は長辺90～100cm、短辺65～75cmの隅丸長方形を呈し、深さは46～55cmである。埋土は地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルトを主体としている。

遺物は南西隅柱の抜き取り穴から須恵器坏（第13図２）が出土したのみである。

【SB05 建物跡】（第８・10・13図）

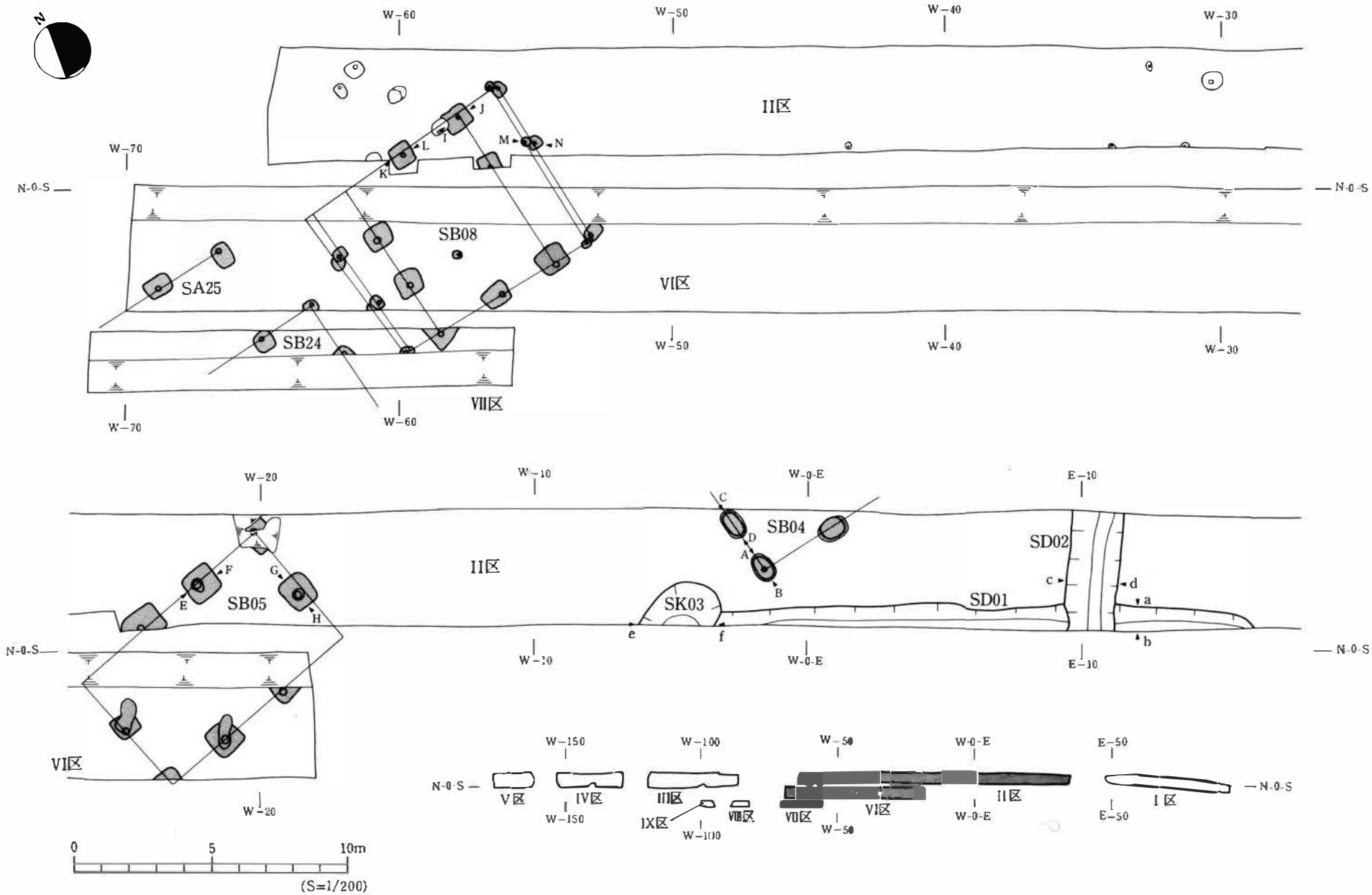
II区中央部からVI区東端に位置する東西３間、南北２間の東西棟建物である。柱穴は８箇所で検出されており、このうち７箇所で柱痕跡、４箇所で柱抜き取り穴を確認している。また、２箇所には柱の沈下を防ぐ礎板が残存していた。

平面規模は桁行が北側柱列で総長約8.3m、柱間寸法は東から2.9m・2.6m・(2.8m)、梁行が東妻で総長約5.0m、柱間寸法は北から2.7m・(2.3m) である。建物の方向は北側柱列でみると E—10°—N である。柱穴は１辺が100～120cmの正方形を呈し、深さは40～50cmある。柱痕跡は直径20cm程の円形である。埋土は地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトを主体としている。

遺物は柱穴掘方埋土から須恵器稜埦（第13図12）が出土している他、非ロクロ調整の土師器坏やロクロ調整で底部の切り離しがヘラ切りの土師器坏、回転糸切りの須恵器坏などの破片が少量出土している。

【SB08 建物跡】（第８・10・13図）

II・VI区の西寄りからVII区に位置する南北３間、東西２間の南北棟建物で、東・西の２面に廂をもつ。また、棟通り下では床束の可能性がある柱穴も１箇所確認されている。柱穴は身舎で８箇所、廂



第8図　第44次調査II・VI・VII区遺構配置図

で6箇所検出されており、全てで柱痕跡を確認している。身舎の柱穴5箇所では柱材の一部も残っていた。なお、東・西の廂部分はほぼ同位置で1度改築されている。

平面規模は桁行が身舎東入側柱列で総長6.3m、柱間寸法はおよそ2.1m等間、梁行が南妻で身舎総長4.9m、柱間寸法は西から2.6m・2.3m、廂の出は東・西ともに1.7mで、改築後は西の出が1.4m、東の出が1.5mとなっている。建物の方向は東入側柱列でみるとN—2°—Wである。柱穴は身舎では一辺が80～100cmの正方形を呈し、深さは40～60cmである。一方、廂では一辺もしくは長辺が30～70cmの方形を基調としており、深さは20～30cmとなっている。柱痕跡は身舎が直径15～20cm、廂が直径10～15cmの円形である。埋土は身舎が地山ブロック主体の黄褐色粘土と黒褐色シルトの互層、廂が地山ブロックを多量に含む黄褐色シルトである。また、柱痕跡中には灰白色火山灰の粒子が含まれている。

遺物は柱穴掘方埋土から須恵器高台坏（第13図13）が出土している他、非ロクロ調整の土師器鉢やロクロ調整の土師器坏などの破片が少量出土している。

【SB10建物跡】（第8・10・13図）

III区の東部に位置する東西2間以上、南北2間以上の建物で、III区北側の調査区外へ及ぶ。柱穴は5箇所で検出されており、全てで柱痕跡を確認している。

柱間寸法は南側の柱列で西から2.7m・2.8m、西側の柱列で南から2.4m・2.2mである。建物の方向は西側の柱列でみるとN—2°—Wである。柱穴は一辺が60～100cmの正方形を呈し、深さは30～60cmで、南西隅と東端の柱穴が特に深い。柱痕跡は直径15～20cmの円形である。埋土は地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルトと黒褐色シルトの互層である。また、柱痕跡中には焼土・炭化物が含まれている。

遺物は柱穴掘方埋土から須恵器坏（第13図10・11）が出土している他、非ロクロ調整の土師器甕や底部の切り離しが回転糸切りの須恵器坏などの破片が少量出土している。

【SB16建物跡】（第9図）

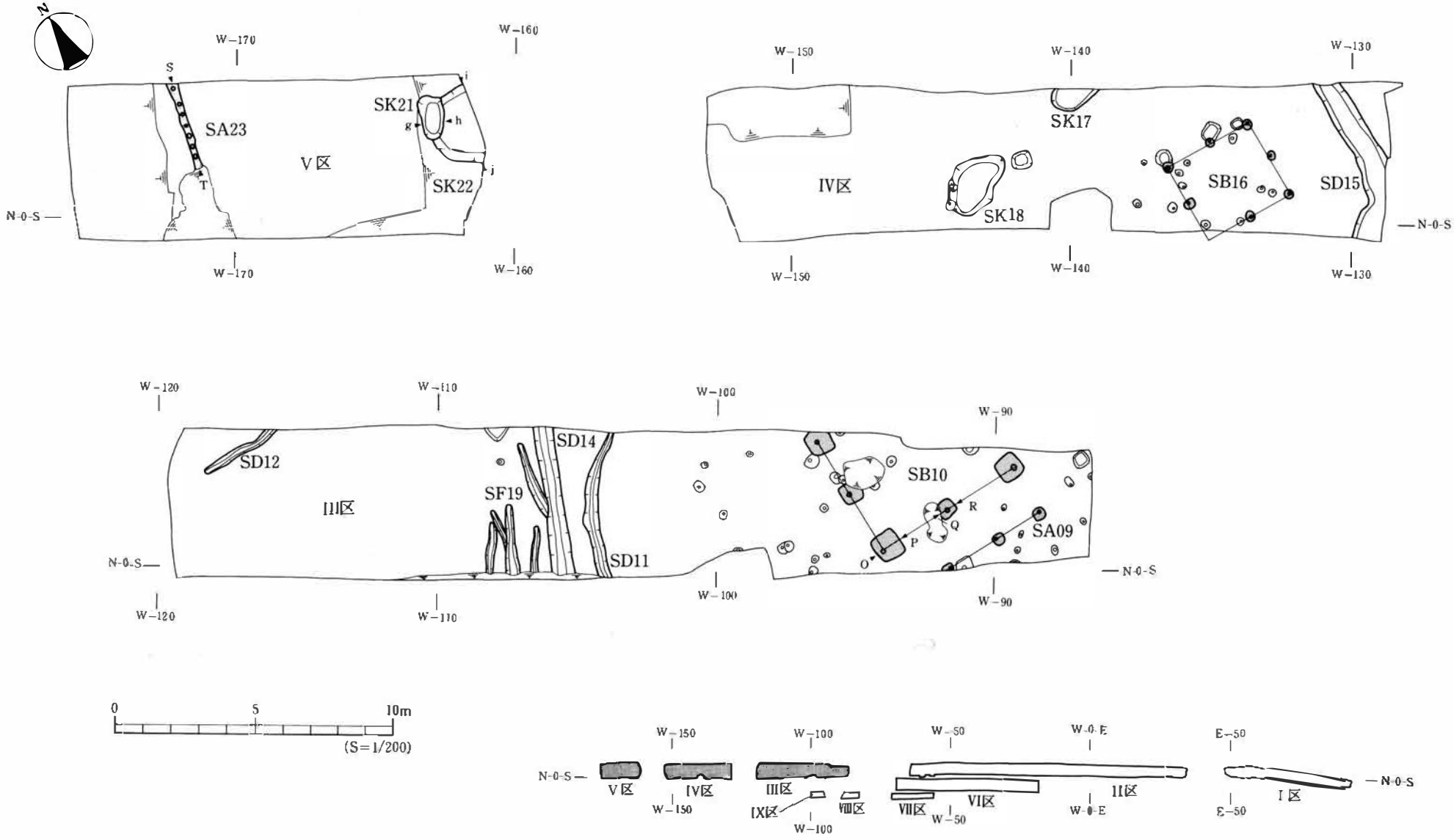
IV区の東部に位置する東西2間、南北2間の東西棟建物である。柱穴は7箇所で検出されており、全てで柱痕跡を確認している。

平面規模は桁行が北側柱列で総長3.2m、柱間寸法は西から1.7m・1.5m、梁行が東妻で総長3.0m、柱間寸法は北から1.4m・1.6mである。建物の方向は北側柱列でみるとE—1°—Nである。柱穴は一辺が30～40cmの隅丸方形を基調とし、深さは15～25cmある。柱痕跡は直径10～15cmの円形である。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを主体としている。

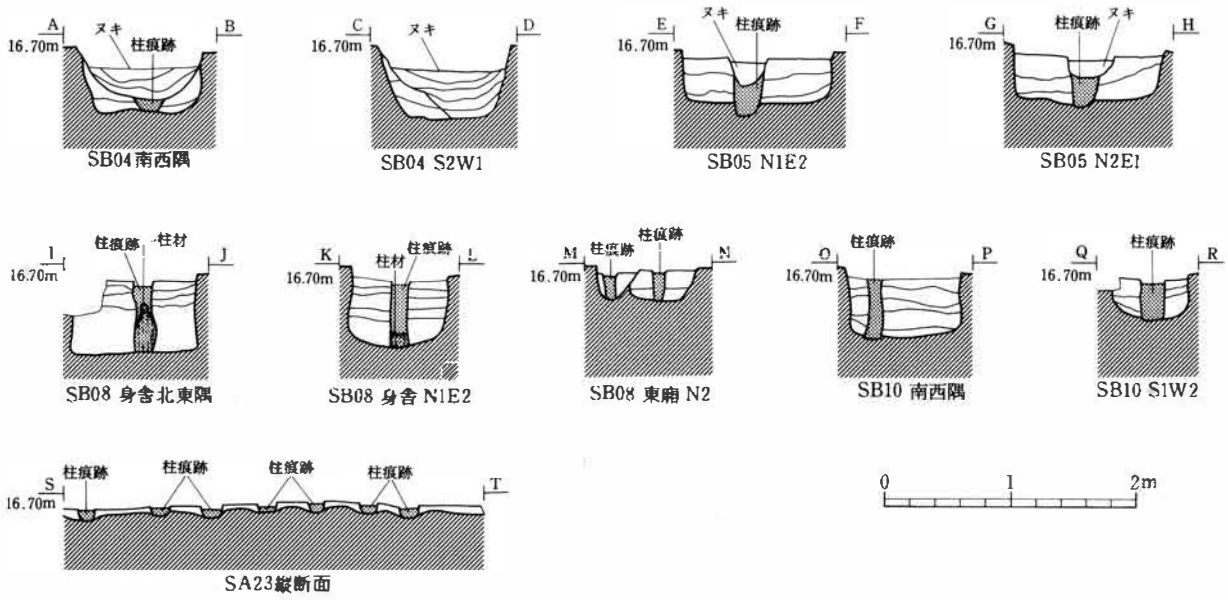
遺物は柱穴掘方埋土から出土した須恵器片I点のみである。

【SB24建物跡】（第8図）

VI区西寄りからVII区に位置する東西1間以上、南北1間以上の建物で、北東部が調査区内に掛かっている。柱穴は3箇所で検出されており、全てで柱痕跡を確認している。なお、北東隅の柱穴には柱



第9図　第44次調査III・IV・V区遺構配置図



第10図　SB04・05・08・10 建物跡、SA23 材木塀跡断面

材の一部も残っていた。

柱間寸法は北側の柱列で2.2m、東側の柱列で2.1mある。建物の方向は東側の柱列でみるとN—1°—Wである。柱穴は一辺が50～70cmの正方形を呈し、深さは40～60cmある。柱痕跡は直径15～20cmの円形である。埋土は地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルトを主体としている。

遺物は出土していない。

【SA09 柱穴列】（第9図）

III区東部、SB10 建物跡の南に位置し、これの南側の柱列とほぼ平行する東西2間以上の柱穴列である。検出された柱穴では柱痕跡が確認されている。

柱間寸法は1.8m 等間で、方向はE—1°—Nである。柱穴は一辺が35～40cmの隅丸正方形を呈し、深さは20～30cmある。柱痕跡は直径10～15cmの円形である。埋土は地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルトと黒褐色シルトの互層である。

遺物は出土していない。

【SA25柱穴列】（第8図）

VI区の西端に位置する東西1間以上の柱穴列である。検出された柱穴では柱痕跡が確認されている。

柱間寸法は2.7mで、方向はE—2°—Nである。柱穴は長辺90～100cm、短辺60～70cmの長方形を呈し、深さは30cm程ある。なお、東・西の柱穴では長辺の方向が直交する。柱痕跡は約15cmの円形である。埋土は地山ブロックを多量に含む褐色シルトを主体としている。

遺物は柱穴掘方埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕などの小破片が数点出土している。

② 材木塀跡

【SA23 材木塀跡】（第 9 ・10図）

V区の西寄りを南北方向に延びる材木塀で、長さ3.4m 分を検出した。塀は布掘りの中に材木を立て並べたもので、方向は N—12°—E である。

掘方（布掘り）は上幅20～35cm、底幅10～20cm、深さ10cm程である。断面は浅い「U」字状で、底面には凹凸がある。埋土は地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルトである。

柱痕跡は直径15cm前後の円形を呈し、間隔は30～60cmである。

遺物は出土していない。

③ 溝跡

【SD01 溝跡】（第 8 ・11図）

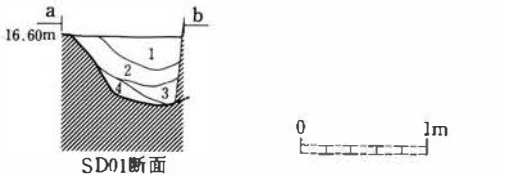
II区中央部の南壁際を壁沿いに北西・南東方向に延びる溝で、長さ19.5m 分を検出した。SD02 溝跡、SK03 土壙と重複しており、これらの遺構よりも古い。溝の方向は E—31°—S である。上幅0.9m 以上、下幅0.5m以上で、深さは最も深い部分で0.6m ある。側壁は直線的に外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は 4 層に分けられる。 1 ・ 2 層は地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色のシルトで、締まりもあることから溝を埋め戻した土の可能性がある。 3 ・ 4 層は灰オリーブ色のシルトで、自然堆積とみられる。

遺物は土師器の小破片や須恵器坏・甕などの破片が少量出土している。須恵器坏には再調整に回転ヘラケズリが施されているものもある。

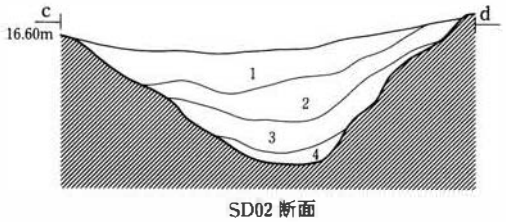
【SD02 溝跡】（第 8 ・11図）

II区中央やや東寄りを北東・南西方向に延びる溝で、長さ4.3m 分を検出した。SD01 溝跡と重複しており、これよりも新しい。溝の方向は N—31°—E である。上幅約1.8m、下幅約0.4m で、深さは1.0 m 前後である。断面は両側へやや開く「V」字状を呈する。堆積土は 4 層に分けられ、いずれの層も自然堆積とみられる。

遺物は底部の切り離しが回転糸切りの須恵器坏、須恵器甕の破片が少量出土している。



SD01断面



SD02 断面

SD01 土層観察表

層位	土色	土性	混入物等	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土少量、地山ブロック多量	人為堆積土？
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック多量	人為堆積土？
3	灰オリーブ色(5Y5/2)	粘土質シルト	地山ブロック少量	自然堆積土
4	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山ブロック少量	自然堆積土

SD02 土層観察表

層位	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物	自然堆積土
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山小ブロック若干	自然堆積土
3	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	地山小ブロック少量	自然堆積土
4	オリーブ灰色(5GY5/1)	粘土質シルト	炭化物・地山小ブロック少量	自然堆積土

第11図　SD01・02 溝跡断面

【SD12 溝跡】（第 9 図）

III区の北西隅を東西方向に延びる溝で、西端から東へ長さ2.8m 分を検出した。溝の方向は E—3°—N である。上幅20～40cm、下幅15～25cmで、深さは 5 cm程ある。断面は浅い「U」字状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は焼土・炭化物を含む暗褐色シルト 1 層のみで、自然堆積とみられる。

遺物は非ロクロ調整の土師器坏、再調整に回転ヘラケズリが施された須恵器坏の破片が数点出土している。

【SD15 溝跡】（第 9 ・13図）

IV区の東端近くを南北方向に延び、南東隅で西側へ折れ曲がるとみられる溝で、長さ6.2m 分を検出した。溝の方向は N—4°—E である。上幅0.9～1.1m、下幅0.4～0.7m で、深さは15cm程ある。断面は浅い「U」字状で、底面にはやや凹凸がみられる。堆積土は焼土・炭化物を含む暗褐色シルト 1 層のみで、自然堆積とみられる。

遺物は須恵器壺？（第13図14）が出土している他、土師器の小破片と須恵器坏・甕・壺の破片が少量出土している。

④ 小溝状遺構群

【SF19 小溝状遺構群】（第 9 図）

III区の中央部に位置する南北方向の 5 本の小溝群である。SD14 溝跡と重複しており、これよりも古い。溝の方向をみると N—10°—E のものと N—30°—E のものがあり、前者が古い。したがって、新旧 2 時期あると考えられる。

古い時期の溝は 2 本確認されており、幅20～30cm、深さ 5 cm前後で、長さは最大で2.8m 残る。断面は浅い皿状で、溝の間隔は1.5m ある。

新しい時期の溝は 3 本確認されており、幅20～50cm、深さ10cm前後で、長さ1.7～2.5m 以上である。断面は浅い皿状で、溝の間隔は0.5m 程である。

遺物は出土していない。

⑤ 土壙

【SK03 土壙】（第 8 ・12・13図）

II区中央部の南壁際で検出された。SD01 溝跡と重複しており、これよりも新しい。土壙の南半以上が調査区外に及んでいるため平面形は明らかでないが、東西軸3.2m 以上、南北軸1.5m 以上で楕円形を呈するものと推測される。深さは70cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに外傾している。堆積土は 5 層認められ、いずれも自然流入土である。

遺物は土師器甕、須恵器甕の小破片と砥石（第13図16）が出土している。

【SK17 土壙】（第 9 図）

Ⅳ区中央部の北壁際で検出された。北半部が調査区外に及んでいるものの長軸1.6m 以上、短軸1.1 m 以上で楕円形を呈するものと推測される。深さは10cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色シルト 1 層のみで、自然流入土である。

遺物は土師器の小破片が数点出土している。

【SK18土壙】（第 9 図）

Ⅳ区中央部の南壁際で検出された。平面形は長軸2.5m、短軸1.8mの不整形を呈し、深さは20cmある。底面にはやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は焼土・炭化物を含む暗褐色シルト 1 層のみで、自然流入土である。

遺物は土師器甕、須恵器甕の破片が少量出土している。

【SK21 土壙】（第 9 ・12・13図）

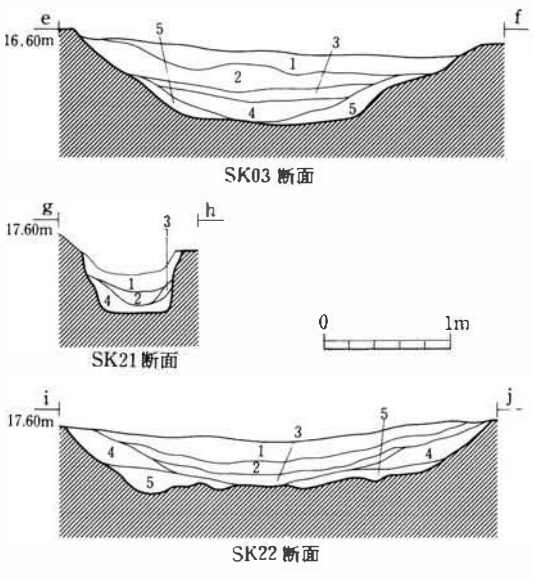
Ⅴ区の北東隅で検出された。SK22 土壙と重複しており、これよりも新しい。平面形は長軸1.6m、短軸0.8m の楕円形を呈し、深さは60cmある。底面はほぼ平坦で、壁は急角度に外傾している。堆積土は 4 層認められ、いずれも自然流入土である。

遺物は須恵器坏（第13図 9 ）が出土したのみである。

【SK22土壙】（第 9 ・12図）

Ⅴ区の北東隅で検出された。SK21 土壙と重複しており、これよりも古い。東半部が調査区外に及んでいるため平面形は明らかでないが、東西軸0.8m 以上、南北軸1.5m 以上で楕円形を呈するものと推測される。深さは50cmである。底面には凹凸があり、壁は緩やかに外傾している。堆積土は 5 層認められ、いずれも自然流入土であるが、 2 層には灰白色火山灰のブロックが含まれる。

遺物は出土していない。



SK03土層観察表

層位	土色	土性	混入物等	備考
1	褐色(7.5YR4/3)	シルト	焼土・炭化物若干	自然流入土
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物少量	自然流入土
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山小ブロック若干	自然流入土
4	灰色(5Y5/1)	粘土質シルト	地山小ブロック少量	自然流入土
5	褐灰色(7.5YR5/1)	シルト	地山小ブロック少量	自然流入土

SK21 土層観察表

層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山小ブロック	自然流入土
2	黒褐色(10YR2/1)	シルト		自然流入土
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト		自然流入土
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山大ブロック	自然流入土

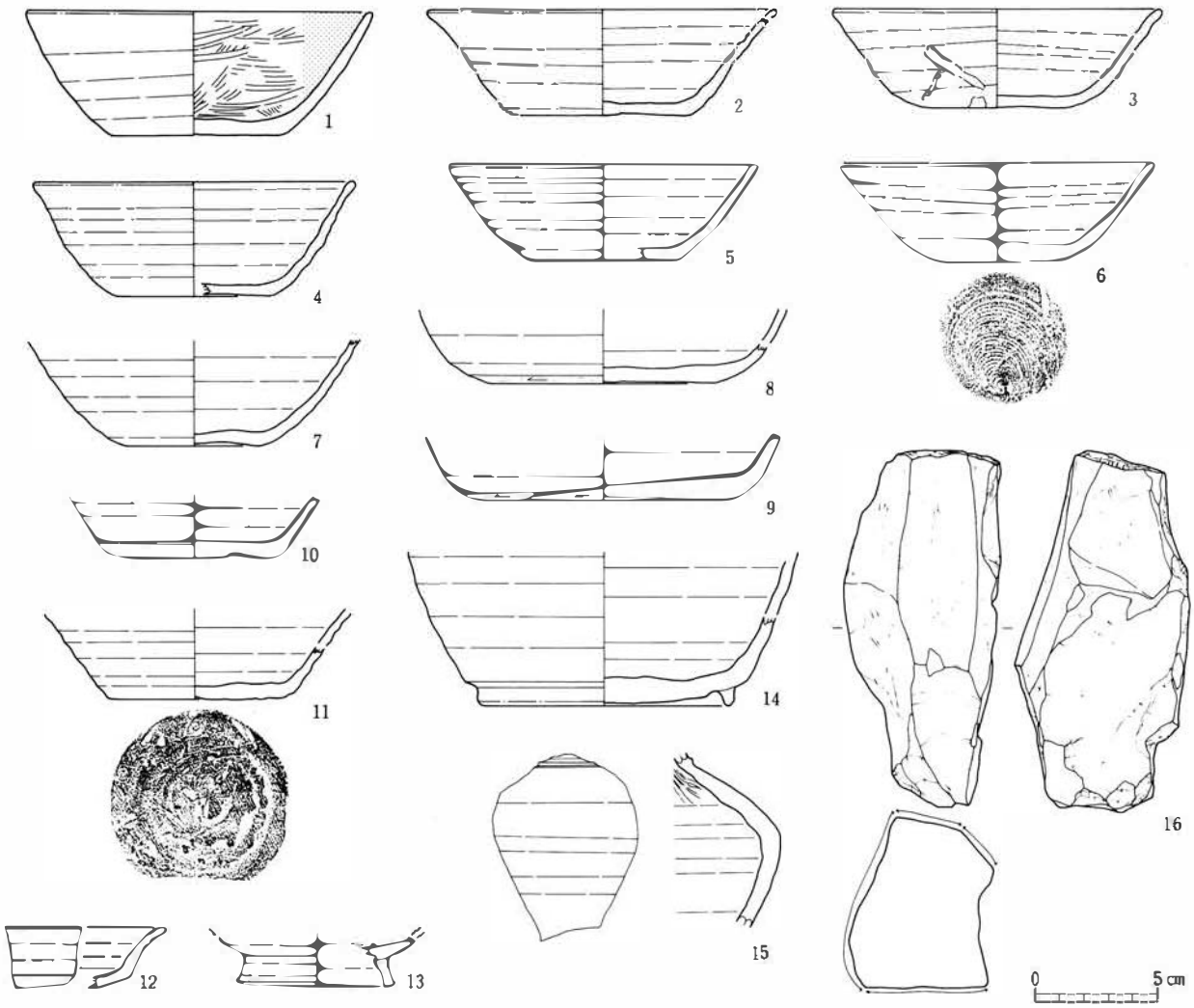
SK22 土層観察表

層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒色(7.5YR1.7/1)	シルト		自然流入土
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	灰白色火山灰ブロック	自然流入土
3	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト		自然流入土
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト		自然流入土
5	暗褐色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山小ブロック少量	自然流入土

第12図　SK03・21・22 土壙断面

⑥ その他の出土遺物（第13図）

II・III区の確認面からはロクロ調整で内面がヘラミガキ・黒色処理された土師器坏（第13図１）や須恵器坏（第13図３～８）・壺（第13図15）などが出土している。須恵器坏は回転糸切りによって底部が切り離されているものが殆どで、ヘラ切り後回転ヘラケズリが施されているものも１点ある。



No	種別	出土遺構・区	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版
1	土師器・坏	III区確認面	外：ロクロナデ、切り離し不明→手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ・黒色処理	14.2	7.2	5.1	完形		18－1
2	須恵器・坏	SB04・南西隅ヌキ	外：ロクロナデ、ヘラ切り 内：ロクロナデ	(14.4)	7.1	4.3	2/3		18－2
3	須恵器・坏	III区確認面	外：ロクロナデ、回転糸切り 内：ロクロナデ	(13.5)	(5.6)	4.0	1/3		18－3
4	須恵器・坏	III区確認面	外：ロクロナデ、回転糸切り 内：ロクロナデ	(13.3)	(6.2)	4.7	1/4		18－5
5	須恵器・坏	III区確認面	外：ロクロナデ、回転糸切り 内：ロクロナデ	(12.7)	(6.2)	3.9	1/5		
6	須恵器・坏	III区確認面	外：ロクロナデ、回転糸切り 内：ロクロナデ	13.0	5.8	4.1	完形		18－4
7	須恵器・坏	II区確認面	外：ロクロナデ、回転糸切り 内：ロクロナデ	－	5.2	－	1/3		
8	須恵器・坏	III区確認面	外：ロクロナデ→ヘラ切り→回転ヘラケズリ 内：ロクロナデ	－	9.3	－	1/3		
9	須恵器・坏	SK21・堆積土	外：ロクロナデ→切り離し不明→手持ちヘラケズリ 内：ロクロナデ	－	(10.2)	－	1/4		
10	須恵器・坏	SB10・南西隅掘方埋土	外：ロクロナデ、ヘラ切り 内：ロクロナデ	－	7.2	－	1/4		
11	須恵器・坏	SB10・S2W1 掘方埋土	外：ロクロナデ、ヘラ切り 内：ロクロナデ	－	(7.2)	－	1/3		
12	須恵器・横瓶	SB05・N1E2 掘方埋土	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	－	－	－	一部		
13	須恵器・高台坏	SB08・身舎北東隅掘方埋土	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	－	(6.6)	－	一部		
14	須恵器・壺？	SD15・堆積土	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ→高台雨内後ロクロナデ 内：ロクロナデ	－	10.6	－	1/3		
15	須恵器・壺	III区確認面	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	－	－	－	1/10		
No	種別	出土遺構・区	特徴						写真図版
16	砥石	SK03・堆積土	最大長：14.5cm 最大幅：6.3cm 最大厚：7.0cm 使用面：5 石材：凝灰岩						37－1

第13図　第44次調査出土遺物

2．第47次調査（第14図）

検出された遺構には、掘立柱建物跡6棟、柱穴列1列、竪穴住居跡45軒、材木塀跡2条、溝跡2条、河川跡1、土壙19基、小溝状遺構群などがあり、土師器、須恵器、木製品、土製品、石製品、種子、動物遺体などが出土している。また、遺構確認の段階で出土した遺物には縄文土器と石器が各1点含まれる。

これらの遺構のうち小溝状遺構群は主に⑧層上面で確認されており、II区東部を除く調査区のほぼ全域に分布している。溝の堆積土は⑥～⑧層起源とみられる黄褐色土のブロックを主体としており、⑧よりも上層から掘り込まれていたものもあると推測される。遺構からは遺物が出土していないものの、地山の層序からみて奈良・平安時代もしくはそれ以降の畑跡と考えられる。堆積土と⑧層の識別が難しかったためプランを確認する目的で⑨層もしくは⑩層上面まで掘り下げたところ、その殆どが失われてしまった。

以下、主な遺構について説明する。

① 掘立柱建物跡・柱穴列（第14図）

柱穴はI区中央やや東寄りとII区中央部に集中する傾向がある。確認面は⑨層もしくは⑩層上面であるが、掘方埋土に⑥～⑧層起源とみられる黄褐色土のブロックを含むものが多く、更に上層から掘り込まれていた可能性があるものが主体を占める。住居跡や土壙と重複する場合、殆どがこれらよりも新しい。建物跡6棟、柱穴列1列を確認した。

【SB22建物跡】（第14図）

I区西部に位置する東西3間、南北2間の東西棟建物である。柱穴は6箇所で検出されており、全てで柱痕跡を確認している。また、このうち3箇所には柱材の一部が残る。

平面規模は桁行が南側柱列で総長4.1m、柱間寸法は西から1.4m・1.4m・1.3m、梁行が東妻で総長3.2m、柱間寸法は1.6m等間である。建物の方向は南側柱列でみるとE—15°—Nである。柱穴は長軸が30～50cmの隅丸長方形もしくは楕円形を呈し、深さは20～50cmある。柱痕跡は直径15cm程の円形である。埋土は黒褐色シルトを主体としている。

遺物は出土していない。

【SB57建物跡】（第14図）

I区の中央部に位置する東西2間、南北2間以上の建物である。柱穴は6箇所で検出されており、このうち4箇所で柱痕跡を確認している。SI12住居跡と重複しており、これよりも新しい。

平面規模は北側の柱列で総長5.0m、柱間寸法が西から2.4m・2.6m、西側の柱列の柱間寸法は北から1.9m・2.3mである。建物の方向は北側の柱列でみるとE—1°—Sである。柱穴は長軸が30～50cmの長方形もしくは不整形を呈し、深さは15～30cmある。柱痕跡は直径15cm程の円形である。埋土は黄褐色土のブロックを多く含む黒褐色シルトを主体としている。

遺物は出土していない。

【SB72 建物跡】（第14図）

Ⅰ区中央やや東寄りに位置する南北２間（2.8m）以上、東西２間（2.7m）の南北棟建物である。柱穴は５箇所で検出されており、このうち３箇所で柱痕跡を確認している。SI10 住居跡と重複しているが、重複部分の柱穴が残存していないため前後関係は不明である。

柱間寸法は1.2～1.5m で、建物の方向は東側柱列でみるとおよそ N－42°－W である。柱穴は一辺が25cm程の隅丸正方形を呈するものが多く、深さは10～25cmある。柱痕跡は直径10cm程の円形である。埋土は黄褐色土のブロックを多く含む灰黄褐色シルトを主体としている。

遺物は出土していない。

【SB73 建物跡】（第14図）

Ⅰ区中央やや東寄りに位置する東西２間（4.2m）、南北１間（2.4m）以上の建物である。柱穴は５箇所で検出されており、このうち４箇所で柱痕跡を確認している。

柱間寸法は1.8～2.4m で、建物の方向は南側の柱列でみるとおよそ E－18°－N である。柱穴は長軸が25～40cmの不整形を呈し、深さは10～20cmある。柱痕跡は直径10～15cmの円形である。埋土は黄褐色土のブロックを多く含む灰黄褐色シルトを主体としている。

遺物は出土していない。

【SA74 柱穴列】（第14図）

Ⅰ区中央やや東寄りに位置する東西２間（3.0m）以上の柱穴列である。検出された柱穴では柱痕跡が確認されている。

柱間寸法は1.5m 等間、方向は E－38°－N である。柱穴は長軸が30～45cmの方形を基調としており、深さは30cm前後ある。柱痕跡は直径10～15cmの円形である。埋土は黄褐色土のブロックを多く含む灰黄褐色シルトを主体としている。

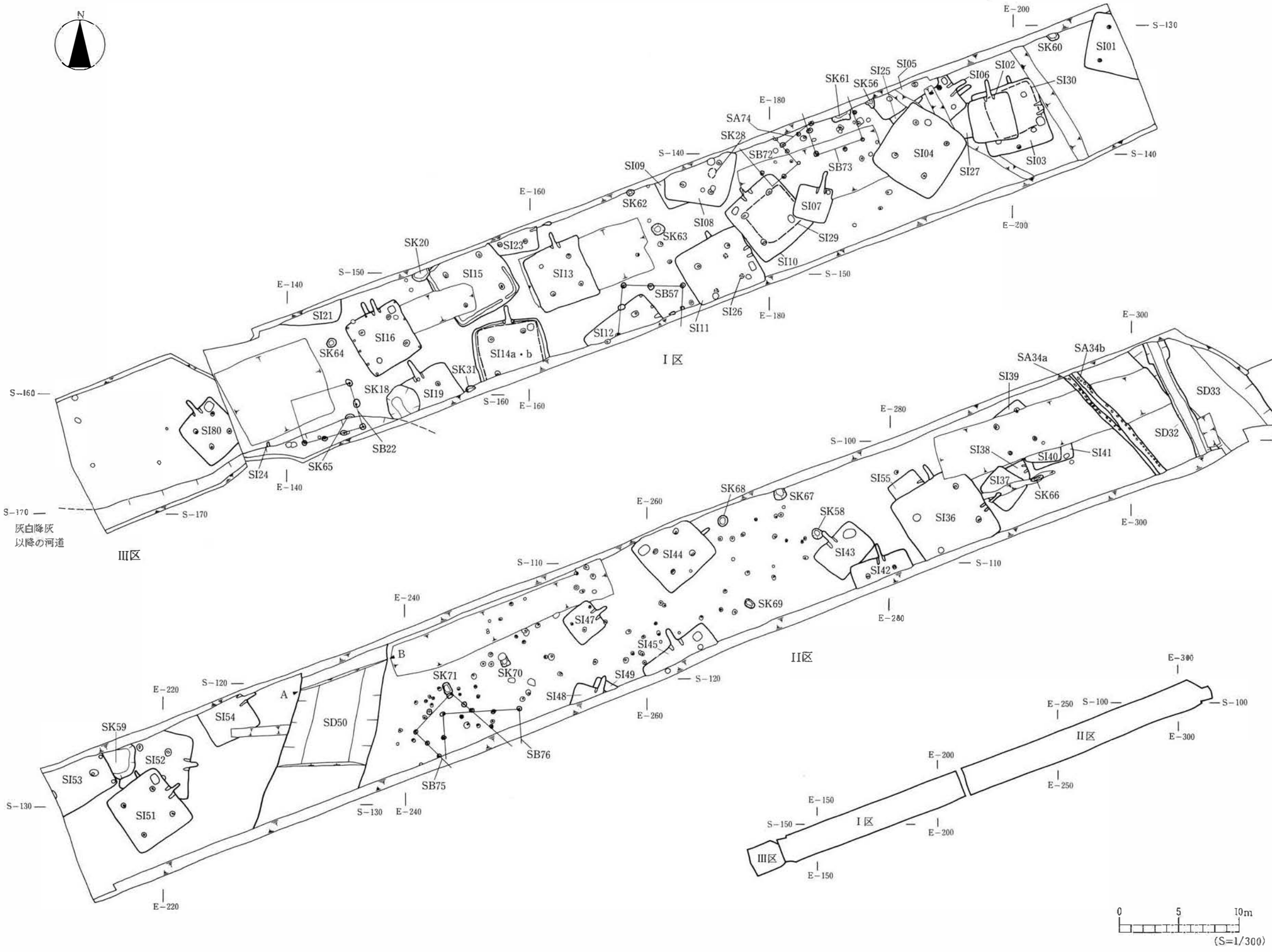
遺物は出土していない。

【SB75 建物跡】（第14図）

II区中央やや西寄りに位置する南北３間以上、東西２間の南北棟建物である。柱穴は７箇所で検出されており、全てで柱痕跡を確認している。SK71 土壙と重複しており、これよりも新しい。

平面規模は桁行が東側柱列で総長4.2m 以上、柱間寸法は1.4m 等間、梁行が北妻で総長4.2m、柱間寸法は西から2.0m・2.2m である。建物の方向は北側柱列でみると N－39°－W である。柱穴は長軸が30～60cmの隅丸長方形を呈するものが多く、深さは20～35cmある。柱痕跡は直径15cm程の円形である。埋土は黒褐色シルトを主体としている。

遺物は出土していない。



第14図　第47次調査区遺構配置図

【SB76 建物跡】（第14図）

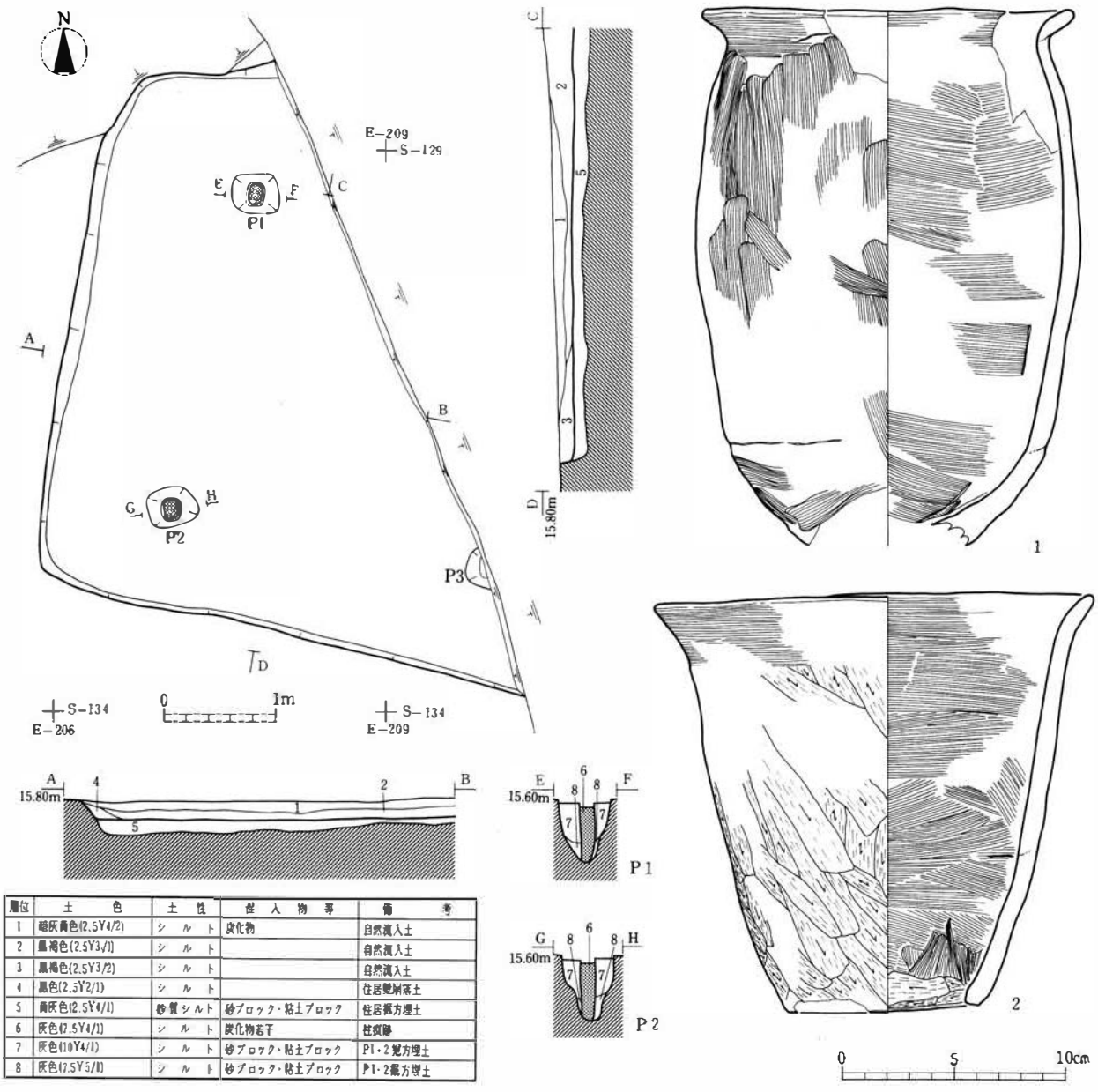
II区中央やや西寄りに位置する東西３間（6.2m）、南北１間（1.9m）以上の建物である。柱穴は５箇所で検出されており、全てで柱痕跡を確認している。

柱間寸法は1.9～2.2m で、建物の方向は北側の柱列でみるとおよそ E－4°－N である。柱穴は長軸が25～35cmの不整形を呈し、深さは15～30cmある。柱痕跡は直径10cm程の円形である。埋土は黄褐色土のブロックを多く含む暗褐色シルトを主体としている。

遺物は出土していない。

② 竪穴住居跡

【SI01 住居跡】（第15図）



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	炭化物	自然流入土
2	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト		自然流入土
3	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト		自然流入土
4	黒色(2.5Y2/1)	シルト		住居壁崩落土
5	黄灰色(2.5Y4/1)	砂質シルト	砂ブロック・粘土ブロック	住居掘方埋土
6	灰色(7.5Y4/1)	シルト	炭化物若干	柱痕跡
7	灰色(10Y4/1)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック	P1・2 覚方埋土
8	灰色(7.5Y5/1)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック	P1・2 掘方埋土

No	器種	部位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・壺	底部	外：ヨコナデ→ヘラナデ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	(16.7)	－	－	1/2		18－6	A II2c
2	土師器・鉢	体部	外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ→ヘラナデ・ナデ→ヘラケズリ	19.7	－	18.7	5/6	無底式	18－8	A

第15図　SI01 住居跡および出土遺物

［位置・確認面］ I 区の東端で検出された。確認面は⑨層上面で、南東方向へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－15°－E である。

［重複］住居の位置からみて、SI53 住居跡と重複していると考えられる。重複する部分の調査ができなかったため、その前後関係は不明である。

［平面形・規模］住居の東部が未調査のため全体の規模は不明であるが、現状から東西4.5m 以上×南北4.8m で方形を基調とする。

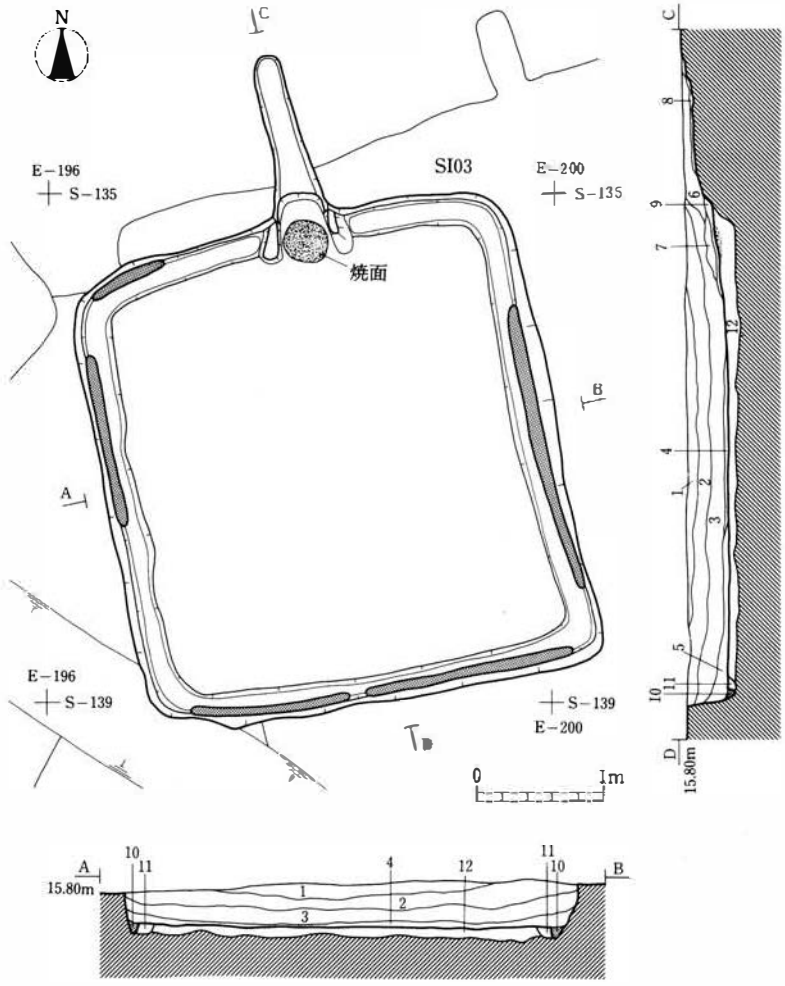
［堆積土］ 4 層認められる。 1 ～ 3 層は自然流入土で、 4 層は西壁の崩落土である。

［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は西壁で床面から30cmある。

［床］掘方埋土を床としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］床面で 2 個（P1・2）検出された。P1・2 は住居の西壁から 1 m 程内側の平行線上に位置しており、柱痕跡が認められる。いずれの掘方も平面形は45cm×35cmの隅丸長方形を呈し、断面が「V」字状で、深さは約50cmある。柱痕跡は20cm×15cmの隅丸長方形を呈する。また、床面で確認された P3 も柱穴の可能性が強い。この P1～3 は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［出土遺物］床面直上から土師器甑（第15図 2 ）・甕（第15図 1 ）が出土している。この他にも床面直上からは土師器鉢・甕、体部外面に平行タタキが施された須恵器甕などの破片が出土している。



【SI02 住居跡】（第16・17図）

［位置・確認面］ I 区の東寄りで検出された。確認面は⑨層上面で、東側へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－14°－W である。

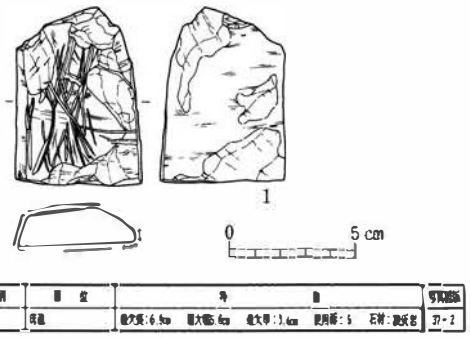
層位	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物、砂小ブロック少量	自然流入土
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物	自然流入土
3	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物少量、砂ブロック	自然流入土
4	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	人為堆積土
5	黒褐色(7.5YR2/2)	シルト	炭化材・炭化物多量、砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	人為堆積土
6	褐色(7.5YR4/3)	シルト	焼土ブロック多量	カマド周辺上風除落土
7	にぶい黄橙色(10YR6/3)	粘土質シルト	焼土、砂ブロック・粘土ブロック混じり	カマド粉焼部崩落土
8	黒色(10YR2/1)	シルト	焼土、炭化物多量	カマド裡面内堆積土(機能時の堆積)
9	にぶい赤褐色(5YR4/3)	シルト	焼土ブロック主体、極薄い炭化物層・灰	カマド燃焼部内堆積土(機能時の堆積)
10	黒褐色(2.5Y3/1)	砂質シルト	炭化物若干	壁材の痕跡
11	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	炭化物若干、砂ブロック多く	周辺埋土
12	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック多く	掘方埋土

第16図　SI02 住居跡

［重複］SI03・27・30住居跡と重複しており、いずれよりも新しい。

［平面形・規模］東西3.5m×南北3.7mの正方形を呈する。

［堆積土］9層認められ、1～3層は自然流入土である。4・5層は砂と黒色粘土のブロックを主体とし、5層には炭化材・炭化物が多量に含まれる。いずれも人為堆積土とみられる。6層はカマド煙道上部の崩落土、7層は燃焼部の崩壊土である。8・9層は焼土・灰・炭化物が混入する層で、カマド機能時の堆積と考えられる。



第17図　SI02住居跡出土遺物

［壁］SI03・27住居跡と重複する部分ではその埋土を、他では地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りの良い東壁で床面から35cmある。

［床］掘方埋土を床としいる。床面には若干凹凸があり、カマド付近がやや高くなっている。

［周溝］壁の直下をほぼ全周し、カマド下部で途切れる。上幅15～25cm、深さ10cm前後で、断面は「U」字状を呈する。堆積土は締まりのある暗灰黄色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅約10cm、深さ10cm前後の黒褐色の堆積土が断続的に認められる。

［カマド］北辺ほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部では、住居の壁を20cm程掘り込んで奥壁とし、灰褐色の粘土質シルトを積み上げて側壁を構築している。燃焼部底面は焚き口側へ傾斜しており、中央部が強く焼けて赤変している。底面と煙道の間には5cmの段がつく。煙道は先端に向かって上向きに傾斜しており、長さ1.1mである。

［出土遺物］床面もしくは床面直上から土師器坏・鉢・甕の破片と砥石（第17図1）が出土している。坏には内面がヘラミガキ・黒色処理されているものとナデ調整のものが認められる。

【SI03住居跡】（第18・19図）

［位置・確認面］I区の東寄りで検出された。確認面は⑨層上面で、東側へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－19°－Wである。

［重複］SI02・30住居跡と重複しており、前者よりも古く、後者よりも新しい。

［平面形・規模］SI02住居跡によって住居西半の大部分が壊されているものの、東西5.3m×南北5.5mの正方形を呈する。

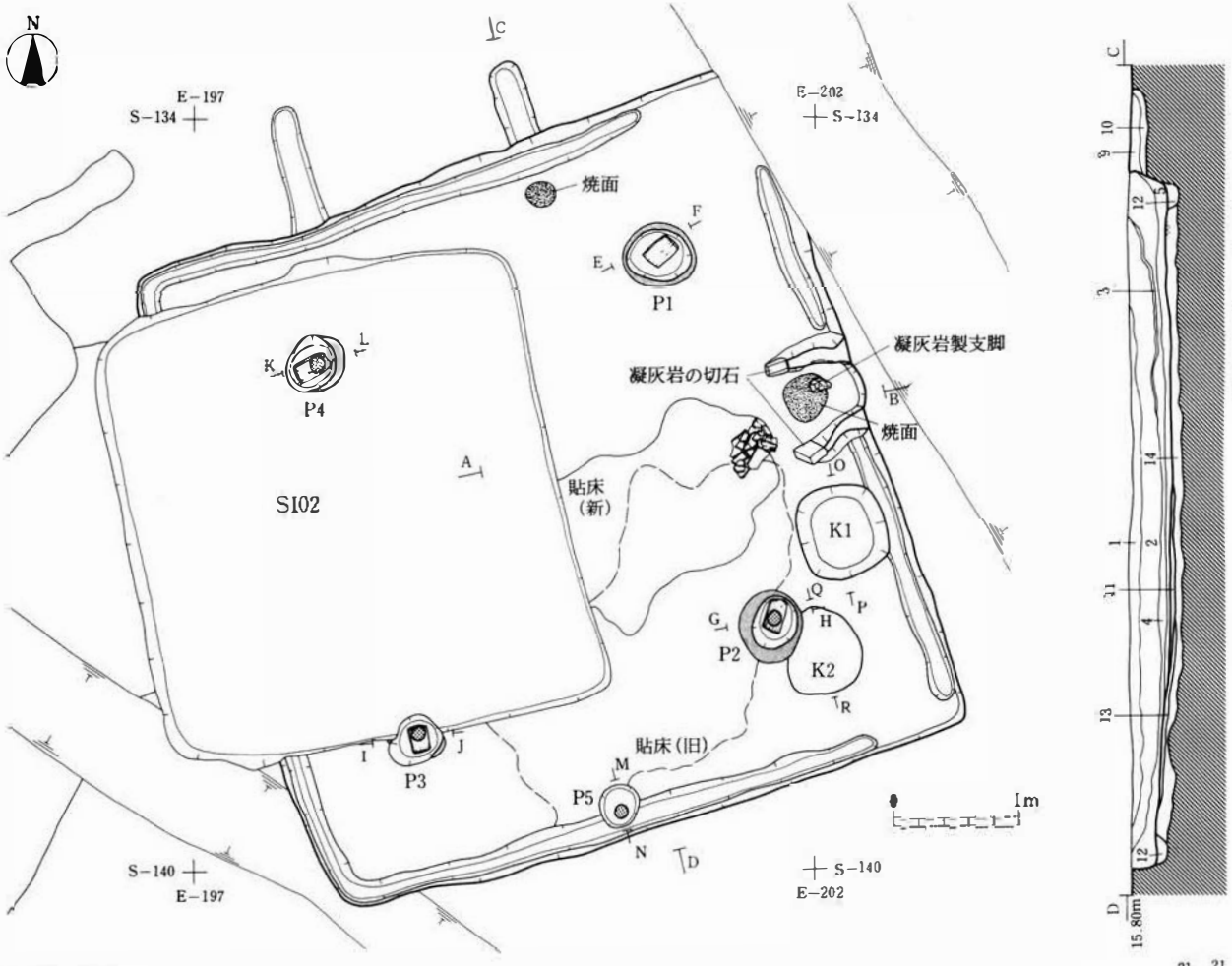
［堆積土］10層認められ、1・2層は自然流入土である。3層は薄い炭化物層で、植物の繊維質が自然炭化したものとみられる。4・5層は砂と黒色粘土のブロックを主体としており、人為堆積土と考えられる。6層は新しいカマド燃焼部の崩壊土、7・8層はその燃焼部内に堆積した灰層と焼土・炭化物層で、機能時の堆積である。9・10層は古いカマドの煙道上部を崩して埋め戻した土とその煙道内堆積土である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りの良い北壁で床面から30cm

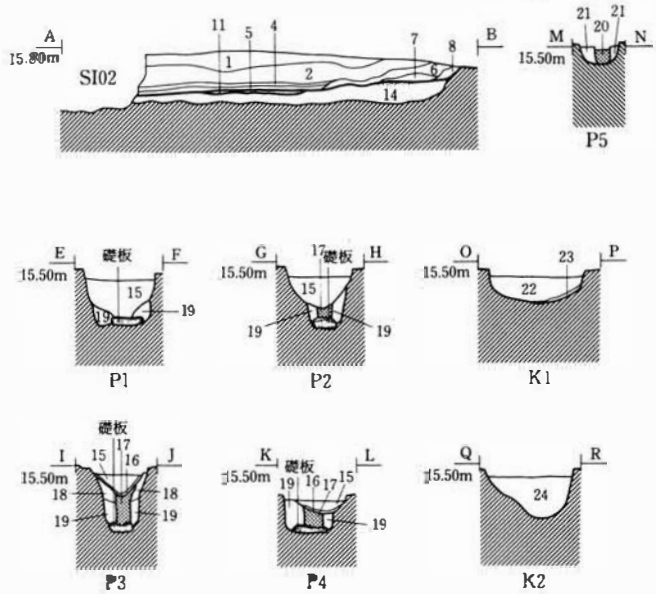
ある。

［床］南半の大部分は貼床されており、その他では掘方埋土を床としている。床面には凹凸があり、北西方向へやや傾斜している。なお、貼床が2枚認められることから、床面が1回補修されていることがわかる。

［柱穴］5個（P1～5）検出された。P1～3は床面で、P4はSI02住居跡の掘方埋土除去後に確認され



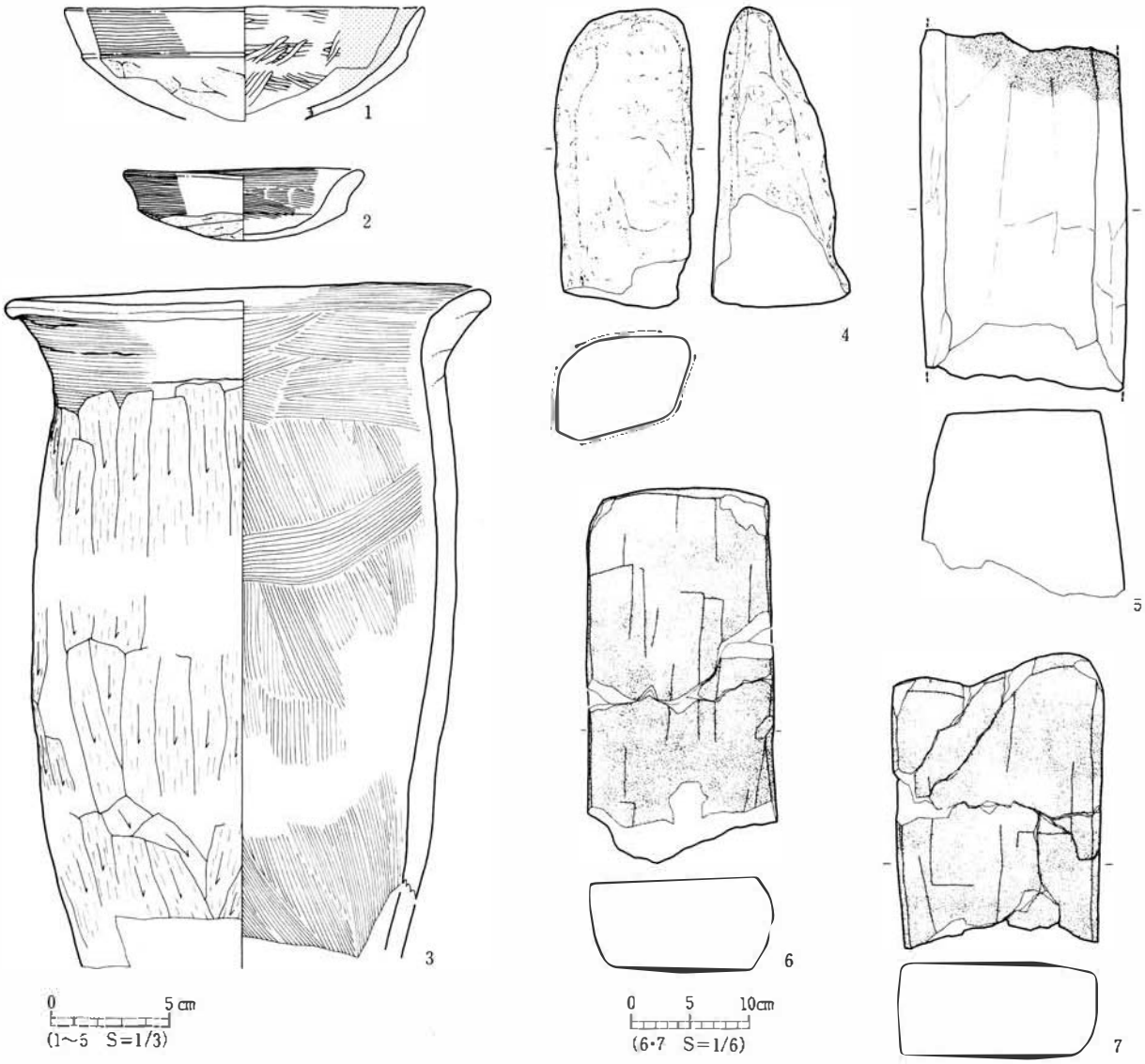
図位	土色	土質	混入物等	備考
1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物	自然流入土
2	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	炭化物少量	自然流入土
3				炭化物質褐色の粘質層が目的炭化？
4	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭土若干、砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	人為堆積土
5	褐色 (7.5YR4/2)	シルト	炭化物少量 砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	人為堆積土
6	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	シルト	炭土大ブロック・炭化物・黄褐色粘土ブロック多量	カマド（新）焼き減失堆土
7	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粉質シルト	炭土ブロック少量、灰主体	カマド（新）焼焼部内堆積土（最終時の堆積）
8	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	炭土ブロック・炭化物多量	カマド（新）焼焼部内堆積土（最終時の堆積）
9	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	黒土大ブロック・炭化物・砂ブロック・粘土ブロック混じり	カマド（旧）焼道埋土
10	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト	炭土小ブロック・炭化物多量	カマド（旧）焼道内堆積土（最終時の堆積）
11	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	砂ブロック多量、白色粘土ブロック少量、固まり強い	貼床
12	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	砂ブロック多く	周囲内堆積土（人為堆積）
13	オリーブ褐色 (2.5YR4/4)	シルト	砂ブロック・黄褐色粘土ブロック・白色粘土ブロック混じり	貼床
14	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	住居掘方埋土
15	黒褐色 (2.5YR3/1)	シルト	炭化物若干、砂小ブロック・粘土小ブロック	P1～4柱抜き取り痕
16				P3～4柱抜き取り痕（薄い炭化物層）
17	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	砂小ブロック	P2～4柱抜き取
18	オリーブ黒色 (5Y3/2)	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック多量	P3掘方埋土
19	オリーブ黒色 (7.5Y3/2)	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック多量	P1～4掘方埋土
20	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物少量	P5柱抜き取
21	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物若干、砂ブロック・粘土ブロック	P5掘方埋土
22	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	炭化物少量 砂ブロック	K1堆積土
23				K2堆積土（薄い炭化物層）
24	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	炭化物若干、砂ブロック・粘土ブロック混じり	K2堆積土（人為堆積）



第18図　SI03住居跡

ているが、これら4個の柱穴は住居平面形の対角線上に位置しており、SI03住居跡に伴う主柱穴と考えられる。いずれの柱穴にも柱抜き取り痕が認められ、掘方の平面形は長軸が45cm程の楕円形を呈し、深さ約50cmである。P2～4の柱穴下部では直径15cmの円形の柱痕跡が検出されており、全ての柱穴掘方底面上には厚さ5cm程の礎板が残る。礎板の樹種は同定の結果、サクラ属であった。また、P5は南辺中央壁際の床面で確認されている。掘方の平面形は直径30cmの円形を呈し、深さは15cmで、柱痕跡は直径10cmの円形である。

［周溝］残存する壁の直下をほぼ全周するが、東辺のカマド下部と北東・南東隅で途切れている。上幅15～20cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含む黒褐色土で、人為堆積とみられる。



No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	堆積土	外：軟い段、ヨコナデ・手持ちヘラケズリ？ 内：ヘラミガキ・黒色処理	(15.2)	—	—	1/4			A II b
2	土師器・坏	堆積土	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ヨコナデ・ナデ	10.2	—	2.9	完形		18－9	B III a
3	土師器・壺	床面	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ→ヘラナデ	20.4	—	—	4/5		18－7	A III b

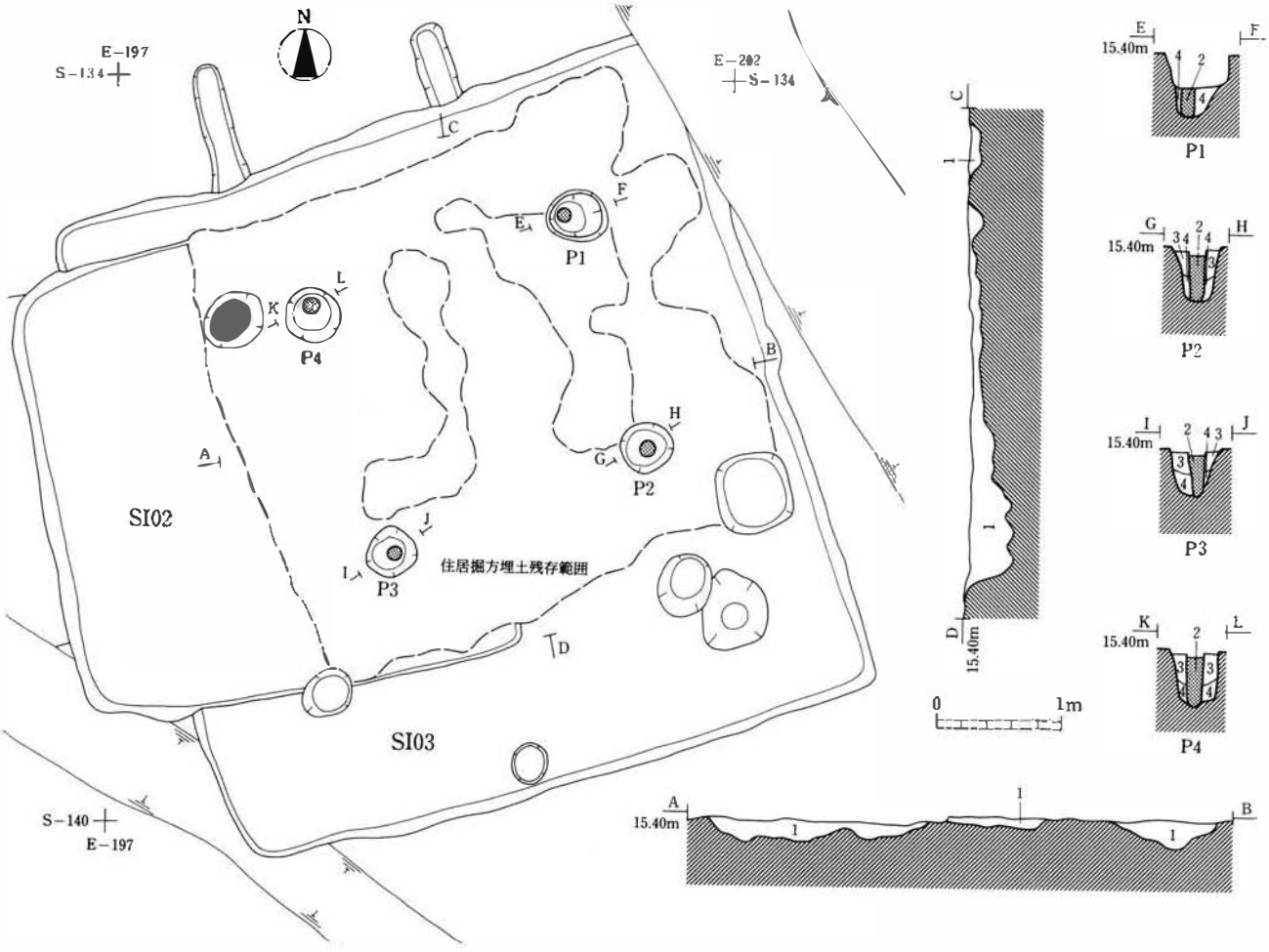
No.	種別	層位	特徴	写真図版
4	砥石	床面	最大長：12.6cm　最大幅：5.7cm　最大厚：5.6cm　使用面：4　石材：安山岩	37－3
5	凝灰岩製支脚	カマド燃焼部支脚	残存長：15.2cm　残存幅：8.3cm　最大厚：7.8cm　スクリーントーン部分は焼けて赤変	36－9
6	切石	カマド右ソデ焚き口	残存長：31.2cm　最大幅：15.9cm　最大厚：8.0cm　石材：凝灰岩　スクリーントーン部分は焼けて赤変	36－12
7	切石	カマド左ソデ焚き口	残存長：24.5cm　最大幅：16.7cm　最大厚：7.9cm　石材：凝灰岩　スクリーントーン部分は焼けて赤変	36－11

第19図　SI03 住居跡出土遺物

［カマド］東辺中央と北辺のやや東寄りで新旧２つのカマドが検出された。東辺のものが新しく、燃焼部が残る。側壁は黄褐色粘土主体の土を積み上げて構築されており、その焚き口部には凝灰岩の切石（第19図６・７）が左右１個ずつ据えられている。燃焼部底面は焚き口側へ傾斜しており、中央部が強く焼けて赤変している。底面の中央やや左側壁寄りでは凝灰岩製の支脚（第19図５）が検出されている。また、北辺の古いカマドでは燃焼部側壁が取り払われて、直径20cm程の円形の焼け面と煙道が残る。底面と煙道の間には15cmの段がつく。長さ70cmの煙道はほぼ水平に延び、上部が意識的に崩されて埋め戻されていたと考えられる。

［貯蔵穴状ピット］床面で２個（K1･2）検出された。K1は東辺のカマド右脇に位置しており、平面形が75cm×70cmの隅丸正方形で、深さは25cmある。堆積土は２層認められ、上層は砂のブロックを含む黒褐色土、下層は底面上に堆積した薄い炭化物層である。また、南東隅近くに位置するK2は70cm×60cmの不整形を呈し、深さ40cmである。堆積土は砂と粘土のブロックが混じる黒褐色土１層で、人為堆積と考えられる。

［出土遺物］床面から土師器甕（第19図３）が出土している他、床面直上の遺物には内面がナデ調整



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物、砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	住居掘方埋土
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト		P1～4柱痕跡
3	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	砂ブロック多く	P2～4掘方埋土
4	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	P1～4掘方埋土

第20図　SI30 住居跡

された土師器坏や土師器鉢・甕の破片、砥石（第19図４）が認められる。また、堆積土中からは土師器坏（第19図１・２）が出土している。

【SI30 住居跡】（第20図）

［位置・確認面］Ｉ区の東寄りで検出された。SI02・03 住居跡を掘り上げた後に確認している。

［重複］SI02・03 住居跡と重複しており、いずれよりも古い。

［平面形・規模］SI02・03 住居跡によって壊されており、壁・堆積土が残存しないことから全体の規模は不明であるが、残った掘方埋土の状況から東西4.2ｍ以上×南北3.9m 以上で方形を基調とするものと考えられる。

［床］掘方埋土が残るのみで、詳細は不明である。

［柱穴］４個(P1～4)検出された。P1 は SI03 住居跡柱穴の直下で、P2～4 は SI02・03 住居跡の掘方埋土除去後に確認されている。これら４個の柱穴は残存する掘方埋土の平面形のほぼ対角線上に位置しており、SI30 住居跡に伴う主柱穴と考えられる。いずれの柱穴にも直径約15cmの円形の柱痕跡が認められ、掘方の平面形は長軸が40～45cmの不整形を呈し、深さ40～50cmで残る。

［出土遺物］遺物は出土していない。

【SI04 住居跡】（第21～23図）

［位置・確認面］Ｉ区の東寄りで検出された。確認面は⑨層上面で、東側へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、Ｎ－33°－Ｅである。

［重複］SI05・06・25・27 住居跡と重複しており、いずれよりも新しい。

［平面形・規模］攪乱によって住居の北東部が壊されているものの、東西6.0ｍ×南北6.1m の正方形を呈する。

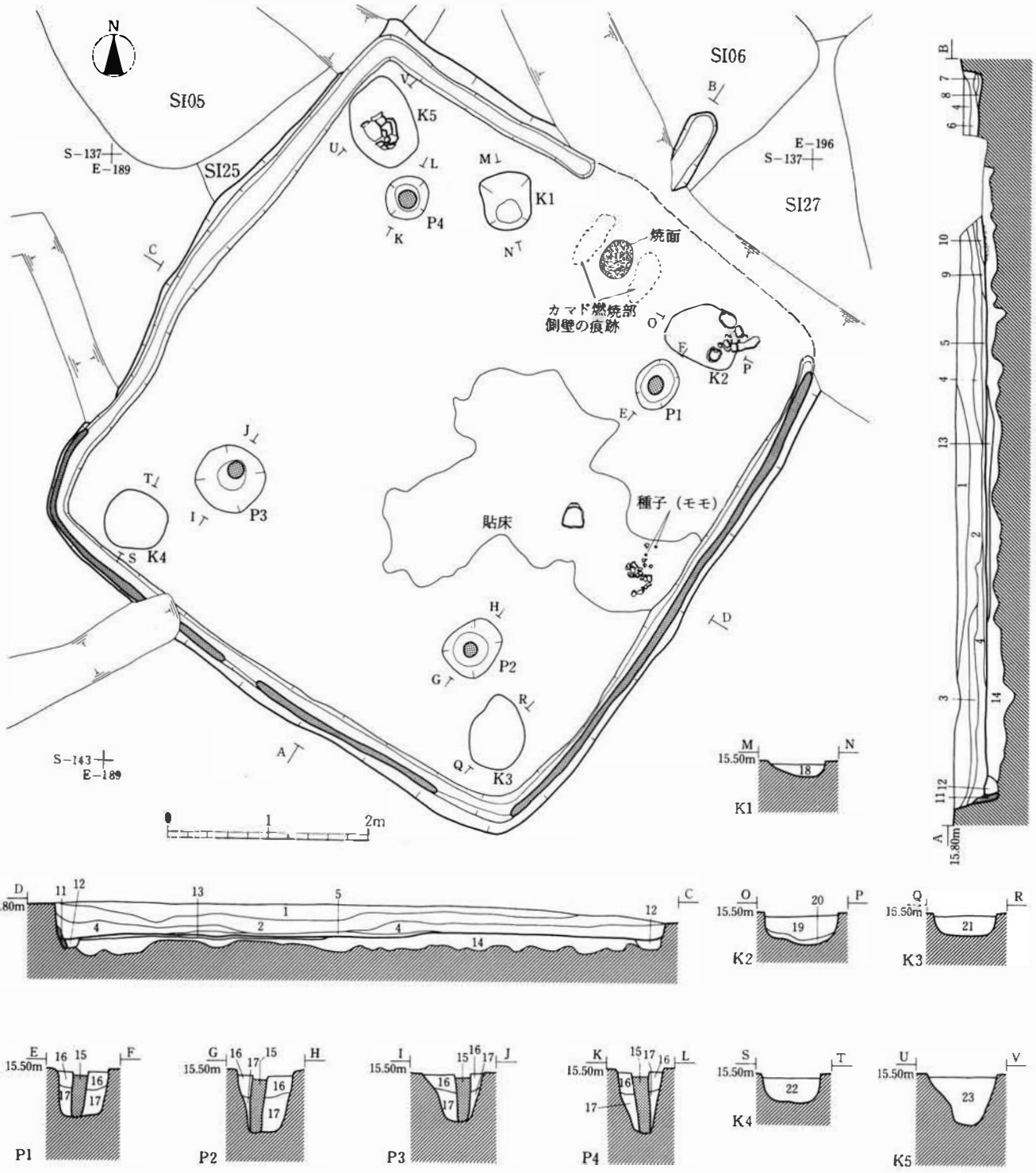
［堆積土］10層認められ、１～４層は自然流入土である。５層は砂のブロックを多く含み、やや締まりがあることから人為堆積土の可能性がある。６層はカマド煙道上部の崩落土、７・８層は煙道内堆積土である。９・10 層はそれぞれカマド燃焼部内に堆積した炭化物層・灰層で、機能時の堆積と考えられる。

［壁］基本的に地山を壁としているが、SI05・06・25・27 住居跡と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は残りの良い東壁で床面から35cmある。

［床］中央部から東辺中央の壁際にかけ貼床されており、その他では掘方埋土を床としている。床面には凹凸があり、西半がやや高くなっている。

［柱穴］床面で４個（P1～4）検出された。P1～4 は住居平面形の対角線上に位置しており、いずれにも柱痕跡が認められる。掘方の平面形は一辺または長辺が45～65cmの隅丸正方形もしくは長方形を呈し、深さは50～65cmである。柱痕跡は直径約15cmの円形を呈する。この P1～4 は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

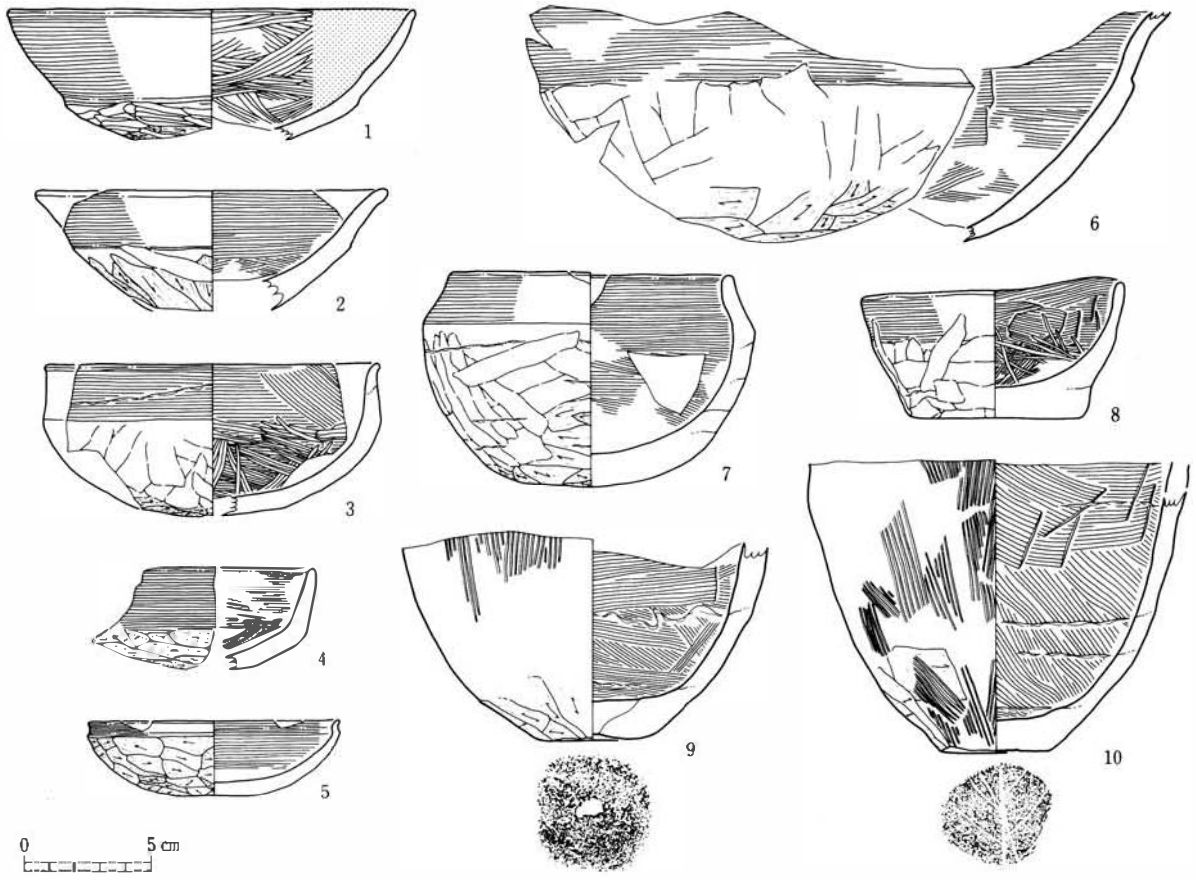
［周溝］北東部は攪乱されて不明であるが、他では壁の直下を巡っている。上幅15～35cm、深さ10～15



個位	土色	土性	構入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物少量	自然流入土
2	暗褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物	自然流入土
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		自然流入土
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト		自然流入土
5	黄褐色(7.5YR3/3)	砂質シルト	砂ブロック多く、やや締まりあり	人為堆積土?
6	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	粘土・炭化物	カマド周辺上部崩落土
7	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シルト	粘土・炭化物少量	カマド周辺内堆積土
8				カマド周辺内堆積土(周い炭化物層、粘土塊の堆積)
9				カマド周辺内堆積土(炭化物層、粘土塊の堆積)
10			粘土・炭化物若干	カマド燃焼部内堆積土(灰層、粘土塊の堆積)
11	褐色(5YR3/2)	粘土質シルト		壁材の痕跡
12	オリーブ褐色(5YR3/2)	砂質シルト	砂ブロック多く、締まりあり	堆積土

個位	土色	土性	構入物等	備考
13	にぶい褐色(7.5YR7/4)	砂質シルト	砂ブロック多量、締まり無い	貼床
14	暗褐灰色(7.5GY)	砂質シルト	炭化物若干、砂ブロック多く	灰層最方埋土
15	暗褐灰色(10GY3/1)	粘土質シルト	炭化物・砂小ブロック少量	P1～4 [illegible]
16	暗褐色(10GY2/1)	粘土質シルト	炭化物少量、砂ブロック	P1～4 [illegible]
17	暗褐灰色(10GY4/1)	砂質シルト	砂ブロック多量	P1～4 [illegible]
18	黒色(N1.5/)	シルト	炭化物多く、砂ブロック少量	K1 堆積土
19	灰褐色(7.5YR4/2)	粘土質シルト	粘土・炭化物、砂ブロック・粘土ブロック多量	K2 堆積土(人為堆積)
20	黒灰色(7.5GY5/1)	砂質シルト	砂大ブロック多量、粘土ブロック	K2 堆積土(人為堆積)
21	暗褐灰色(7.5GY4/1)	粘土質シルト	炭化物少量、砂ブロック・粘土ブロック多量	K3 堆積土(人為堆積)
22	暗褐灰色(7.5GY4/1)	粘土質シルト	炭化物少量、砂ブロック・粘土ブロック多量	K4 堆積土(人為堆積)
23	暗褐灰色(10GY4/1)	砂質シルト	炭化物少量、砂ブロック多量	K5 堆積土(人為堆積)

第21図　SI04 住居跡



No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	床面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→粗いヘラミガキ 内：ヘラミガキ→黒色処理	16.2	—	—	1/2		19－1	A Ⅱb
2	土師器・坏	床直	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヨコナデ・ナデ	(14.0)	—	—	1/4			B Ⅲa
3	土師器・坏	床直	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヨコナデ→ヘラミガキ	(13.2)	—	(5.9)	1/4		19－2	B Ⅳc
4	土師器・坏	掘方埋土	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ヨコナデ→ヘラミガキ	—	—	—	1/10	黒色処理脱色？		A Ⅲc
5	土師器・坏	堆積土	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ　内：ヨコナデ	(10.0)	—	3.0	2/5		19－5	B Ⅱ1
6	土師器・鉢	掘方埋土	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	—	—	—	一部			B
7	土師器・鉢	床面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	11.2	—	8.4	1/2底完		19－4	A Ⅰ
8	ミニチュア土器	K2 堆積土	外：ヨコナデ→軽いナデ 内：ヘラナデ→粗いヘラミガキ→底：粗いナデ	10.4	6.7	5.5	完形		19－3	B
9	土師器・甕	床直	外：ハケメ・ヘラケズリ　内：ナデ・ヘラナデ ススケ	—	4.6	—	1/5			
10	土師器・甕	床面	外：ハケメ・ヘラケズリ　内：ナデ・ヘラナデ	—	4.2	—	1/3			

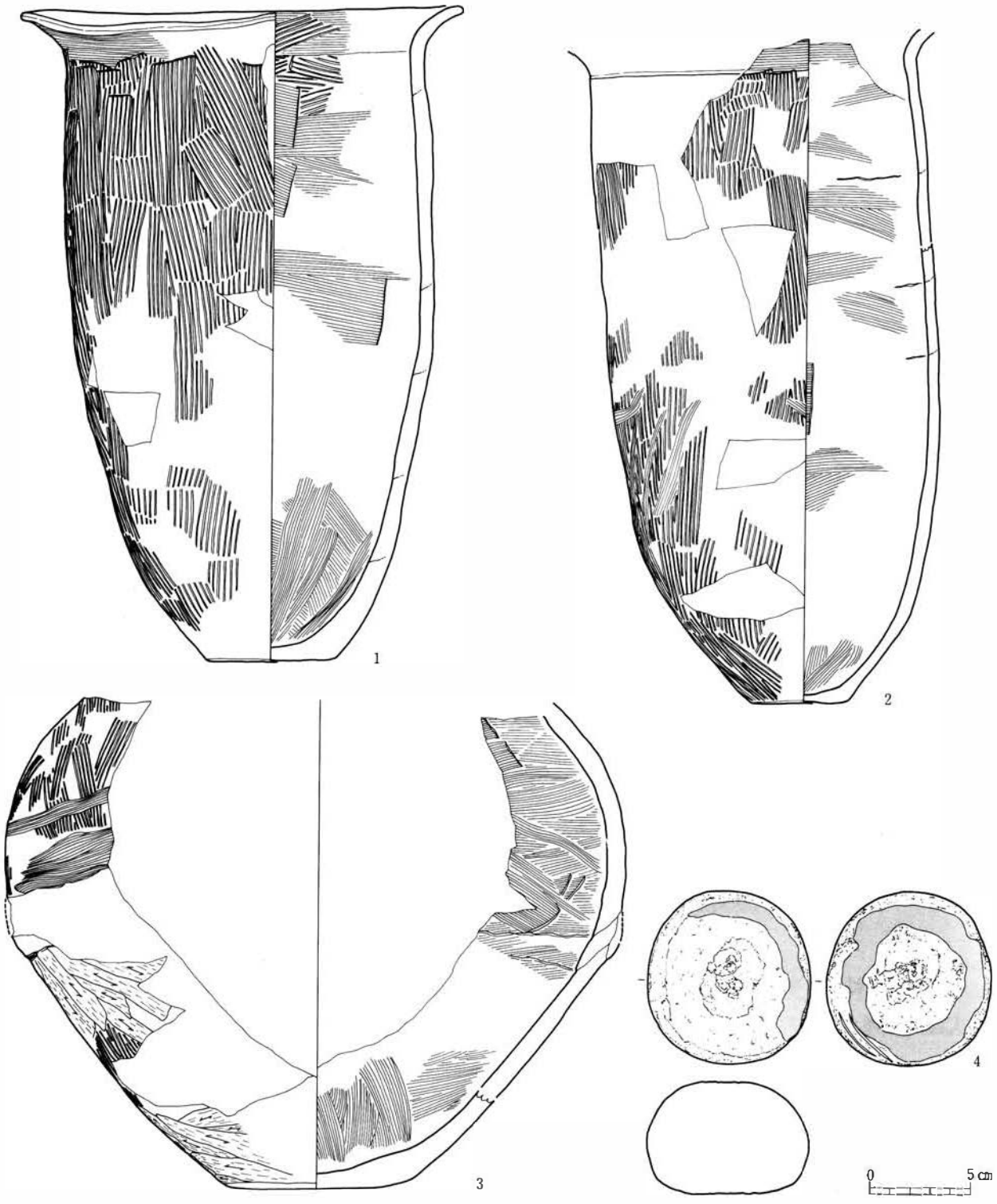
第22図　SI04 住居跡出土遺物（1）

cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのあるオリーブ黒色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、東・南辺の周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅5～10cm、深さ10～15cmの黒色の堆積土が断続的に認められる。

［カマド］北辺中央から若干東寄りで検出された。攪乱によって壊されており、燃焼部側壁の痕跡と焼け面、煙道の一部が残る。焼け面は40cm×30cmの隅丸長方形を呈し、平坦である。煙道はほぼ水平に延び、長さ1.0m程である。

［貯蔵穴状ピット］床面で5個（K1～5）検出された。これらのピットはカマドの脇もしくは住居の隅に位置しており、やや不整であるが方形を基調とするものが多い。この内、K2～5の堆積土はいずれも砂と粘土のブロックを多量に含むことから人為堆積と考えられる。

［出土遺物］床面や床面直上、K2 堆積土中、住居掘方埋土中から土師器坏（第22図1～4）・鉢（第22図6・7）・甕（第22図9・10、第23図1～3）、ミニチュア土器（第22図8）、凹・磨石（第23図4）が出土している。この他にも床面や床面直上の遺物には土師器坏・鉢・甕などの破片とモモの種子2



No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・甕	床直	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	22.0	6.5	32.3	7/8		19－6	A IV1a
2	土師器・甕	床面	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ　底：木葉痕	－	4.9	－	2/3		19－7	A I a
3	土師器・甕	床面	外：ハケメ→ナデ・ヘラケズリ　内：ヘラナデ	－	9.5	－	1/5			B1b
No.	種別	層位	特徴							写真図版
4	磨・凹石	床直	径：8.5cm　厚さ：5.5cm　石材：安山岩　スクリーントーン部分は磨面の範囲							37－11

第23図　SI04 住居跡出土遺物（2）

点が認められる。坏には内面がヘラミガキ・黒色処理されているものとナデ調整のものがある。甕は長胴形のものが多く、体部外面の調整はハケメもしくはヘラケズリである。堆積土中からは土師器坏（第22図５）が出土している。

【SI05 住居跡】（第24図）

［位置・確認面］ Ⅰ区の東寄りで検出された。確認面は⑨層上面で、東側へ緩やかに傾斜している。

［方向］ 住居の方向は、N－30°－W である。

［重複］ SI04・06・25 住居跡、SK56 土壙と重複しており、SI04 住居跡、SK56 土壙よりも古く、他の住居よりも新しい。

［平面形・規模］住居の北半以上が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、東西5.5m×南北2.1m 以上で方形を基調とする。

［堆積土］ 4 層認められる。１・２層は砂のブロックを多く含み、やや締まりがあることから人為堆積土の可能性がある。３・４層はいずれも住居壁の崩落土とみられる。

［壁］ SI06・25 住居跡と重複する部分ではその埋土を、他では地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は残りの良い西壁で床面から25cmある。

［床］ 中央部から南辺中央の壁際にかけ貼床されており、その他では掘方埋土を床としている。床面には凹凸があり、中央部が若干高くなっている。

［柱穴］ 床面で２個（P1・2）検出された。P1・2 は住居の南壁から1.2m 程内側の平行線上に位置しており、柱痕跡が認められる。掘方の平面形は一辺が40cm程のやや不整な隅丸正方形を呈し、深さは30cmである。柱痕跡は直径約15cmの円形を呈する。この P1・2 は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］ 調査区内では壁の直下を巡っている。上幅15～25cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある暗緑灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅約５cm、深さ10cm前後の緑黒色の堆積土が認められる。

［出土遺物］ 住居掘方埋土中から土師器坏（第24図１）と土師器高坏・甕の小破片が出土しており、床面の遺物にはナデ調整の土師器坏も認められる。高坏の坏部内面はヘラミガキ・黒色処理されている。また、堆積土中からは土師器坏（第24図２）が出土している。

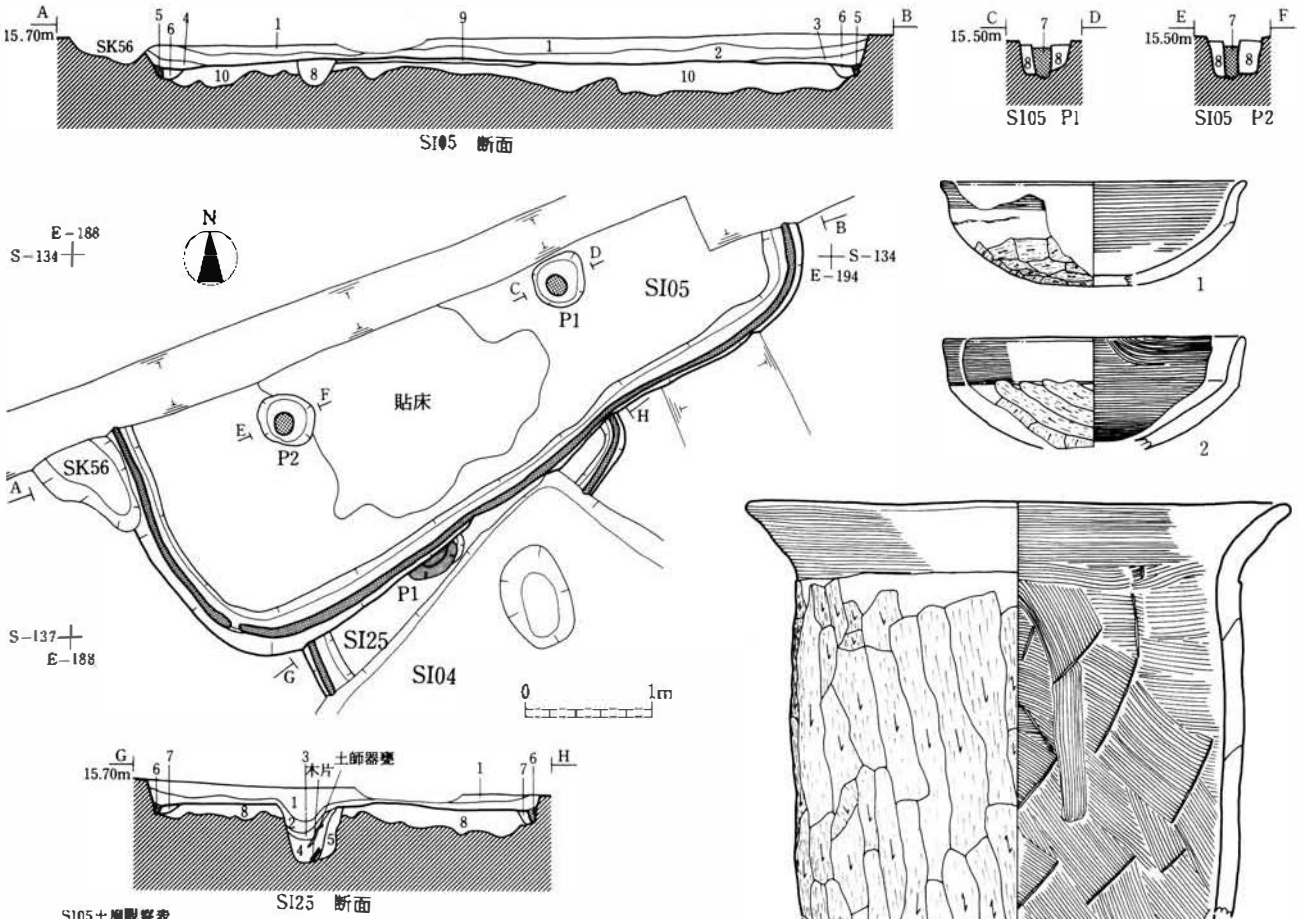
【SI25 住居跡】（第24図）

［位置・確認面］ Ⅰ区の東寄りで検出された。確認面は⑨層上面で、東側へ緩やかに傾斜している。

［重複］ SI04・05・06 住居跡と重複しており、SI06 住居跡よりも新しく、他の住居よりも古い。

［平面形・規模］ 住居の大部分が SI04・05 住居跡によって壊されているため全体の規模は不明であるが、東西3.1m×南北0.5m 以上で方形を基調としていると考えられる。

［堆積土］ 2 層認められる。１・２層は砂と粘土のブロックを多く含み、締まりもあることから人為



SI05土層観察表

層位	土色	土性	混入物等	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物、砂ブロック多く、やや締まりあり	人為堆積土？
2	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック多く、やや締まりあり	人為堆積土？
3	黄褐色(5Y5/3)	砂質シルト		住居壁崩落土
4	暗緑灰色(10GY3/1)	粘土質シルト		住居壁崩落土
5	緑黒色(10GY2/1)	粘土質シルト	砂小ブロック少量	壁材の経路
6	暗緑灰色(10GY3/1)	砂質シルト	砂ブロック多く、締まりあり	周溝埋土
7	暗緑灰色(10GY4/1)	粘土質シルト	砂小ブロック若干	P1・2柱抜き取り
8	暗緑灰色(10GY4/1)	砂質シルト	砂ブロック多量	P1・2掘方埋土
9	灰オリーブ色(5Y5/3)	砂質シルト	砂ブロック多量、締まり強い	貼床
10	暗緑灰色(10GY4/1)	砂質シルト	砂ブロック多く	住居掘方埋土

SI25 土層観察表

層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物、砂ブロック・粘土ブロック多く、締まりあり	人為堆積土
2	暗灰色(N3/)	粘土質シルト	炭化物少量、砂ブロック・粘土ブロック多く、締まりあり	人為堆積土
3				P1柱抜き取り痕(自然炭化？の炭化物層)
4	暗緑灰色(10GY3/1)	シルト	砂ブロック多く、土師片・木片	P1柱抜き取り痕

層位	土色	土性	混入物等	備考
5	暗緑灰色(10GY4/1)	砂質シルト	砂小ブロック多量	P1掘方埋土
6	緑黒色(10GY2/1)	粘土質シルト		壁材の経路
7	暗緑灰色(10GY3/1)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック多く、締まりあり	周溝埋土
8	暗緑灰色(10GY4/1)	砂質シルト	炭化物少量、砂ブロック多量	住居掘方埋土

No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	SI05・掘方埋土	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ　内：ヨコナデ	(12.2)	-	(4.1)	1/3		19-8	B IV a
2	土師器・坏	SI05・堆積土	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ　内：ヨコナデ	(12.0)	-	-	1/6		19-9	B III c
3	土師器・壺	SI25・P1スキ	外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ヘラナデ→ナデ・ヨコナデ	(21.6)	-	-	1/4		20-1	A IV 2b

第24図　SI05・25住居跡および出土遺物

堆積土とみられる。

［壁］SI06住居跡と重複する部分ではその埋土を、他では地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は西壁で床面から20cmある。

［床］掘方埋土を床としており、床面には凹凸がある。

［柱穴］床面で1個（P1）検出されており、柱抜き取り痕が認められる。掘方の平面形は50cm×40cmの隅丸長方形を呈し、深さは45cmである。

［周溝］残存する壁の直下で検出されている。上幅15～25cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂と粘土のブロックを多く含み、締まりのある暗緑灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅約5cm、深さ10cm前後の緑黒色の堆積土が認められる。

［出土遺物］P1の柱抜き取り穴から土師器甕（第24図3）が出土した他、堆積土中からも土師器甕の破片が数点出土している。

【SI06住居跡】（第25・26図）

［位置・確認面］I区の東寄りで検出された。確認面は⑨層上面で、東側へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－34°－Wである。

［重複］SI04・05・25・27住居跡と重複しており、SI27住居跡よりも新しく、他の住居よりも古い。

［平面形・規模］調査区内ではSI04・05・25住居跡によって壊されており、住居東半が残る。現状から東西3.2m以上×南北3.6m以上で方形を基調とする。

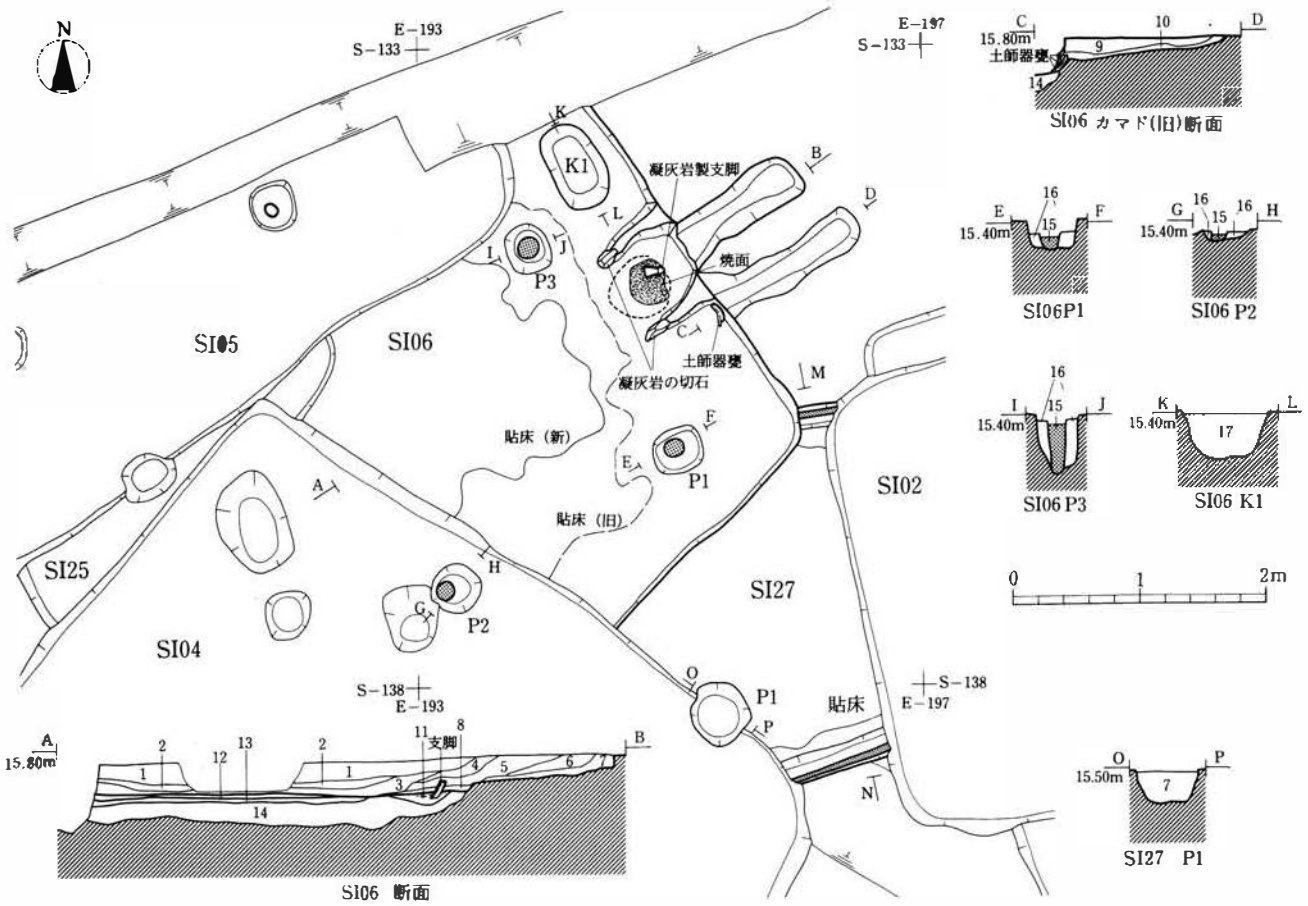
［堆積土］10層認められる。1～3層は砂のブロックを多く含み、やや締まりがあることから人為堆積土の可能性がある。4・5層は新しいカマドの燃焼部と煙道上部の崩壊土、6～8層はそのカマド内堆積層である。この内7・8層はカマド機能時に堆積した焼土・炭化物もしくは灰から成る。9・10層は古いカマドの煙道上部を崩して埋め戻した土とその煙道内堆積土である。

［壁］基本的に地山を壁としているが、SI27住居跡と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は残りの良い東壁で床面から25cmある。

［床］中央部を中心に貼床されており、その他では掘方埋土を床としている。床面には若干凹凸があり、中央部がやや高くなっている。なお、貼床が2枚認められることから、床面が1回補修されていることがわかる。

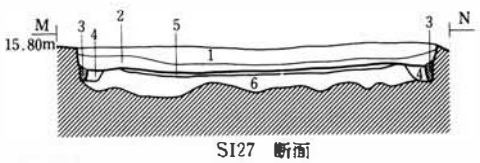
［柱穴］3個（P1～3）検出された。P1・3は床面で、P2はSI04住居跡の掘方埋土除去後に確認されているが、これら3個の柱穴は住居平面形の対角線上に位置するものとみられ、SI06住居跡に伴う主柱穴の可能性が強い。いずれの柱穴にも直径約15cmの円形の柱痕跡が認められる。掘方の平面形は一辺または長辺が40cm程の隅丸正方形もしくは長方形を呈し、深さは10～45cmである。

［カマド］東辺で新旧2つのカマドが検出された。ほぼ中央に位置するとみられるカマドが新しく、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は黄褐色粘土主体の土を積み上げて構築されており、その焚き口部には凝灰岩の切石（第26図7・8）が左右1個ずつ据えられている。燃焼部底面は焚き口側へ緩やかに傾斜しており、中央部が強く焼けて赤変している。底面のほぼ中央では凝灰岩製の支脚（第26図6）が検出されている。底面と煙道の間には5cmの段がつき、長さ1.1mの煙道はほぼ水平に延びる。また、すぐ南側の古いカマドでは燃焼部が除去されており、煙道が残るのみである。長さ1.3mの煙道は先端に向かって上向きに傾斜しており、上部が意識的に崩されて埋め戻されていたと考えられる。この煙道の末端には土師器甕の口縁から体部にかけての破片（第26図3）が貼り付けられており、埋め戻した土の崩れ止めに利用されていた可能性がある。



SI06 土層観察表

番位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	畳薄い炭化物層、砂ブロック多く、締まりあり	人為堆積土
2	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック多く、締まりあり	人為堆積土
3	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	炭化物多量、砂ブロック多く、締まりあり	人為堆積土
4	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	焼土・炭化物少量、黄褐色粘土ブロック	カマド（新）燃焼部・煙道上部崩壊土
5	暗赤褐色(5YR3/2)	シルト	焼土ブロック・炭化物多く、黄褐色粘土ブロック	カマド（新）燃焼部・煙道上部崩壊土
6	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	炭化物	カマド（新）煙道内堆積土
7	黒褐色(5YR3/1)	シルト	焼土小ブロック・炭化物多く	カマド（新）煙道内堆積土(機能時の堆積)
8			焼土・炭化物少量	カマド（新）燃焼部内堆積土(灰層、焼成時の堆積)
9	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物少量、砂ブロック・粘土ブロック疎じり	カマド（旧）煙道埋土
10	黒色(5YR1.7/1)	シルト	焼土ブロック少量、炭化物多量	カマド（旧）煙道内堆積土(機能時の堆積)
11	にぶい赤褐色(5YR5/4)	シルト	焼土・炭化物・砂ブロック、焼けて添加	人為堆積土
12	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	最上部に薄い炭化物層、締まり強い	貼床
13	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	砂ブロック多く、締まり強い	貼床
14	灰オリーブ色(5Y5/2)	砂質シルト	砂ブロック多く	住居重方埋土
15	緑黒色(7.5GY2/1)	粘土質シルト	炭化物少量	P1～3 柱痕跡
16	暗緑灰色(7.5GY3/1)	砂質シルト	炭化物少量、砂ブロック	P1～3 間方埋土
17	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック多く	K1 堆積土(3層とほぼ同一)



SI27 土層観察表

番位	土色	土性	混入物等	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物少量、砂ブロック・粘土ブロック多く、締まりあり	人為堆積土
2	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック・粘土ブロック多く、締まりあり	人為堆積土
3	オリーブ黄色(5Y3/2)	粘土質シルト	砂小ブロック	電材の痕跡
4	灰オリーブ色(5Y5/2)	砂質シルト	砂ブロック多く、締まりあり	角焼埋土
5	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	炭化物若干、砂ブロック・粘土小ブロック疎じり、締まり強い	貼床
6	オリーブ黄色(7.5Y5/2)	砂質シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック疎じり	住居重方埋土
7	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック疎じり	P1 堆積土(柱痕を取り穴?)

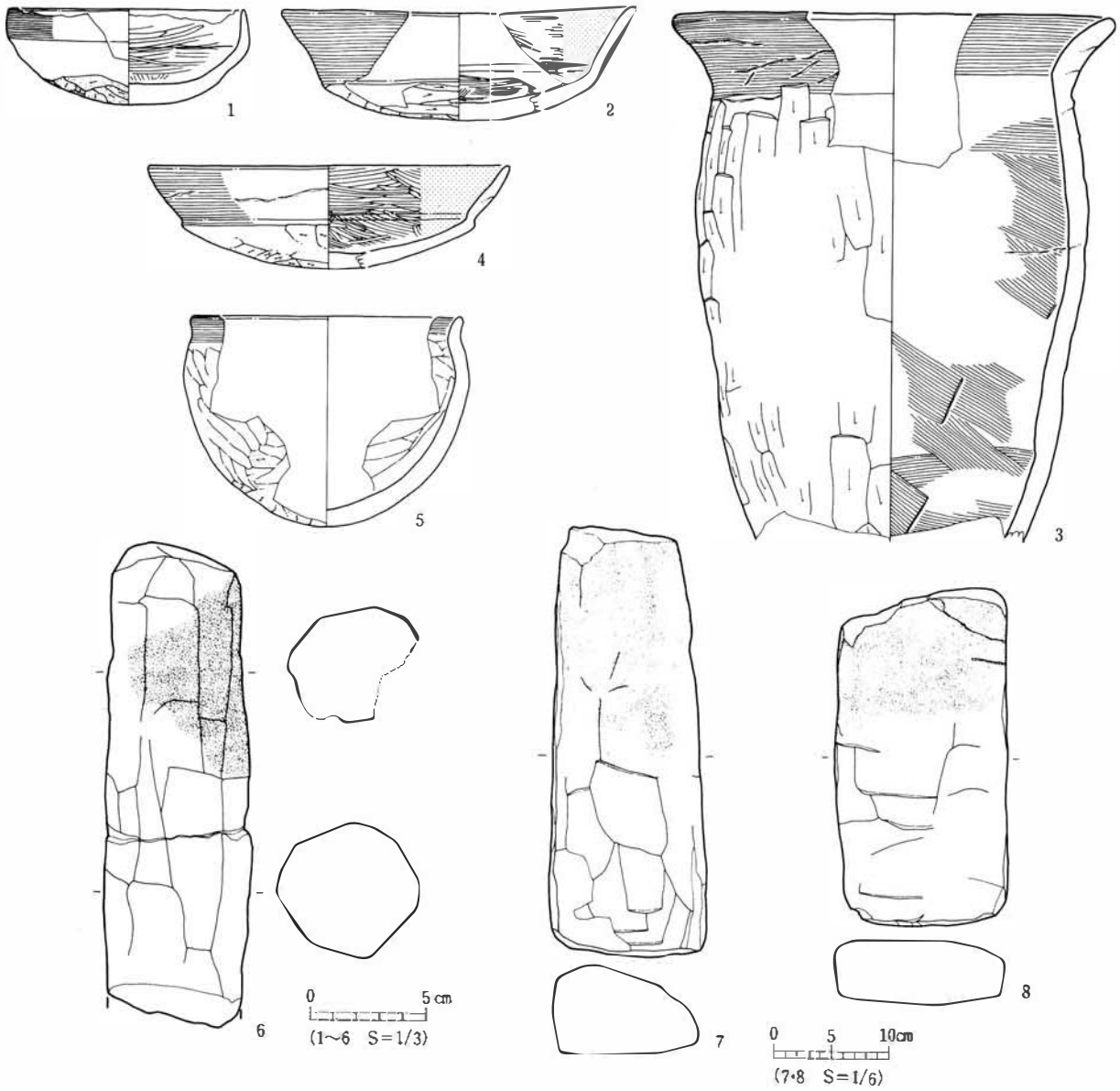
第25図　SI06・27 住居跡

［貯蔵穴状ピット］新しいカマド左脇の床面で検出された（K1）。平面形は70cm×40cmの隅丸長方形を呈し、深さは35cmである。堆積土は砂のブロックを多く含む黄灰色土で、住居堆積土の３層とほぼ同一である。

［出土遺物］床面直上から土師器坏（第26図１・２）と土師器甕の破片少量が出土している。また、古いカマドの煙道末端には貼り付けられていたとみられる土師器甕（第26図３）が残る。

【SI27 住居跡】（第25・26図）

［位置・確認面］Ⅰ区の東寄りで検出された。確認面は⑨層上面で、東側へ緩やかに傾斜している。



No	種別	層位	観察	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	SI06・床直	外：ヨコナデ・小時ちヘラケズリ 内：ヘラガキ	10.2	—	4.1	ほぼ完形	黒色処理脱色？	19－10	A Ⅲd
2	土師器・坏	SI06・床直	外：ヨコナデ→手時ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(15.4)	—	4.7	1/2		20－3	A 1 a
3	土師器・甕	SI06・カマド（旧）煙道	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	(19.2)	—	—	1/4		20－2	A 112b
4	土師器・坏	SI27・床直	外：ヨコナデ→手時ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(15.6)	—	4.4	1/2		20－4	A 1 b
5	土師器・鉢	SI27・床直	外：ヨコナデ・ヘラケズリ→軟いナデ 内：ヨコナデ→軟いナデ	(11.8)	—	(9.0)	1/4		20－5	A 11
No	種別	層位	特徴							写真図版
6	緑泥岩製支脚	カマド（新）燃焼部支脚	残存長：20.7cm　最大幅：6.2cm　最大厚：5.7cm　スクリーントーン部分は焼けて赤変							36－10
7	切石	カマド（新）右ソデ焚き口	最大長：36.8cm　最大幅：12.7cm　最大厚：8.0cm　石材：凝灰岩　スクリーントーン部分は焼けて赤変							36－14
8	切石	カマド（新）左ソデ焚き口	最大長：28.9cm　最大幅：14.8cm　最大厚：5.5cm　石材：凝灰岩　スクリーントーン部分は焼けて赤変							36－13

第26図　SI06・27住居跡出土遺物

［重複］SI02・04・06住居跡と重複しており、いずれよりも古い。

［平面形・規模］住居の大部分がSI02・04・06住居跡によって壊されているため全体の規模は不明であるが、東西1.9m以上×南北2.8mで方形を基調としていると考えられる。

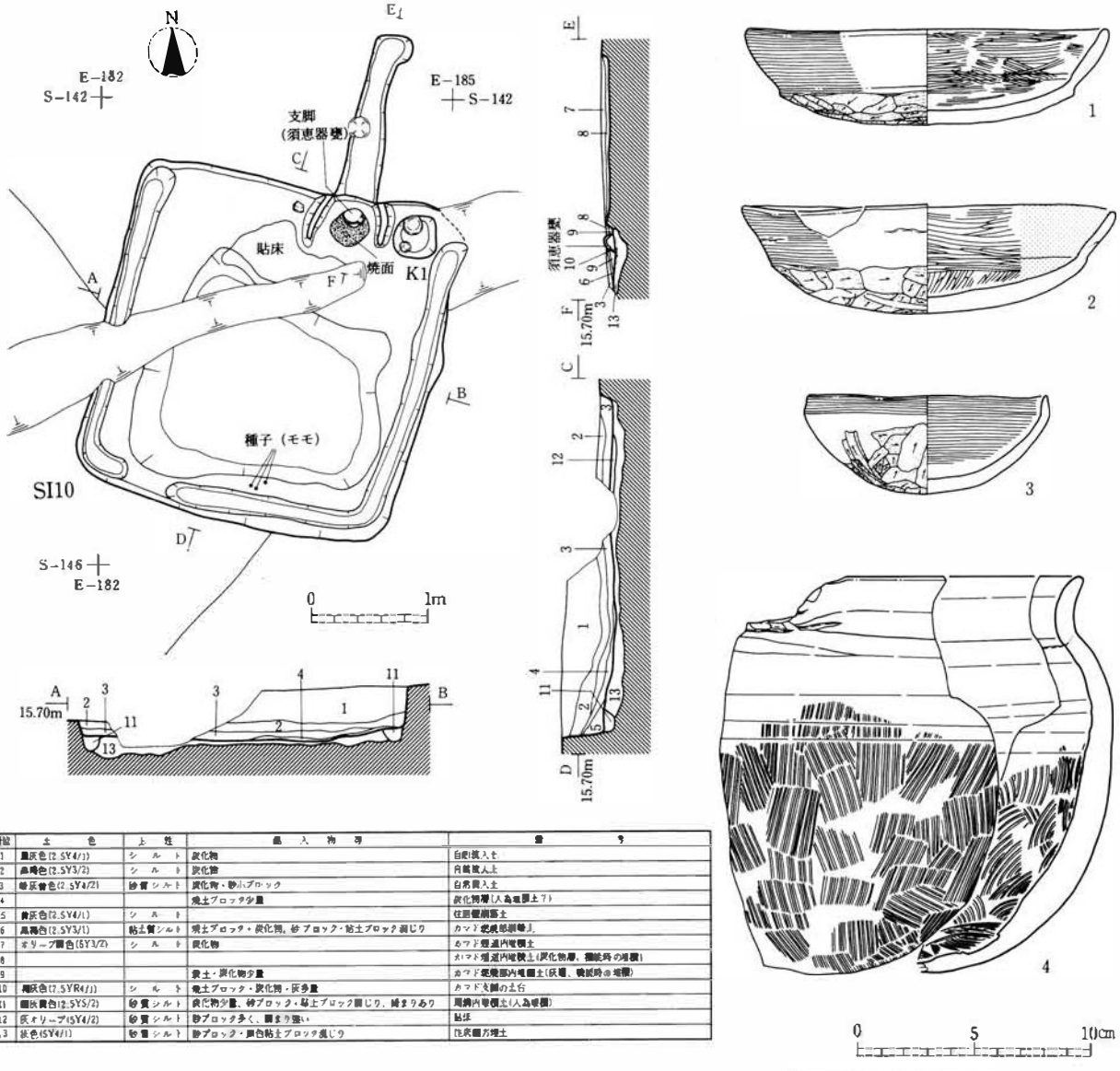
［堆積土］2層認められる。1・2層は砂と粘土のブロックを多く含み、締まりもあることから人為堆積土とみられる。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北壁で床面から20 cmある。

［床］残存する部分では壁際を除き貼床されている。壁際では掘方埋土を床としており、床面には凹凸がある。

［周溝］残存する壁の直下で検出されている。上幅15～20cm、深さ10～15cmで、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある灰オリーブ色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅約5cm、深さ10～15cmのオリーブ黒色の堆積土が認められる。

［その他のピット］床面で1個（P1）検出された。平面形は一辺が50cmの隅丸正方形を呈し、深さ25cmで、堆積土は砂と黒色粘土のブロックが混じる暗灰黄色土である。このP1は柱抜き取り穴の可能性がある。



番号	土色	土性	混入物等	備考
1	黒灰色(2.5Y4/1)	シルト	炭化物	自然流入土
2	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	炭化物	自然流入土
3	暗灰黄色(2.5Y4/2)	砂質シルト	炭化物・砂小ブロック	自然流入土
4			焼土ブロック少量	炭化物層（人為堆積土？）
5	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト		住居使用時床土
6	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	焼土ブロック・炭化物、砂ブロック・粘土ブロック混じり	カマド燃焼部掘り
7	オリーブ黒色(5Y3/2)	シルト	炭化物	カマド煙道内堆積土
8				カマド煙道内堆積土（炭化物層、焼成時の堆積）
9			炭土・炭化物少量	カマド燃焼部内堆積土（灰層、焼成時の堆積）
10	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	焼土ブロック・炭化物・灰少量	カマド支脚の土石
11	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	炭化物少量、砂ブロック・粘土ブロック混じり、締まりあり	周溝内堆積土（人為堆積）
12	灰オリーブ(5Y4/2)	砂質シルト	砂ブロック多く、締まり強い	貼床
13	灰色(5Y4/1)	砂質シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	住居掘方埋土

No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	復原率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	床面	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ　内：ヘラミガキ	(15.6)	-	4.1	1/3	黒色処理脱色？	20－6	A1b
2	土師器・坏	K1底面	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	16.1	-	4.7	完形		20－7	A1b
3	土師器・坏	K1底面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ　内：ヨコナデ	10.6	-	4.2	完形		20－8	B1l2
4	須恵器・甕	カマド燃焼部支脚	外：平行タタキ→ロクロナデ 内：同心円アテ具→ロクロナデ	-	-	-	1/5	支脚に転用、外面が焼けて赤変、内外面の写真有り	20－9	C

第27図　SI07住居跡および出土遺物

［出土遺物］床面直上から土師器坏（第26図４）・鉢（第26図５）が出土している。この他にも床面直上からは外面に段がつき、内面がヘラミガキ・黒色処理されている土師器坏や土師器鉢・甕の破片が少量出土している。

【SI07住居跡】（第27図）

［位置・確認面］Ｉ区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、ほぼ平坦である。

［方向］住居の方向は、Ｎ－16°－Ｅである。

［重複］SI10・29住居跡と重複しており、いずれよりも新しい。

［平面形・規模］住居北半が攪乱によって壊されているものの、東西2.7m×南北2.8mの正方形を呈する。

［堆積土］９層認められ、１～３層は自然流入土である。４層は焼土ブロックを含む炭化物主体の層で、人為堆積土とみられる。５層は住居壁の崩落土、６層はカマド燃焼部の崩壊土である。７～９層はカマドの煙道もしくは燃焼部内に堆積している。この内８・９層はそれぞれ炭化物・灰層で、カマド機能時の堆積と考えられる。

［壁］基本的に地山を壁としているが、SI10住居跡と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は残りの良い東壁で床面から35cmある。

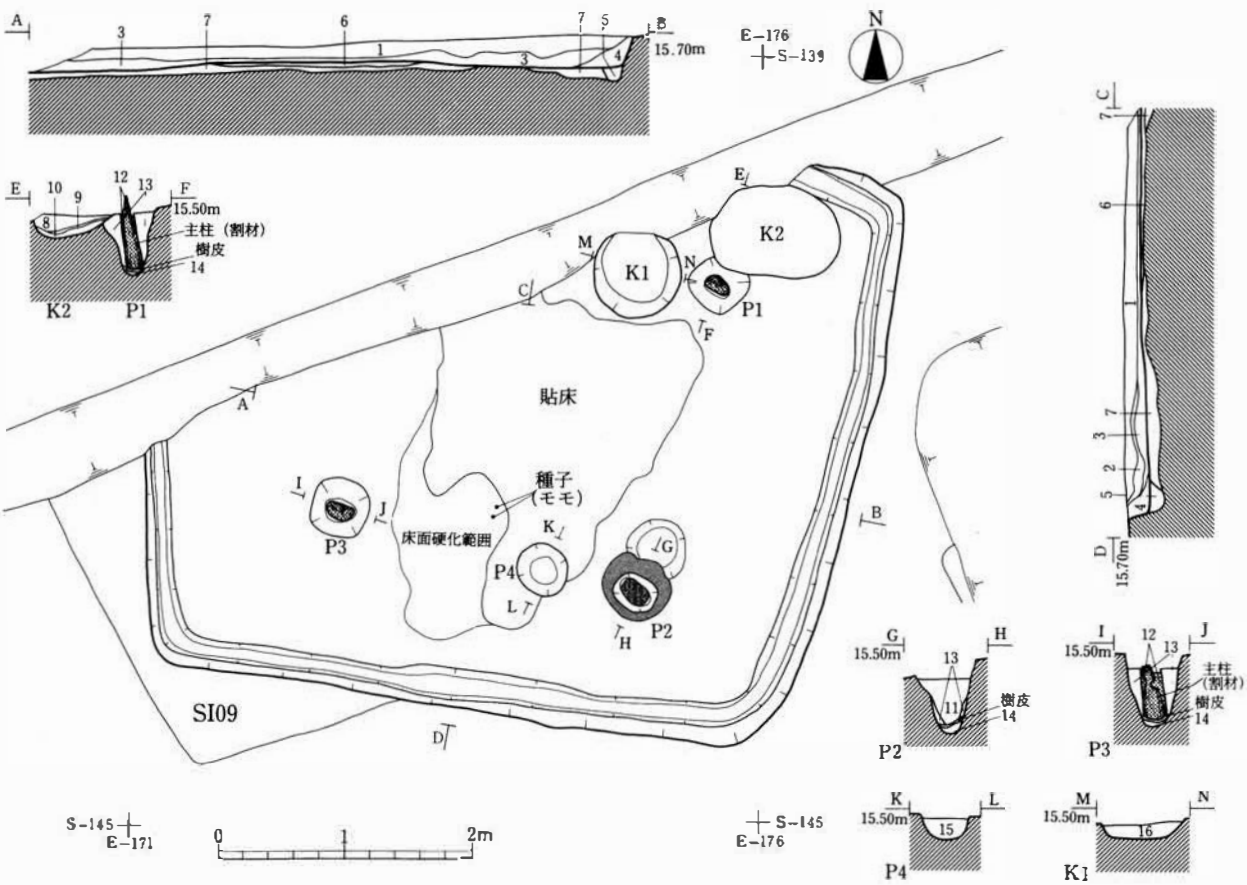
［床］基本的に掘方埋土を床としており、カマドの焚き口付近に部分的な貼床が認められる。床面は中央部が窪み、北西方向へやや傾斜している。

［周溝］北辺を除く壁の直下を巡っており、南西隅で途切れる。上幅15～25cm、深さ10～15cmで、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂と粘土のブロックが混じる暗灰黄色土で、締まりもあることから人為堆積と考えられる。

［カマド］北辺やや東寄りに付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は暗オリーブ灰色の粘土質シルトを積み上げて構築されている。燃焼部底面は中央部が若干窪み、強く焼けて赤変している。また、底面の中央やや奥壁寄りに認められる褐灰色土の塊の上には、須恵器甕の口縁から体部にかけての破片（第27図４）が外面を上にして置かれている。甕の外面は焼けて赤変しており、支脚に転用されたことが窺われる。底面と煙道の間には５cmの段がつき、長さ1.4mの煙道はほぼ水平に延びる。

［貯蔵穴状ピット］カマド右脇にあたる住居北東隅の床面で検出された（K1）。平面形は一辺が35cmの隅丸正方形を呈し、深さは10cmである。堆積土は住居堆積土の３層とほぼ同一で、底面からは土師器坏２点（第27図２・３）が出土している。

［出土遺物］床面やK1底面から土師器坏（第27図１～３）が出土しており、カマド燃焼部内には支脚として利用された須恵器甕（第27図４）も残る。この他、床面からは土師器甕の破片数点とモモの種子３点が出土している。



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物	自然流入土
2				炭化物層(植物の繊維質、小枝が自然炭化?)
3	褐灰色(10YR4/1)	シルト	極薄い炭化物層 砂ブロック・粘土ブロック混じり	人為堆積土?
4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物若干	住居壁崩落土
5	灰色(5Y4/1)	シルト	砂ブロック多く、固まりあり	暗褐灰堆積土(人為堆積)
6	灰オリーブ色(5Y5/3)	砂質シルト	炭化物若干、砂ブロック多量、固まり強い	貼床
7	黄オリーブ色(5Y4/2)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	住居壁方埋土
8	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	砂小ブロック・粘土ブロック混じり	K2堆積土(人為堆積)

層位	土色	土性	混入物等	備考
9				K2堆積土(灰層、層形成の堆積)
10	オリーブ黒色(5Y3/2)	砂質シルト	黒土・炭化物多量	K2堆積土(暗部形の堆積)
11	灰色(5Y4/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック・粘土ブロック混じり	P2柱痕を取り囲
12	オリーブ黒色(5Y3/2)	シルト		P1・1層崩落
13	灰色(5Y5/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック・粘土ブロック混じり	P1〜3層方埋土
14	黄色(5Y6/1)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	P1〜3層方埋土
15	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	黒土・炭化物、砂ブロック主体	P4堆積土
16	オリーブ黒色(5Y3/2)	砂質シルト	黒土・炭化物・灰	K1堆積土

第28図　SI08 住居跡

【SI08 住居跡】（第28図）

［位置・確認面］ I 区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、西側へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－15°－E である。

［重複］SI09 住居跡、SK28 土壙と重複しており、いずれよりも新しい。

［平面形・規模］住居の北西部が調査区外に及んでいるものの、東西5.4m×南北4.5m の長方形を呈する。

［堆積土］ 4 層認められ、 1 層は自然流入土である。 2 層は炭化物層で、植物の繊維質や小枝が自然炭化したものとみられる。3 層は砂と粘土のブロックを主体としており、人為堆積土の可能性がある。4 層は住居壁の崩落土と考えられる。

［壁］基本的に地山を壁としているが、SI09 住居跡と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がり、壁高は残りの良い東壁で床面から25cmある。

［床］中央部は貼床されており、その他では掘方埋土もしくは地山（基本層序の⑫層）を床としている。床面には若干凹凸があり、中央部がやや高くなっている。

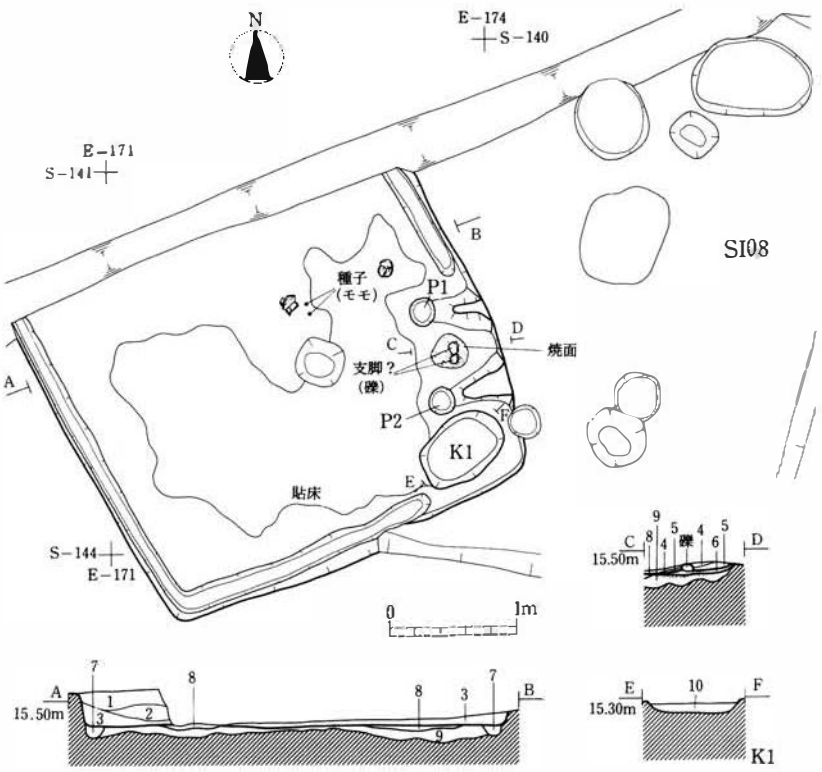
［柱穴］床面で3個(P1～3)検出された。P1～3は住居平面形の対角線上に位置しており、P1･3には柱材、P2には柱抜き取り痕が残る。掘方の平面形は一辺が45cm程の隅丸正方形を呈し、断面が「V」字状で、深さは約60cmである。柱材は断面が20cm×10cmの台形状を呈する割材で、樹種同定の結果、クリであることが分かった。また、柱材の下には樹皮が敷かれており、P2の掘方底面近くでも樹皮が確認されている。柱の沈下を防いでいたものと推測される。このP1～3は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っている。上幅15～25cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある灰色土で、人為堆積土とみられる。

［貯蔵穴状ピット］住居北東部の床面で2個（K1･2）検出された。K1は平面形が直径70cmの円形を呈し、深さ15cmで、堆積土には焼土や炭化物･灰が多く含まれる。また、北東隅に位置するK2は長軸100cmの楕円形を呈し、深さ30cmである。堆積土は3層認められ、最上層は砂と粘土のブロックが混じる暗灰黄色土で、人為堆積と考えられる。下位2層は灰層と焼土・炭化物を多量に含む層で、機能時の堆積とみられる。

［その他のピット］床面で1個（P4）検出された。平面形は直径40cmの不整な円形を呈し、深さ20cmで、堆積土は砂のブロックを主体とする暗灰黄色土である。

［出土遺物］床面や床面直上から内面がナデ調整されている土師器坏や土師器甕の破片少量とモモの種子2点が出土している。



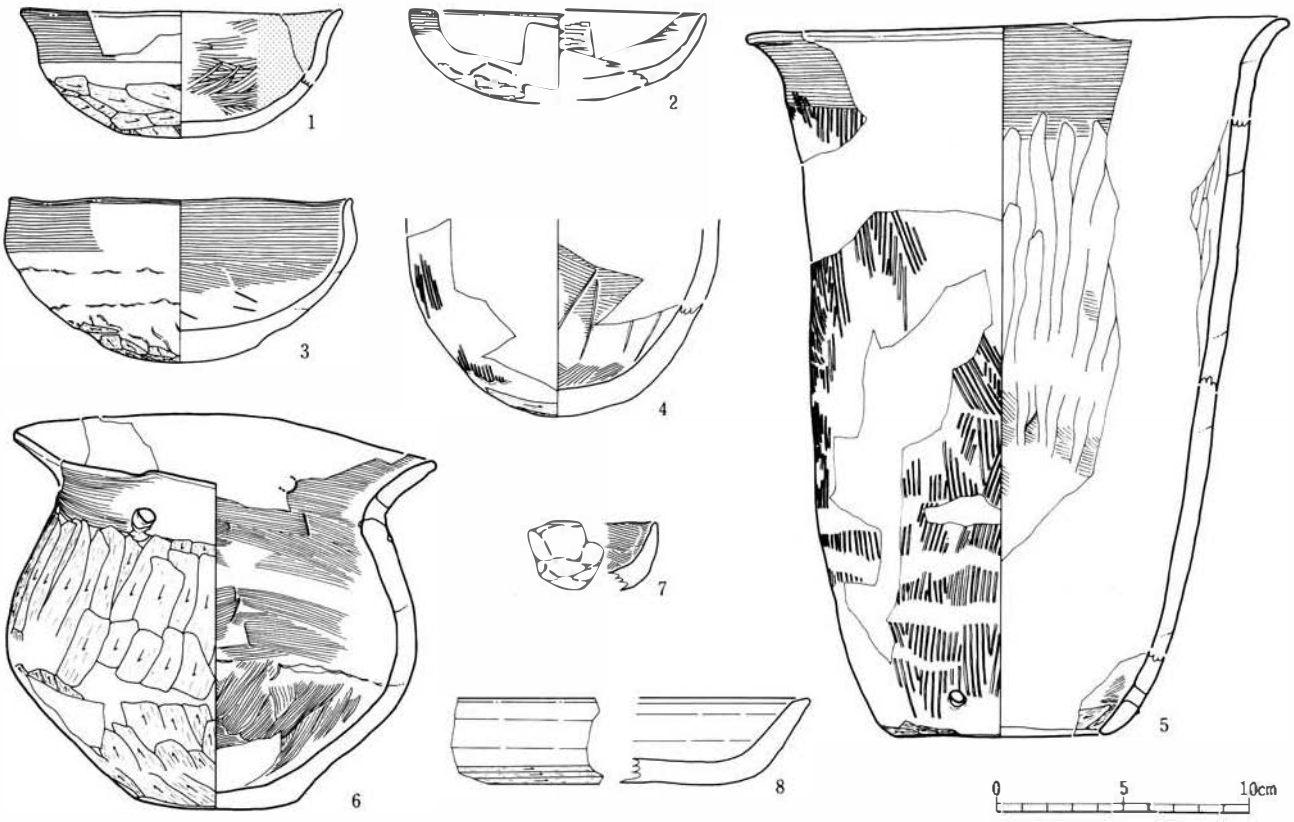
【SI09住居跡】（第29･30図）

［位置・確認面］Ⅰ区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、西側へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－

層位	土色	土性	混入物等	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物	自然流入土
2	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	炭化物	自然流入土
3	灰色(7.5Y4/1)	シルト	最下部に極薄い炭化物層、砂ブロック･粘土ブロック混じり	人為堆積土
4	暗赤灰色(2.5YR3/1)	シルト	焼土･炭化物多く	カマド燃焼部内堆積土
5				カマド燃焼部内堆積土(灰層、機能時の堆積)
6	暗赤灰色(2.5YR3/1)	粘土質シルト	焼土･炭化物･灰･粘土ブロック	カマド燃焼部経面を貼り直した土
7	オリーブ黒色(5Y3/2)	粘土質シルト	締まりあり	周溝内堆積土(人為堆積)
8	灰オリーブ色(5Y4/2)	砂質シルト	炭化物若干、砂ブロック多量	貼床
9	灰色(5Y4/1)	シルト	炭化物若干、砂ブロック･粘土ブロック混じり	住居掘方埋土
10	灰色(7.5Y4/1)	シルト	焼土･炭化物･灰多く	K1堆積土(3層とほぼ同一)

第29図　SI09住居跡



No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	床面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ・暗色帯状	12.7	—	5.0	3/4		20—10	A IIIa
2	土師器・坏	床直	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ？ 内：ヘラミガキ	(11.8)	—	—	1/3	黒色処理脱色？	20—11	A IVb
3	土師器・坏	床直	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラナデ・ナデ→ヨコナデ	(13.6)	—	6.4	1/3		21—1	B IVc
4	土師器・鉢？	床直	外：ハケメ・ヘラケズリ　内：ヘラナデ・ナデ	—	—	—	1/6			
5	土師器・甕	床直	外：ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ヘラナデ→ヘラケズリ・明いヘラミガキ	(21.6)	(8.3)	(28.3)	3/4	体下半部に1箇所穿孔、無透式	21—3	A
6	土師器・甕	床直	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ナデ→ヘラナデ	16.1	6.0	15.5	7/8	頸部に2箇所穿孔	21—2	C
7	ミニチュア土器	床直	外：ナデ？　内：ナデ	—	—	(2.7)	1/6			A
8	須恵器・盤	床直	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ 内：ロクロナデ	(25.8)	—	(8.4)	一部			

第30図　SI09 住居跡出土遺物

29°－W である。

［重複］SI08 住居跡と重複しており、これよりも古い。

［平面形・規模］住居の北部が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、東西3.3m×南北2.8m 以上で方形を基調とする。

［堆積土］6層認められ、1・2層は自然流入土である。3層は砂と粘土のブロックが混入する層で、人為堆積土とみられる。4～6層はカマド燃焼部内に堆積している。この内5層はカマド機能時の堆積と考えられる灰層、6層は燃焼部底面を貼り直した土と考えられる粘土質シルト層である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りの良い西壁で床面から30cm ある。

［床］中央部を中心に貼床が認められ、その他では掘方埋土を床としている。床面には若干凹凸がある。

［周溝］調査区内ではカマドが付設されている南東部を除き、壁の直下で検出されている。上幅15～20cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は締まりのあるオリーブ黒色土で、人為堆積と考えられる。

［カマド］東辺の南寄りに付設されており、燃焼部が残る。側壁は砂のブロックを含む灰色土を積み上げて構築されており、その焚き口部では構築もしくは補強材の据え方と考えられる小ピット２個（P1・2）が検出されている。P1・2は直径20cmの円形を呈し、深さ５cm程である。底面には機能面が２面認められる。２面とも若干凹凸があり、中央部が強く焼けて赤変している。なお、上面は焚き口側へ緩やかに傾斜しており、その中央で支脚として利用された可能性のある上側が焼けた礫２点を確認している。

［貯蔵穴状ピット］カマド右脇にあたる住居南東隅の床面で検出された（K1）。平面形は70cm×50cmの不整な隅丸長方形を呈し、深さは10cmである。堆積土は焼土・炭化物・灰を多く含む灰色土で、住居堆積土の３層に近い。

［出土遺物］床面や床面直上から土師器坏(第30図１～３)・鉢？（第30図４）・甑（第30図５）・甕（第30図６）、須恵器盤（第30図８）、ミニチュア土器（第30図７）が出土している。この他にも床面直上やカマド燃焼部内堆積土中からは外面に手持ちヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている土師器盤の底部破片や土師器鉢・甕の破片が出土している。なお、床面からはモモの種子２点も出土している。

【SI10住居跡】（第31・32図）

［位置・確認面］Ｉ区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、ほぼ平坦である。

［方向］住居の方向は、N－40°－W である。

［重複］SI07・11住居跡と重複しており、前者よりも古く、後者よりも新しい。また、SB72建物跡とも重複しているが、前後関係は不明である。

［平面形・規模］攪乱とSI07住居跡によって東半が壊されているものの、東西5.2m×南北5.7mの正方形を呈する。

［堆積土］５層認められ、１・２層は自然流入土である。３層は砂のブロックを多く含み、やや締まりがあることから人為堆積土の可能性がある。４層はカマド燃焼部の崩壊土、５層は燃焼部内に堆積した灰層で、機能時の堆積と考えられる。

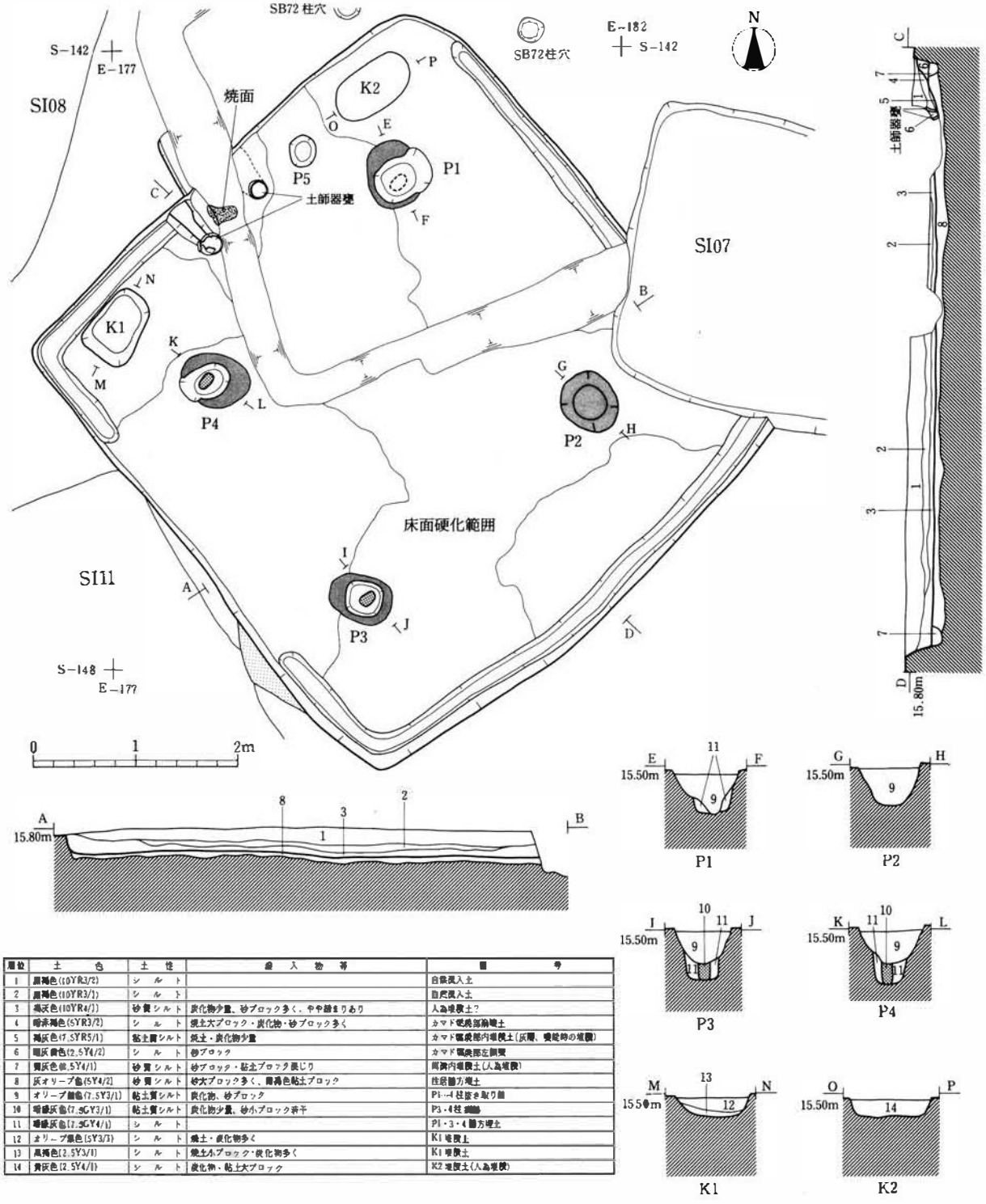
［壁］基本的に地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。SI11住居跡の煙道と重複する西辺南寄りの部分（スクリーントーン部分）では埋土を壁としており、機能時に壁が１度崩れていた可能性がある。壁高は残りの良い南壁で床面から30cmある。

［床］掘方埋土を床としている。床面には凹凸があり、西半がやや高くなっている。また、カマド周辺から中央部にかけてと南西・北西隅付近では、床面が強く硬化している。

［柱穴］床面で４個（P1～4)検出された。P1～4は住居平面形の対角線上に位置しており、P1・3・4には柱抜き取り痕が認められ、P2は抜き穴によって壊されている。掘方の平面形は隅丸正方形もしくは長方形を呈し、深さ40～55cmである。P3・4の柱穴下部では20cm×10cmの隅丸長方形の柱痕跡が検出されており、P1底面にも同規模の柱押圧痕が残る。このP1～4は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

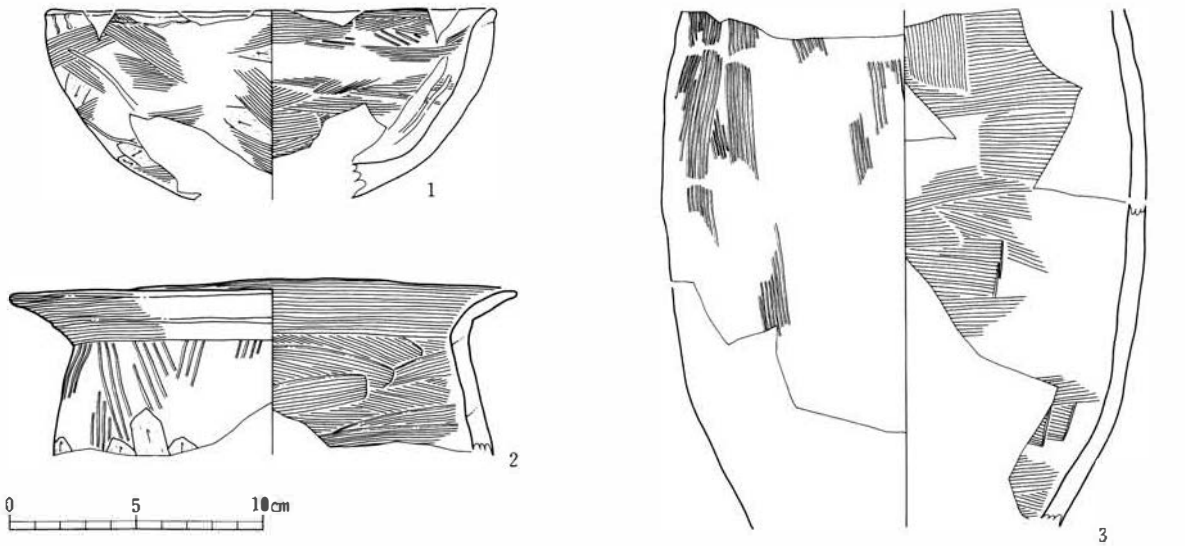
［周溝］カマド下部から北東隅にかけてと西辺中央を除く壁の直下で検出されている。上幅15～25cm、深さ10cm前後で、断面は「U」字状を呈する。堆積土は砂と粘土のブロックが混じる黄灰色土で、人為堆積と考えられる。

［カマド］北辺ほぼ中央で検出された。攪乱によって壊されており、燃焼部と煙道の一部が残る。燃焼部側壁は砂のブロックを含む暗灰黄色土を積み上げて構築されており、その焚き口部には心材として用いられた土師器甕（第32図２・３）が口縁部側を下にして左右１個ずつ残る。燃焼部底面は焚き



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト		自然流入土
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト		自然流入土
3	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	炭化物少量、砂ブロック多く、やや締まりあり	人為堆積土?
4	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	焼土大ブロック・炭化物・砂ブロック多く	カマド燃焼部崩壊土
5	褐灰色(7.5YR5/1)	粘土質シルト	焼土・炭化物少量	カマド燃焼部内堆積土(廃棄、機能時の堆積)
6	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	砂ブロック	カマド燃焼部左側壁
7	黄灰色(2.5Y4/1)	砂質シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	周溝内堆積土(人為堆積)
8	灰オリーブ色(5Y4/2)	砂質シルト	砂大ブロック多く、暗褐色粘土ブロック	住居貼り堆土
9	オリーブ褐色(7.5Y3/1)	粘土質シルト	炭化物、砂ブロック	P1・4柱抜き取り跡
10	暗緑灰色(7.5GY3/1)	粘土質シルト	炭化物少量、砂小ブロック若干	P3・4柱痕跡
11	暗緑灰色(7.5GY4/1)	シルト		P1・3・4貼り堆土
12	オリーブ黒色(5Y3/1)	シルト	焼土・炭化物多く	K1堆積土
13	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	焼土小ブロック・炭化物多く	K1堆積土
14	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	炭化物・粘土大ブロック	K2堆積土(人為堆積)

第31図　SI10 住居跡



No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・鉢	堆積土	外：ヘラケズリ→ナデ→粗いヘラミガキ？ 内：ハケメ→ナデ→軽いナデ	17.8	－	－	1/7		21－4	B
2	土師器・甕	カマド燃焼部右側壁中	外：ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	20.0	－	－	1/7	口縁部外面に沈線1本	21－5	
3	土師器・甕	カマド燃焼部左側壁中	外：ハケメ　内：ヘラナデ	－	－	－	1/5			

第32図　SI10 住居跡出土遺物

口側へ傾斜しており、中央部が強く焼けて赤変している。底面と煙道の間には5cmの段がつく。煙道は先端に向かって上向きに傾斜しており、長さ30cm程残る。

［貯蔵穴状ピット］床面で2個（K1・2）検出された。K1は北西隅に位置し、平面形が70cm×45cmの不整な隅丸長方形で、深さは20cmある。堆積土は2層認められ、いずれにも焼土・炭化物が多く含まれる。また、北東隅に位置するK2は長軸80cmの楕円形を呈し、深さ15cmである。堆積土は粘土の大ブロックを含む黄灰色土1層で、人為堆積と考えられる。

［その他のピット］カマド右脇の床面で1個（P5）検出された。平面形は直径30cmの不整な円形を呈し、深さ15cmで、堆積土は焼土ブロックと炭化物を多量に含む黒褐色土である。

［出土遺物］床面から内面がナデ調整の土師器坏や土師器甕の破片が少量出土している他、カマド燃焼部側壁中には心材として利用された土師器甕（第32図2・3）が残る。また、堆積土中からは土師器鉢（第32図1）が出土している。

【SI29 住居跡】（第33図）

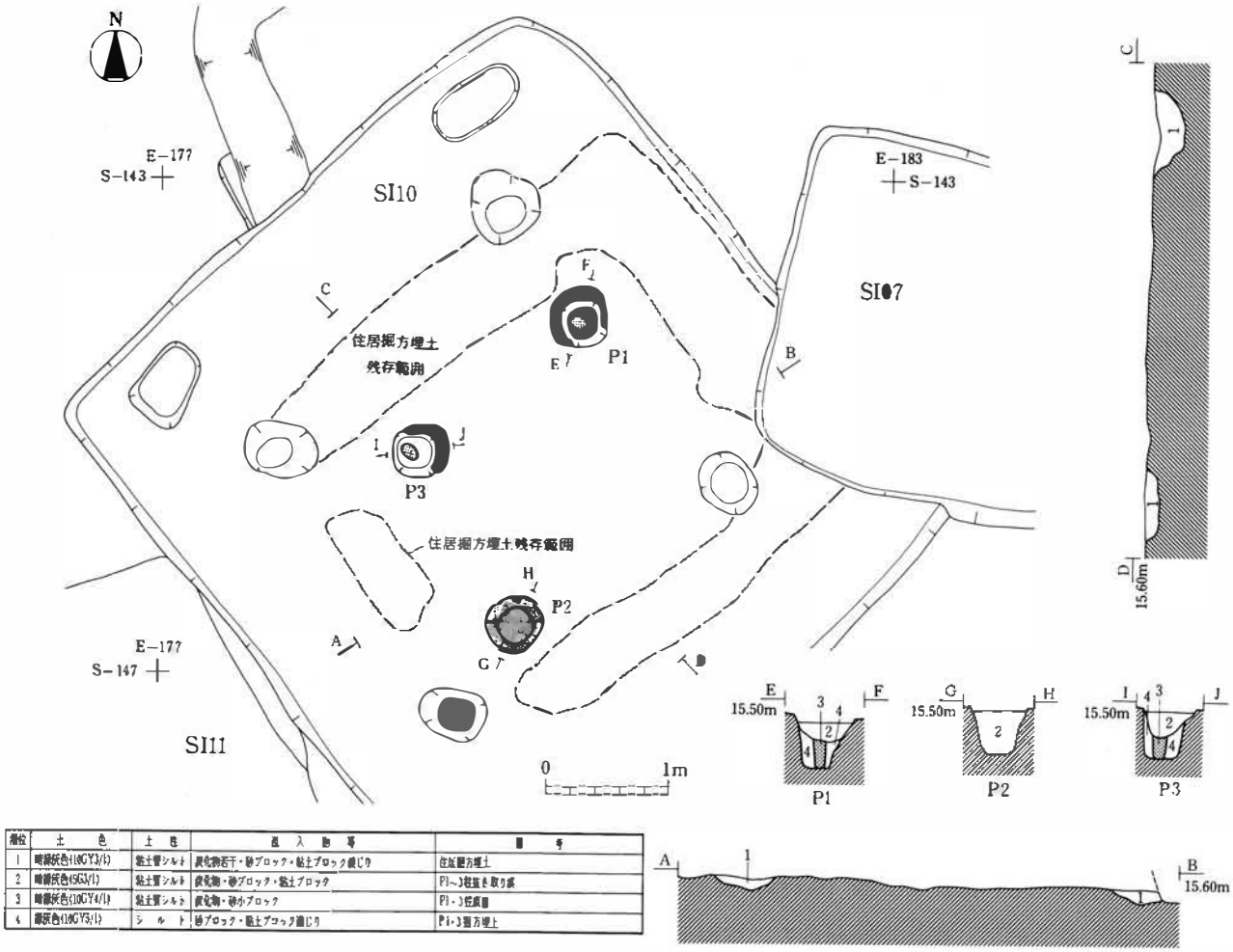
［位置・確認面］I区の中央部で検出された。SI10 住居跡を掘り上げた後に確認している。

［重複］SI07・10 住居跡と重複しており、いずれよりも古い。

［平面形・規模］SI07・10 住居跡によって壊されており、壁・堆積土が残存しないことから全体の規模は不明であるが、残った掘方埋土の状況から東西4.1m以上×南北3.7m以上で方形を基調とするものと考えられる。

［床］掘方埋土が残るのみで、詳細は不明である。

［柱穴］3個（P1～3）検出された。P1～3はSI10住居跡の掘方埋土除去後に確認されており、P1・3には柱抜き取り痕が認められ、P2は抜き穴によって壊されている。P1・3の柱穴下部では15cm×10



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	暗緑灰色(10GY3/1)	粘土質シルト	炭化物若干・砂ブロック・粘土ブロック混じり	住居掘方埋土
2	暗緑灰色(5G3/1)	粘土質シルト	炭化物・砂ブロック・粘土ブロック	P1～3柱痕も取り込む
3	暗緑灰色(10GY4/1)	粘土質シルト	炭化物・砂小ブロック	P1・3柱痕
4	緑灰色(10GY5/1)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	P1・3掘方埋土

第33図　SI29 住居跡

cmの隅丸長方形の柱痕跡が検出されており、掘方は一辺35cmの隅丸正方形で、深さ40～45cm残る。このP1～3は残存する掘方埋土の平面形のほぼ対角線上に位置しており、SI29住居跡に伴う主柱穴と考えられる。なお、南東の主柱穴はSI10住居跡の柱穴によって食われていると推測される。

［出土遺物］住居掘方埋土中から土師器甕の体部破片が1点出土したのみである。

【SI11 住居跡】（第34・35図）

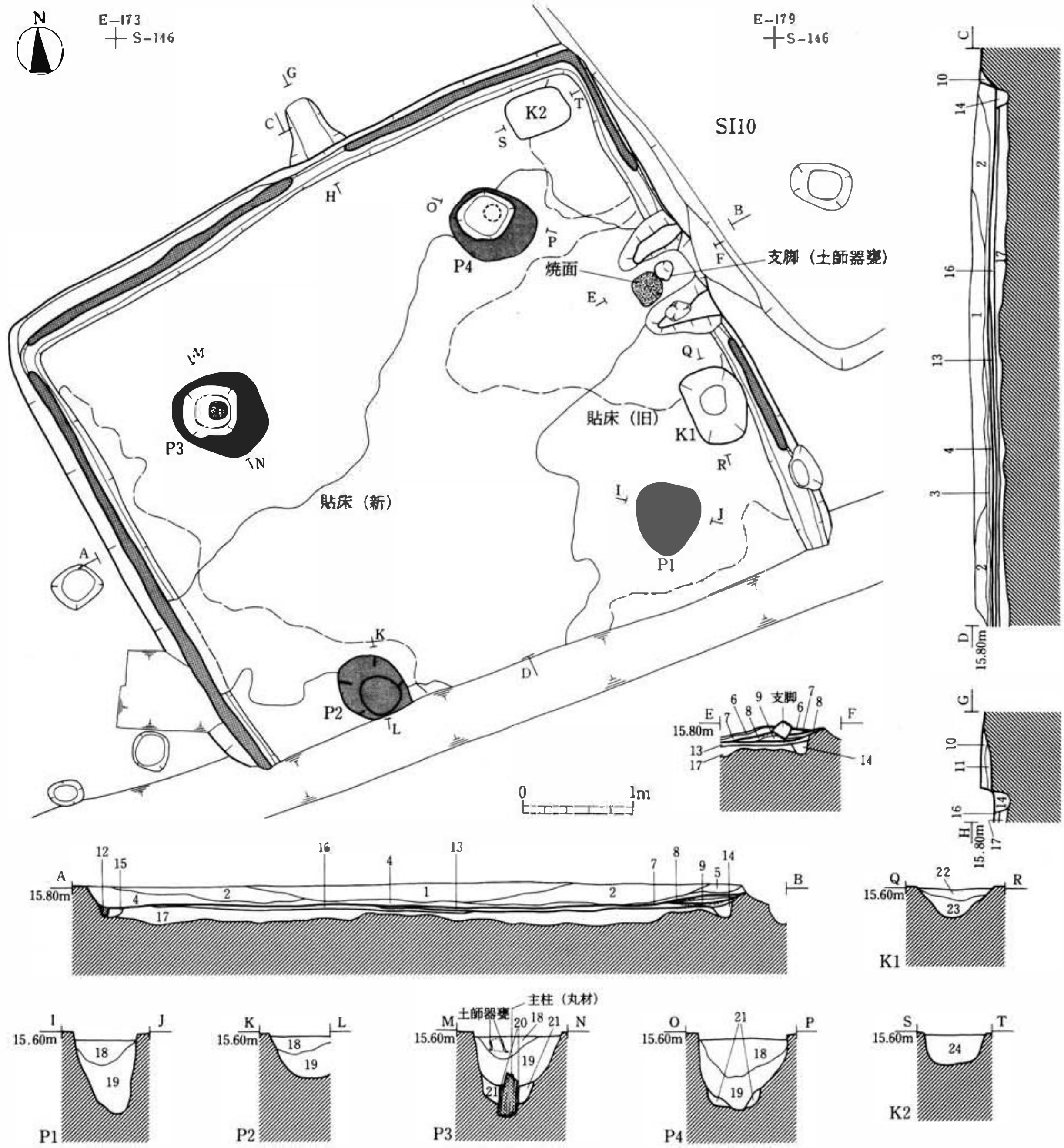
［位置・確認面］Ⅰ区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、ほぼ平坦である。

［方向］住居の方向は、N－29°－Wである。

［重複］SI10・26住居跡と重複しており、前者よりも古く、後者よりも新しい。

［平面形・規模］住居の南部が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、東西5.8m×南北5.1m以上で方形を基調とする。

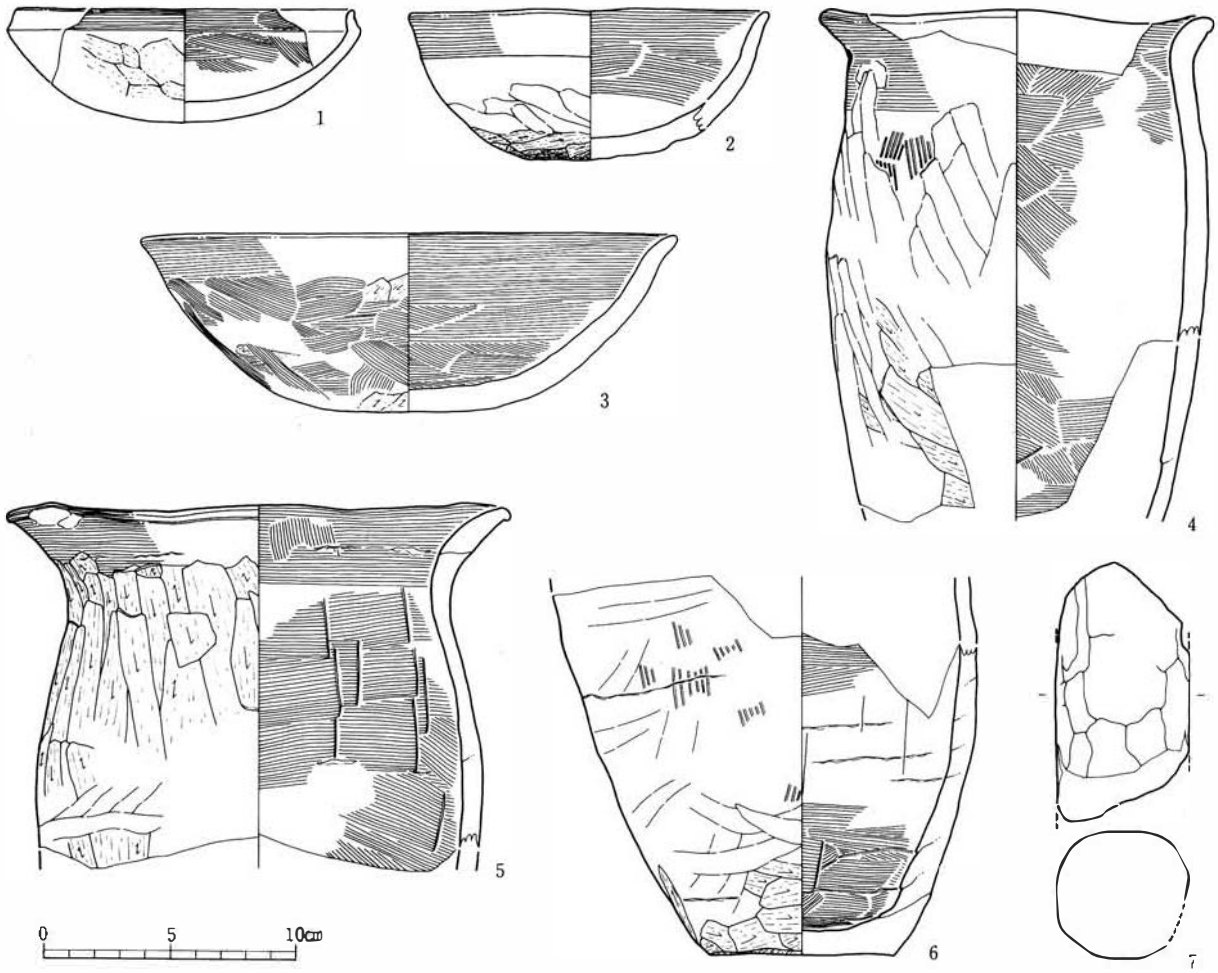
［堆積土］11層認められ、1・2層は自然流入土である。3層は薄い炭化物層で、植物の繊維質が自然炭化したものとみられる。4層は砂と粘土のブロックを主体としており、人為堆積土の可能性がある。5層は新しいカマド燃焼部の崩壊土、6・7・9層は主にその燃焼部内に堆積した炭化物や灰層で、機能時の堆積土である。8層は黄褐色粘土主体の層で、締まりが強く上面が焼けて赤変していることから、新しいカマド燃焼部底面を貼り直した土と考えられる。10・11層は古いカマドの煙道上部



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/1)	シルト	炭化物	自然流入土
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物	自然流入土
3				炭化物層(建物の屋根材が焼失した?)
4	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	粗い炭化物層、砂ブロック・粘土ブロック主体	人為堆積土?
5	明黄褐色(10YR6/6)	粘土質シルト	黄褐色粘土大ブロック主体	カマド(新)袖の構築材
6				カマド(新)燃焼部内堆積土(炭化物、焼土粒の混入)
7				カマド(新)煙道内堆積土(炭化物、焼土粒の混入)
8	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロック主体、締まり強い、被熱して赤変	カマド(新)使用面を貼り直した土
9				カマド(新)燃焼部内堆積土(炭化物、焼土粒の混入)
10	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	焼土ブロック・炭化物・黄褐色粘土ブロック多量、締まりあり	カマド(旧)構築土
11				カマド(旧)燃焼部内堆積土(炭化物、焼土粒の混入)
12	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物少量	壁材の崩落?

層位	土色	土性	混入物等	備考
13	暗灰黄色(2.5Y4/2)	砂質シルト	炭化物少量、砂ブロック多量、締まり強い	貼床
14	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック多く、締まりあり	周溝覆土
15	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	炭化物若干、砂ブロック多く、締まりあり	周溝覆土
16	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	炭化物少量、砂ブロック多量、黄褐色粘土ブロック、締まり強い	貼床
17	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト	炭化物、砂小ブロック	住居掘方埋土
18	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	粗い炭化物層	P1～4柱抜き取り・切り取り痕
19	暗青灰色(5BG4/1)	砂質シルト	炭化物、砂ブロック多く	P1～4柱抜き取り・切り取り痕
20	暗青灰色(5BG3/1)	シルト		P3柱痕
21	青灰色(5BG5/1)	砂質シルト	砂ブロック多量	P3・4掘方埋土
22	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物	K1覆土
23	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	炭化物、砂ブロック・粘土ブロック主体	K1埋土(4層とほぼ同一)
24	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	砂ブロック多く、締まりあり	K2埋土(人為堆積)

第34図　SI11 住居跡



No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	床面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヨコナデ・ナデ	(13.4)	—	4.4	1/2		21－6	B II1
2	土師器・坏	床面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→粗いナデ 内：ヨコナデ→ヘラナデ	(14.8)	—	5.8	4/5		21－7	B IV b
3	土師器・鉢	堆積土	外：ヨコナデ→ヘラケズリ→ナデ 内：ナデ・ヨコナデ	21.5	—	7.0	1/2		21－8	B
4	土師器・甕	P3ヌキ	外：ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ→粗いナデ 内：ヨコナデ・ナデ→ヘラナデ	15.6	—	—	2/3		22－1	A II2c
5	土師器・甕	P3ヌキ	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	20.0	—	—	1/5		21－9	A II2b
6	土師器・甑	カマド（新）燃焼部支脚	外：ハケメ・ヘラケズリ→粗いナデ 内：ナデ→ヘラナデ　底：ヘラケズリ	—	6.9	—	2/5			
No	種別	層位	特徴							写真図版
7	土製支脚	堆積土	残存長：10.2cm　径：5.3cm　調整：ナデ							

第35図　SI11 住居跡出土遺物

を崩して埋め戻した土とその煙道内堆積土である。

［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は残りの良い西壁で床面から20cmある。

［床］大部分は貼床されており、その他では掘方埋土を床としている。床面には凹凸があり、中央部がやや高くなっている。なお、貼床が2枚認められることから、床面が1回補修されていることがわかる。新しい貼床は、東辺の新しいカマド部分から中央部を経て西辺まで帯状に行われており、カマドの造り替えに伴う床の貼り直しである可能性が強い。

［柱穴］床面で4個（P1～4）検出された。P1～4は住居平面形のほぼ対角線上に位置しており、P3には柱切り取り痕が認められ、P1・2・4は抜き穴によって殆ど壊されている。掘方の平面形は一辺が50cm程の隅丸正方形を呈し、深さ40～75cmである。P3の柱穴下部には直径20cmの円形の柱材が残存して

おり、P4 底面にも同規模の柱押圧痕が残る。樹種同定の結果、P3 の柱材はクマノミズキ類であった。この P1～4 は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］調査区内では壁の直下もしくは壁際を巡っている。上幅15～25cm、深さ10cm前後で、断面は「U」字状を呈する。堆積土は基本的に砂のブロックを多く含み、締まりのある灰黄褐色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、新旧のカマド部分を除く周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅５～10cm、深さ10cm前後の褐灰色の堆積土が認められる。

［カマド］東辺中央やや北寄りと北辺中央やや東寄りで新旧２つのカマドが検出された。東辺のものが新しく、燃焼部が残る。側壁は黄褐色粘土主体の土を積み上げて構築されており、底面には機能面が２面認められる。２面とも焚き口側へ傾斜しており、中央付近が強く焼けて赤変している。なお、上面の中央には支脚として利用されたと考えられる土師器甕の下半（第35図６）が底部を伏せた状態で置かれている。また、北辺の古いカマドでは燃焼部が除去されて、煙道の一部が残る。長さ60cm程残存する煙道は先端に向かって上向きに傾斜しており、上部が意識的に崩されて埋め戻されていたと考えられる。

［貯蔵穴状ピット］床面で２個（K1・2）検出された。K1 は東辺のカマド右脇に位置しており、平面形が70cm×50cmのやや不整な隅丸長方形で、深さは25cmある。堆積土は２層認められ、上層は黒褐色土、下層は住居堆積土４層とほぼ同一の褐灰色土である。また、北東隅に位置する K2 は55cm×40cmの隅丸長方形を呈し、深さ30cmである。堆積土は砂のブロックを多く含む灰黄褐色土１層で、人為堆積と考えられる。

［出土遺物］床面直上や P3 柱抜き取り穴から土師器坏（第35図１・２）・甕（第35図４・５）が出土している他、新しいカマド燃焼部内には支脚として利用された土師器甕（第35図６）が残る。他にも床面や床面直上からは土師器鉢・甑・甕などの破片が出土している。また、堆積土中からは土師器鉢（第35図３）と土製支脚（第35図７）が出土している。

【SI26 住居跡】（第36図）

［位置・確認面］Ⅰ区の中央部で検出された。SI11 住居跡を掘り上げた後に確認している。

［重複］SI11 住居跡と重複しており、これよりも古い。

［平面形・規模］SI11 住居跡によって壊されており、柱穴と貯蔵穴状ピットが残るのみで、全体の規模は不明である。

［柱穴］３個（P1～3）検出された。P1～3 は SI11 住居跡の掘方埋土除去後に確認されており、その配置から SI26 住居跡の主柱穴と判断した。P1 には柱抜き取り痕が認められ、P2・3 は抜き穴によって壊されている。P1 の掘方は一辺が30cmのやや不整な隅丸正方形を呈し、深さ45cmである。この柱穴下部では直径15cmの円形の柱痕跡が検出されており、P2・3 底面にも同規模の柱押圧痕が残る。なお、北西の主柱穴は SI11 住居跡の柱穴によって食われていると推測される。

［貯蔵穴状ピット］１個（K1）検出されており、その位置から SI26 住居跡に伴うものと考えた。平面形は70cm×60cmの不整形を呈し、深さは20cmである。堆積土はやや締まりのある灰色土である。

［出土遺物］遺物は出土していない。

【SI12 住居跡】（第37図）

［位置・確認面］Ⅰ区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、ほぼ平坦である。

［方向］住居の方向は、N－40°－W である。

［重複］SB57 建物跡と重複しており、これよりも古い。

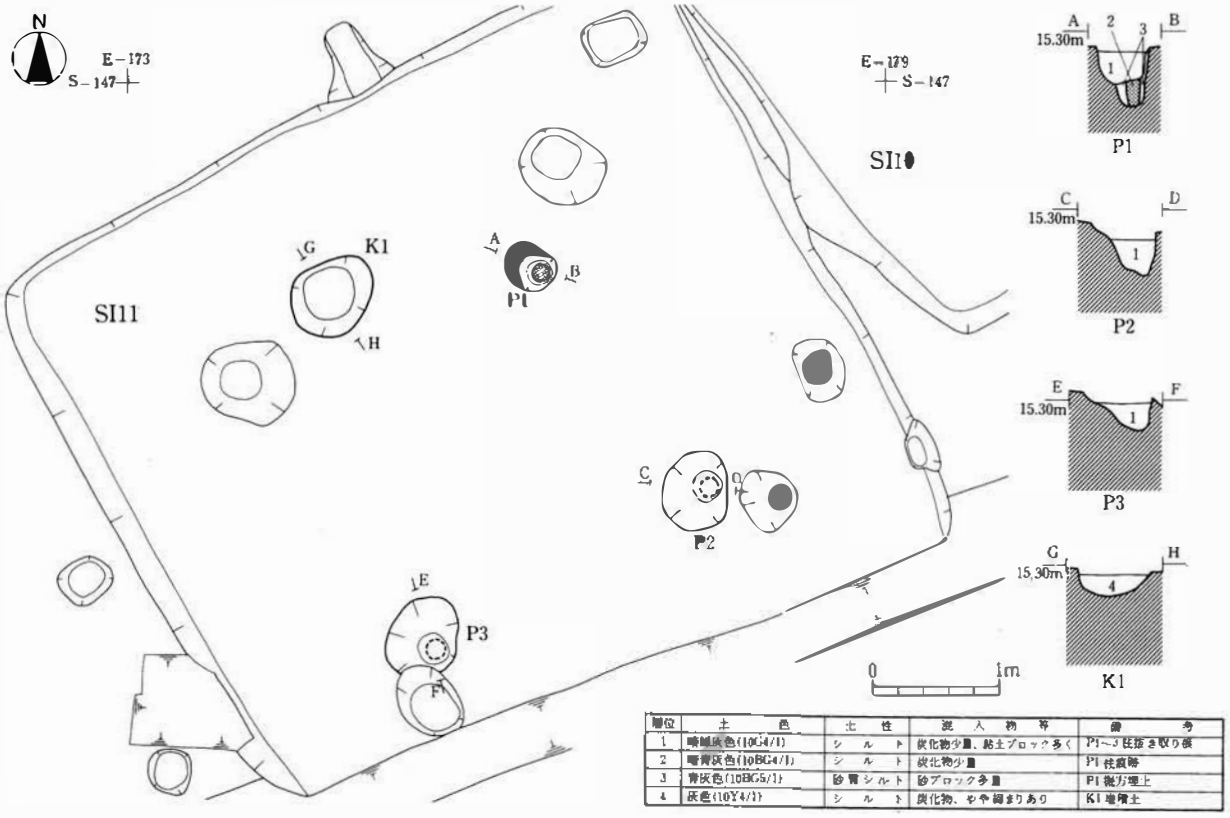
［平面形・規模］住居の南半以上が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、東西6.3m×南北2.7m 以上で方形を基調とする。

［堆積土］4 層認められ、1 層は自然流入土である。2 層は炭化物層で、植物の繊維質が自然炭化したものとみられる。3 層は砂と粘土のブロックを主体としており、人為堆積土の可能性がある。4 層はカマド燃焼部内の堆積土である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りの良い北壁で床面から15cm ある。

［床］調査区内ではほぼ全面が貼床されている。床面には凹凸があり、中央部がやや高くなっている。なお、貼床は 3 枚認められ、新しい貼床 2 枚は中央部に施された部分的な床面の補修と考えられる。

［柱穴］床面で 2 個（P1・2）検出された。P1・2 は住居の北壁から1.2m 程内側の平行線上に位置し



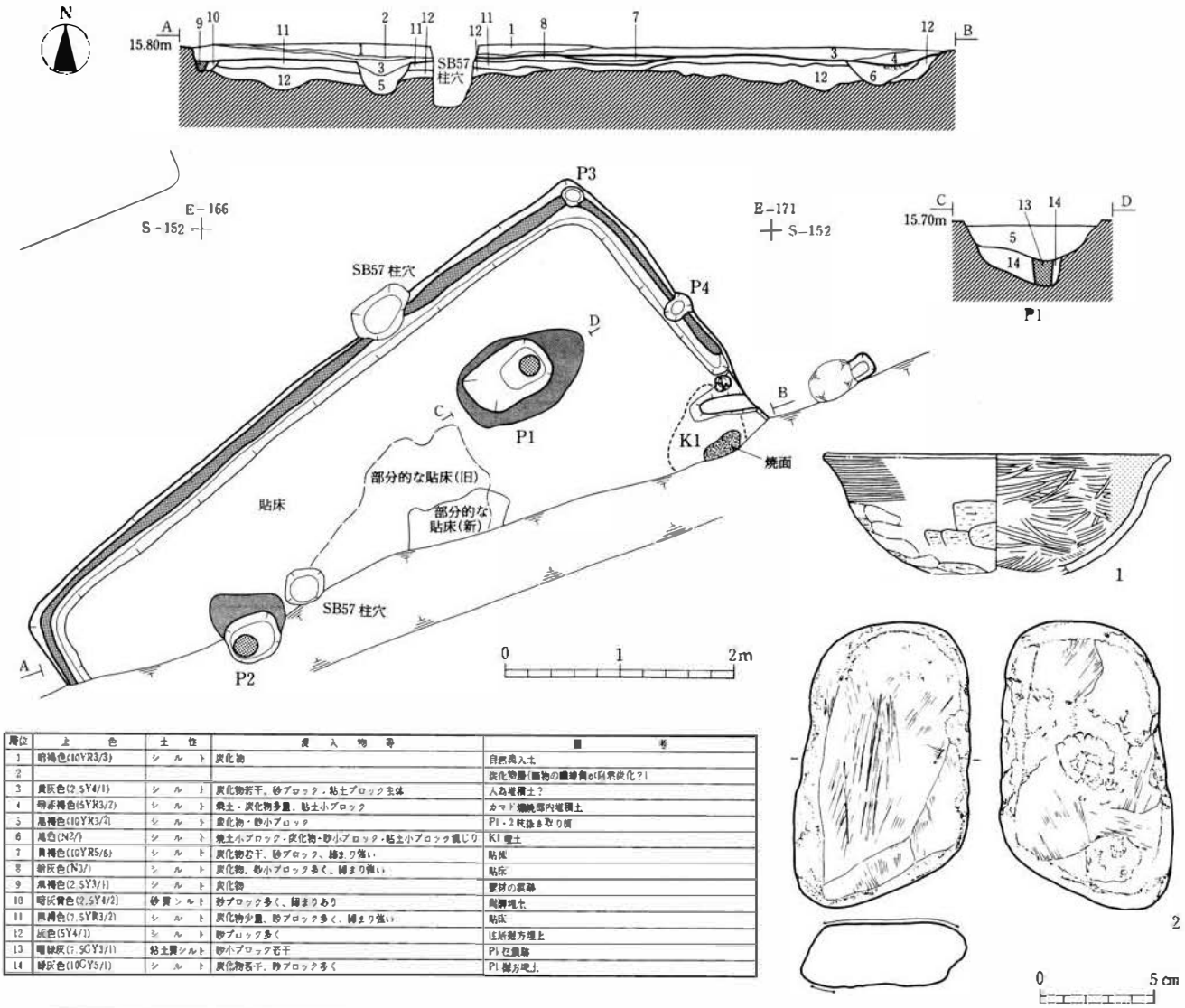
層位	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物少量、粘土ブロック多く	P1～3 柱掘き取り後
2	暗青灰色(10BG4/1)	シルト	炭化物少量	P1 柱痕跡
3	青灰色(10BG5/1)	砂質シルト	砂ブロック多量	P1 掘方埋土
4	灰色(10Y4/1)	シルト	炭化物、やや締まりあり	K1 堆積土

第36図　SI26 住居跡

ており、柱抜き取り痕が認められる。掘方の平面形は長辺が50～75cmの隅丸長方形を呈し、深さは55cmである。柱穴下部では直径20cmの円形の柱痕跡が確認されている。このP1・2は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っており、カマド部分で途切れる。上幅20～25cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある暗灰黄色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅5～10cm、深さ10cm前後の黒褐色の堆積土が認められる。

［カマド］東辺で検出されており、中央付近に位置するものと考えられる。攪乱と調査区側溝によって壊されて、燃焼部と煙道の一部が残る。燃焼部側壁は砂と粘土のブロックが混じる暗灰黄色土を積み上げて構築されており、底面は中央部が若干窪み、強く焼けて赤変している。煙道は先端が残るのみで、長さ1.0m程である。なお、燃焼部下にはカマド構築以前の土壙状の掘り込み(K1)が認められ、

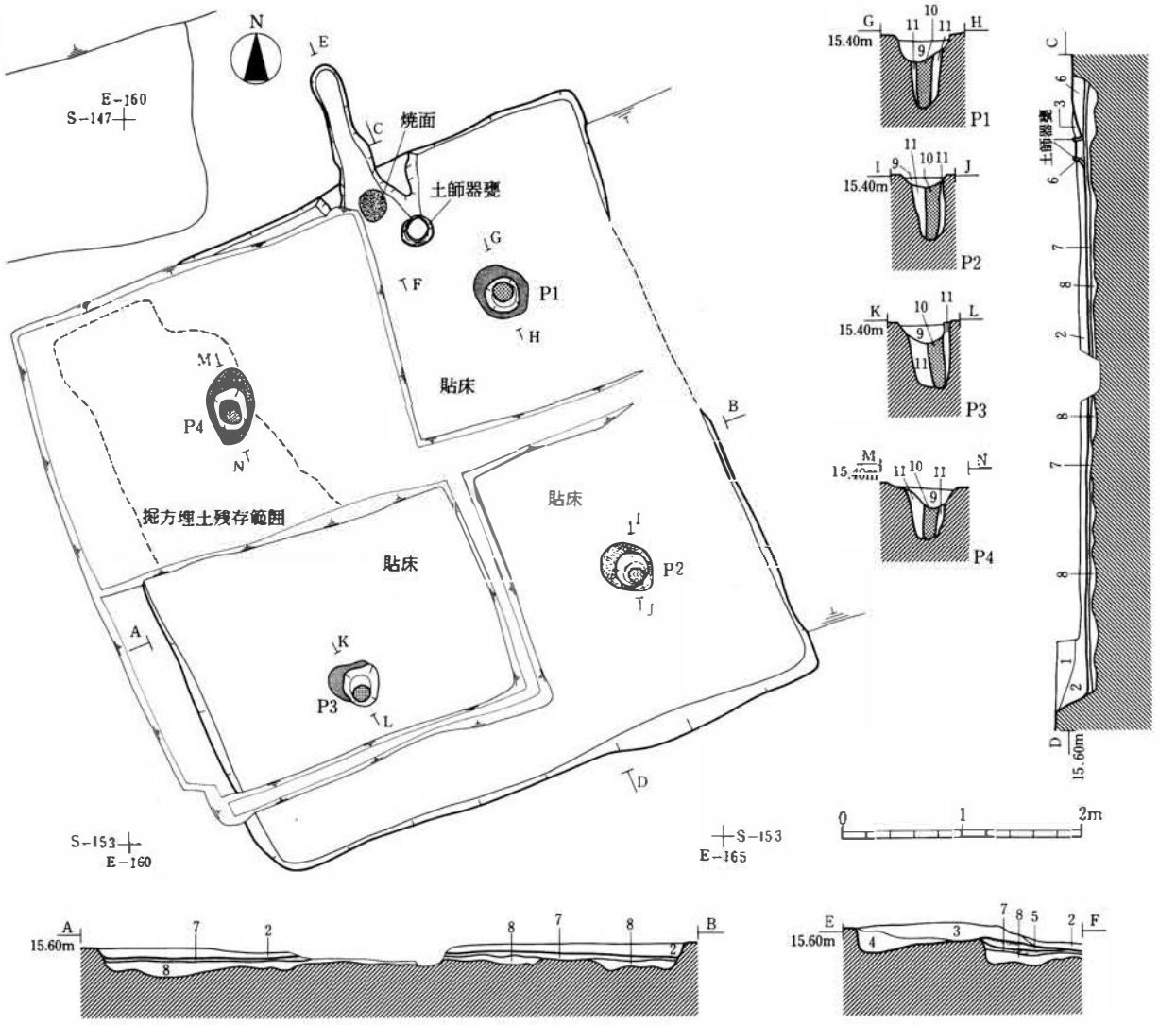


層位	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物	自然流入土
2				炭化物層(植物の繊維質が炭化?)
3	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	炭化物若干、砂ブロック・粘土ブロック主体	人為堆積土?
4	明赤褐色(5YR3/2)	シルト	焼土・炭化物多量、粘土小ブロック	カマド燃焼部内堆積土
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・砂小ブロック	P1・2抜き取り痕
6	黒色(N2/)	シルト	焼土小ブロック・炭化物・砂小ブロック・粘土小ブロック混じり	K1 壁土
7	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物若干、砂ブロック、締まり強い	貼床
8	暗灰色(N3/)	シルト	炭化物、砂小ブロック多く、締まり強い	貼床
9	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物	壁材の痕跡
10	暗灰黄色(2.5Y4/2)	砂質シルト	砂ブロック多く、締まりあり	周溝埋土
11	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物少量、砂ブロック多く、締まり強い	貼床
12	灰色(5Y4/1)	シルト	砂ブロック多く	住居掘方埋土
13	暗緑灰(7.5GY3/1)	粘土質シルト	砂小ブロック若干	P1 柱痕跡
14	緑灰色(10GY5/1)	シルト	炭化物若干、砂ブロック多く	P1 掘方埋土

No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	P1 ヌキ	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(15.2)	－	－	1/4		22－3	A IVa

No.	種別	層位	特徴	写真図版
2	砥石	K1 埋土	最大長：12.5cm　最大幅：7.2cm　最大厚：2.8cm　使用面：2　石材：凝灰岩	37－4

第37図　SI12 住居跡および出土遺物



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物	自然流入土
2	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物多く	自然流入土
3	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	焼土・炭化物・砂小ブロック	カマド煙道～燃焼部崩壊土
4	黒色(7.5YR2/1)	シルト	焼土・炭化物	カマド煙道内堆積土
5	黒色(N1.5/)	粘土質シルト	粘土ブロック主体、締まり強く上面が焼けて赤変	カマド燃焼部底面を貼り直した土
6	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	カマド燃焼部右側壁
7	灰オリーブ色(5Y4/2)	砂質シルト	炭化物、砂ブロック多量、粘土ブロック	貼床
8	オリーブ黒色(5Y3/1)	シルト	砂ブロック多く	住居掘方埋土
9	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物、砂小ブロック少量	P1～4柱抜き取り痕
10	黒色(5Y2/1)	粘土質シルト	炭化物、砂小ブロック少量	P1～4柱痕跡
11	オリーブ黒色(7.5Y3/1)	砂質シルト	砂小ブロック多量	P1～4掘方埋土

第38図　SI13 住居跡

焼土ブロックや炭化物を多量に含む砂と粘土ブロック混じりの土で埋め戻されている。

［その他のピット］周溝上面で2個（P3・4）検出された。平面形は直径20cm程の不整な円形を呈し、深さ20～25cmである。このP3・4は、その位置からみて壁柱の抜き取り穴の可能性がある。

［出土遺物］P1柱抜き取り穴から土師器坏（第37図1）、K1埋土中から砥石（第37図2）が出土している他、床面からは内面がナデ調整されている土師器坏や土師器甕の破片が少量出土している。

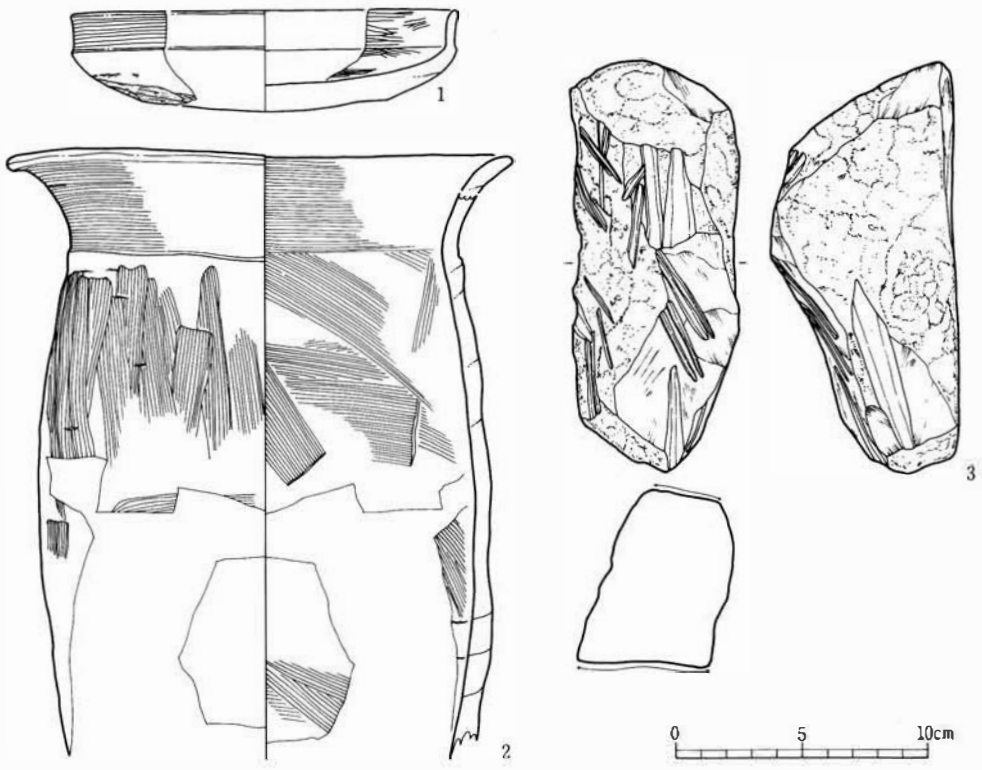
【SI13 住居跡】（第38・39図）

［位置・確認面］Ⅰ区のやや西寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、西側へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－23°-Wである。

［平面形・規模］攪乱によって大部分が壊されているものの、東西4.8m×南北5.1mの正方形を呈する。

［堆積土］5層認められ、1・2層は自然流入土である。3層はカマドの煙道から燃焼部にかけての崩壊土、4層は煙道内堆積土である。5層は粘土ブロック主体の層で、締まりが強く上面が焼けて赤変していることから、カマド燃焼部底面を貼り直した土と考えられる。



No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	堆積土	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ　内：ヘラミガキ	(15.3)	-	4.0	1/3	黒色処理黒色？		A Ⅰc
2	土師器・甕	カマド燃焼部右側壁中	外：ヨコナデ・ナデ　内：ヘラナデ・ヨコナデ	(20.0)	-	-	2/3		22-2	A Ⅱc
No.	種別	層位	特徴							写真図版
3	砥石	堆積土	最大長：16.1cm　最大幅：7.3cm　最大厚：6.7cm　使用面：5　石材：砂岩							37-5

第39図　SI13住居跡出土遺物

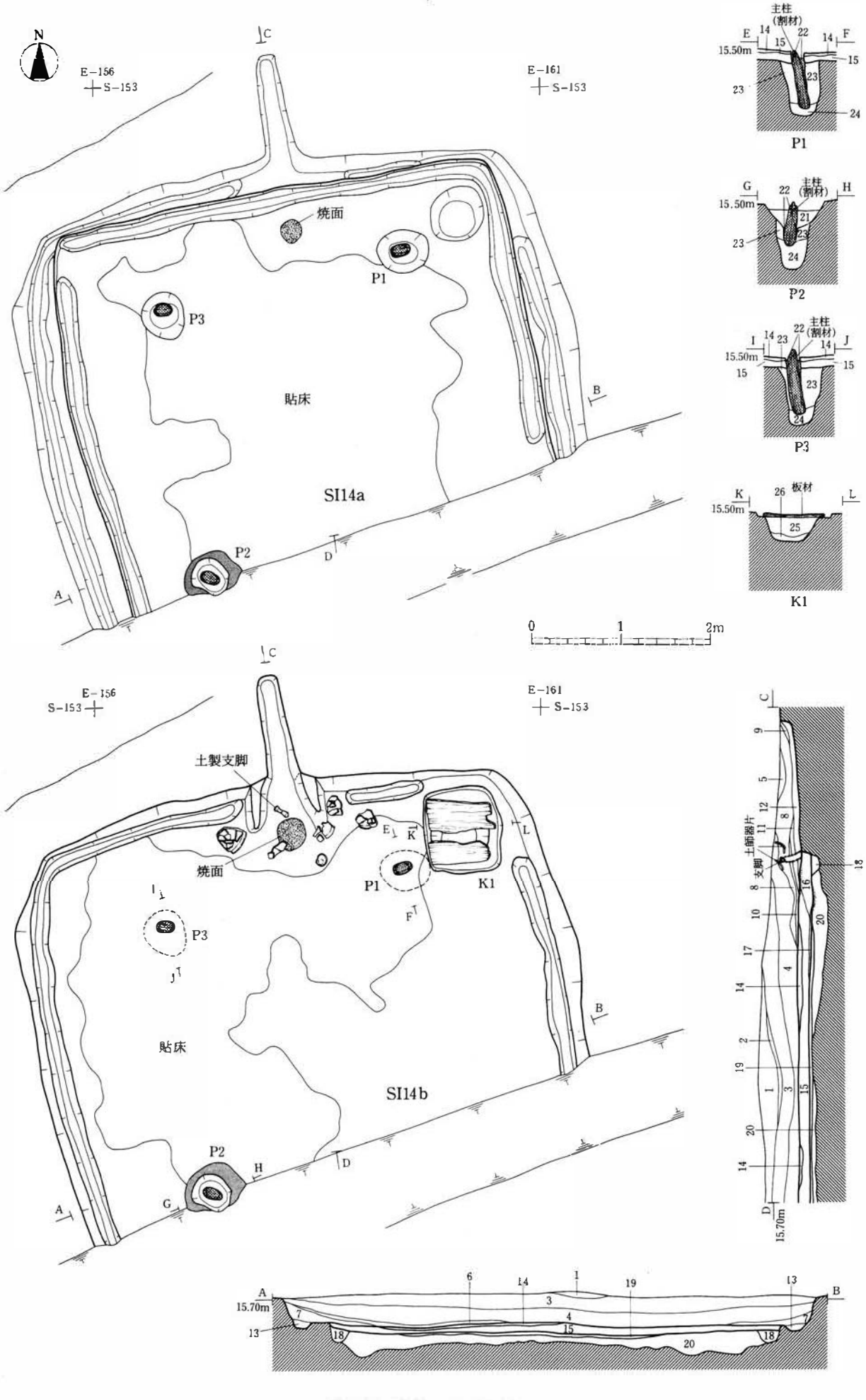
［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は最も残りの良い南東隅で床面から30cmある。

［床］残存する部分は全て貼床されている。床面にはやや凹凸がある。

［柱穴］4個（P1～4）検出された。P1～3は床面で、P4は攪乱除去後に確認されているが、これら4個の柱穴は住居平面形の対角線上に位置しており、SI13住居跡に伴う主柱穴と考えられる。いずれの柱穴にも柱抜き取り痕が認められ、掘方の平面形は一辺または長辺が25～35cmのやや不整な隅丸正方形もしくは長方形を呈し、深さ50～60cmである。柱穴下部では直径15cmの円形の柱痕跡が検出されている。

［カマド］北辺やや東寄りに付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部右側壁は砂と粘土のブロックが混じるオリーブ褐色土を積み上げて構築されており、その焚き口部には心材として用いられたと考えられる土師器甕（第39図2）が口縁部を下にして残る。攪乱によって失われている左側壁も同様に構築されていたと推定される。燃焼部底面には機能面が2面認められる。2面とも焚き口側へ緩やかに傾斜しており、中央付近が強く焼けて赤変している。煙道は先端に向かってやや下向きに傾斜しており、長さ1.0mである。

［出土遺物］カマド燃焼部右側壁中に心材として利用されたと考えられる土師器甕（第39図2）が残



第40図　SI14a・b住居跡

層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒色(N2/)	シルト	極薄い炭化物層・灰、土器片多量	廃絶後の住居内に捨てられた土?
2				灰層(廃絶後の住居内に捨てられた土?)
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	焼土・極薄い炭化物層・灰、土器片多量	廃絶後の住居内に捨てられた土?
4	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物少量	自然流入土
5	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト		自然流入土
6			炭化材	炭化物層(廃絶後の住居内に捨てられた土?)
7	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	炭化物少量	壁崩壊崩落土
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	焼土大ブロック・炭化物・黄褐色粘土大ブロック	カマド煙道～燃焼部崩壊土
9	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	炭化物	カマド煙道内堆積土
10				カマド燃焼部内堆積土(炭化物層、機能時の堆積)
11			焼土・炭化物少量	カマド燃焼部内堆積土(灰層、機能時の堆積)
12	黒(5Y2/1)	シルト	焼土・炭化物多量	カマド煙道～燃焼部内堆積土(機能時の堆積)
13	黒褐色(2.5Y3/1)	砂質シルト	砂ブロック多く、締まりなし	周溝内堆積土(7層に近い)
14	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物若干、白色粘土ブロック多量、締まり強い	貼床
15	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物少量、砂ブロック多量、白色粘土若干、締まりあり	SI14a床面を嵩上げした土
16	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	焼土ブロック・炭化物・灰・白色粘土多量	SI14a カマド燃焼部崩壊土
17				SI14a薄い炭化物層
18	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	粘土ブロック、締まりあり	SI14a 周溝内堆積土(人為堆積)
19	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	砂ブロック・白色粘土ブロック混じり、締まり強い	SI14a 貼床
20	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト	砂ブロック多量	SI14a 住居掘方埋土
21	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物・砂小ブロック	P2 柱切り取り穴
22	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト		P1～3 柱痕跡
23	オリーブ黒色(5Y3/2)	シルト	砂ブロック多量	P1～3 掘方埋土
24	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック多量	P1～3 掘方埋土
25	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・地山小ブロック	K1 堆積土
26	オリーブ黒色(5Y3/2)	シルト	炭化物多く	K1 堆積土

第2表　SI14a・b住居跡土層観察表

る他、燃焼部内から土師器坏と長胴形の土師器甕の破片が出土している。土師器坏には内面がヘラミガキ・黒色処理されているものとナデ調整のものがある。また、堆積土中からは土師器坏（第39図1）と砥石（第39図3）が出土している。

【SI14a・b住居跡】（第40～43図、第2表）

I区西寄りの⑩層上面で検出されており、確認面は西側へ緩やかに傾斜している。住居の方向は、N－16°－Wで、精査の結果、建て替えが行われていることがわかった。住居南部が調査区外に及ぶものの、調査区内では古い住居の東辺を30cm、西辺を40cm、北辺を20cm程外側に広げ、さらに床面を約10cm嵩上げして新しい住居を構築している。ここでは、改築前の住居をSI14a、改築後をSI14bとする。

《SI14a住居跡》（第40図、第2表）

［平面形・規模］住居の南部が調査区外に及ぶことから全体の規模は不明であるが、東西5.1m×南北4.2m以上で方形を基調とする。

［堆積土］3層（断面図の15～17層）認められる。15層は砂のブロックを多量に含み、締まりのある黒褐色土で、改築時に床面を嵩上げするために埋め戻された土である。16層はカマド燃焼部の崩壊土、17層は燃焼部底面から焚き口周辺の床面にかけて分布する炭化物層である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がって、高さ10cm程残る。

［床］カマド周辺から中央部にかけて貼床されており、その他では掘方埋土を床としている。床面には凹凸があり、壁際がやや高くなっている。

［柱穴］床面で3個（P1～3）検出された。P1～3は住居平面形の対角線上に位置するものとみられ、いずれの柱穴にも柱材が残る。なお、P2には改築後の床面から掘り込まれた柱切り取り穴も認められる。掘方の平面形は長軸が50～60cmの不整形を呈し、深さは約60cmである。柱材は断面が20cm×10cmの台形状を呈する割材で、樹種同定の結果、クリであることが分かった。このP1～3は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っており、北西隅と東辺やや南寄りで途切れる。上幅15～25cm、

深さ10～15cmで、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は粘土ブロックを含み、締まりのある黒褐色土で、人為堆積土である。

［カマド］長軸30cmの楕円形を呈する焼け面とその上部に燃焼部の崩壊土が残存している状況から、北辺ほぼ中央に付設されていたと考えられる。燃焼部は住居の改築時に壊されているが、煙道は改築後もそのまま利用されていた可能性がある。

［出土遺物］カマド燃焼部の崩壊土中から土師器甕の破片1点と、床面からモモの種子2点が出土したのみである。

《SI14b住居跡》（第40～43図、第2表）

［平面形・規模］住居の南部が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、東西5.8m×南北4.4m以上で方形を基調とする。

［堆積土］12層認められ、4・5層は自然流入土である。2層は薄い灰層で、その前後にあたる1・3層は極薄い炭化物・灰層や焼土、土器片を多量に含む。6層は炭化物層で、炭化材も含まれる。この1～3・6層は廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。7層は住居壁の崩落土とみられる。8層はカマドの煙道から燃焼部にかけての崩壊土、9～12層は主にそのカマド内に堆積した炭化物や灰層で、10～12層は機能時の堆積である。

［壁］地山を壁としており、住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は残りの良い西壁で床面から30cmある。

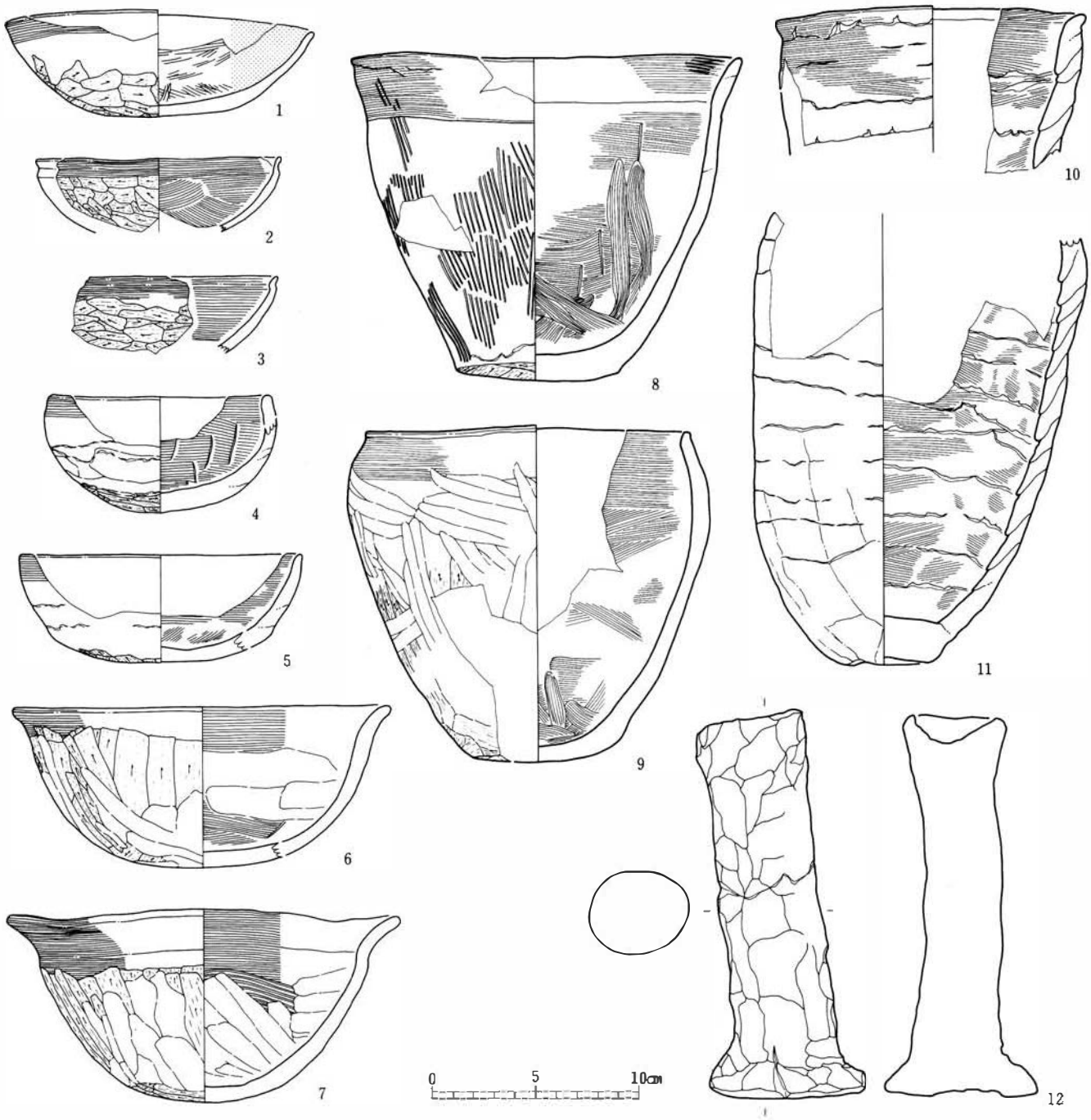
［床］カマド周辺から西半部にかけて貼床が認められる。その他では、SI14a住居跡と重複する部分は埋土を、拡張部分は地山（基本層序の⑫層）を床としている。床面には凹凸があり、中央部がやや高くなっている。

［主柱］改築前の柱材（SI14aのP1～3の柱材）をそのまま主柱として利用している。P2には柱切り取り穴が認められる。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っており、カマド部分と北東隅で途切れる。上幅15～25cm、深さ5～10cmで、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含む締まりのない黒褐色土で、住居堆積土の7層に近い。周溝が機能時に開口していた可能性もある。

［カマド］北辺ほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は黄褐色粘土主体の土を積み上げて構築されており、右側壁中からは心材として用いられた土師器甕（第42図4）と円筒形土製品（第41図10）が出土している。焚き口付近の崩壊土中からも土師器甕の体下部（第42図3）と円筒形土製品（第41図11）が出土しており、同様に左側壁の心材もしくは焚き口上部の構築材として利用されていたと推測される。燃焼部底面には若干凹凸があり、中央やや焚き口寄りが強く焼けて赤変している。底面のほぼ中央では土製支脚（第41図12）も検出されている。煙道は先端に向かって上向きに傾斜しており、長さ1.2mである。

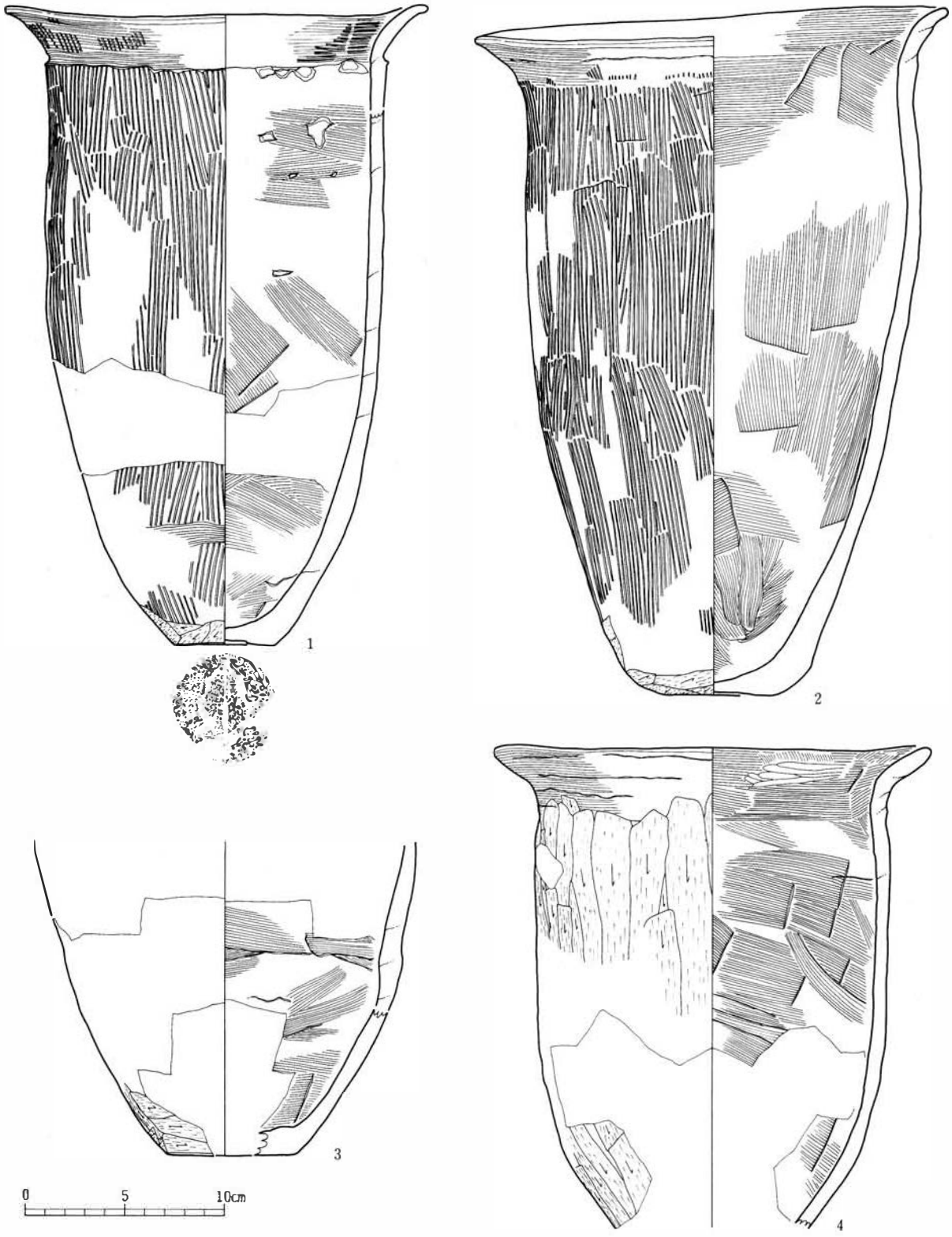
［貯蔵穴状ピット］住居北東隅の床面に位置している（K1）。K1は、長さ80cm×幅40cm×厚さ3cm程度の大きさの板材2枚によって蓋をされた状態で検出されている。平面形は直径60cmの円形を呈し、



No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	カマド燃焼部崩壊土	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ・黒色処理	14.9	—	4.2	ほぼ完形		22－4	AⅣb
2	土師器・坏	周溝	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	(11.8)	—	—	1/6		24－3	B Ⅰ2
3	土師器・坏	床直	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ　内：ヨコナデ	—	—	—	1/8			B Ⅰ1
4	土師器・坏	床直	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	(10.8)	—	5.6	1/2		22－5	BⅣd
5	土師器・坏	床直	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	(13.7)	—	5.3	3/5		22－6	BⅣa
6	土師器・鉢	床直	外：ヨコナデ→ヘラケズリ→軽いナデ 内：ヨコナデ・ヘラナデ→軽いナデ	(18.8)	—	7.8	1/2		22－7	B
7	土師器・鉢	カマド燃焼部崩壊土	外：ヨコナデ・ヘラケズリ→軽ナデ 内：ヨコナデ→ヘケメ→軽いナデ	(19.0)	—	9.3	1/2		22－8	B
8	土師器・鉢	床直	外：ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ→ナデ　底：ヘラケズリ	18.8	7.8	15.8	7/8		22－9	C Ⅰ
9	土師器・鉢	床直	外：ヨコナデ→ヘラケズリ→軽いナデ 内：ヘラナデ→ヨコナデ・ナデ　底：ヘラケズリ	15.7	5.8	16.2	3/4		22－10	D

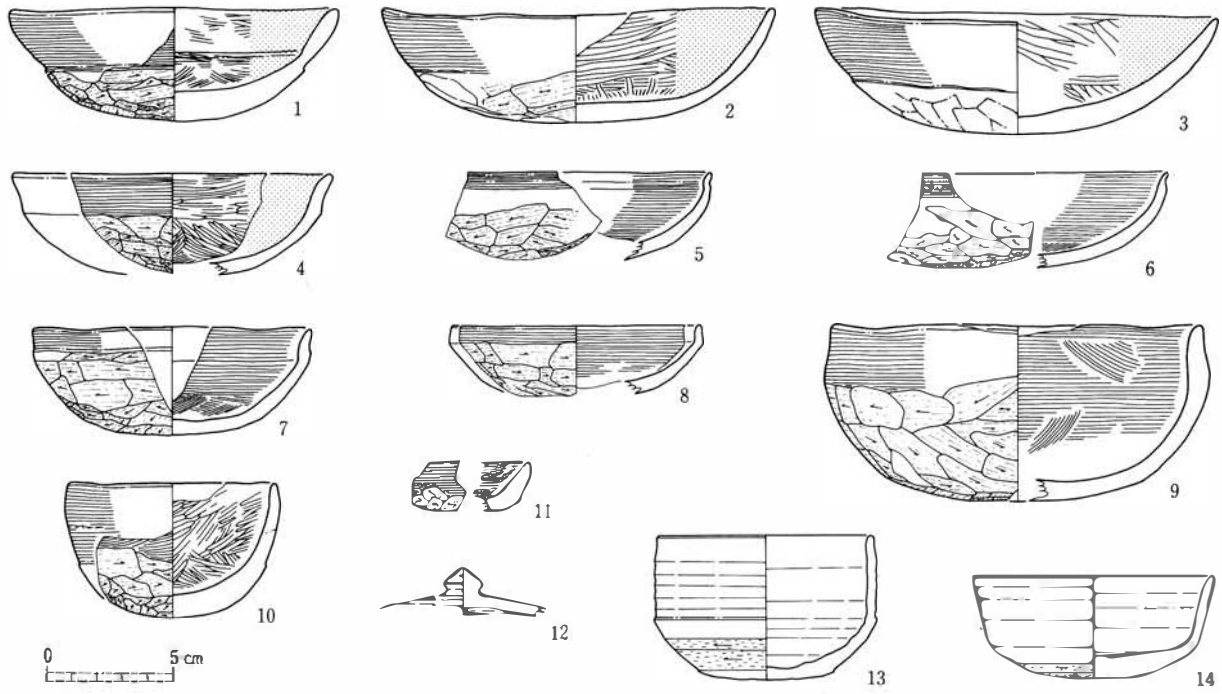
No	種別	層位	特徴	写真図版
10	円筒形土製品	カマド燃焼部右側壁中	外：粗いナデ・ヨコナデ　内：粗いナデ　口径：14.9cm　調整が雑（特に内面）、内面のアップ写真有り	23－1
11	円筒形土製品	カマド燃焼部崩壊土	外：粗いナデ・ヘラケズリ？　内：粗いナデ　底径：4.3cm　調整が雑（特に内面）、受熱による外面の剥落著しい	23－2
12	土製支脚	カマド燃焼部支脚	最大長：18.3cm　径：4.0～4.8cm（断面は楕円形）　調整：ナデ	36－5

第41図　SI14b 住居跡出土遺物（1）



No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・甕	カマド燃焼部崩壊土	外:ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ 内:ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ 底:木葉痕→周縁にナデ	(21.2)	5.0	31.8	3/4		23−3	AIV1a
2	土師器・甕	床面	外:ヨコナデ→ハケメ→ヘラケズリ 内:ヨコナデ・ナデ→ヘラナデ 底:ヘラケズリ	23.8	5.5	34.2	7/8		23−4	A III
3	土師器・甕	カマド燃焼部崩壊土	外:ヘラケズリ 内:ヘラナデ・ナデ 底:軽いヘラケズリ	−	(6.4)	−	1/5			
4	土師器・甕	カマド燃焼部右側壁中	外:ヨコナデ→ヘラケズリ 内:ヨコナデ→ヘラナデ→口縁部に部分的なヘラミガキ	(22.0)	−	−	2/5		24−1	A IV2b

第42図　SI14b 住居跡出土遺物（2）



No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ→黒色処理	(13.0)	—	4.5	2/3		24－2	A Ⅰb
2	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ→ナデ 内：ヘラミガキ→黒色処理	15.6	—	4.5	9/10		24－4	A Ⅱb
3	土師器・坏	堆積土3層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ→黒色処理	16.0	—	5.0	4/5		24－5	A Ⅱb
4	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ→黒色処理	(12.8)	—	—	1/10			A Ⅲa
5	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ　内：ヨコナデ	—	—	—	1/10			B Ⅱ
6	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	—	—	—	1/8			B Ⅰ2
7	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	(11.0)	—	(4.2)	1/4		24－6	B Ⅱ
8	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ　内：ヨコナデ	(10.0)	—	—	1/5		24－7	B Ⅱ2
9	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ヨコナデ・ナデ	(14.8)	—	6.9	2/5		24－8	B Ⅲc
10	ミニチュア土器	堆積土1層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ　内：ヘラミガキ	(8.5)	—	5.3	4/5		24－9	B
11	ミニチュア土器	堆積土3層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ　内：ナデ	—	—	1.9	1/6			B
12	須恵器・蓋	堆積土1層	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ	—	—	—	1/10	宝珠形つまみ(径：1.5cm)		
13	須恵器・坏	堆積土1層	外：ロクロナデ→ヘラ切り→[illegible]ヘラケズリ→ナデ 内：ロクロナデ	(8.6)	—	5.6	4/5		24－10	A Ⅰb
14	須恵器・坏	堆積土3層	外：ロクロナデ→切り離し不明→[illegible]ヘラケズリ 内：ロクロナデ	(9.6)	—	4.0	1/2		24－11	A Ⅱb

第43図　Sl14b住居跡出土遺物（3）

深さは25cmある。堆積土は2層認められ、上層は黒褐色土、下層は炭化物を多く含むオリーブ黒色土である。なお、蓋として利用されたと考えられる板材の据え方も認められ、その平面形は95cm×85cmの長方形で、深さは4cmある。この板材は樹種同定の結果、ケヤキであることが分かった。

［出土遺物］床面や床面直上、カマド燃焼部崩壊土中、周溝堆積土中から土師器坏（第41図1～5）・鉢（第41図6～9）・甕（第42図1～3）、円筒形土製品（第41図11）が出土しており、他にも内面がナデ調整された土師器坏や土師器鉢・甕の破片が認められる。カマド燃焼部には土製支脚（第41図12）と右側壁の心材として利用された土師器甕（第42図4）、円筒形土製品（第41図10）が残り、K1堆積土の上層からはモモの種子も1点出土している。また、堆積土1・3層からは土師器坏(第43図1～9)、須恵器坏（第43図13・14）・蓋（第43図12）、ミニチュア土器（第43図10・11）が一括して出土しており、他にも土師器坏・鉢・甕の破片が多く認められる。坏には内面がヘラミガキ・黒色処理されたものとナデ調整のものがあり、前者には外面に段もしくは沈線がつくものが多い。甕は体部破片が多く、外面の調整はハケメまたはヘラケズリを主体としている。

【SI15 住居跡】（第44・45図）

［位置・確認面］ I 区の西寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、西側へ緩やかに傾斜している。

［方向］ 住居の方向は、N－32°－W である。

［重複］ SI23 住居跡、SK20 土壙と重複しており、前者よりも新しく、後者よりも古い。

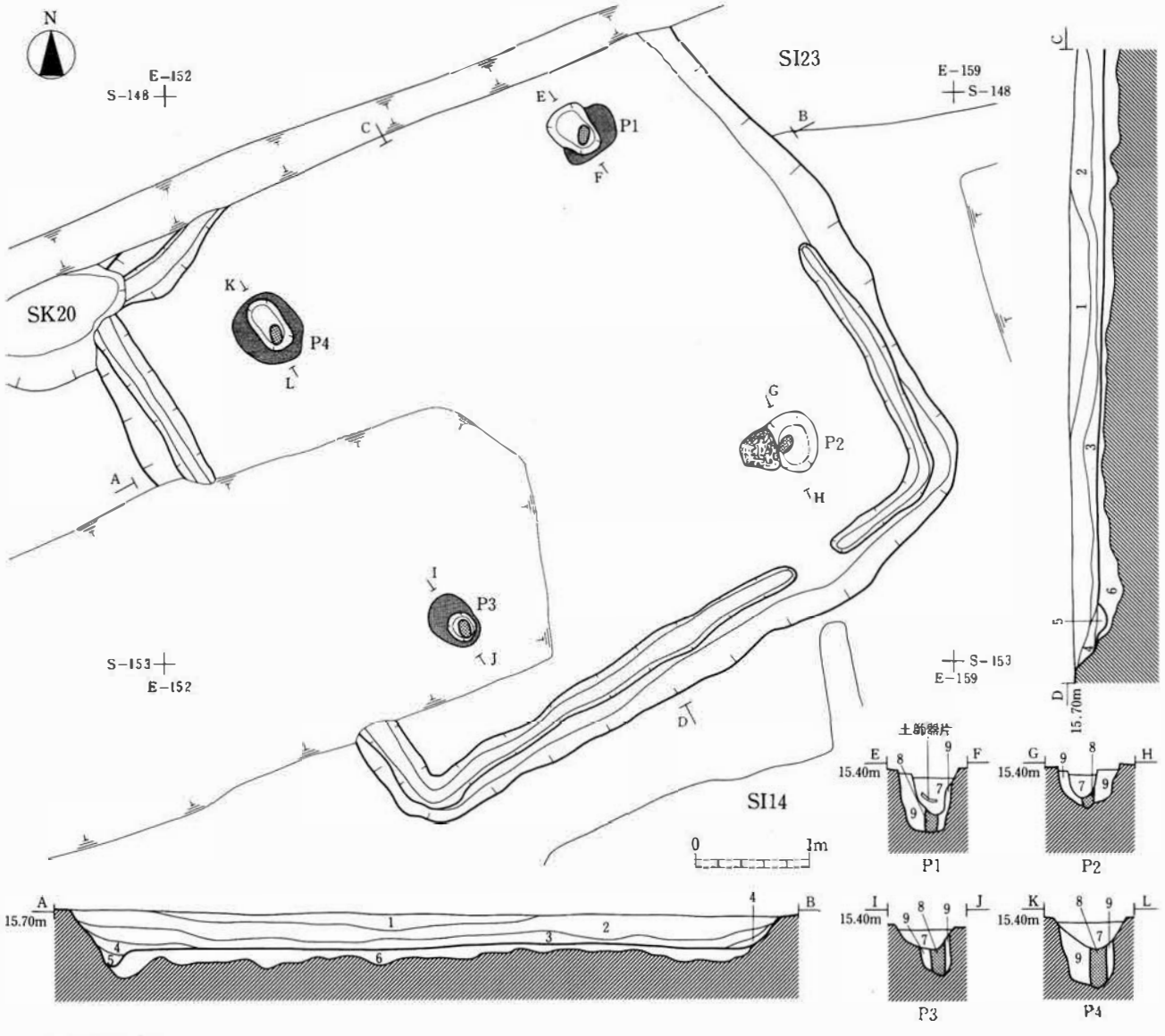
［平面形・規模］住居の北部が調査区外に及んでいるものの、東西5.7m×南北5.6m の正方形を呈する。

［堆積土］ 4 層認められる。1・2 層は炭化物・土器片を多く含む黒色・黒褐色土で、廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。3 層は極薄い炭化物層を含む砂と粘土のブロック混じりの層で、人為堆積土の可能性がある。4 層は住居壁の崩落土とみられる。

［壁］基本的に地山を壁としているが、SI23 住居跡と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は住居外側へ開き気味に立ち上がり、壁高は残りの良い東壁で床面から30cmある。

［床］ 掘方埋土を床としている。床面には若干凹凸があり、北側へやや傾斜している。

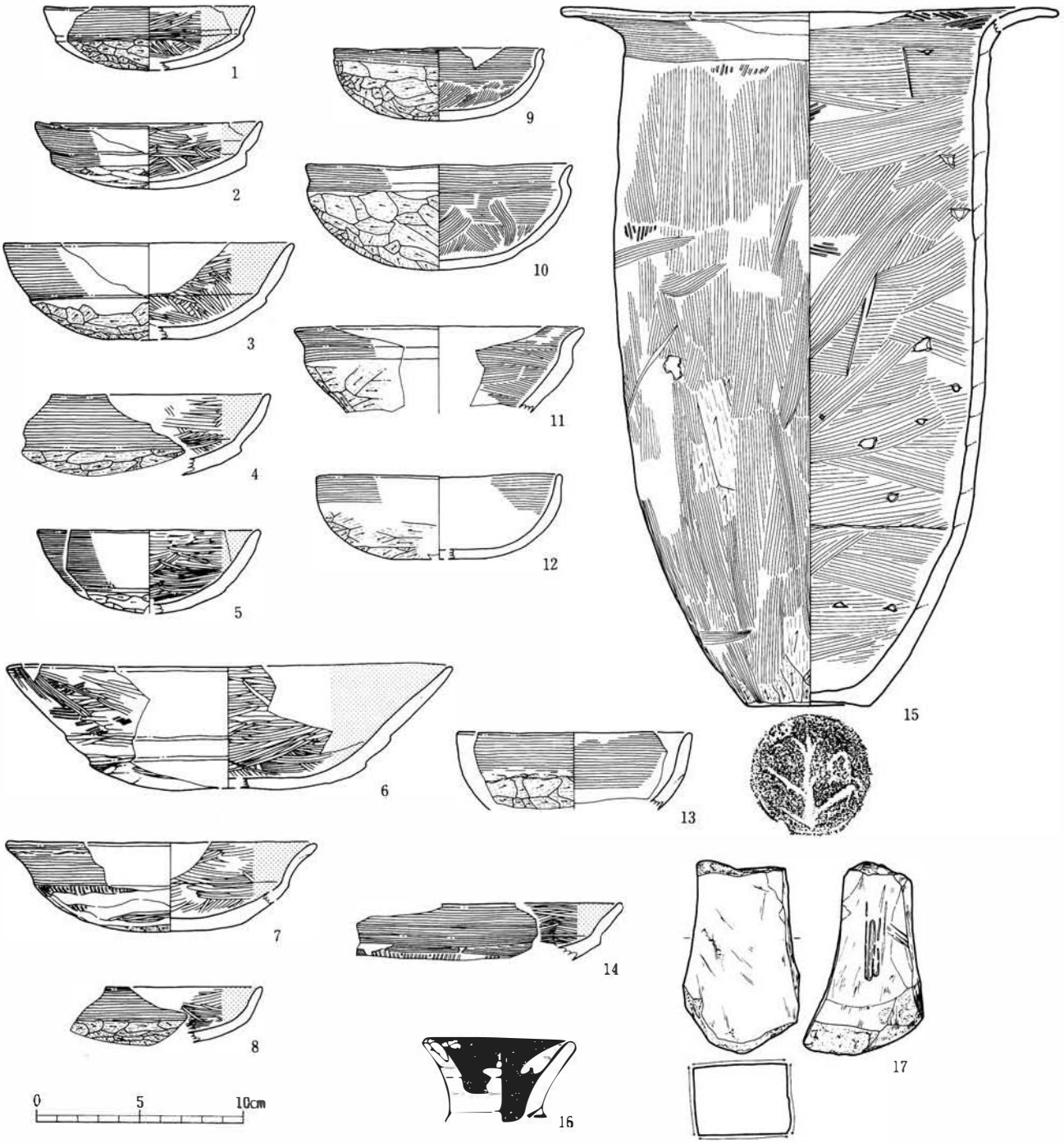
［柱穴］ 4 個（P1～4）検出された。P1・2・4 は床面で、P3 は攪乱除去後に確認されているが、これ



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物・土器片多く	廃絶後の住居内に捨てられた土？
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物・土器片多く	廃絶後の住居内に捨てられた土？
3	黒褐灰色(10GY3/1)	粘土質シルト	極薄い炭化物層・砂ブロック・粘土ブロック混じり	人為堆積土？
4	黒灰色(10YR5/1)	粘土	砂ブロック	住居壁崩落土
5	黒褐灰色(10GY3/1)	砂質シルト	砂ブロック	周囲内埋積土

層位	土色	土性	混入物等	備考
6	緑黒色(10GY2/1)	砂質シルト	炭化物、砂ブロック多量	住居掘方埋土
7	黒色(5Y2/1)	シルト	炭化物	P1～4柱穴を取り囲
8	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	炭化物・砂小ブロック少量	P1～4柱穴跡
9	灰色(5Y4/1)	粘土質シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	P1～4掘方埋土

第44図　SI15 住居跡



No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	堆積土1層	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内:ヘラミガキ+黒色処理	(10.2)	—	3.0	1/4		24−12	A I b
2	土師器・坏	堆積土2層	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内:ヘラミガキ+黒色処理	11.0	—	3.2	1/2		24−13	A I b
3	土師器・坏	堆積土2層	外:ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内:ヘラミガキ+黒色処理	(14.1)	—	4.6	1/3		24−14	A I b
4	土師器・坏	堆積土1層	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内:ヘラミガキ+黒色処理	—	—	—	1/8			A I b
5	土師器・坏	堆積土2層	外:ヨコナデ・軽い手持ちヘラケズリ 内:ヘラミガキ+黒色処理	(10.8)	—	(4.0)	1/4			A II b
6	土師器・坏	堆積土1層	外:ハケメ・手持ちヘラケズリ→軽いヘラミガキ 内:ヘラミガキ+黒色処理	(21.5)	—	6.1	1/4	外面に段が2段つく、黒色処理一部黒色	25−1	A II b
7	土師器・坏	堆積土2層	外:ハケメ・手持ちヘラケズリ→ヨコナデ・軽いナデ・部分的にヘラミガキ 内:ヘラミガキ・黒色処理	(15.0)	—	4.3	1/3		25−2	A III a
8	土師器・坏	掘方埋土	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内:ヘラミガキ+黒色処理	—	—	—	1/10			A III b
9	土師器・坏	堆積土2層	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内:ヨコナデ→ナデ	10.2	—	3.5	底部完形		25−3	B I 1
10	土師器・坏	堆積土2層	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内:ヨコナデ・ナデ	(12.8)	—	5.1	1/4		25−4	B I 1
11	土師器・坏	堆積土2層	外:ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	(14.0)	—	—	1/5			B V
12	土師器・坏	堆積土2層	外:ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内:ヨコナデ・(ヘラナデ)	(11.8)	—	4.1	1/2		25−5	B IV c
13	土師器・坏	堆積土2層	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内:ヨコナデ	(11.4)	—	—	1/6			B IV c
14	土師器・盤	堆積土2層	外:ヨコナデ・ハケメ→ナデ・ヨコナデ 内:ヘラミガキ+黒色処理	—	—	—	一部			
15	土師器・甕	床直	外:ハケメ・ヘラケズリ→ヨコナデ・ヘラナデ 内:ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ 底:木葉痕	(24.0)	6.1	33.4	底部完形		25−6	A IV c
16	須恵器・壺?	堆積土2層	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	7.4	—	—	一部	平坂の口縁部?、内外面に波付着(スクリーントーン部分)、俯瞰の写真有り	25−7	
No.	種別	層位	特徴							写真図版
17	砥石	堆積土2層	最大長:9.2cm 最大幅:5.5cm 最大厚:5.8cm 使用面:5 石材:凝灰岩							37−6

第45図 SI15 住居跡出土遺物

ら４個の柱穴は住居平面形の対角線上に位置しており、SI15住居跡に伴う主柱穴と考えられる。いずれの柱穴にも柱抜き取り痕が認められ、掘方の平面形は長辺が30～55cmのやや不整な隅丸長方形を呈し、深さ40～60cmである。柱穴下部では15cm×10cmの隅丸長方形の柱痕跡が検出されている。

［周溝］調査区内では東辺の北半を除く壁の直下もしくは壁際を巡っており、南東隅付近で途切れる。上幅15～35cm、深さ10～15cmで、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを含む締まりのない暗緑灰色土で、周溝が機能時に開口していた可能性もある。

［出土遺物］床面直上、住居掘方埋土中から土師器坏（第45図８）・甕（第45図15）が出土している他には床面近くの遺物は殆ど認められない。また、堆積土１・２層からは土師器坏（第45図１～７・９～13）・盤（第45図14）、須恵器壷？（第45図16）、砥石（第45図17）が一括して出土しており、他にも土師器坏・甕の破片が多く認められる。

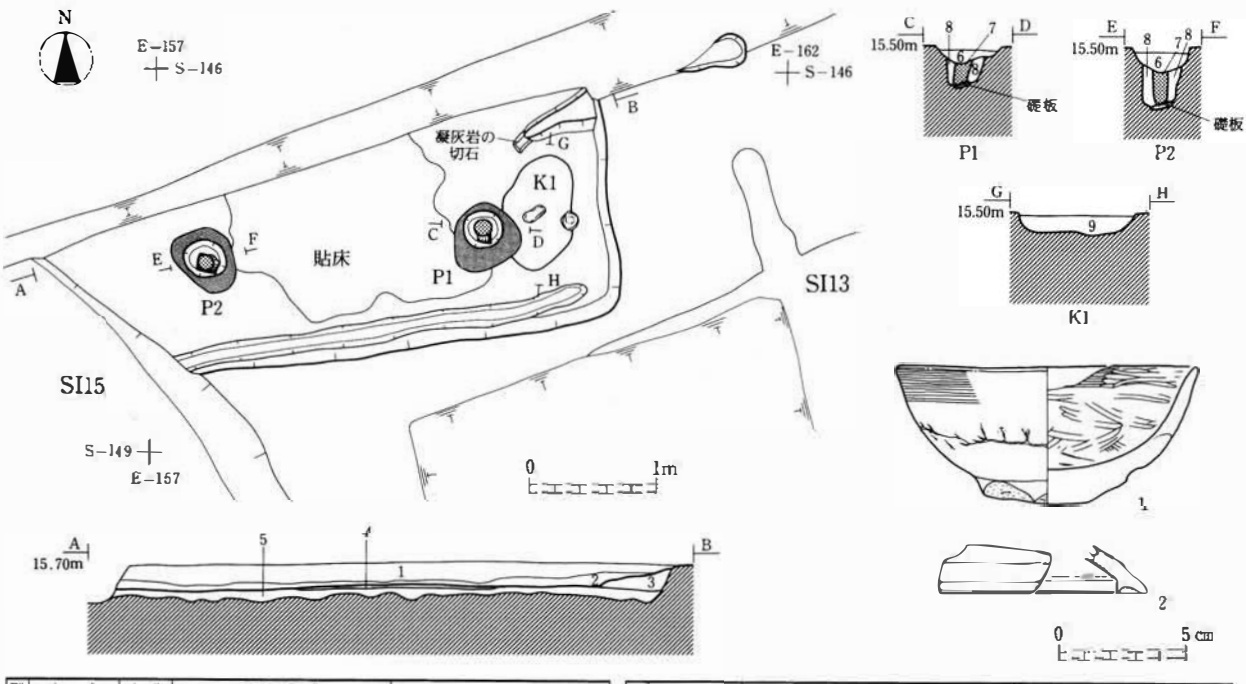
【SI23住居跡】（第46図）

［位置・確認面］Ｉ区のやや西寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、西側へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－8°－W である。

［重複］SI15 住居跡と重複しており、これよりも古い。

［平面形・規模］SI15 住居跡によって壊され、北半以上が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、東西4.5m 以上×南北1.7m 以上で方形を基調とする。



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり、締まりあり	人為堆積土？
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	極薄い炭化物層、砂ブロック・粘土ブロック混じり、締まりあり	人為堆積土？
3	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	砂ブロック、粘土ブロック主体	カマド燃焼部右側壁
4	暗灰黄色(2.5Y4/2)	粘土質シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり、締まり強い	貼床
5	黒色(N2/)	粘土質シルト	砂ブロック多量・粘土小ブロック混じり	住居掘方埋土

層位	土色	土性	混入物等	備考
6	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質シルト	砂小ブロック・粘土小ブロック混じり	P1・2柱抜き取り痕
7	暗緑灰色(7.5GY4/1)	粘土質シルト	炭化物・砂小ブロック少量	F1・2柱痕跡
8	暗緑灰色(7.5GY3/1)	砂質シルト	炭化物若干、砂小ブロック多量	F1・2掘方埋土
9	緑黒色(5GL7/1)	粘土質シルト	炭化物・粘土ブロック多く	K1堆積土(人為堆積)

No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	床面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヨコナデ・ヘラナデ→ヘラミガキ	12.0	－	5.4	はぼ完存	黒色処理炭色？	25－8	A1V1b
2	須恵器・壷	堆積土	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ	－	－	－	一部			

第46図　SI23 住居跡および出土遺物

［堆積土］２層認められる。１・２層は砂と粘土のブロックが混入する締まりのある層で、２層には極薄い炭化物層が含まれる。いずれの層も人為堆積土の可能性がある。

［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へ若干開き気味に立ち上がる。壁高は残りの良い東壁で床面から20cmある。

［床］中央部から南辺中央の壁際にかけ貼床されており、その他では掘方埋土を床としている。床面には若干凹凸があり、中央部がやや高くなっている。

［柱穴］床面で２個（P1・2）検出された。P1・2は住居の南壁から80cm程内側の平行線上に位置しており、柱抜き取り痕が認められる。掘方の平面形は一辺が約30cmのやや不整な隅丸正方形を呈し、深さは30～45cmである。柱穴下部では直径12cmの円形の柱痕跡が確認されており、掘方底面上には厚さ3cm程の礎板が残る。礎板は樹種同定の結果、オニグルミであった。このP1・2は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］南壁の直下で検出されている。上幅15～20cm、深さ10cm前後で、断面は「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある黒褐色土で、人為堆積と考えられる。

［カマド］東辺で検出されており、中央付近に位置するものと考えられる。調査区側溝によって壊されて、燃焼部・煙道の一部が残る。燃焼部右側壁は黄灰色の粘土質シルトを積み上げて構築されており、その焚き口部には凝灰岩の切石が据えられている。左側壁も同様に構築されていたと推測される。燃焼部底面は焚き口側へ緩やかに傾斜している。煙道は先端が残るのみで、長さ1.3m程である。

［貯蔵穴状ピット］カマド右脇にあたる住居南東隅の床面で検出された（K1）。平面形は90cm×55cmのやや不整な楕円形を呈し、深さは20cmである。堆積土は粘土ブロックと炭化物を多く含む緑黒色土で、人為堆積と考えられる。

［出土遺物］床面から土師器坏（第46図１）が出土しており、この他にも床面の遺物には土師器甕の破片が若干認められる。また、堆積土中からは須恵器蓋（第46図２）が出土している。

【SI16住居跡】（第47～49図）

［位置・確認面］Ｉ区の西寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、南西方向へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－30°－Wである。

［平面形・規模］攪乱によって東辺の一部が壊されているものの、東西4.6m×南北4.6mの正方形を呈する。

［堆積土］10層認められる。１層は焼土ブロックと炭化物を多く含む黒褐色土、２層は炭化物と灰を主体とする暗灰色土で、いずれの層も土器片を多量に含み、廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。３層は砂と粘土のブロックを主体としており、人為堆積土の可能性がある。４・５層は新しいカマドの煙道から燃焼部にかけての崩壊土、６～８層は主にその燃焼部内に堆積した炭化物や灰層で、機能時の堆積である。９・10層は古いカマドの煙道上部を崩して埋め戻した土とその煙道内堆積土である。

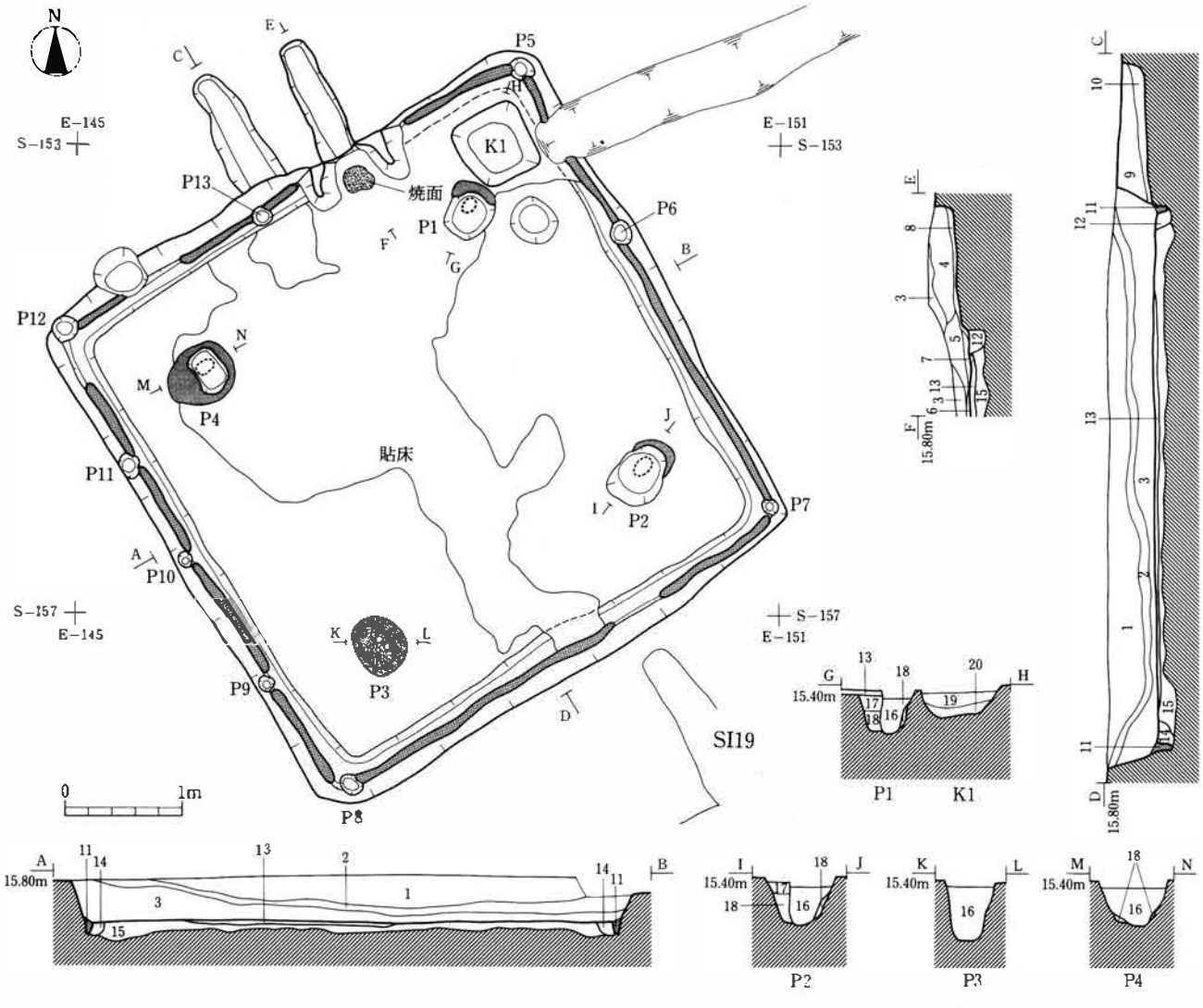
［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は残りの良い南壁

で床面から45cmある。

［床］カマド部分から中央部を経て南辺中央にかけ貼床されており、その他では掘方埋土を床としている。床面には若干凹凸があり、南側へやや傾斜している。

［柱穴］床面で4個（P1～4）検出された。P1～4は住居平面形の対角線上に位置しており、P1・2・4には柱抜き取り痕が認められ、P3は抜き穴によって壊されている。掘方の平面形は長辺が40～55cmの隅丸長方形を呈し、深さ40～50cmである。P1・2・4の柱穴底面には15cm×10cmの隅丸長方形を呈する柱押圧痕が残る。このP1～4は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［壁柱穴］周溝上面もしくはわずかに壁から張り出す位置で9個（P5～13）のピットが検出された。ピットの間隔は一定でないものの、平面形は直径10～20cmの不整な円形を呈し、深さ20cm程である。

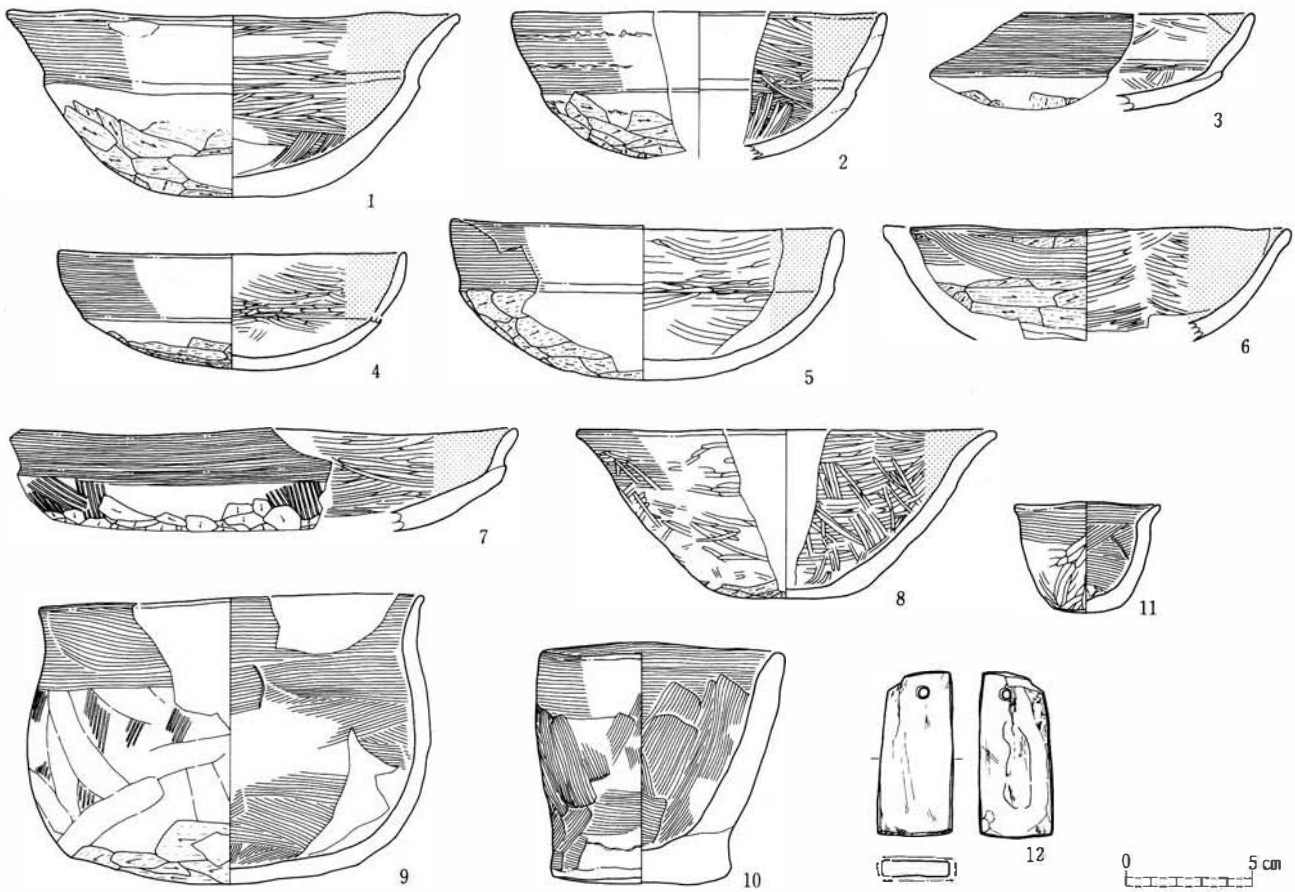


第47図　SI16住居跡

このP5～13は、その位置・形状・規模から壁柱の抜き取り穴と考えられる。

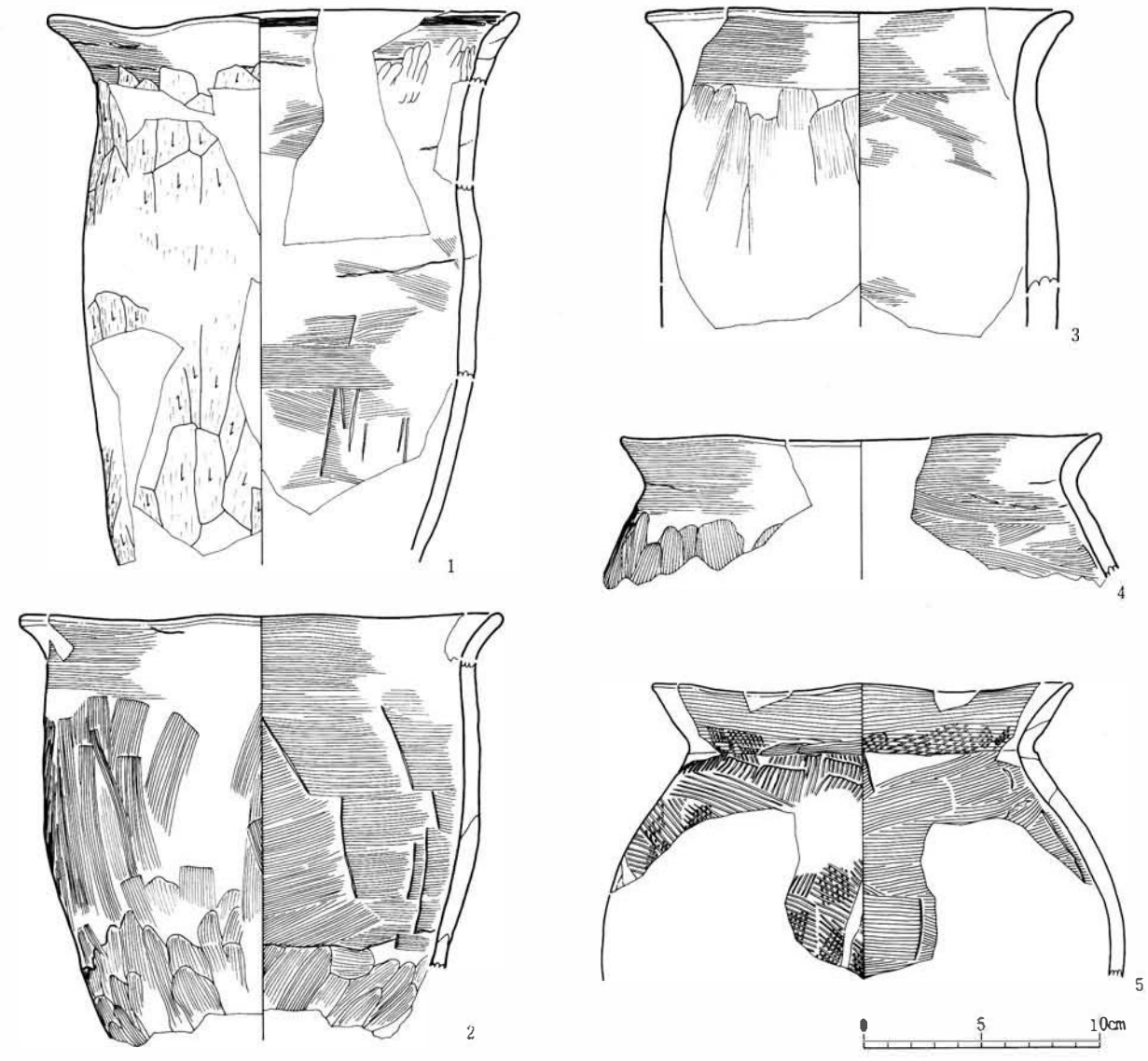
［周溝］壁の直下を全周している。上幅15～30cm、深さ15cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は主に砂のブロックを多く含み、締まりのある灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅5～10cm、深さ15cm前後の灰オリーブ色の堆積土が断続的に認められる。

［カマド］北辺で新旧2つのカマドが検出された。やや東寄りに位置するカマドが新しく、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は黄褐色粘土主体の土を積み上げて構築されており、底面は中央部が若干窪み、強く焼けて赤変している。燃焼部底面と煙道の間には5cmの段がつき、長さ1.0mの煙道はほぼ水平に延びる。また、中央の古いカマドでは燃焼部が除去されており、煙道が残るのみである。長さ



No	種別	層位	図量	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(17.9)	—	7.2	1/4		25－9	A1a
2	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(14.8)	—	(5.7)	1/4		25－10	A1b
3	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ・不明ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	—	—	—	1/6			A1b
4	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ・不明ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(13.8)	—	4.6	4/5		25－11	A1b
5	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	15.6	—	4.2	3/5		25－12	A1c
6	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ→ヨコナデ・粗いナデ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(16.2)	—	—	1/5			A1V1b
7	土師器・盤	堆積土1層	外：ヨコナデ→ハケメ→粗いヘラケズリ・ヨコナデ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	—	—	—	一部			
8	土師器・坏	堆積土1層	外：ヨコナデ→ヘラケズリ・粗いヘラミガキ 内：ヘラミガキ＋黒色処理　底：ヘラケズリ	(16.6)	—	(6.6)	1/4		26－1	A1V2a
9	土師器・鉢	堆積土1層	外：ハケメ→粗いナデ→ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ナデ→ヘラナデ	16.8	—	11.1	4/5		26－2	E
10	ミニチュア土器	堆積土1層	外：ヨコナデ・ナデ→ヘラナデ 内：ヨコナデ→ヘラナデ　底：粗いヘラケズリ	(9.7)	6.4	9.3	完形		26－3	B
11	ミニチュア土器	堆積土1層	外：ヨコナデ→ヘラミガキ 内：ナデ・ヘラナデ→ヨコナデ　底：ヘラミガキ	(5.8)	(2.6)	4.4	1/3		26－4	B
No	種別	層位	特徴					備考		写真図版
12	砥石	堆積土2層	最大長：6.5cm　最大幅：2.9cm　最大厚：0.6cm　径4mmの粗孔有り　使用面：6　石材：凝灰岩							37－7

第48図　SI16住居跡出土遺物（1）



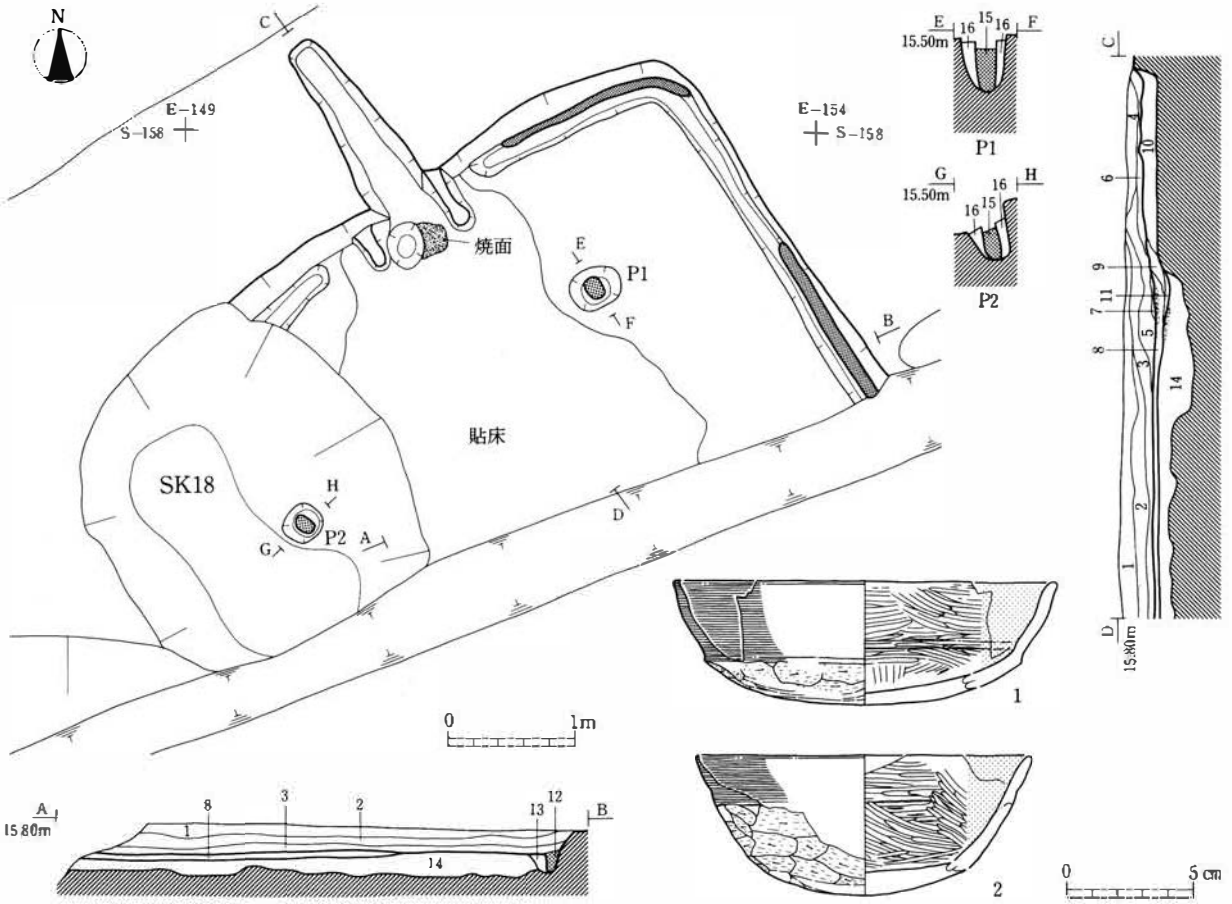
№	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・甕	竪穴住1層	外:ヨコナデ→ヘラケズリ 内:ヨコナデ・ヘラナデ→口縁部に部分的なヘラミガキ	20.0	−	−	2/3	口縁内面に沈線2本（アップの写真有り）	26−6	A Ⅱ2b
2	土師器・甕	竪穴住1層	外:ヘラナデ→ヨコナデ・ナデ 内:ナデ・ヘラナデ→ヨコナデ	(20.6)	−	−	1/5		26−5	A Ⅳ2c
3	土師器・甕	竪穴住1層	外:ナデ→ヨコナデ　内:ヘラナデ→ヨコナデ	(18.0)	−	−	−		26−7	A Ⅱ2c
4	土師器・甕	竪穴住1層	外:ヨコナデ→ナデ　内:ヘラナデ→ヨコナデ	(20.4)	−	−	一部			
5	土師器・甕	竪穴住1層	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヘラナデ・ヨコナデ	(17.8)	−	−	1/10		26−8	B2a

第49図　SI16 住居跡出土遺物（2）

1.2m の煙道はほぼ水平に延び、上部が意識的に崩されて埋め戻されていたと考えられる。

［貯蔵穴状ピット］新しいカマドの右脇にあたる住居北東隅の床面で検出された（K1）。平面形は一辺が60cmの正方形を呈し、深さは25cmである。堆積土は２層認められ、上層は住居堆積土３層とほぼ同一の灰色土、下層は炭化物を含む灰オリーブ色土である。

［出土遺物］床面や床面直上からは土師器坏・甕の小破片が少量出土したのみである。堆積土１・２層からは土師器坏（第48図１～６・８）・盤（第48図７）・鉢（第48図９）・甕（第49図１～５）、ミニチュア土器（第48図10・11）、砥石（第48図12）が一括して出土しており、他にも土師器坏・鉢・甕、ミニチュア土器の破片が多量に出土している。坏は内面の調整がヘラミガキ・黒色処理のものが主体で、ナデ調整のものも僅かに含まれる。



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物	自然流入土
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物少量	自然流入土
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	壁焼い炭化物層、砂ブロック・粘土ブロック混じり	人為堆積土?
4	黒色(5YR2/1)	シルト	粘土ブロック・炭化物多く	カマド(炭)煙道上部板屋上
5	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	粘土ブロック・白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック	カマド(炭)煙道~燃焼部崩壊土
6	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	粘土・炭化物	カマド(炭)煙道内堆積土
7	灰色(10YR5/1)	シルト	炭主体	カマド(炭)燃焼部内堆積土(燃焼時の堆積)
8	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	層下部に板屋い炭化物層、粘土ブロック多く、締まり強い	貼床
9	にぶい赤褐色(5YR5/4)	粘土質シルト	粘土大ブロック・粘土ブロック多量	カマド(炭)燃焼部崩壊土
10	灰褐色(5YR5/2)	シルト	粘土大ブロック多く、炭化物、上部が焼けて炭変	カマド(炭)煙道内堆積土
11			粘土・炭化物少量	カマド(炭)燃焼部内堆積土(灰層、燃焼時の堆積)
12	黒褐(10YR3/2)	粘土質シルト	炭化物若干、砂小ブロック・粘土小ブロック	壁焼の焼屋
13	暗褐灰色(10YR4/1)	シルト	砂ブロック多く、締まりあり	周囲堆土
14	灰色(N4/1)	砂質シルト	砂ブロック多量	住居貼床堆土
15	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	炭化物若干、砂小ブロック・粘土小ブロック	P1・2柱痕跡
16	暗褐灰色(7.5GY4/1)	砂質シルト	砂ブロック多量	P1・2柱痕跡

No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	現存率	備考	写真図版	分類
1	土師圏・坏	床面	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内:ヘラミガキ+黒色処理	(15.2)	−	4.8	3/4		27−1	A Ⅰb
2	土師圏・坏	堆積土	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内:ヘラミガキ+黒色処理	(13.2)	−	(5.5)	1/2		27−2	A Ⅳ1b

第50図　SI19 住居跡および出土遺物

【SI19 住居跡】(第50図)

[位置・確認面] Ⅰ区の西寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、南西方向へ緩やかに傾斜している。

[方向] 住居の方向は、N−32°−W である。

[重複] SK18 土壙と重複しており、これよりも古い。

[平面形・規模] SK18 土壙に壊されていることや住居の南半が調査区外に及ぶことから全体の規模は不明であるが、東西4.6m 以上×南北3.0m 以上で方形を基調とする。

[堆積土] 11層認められ、1・2層は自然流入土である。3層は極薄い炭化物層を含む砂と粘土のブロック混じりの層で、人為堆積土の可能性がある。4・5層は新しいカマドの煙道から燃焼部にかけての崩壊土、6・7層はそのカマド内堆積土である。8層は新しいカマドの構築時にその燃焼部底面から床面中央部にかけて貼られた土で、粘土ブロックを多く含み締まりが強い。9層は古いカマド燃

焼部の崩壊土で、10・11層はその燃焼部内と煙道に堆積している。煙道内の10層は焼土大ブロックを多く含み、上面が焼けている。この状況からみて、古いカマド機能時に煙道上部が1度崩落し、その後は10層上面が煙道底面となっていたことが窺われる。

［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は最も残りの良い北東隅で床面から30cmある。

［床］住居構築時は掘方埋土を床としていたが、カマド改築時に一部貼床されている。貼床はカマド部分から住居中央部にかけて認められる。床面には若干凹凸があり、中央部がやや高くなっている。

［柱穴］2個（P1・2）検出された。P1は床面で、P2はSK18土壙を掘り上げた段階で確認されているが、これら2個の柱穴は住居の北壁から1.3m程内側の平行線上に位置しており、SI19住居跡に伴う主柱穴と考えられる。いずれの柱穴にも15cm×10cmの隅丸長方形の柱痕跡が認められ、掘方の平面形は一辺または長辺が30～40cmの隅丸正方形もしくは長方形を呈し、深さ50cm程である。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っており、カマド部分で途切れる。上幅15～20cm、深さ15cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある暗緑灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅5～10cm、深さ15cm前後の黒褐色の堆積土が断続的に認められる。

［カマド］北辺で検出されており、やや東寄りに位置するとみられる。同位置で造り替えが行われており、新しいカマドは燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は白色粘土のブロックを含む灰黄褐色土を積み上げて構築されており、底面は中央部が若干窪み、強く焼けて赤変している。煙道はほぼ水平に延び、長さ1.5mである。古いカマドでは燃焼部が改築時に壊されており、その崩壊土と直径30cmの円形の焼け面、煙道が残る。煙道は改築前後を通じてそのまま利用されていたと考えられるが、堆積土の状況から古いカマド機能時に1度上部が崩落していた可能性が強い。

［出土遺物］床面直上から土師器坏（第50図1）が出土している他、床面近くから内面にヘラミガキ・黒色処理が施された土師器坏や土師器甑・甕の破片が出土している。また、堆積土中からは土師器坏（第50図2）が出土している。

【SI21住居跡】（第51図）

［位置・確認面］Ⅰ区の西寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、南西方向へ緩やかに傾斜している。

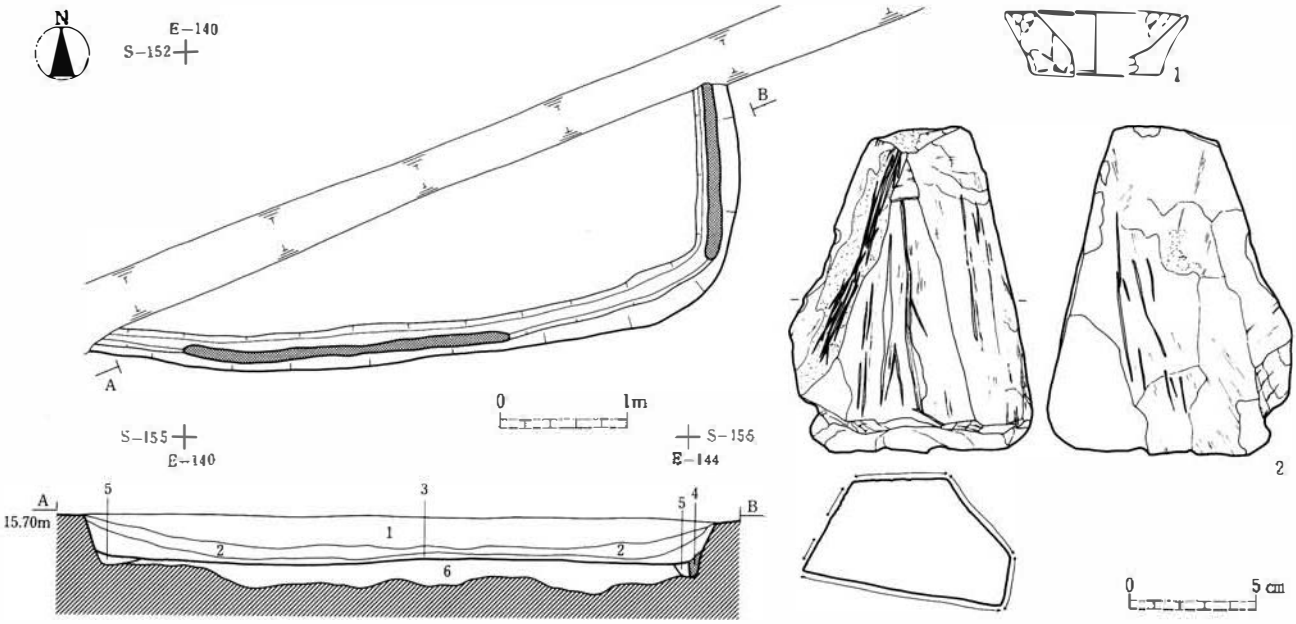
［方向］住居の方向は、N－4°－Wである。

［平面形・規模］調査区内で確認されたのは住居南東隅のみで、全体の規模は不明であるが、東西5.0m以上×南北1.6m以上で方形を基調とする。

［堆積土］3層認められ、1・2層は自然流入土である。3層は極薄い炭化物層と砂のブロックを多く含み、やや締まりがあることから人為堆積土の可能性がある。

［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は残りの良い東壁で床面から35cmある。

［床］掘方埋土を床としており、床面には凹凸がある。



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物少量	自然混入土
2	黒灰色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	炭化物少量	自然混入土
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物多量、砂ブロック多く、やや締まりあり	人為堆積土?
4	オリーブ黒色(5Y3/1)	シルト	炭化物・砂のブロック	壁材の痕跡
5	灰色(7.5Y4/1)	シルト	炭化物粒子、砂ブロック多く、締まりあり	周溝埋土
6	灰色(10Y4/1)	シルト	焼土ブロック・炭化物・砂質ブロック多く	住居圏方埋土

No	種別	層位	調査	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	ミニチュア土器	堆積土	外：ナデ　内：ナデ	(7.3)	(5.0)	2.4	1/16			A
No	種別	層位	約							写真図版
2	砥石	床面	最大長：12.6cm　最大幅：9.4cm　最大厚：4.7cm　使用面：5　石材：粘板岩							37−8

第51図　SI21 住居跡および出土遺物

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っている。上幅15〜25cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅５〜10cm、深さ10cm前後のオリーブ黒色の堆積土が断続的に認められる。

［出土遺物］床面直上から砥石（第51図２）が出土している他、床面近くから外面に段がつき、内面がヘラミガキ・黒色処理されている土師器坏や土師器甕の破片が少量出土している。堆積土中からはミニチュア土器（第51図１）も出土している。

【SI24 住居跡】（第14図）

Ⅰ区西寄りの⑩層上面で検出されており、確認面は南西方向へ緩やかに傾斜している。調査区内では灰白色火山灰降灰以降の河道によって殆どが壊されており、煙道の先端部が長さ40cm程残るのみである。遺物は出土していない。

【SI36 住居跡】（第52・53図）

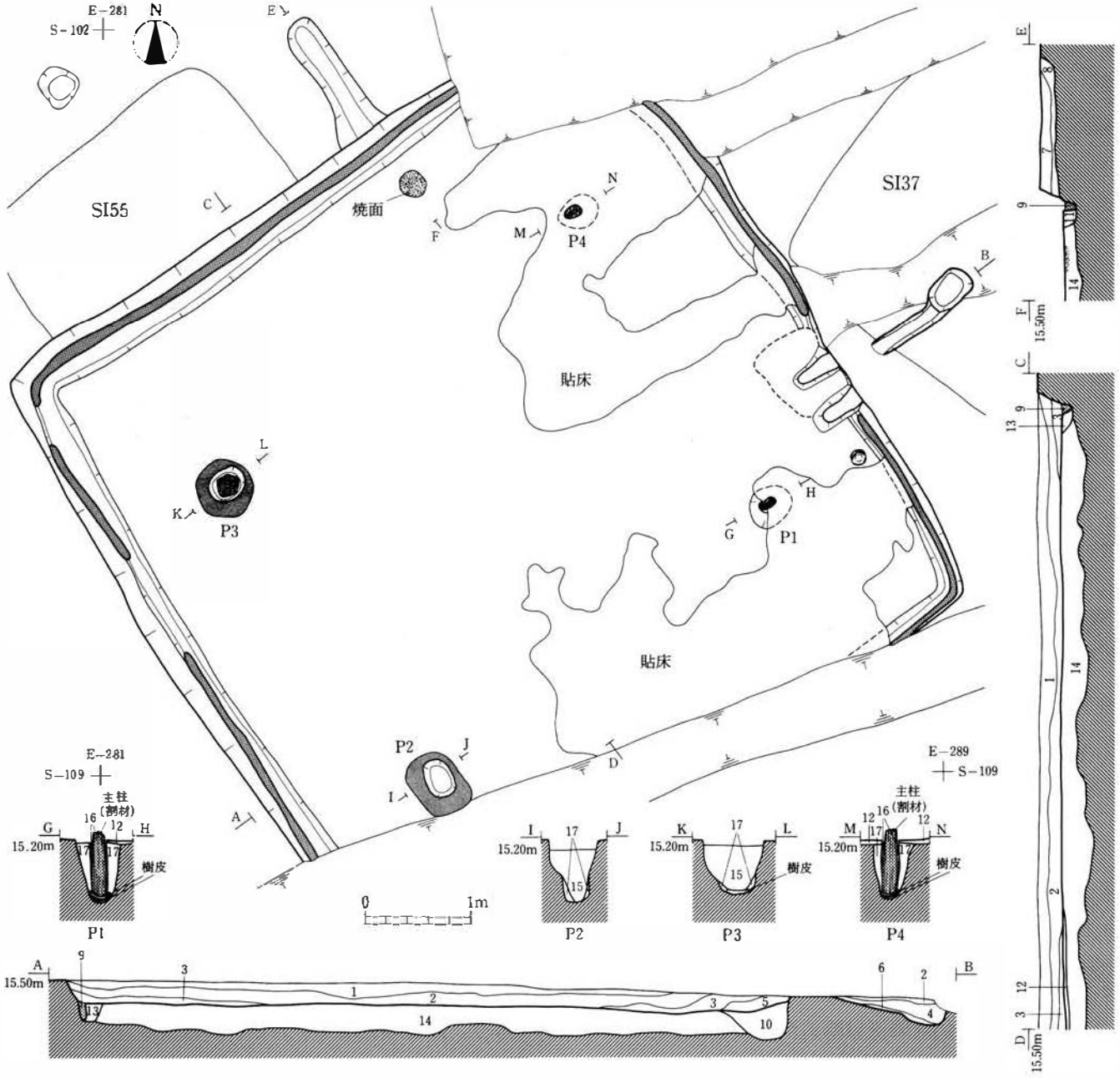
［位置・確認面］Ⅱ区の東寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

［方向］住居の方向は、N−33°−W である。

［重複］SI37・55 住居跡と重複しており、いずれよりも新しい。

［平面形・規模］攪乱によって住居北東隅が壊され、南部は調査区外に及んでいるものの、東西6.8m×南北6.7mの正方形を呈する。

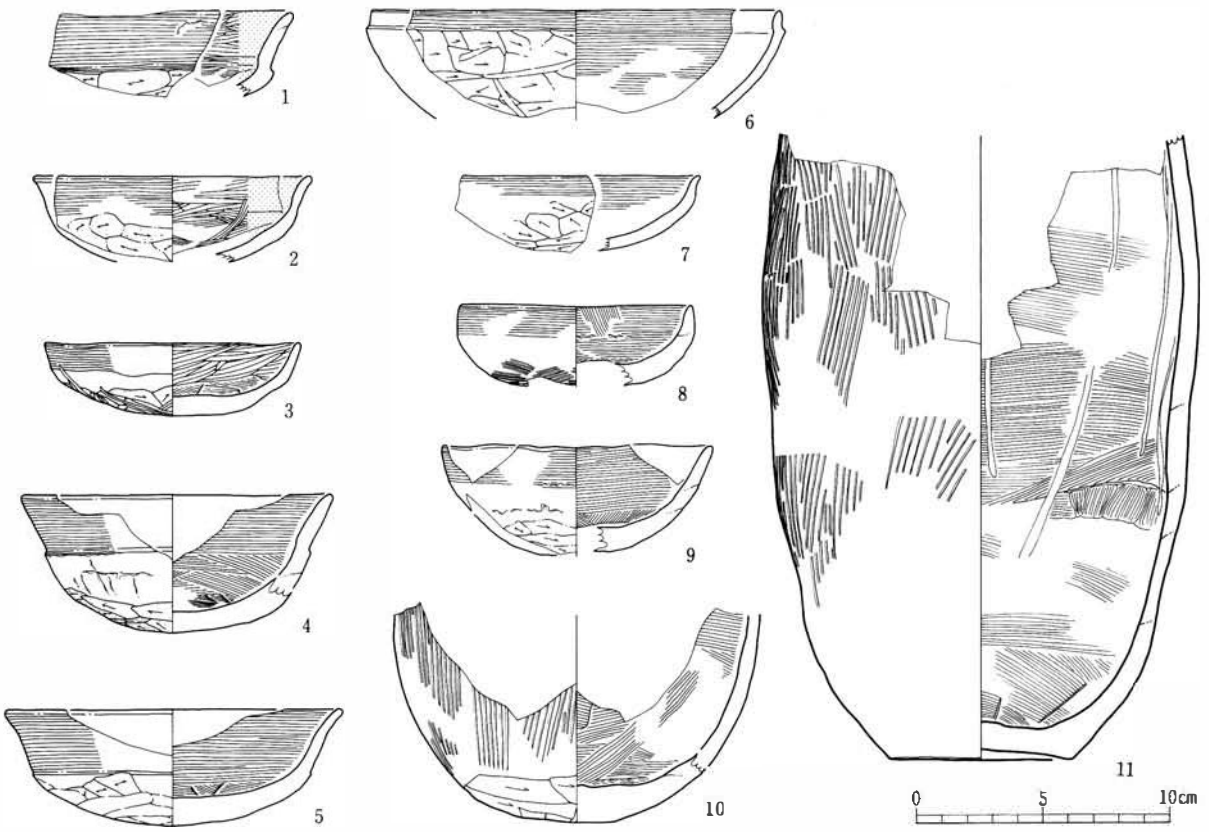
［堆積土］８層認められ、１～３層は自然流入土である。４・５層はそれぞれ新しいカマドの煙道・燃焼部の崩壊土、６層はその煙道内堆積土である。７・８層は古いカマドの煙道上部を崩して埋め戻した土とその煙道内堆積土である。



番号	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		自然流入土
2	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質シルト	炭化物	自然流入土
3	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	炭化物多く	自然流入土
4	黒色(10YR2/1)	シルト	粘土ブロック	カマド（新）煙道上部崩落土
5	褐色(2.5YR4/4)	シルト	粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック主体	カマド（新）燃焼部崩壊土
6	明オリーブ褐色(2.5Y3/3)	粘土	粘土・炭化物	カマド（新）煙道内堆積土
7	黒褐色(5YR3/1)	シルト	粘土ブロック・炭化物・砂ブロック・粘土ブロック混じり	カマド（新）焼道 現土
8	黒色(7.5YR2/1)	シルト	現土・炭化物多く	カマド（新）煙道内堆積土（最終時の堆積）
9	オリーブ黒色(5Y3/1)	粘土質シルト	炭化物少量	壁材の板跡

番号	土色	土性	混入物等	備考
10	黒色(5Y2/1)	粘土質シルト	炭化物少量、砂ブロック・黄褐色粘土ブロック混じり	人為堆積土（カマド造成に伴う盛り込み？）
11	灰色(5Y4/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック多く、固まりあり	焼床現土
12	褐色(7.5YR4/6)	シルト	黄褐色粘土小ブロック多く、固まり強い	焼床
13	灰色(5Y4/1)	シルト	砂ブロック多く、固まりあり	焼床現土
14	オリーブ黒色(10.5Y3/2)	シルト	砂ブロック多く	焼床
15	黒褐色(10.5Y2/1)	粘土質シルト	炭化物若干	P2・3柱抜き取り量
16	黒褐色(10.5Y3/1)	砂質シルト		P1・4柱抜き取り量
17	黒褐色(7.5Y2/1)	粘土質シルト	炭化物若干、砂ブロック・粘土ブロック混じり	P1～4腐朽現土

第52図　SI36 住居跡



No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	床面	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理	—	—	—	一部			A I b
2	土師器・坏	床面	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理	(10.0)	—	—	1/4			A III a
3	土師器・坏	床面	外:ヨコナデ・非常にヘラケズリ→粗いヘラミガキ 内:ヘラナデ→ナデ→粗いヘラミガキ	10.2	—	2.8	2/3		27－3	B IV b
4	土師器・坏	床面	外:ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内:ヘラナデ→ヨコナデ	(12.3)	—	5.4	1/2		27－4	B III b
5	土師器・坏	床面	外:ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→粗いナデ 内:ヘラナデ→ヨコナデ	(13.3)	—	4.1	3/4		27－5	B III a
6	土師器・坏	カマド(新)燃焼部崩壊土	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内:ヨコナデ	(16.2)	—	—	1/5			B I c
7	土師器・坏	掘方埋土	外:ヨコナデ・手持ちヘラケズリ　内:ヨコナデ	—	—	(3.1)	1/6			B I 2
8	土師器・坏	床面	外:ヨコナデ・ハケメ　内:ナデ・ヨコナデ	(9.2)	—	(3.2)	1/3		27－6	B IV c
9	土師器・坏	床直	外:ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	10.7	—	(4.4)	1/2		27－7	B IV b
10	土師器・鉢?	床面	外:ハケメ・ヘラケズリ　内:ナデ・ヘラナデ 底:木葉痕が一部残る	—	—	—	1/6			
11	土師器・甕	床面	外:ハケメ　内:ヘラナデ→粗いヘラミガキ 底:ハケメ	—	7.2	—	1/3			

第53図　SI36 住居跡出土遺物

［壁］基本的に地山を壁としているが、SI55 住居跡と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面から住居外側へ開き気味に立ち上がり、壁高は最も残りの良い北西隅で床面から30cmある。

［床］住居の北東・南東部に貼床が認められ、その他では掘方埋土を床としている。床面には凹凸があり、南東方向へやや傾斜している。

［柱穴］床面もしくは貼床下で4個（P1～4）検出された。P1～4は住居平面形のほぼ対角線上に位置しており、P1･4には柱材、P2･3には柱抜き取り痕が残る。掘方の平面形は長辺が35～45cmの不整な隅丸長方形を呈し、深さは50～60cmである。柱材は断面が20cm×10cmの台形状を呈する割材で、樹種同定の結果、クリであることが分かった。また、柱材の下には樹皮が敷かれており、P3の掘方底面でも樹皮が確認されている。柱の沈下を防いでいたものと推測される。このP1～4は、その位置･形状･規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っているが、新しいカマド下部ではカマド改築時のものと推測される土壙状の掘り込みによって壊されている。上幅10～30cm、深さ10～15cmで、断面は住居内側へや

や開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅5～10cm、深さ10～15cmのオリーブ黒色の堆積土が認められる。この壁材の痕跡は北西隅と西辺中央やや北寄りで途切れている。

［カマド］東辺やや南寄りと北辺やや東寄りで新旧2つのカマドが検出された。東辺のものが新しく、燃焼部と煙道の一部が残る。燃焼部では、カマドを付け替える際に壁材を抜き取った痕と考えられる土壙状の掘り込みを床面からやや盛り上がる程度まで埋め戻した後に、黄褐色粘土主体の土を積み上げて側壁を構築している。底面は中央部が若干窪み、焚き口側へ緩やかに傾斜している。長さ1.5m程の煙道は先端に向かって下向きに傾斜しており、先端部は40cm×30cmの隅丸長方形を呈するピット状である。また、北辺の古いカマドでは燃焼部側壁が取り払われて、直径25cmの円形の焼け面と煙道が残る。長さ1.3mの煙道はほぼ水平に延び、上部が意識的に崩されて埋め戻されていたとみられる。

［出土遺物］床面や床面直上、新しいカマドの燃焼部崩壊土中、住居掘方埋土中から土師器坏（第53図1～9）・鉢？（第53図10）・甕（第53図11）が出土している。この他にも床面からは外面もしくは内外面に段がつき、内面がヘラミガキ・黒色処理された土師器坏や土師器甕の破片が出土している。

【SI55住居跡】（第54図）

［位置・確認面］II区の東寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－36°－Wである。

［重複］SI36住居跡と重複しており、これよりも古い。

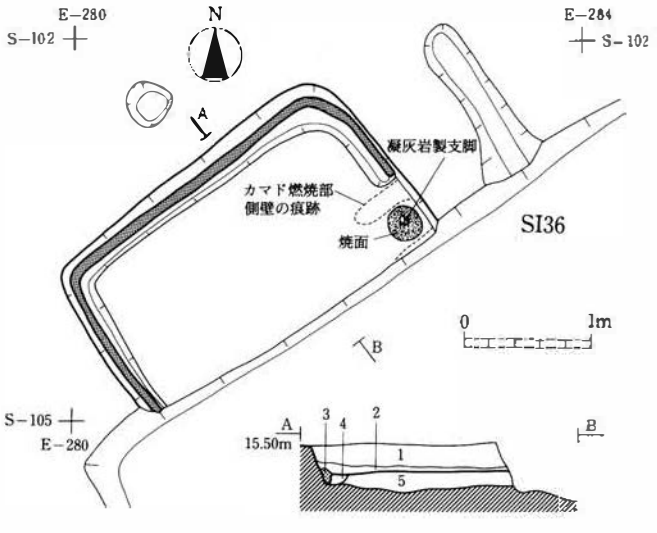
［平面形・規模］住居の南半がSI36住居跡によって壊されているため全体の規模は不明であるが、東西2.7m×南北1.5m以上で方形を基調とする。

［堆積土］2層認められる。1層は均質で締まりのある黒褐色土で、人為堆積の可能性がある。2層は自然流入土とみられる。

［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は残りの良い西壁で床面から25cmある。

［床］掘方埋土を床としている。床面には若干凹凸があり、中央部がやや高くなっている。

［周溝］残存する壁の直下を巡っており、カマド部分で途切れる。上幅10～25cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿っ



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物少量、締まりあり	人為堆積土？
2	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	炭化物若干	自然流入土
3	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質シルト	砂ブロック若干	壁材の痕跡
4	灰色(GY4/1)	粘土質シルト	炭化物少量、砂ブロック多く、締まりあり	人為堆積土
5	灰色(2.5Y4/1)	シルト	砂ブロック多量	地山崩落土

第54図　SI55住居跡

て壁材の痕跡と考えられる幅5～10cm、深さ10cm前後の黒褐色の堆積土が認められる。

［カマド］東辺で検出されており、中央付近に位置するものと考えられる。壊されて、燃焼部側壁の痕跡と焼け面が残る。燃焼部周辺には黄褐色粘土のブロックを多く含む暗灰黄色土が認められることから、側壁は黄褐色粘土主体の土を積み上げて構築されていたと推測される。焼け面は直径25cmの円形を呈し、平坦である。また、焼け面のほぼ中央には凝灰岩製の支脚が一部残存している。なお、煙道は削平によって失われたとみられる。

［出土遺物］カマド燃焼部底面から土師器甕の破片数点が出土したのみである。

【SI37 住居跡】（第55図）

［位置・確認面］II区の東寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－36°－E である。

［重複］SI36・38・39住居跡と重複しており、S136 住居跡よりも古く、他の住居よりも新しい。

［平面形・規模］攪乱によって一部壊されているものの、東西2.9m×南北2.8m の正方形を呈する。

［堆積土］3 層認められ、1 層は自然流入土である。2 層は炭化物層、3 層は砂のブロックを多く含むオリーブ黒色土で、人為堆積の可能性がある。

［壁］基本的に地山を壁としているが、S138･39 住居跡と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がり、壁高は残りの良い南壁で床面から25cmある。

［床］掘方埋土を床としており、床面には凹凸がある。

［周溝］北辺の西半を除く壁の直下を巡っており、西辺中央やや南寄りと南東隅で途切れる。上幅10～20cm、深さ10～15cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は砂と黒色粘土のブロックが混じる黒褐色土で、締まりもあることから人為堆積と考えられる。

［出土遺物］床面から土師器甑（第55図1）・甕（第55図2・3）が出土している他、床面直上から内面にヘラミガキ・黒色処理が施された土師器坏や土師器甕の破片が少量出土している。

【SI38 住居跡】（第55図）

［位置・確認面］II区の東寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－22°－W である。

［重複］SI37・39 住居跡と重複しており、いずれよりも古い。

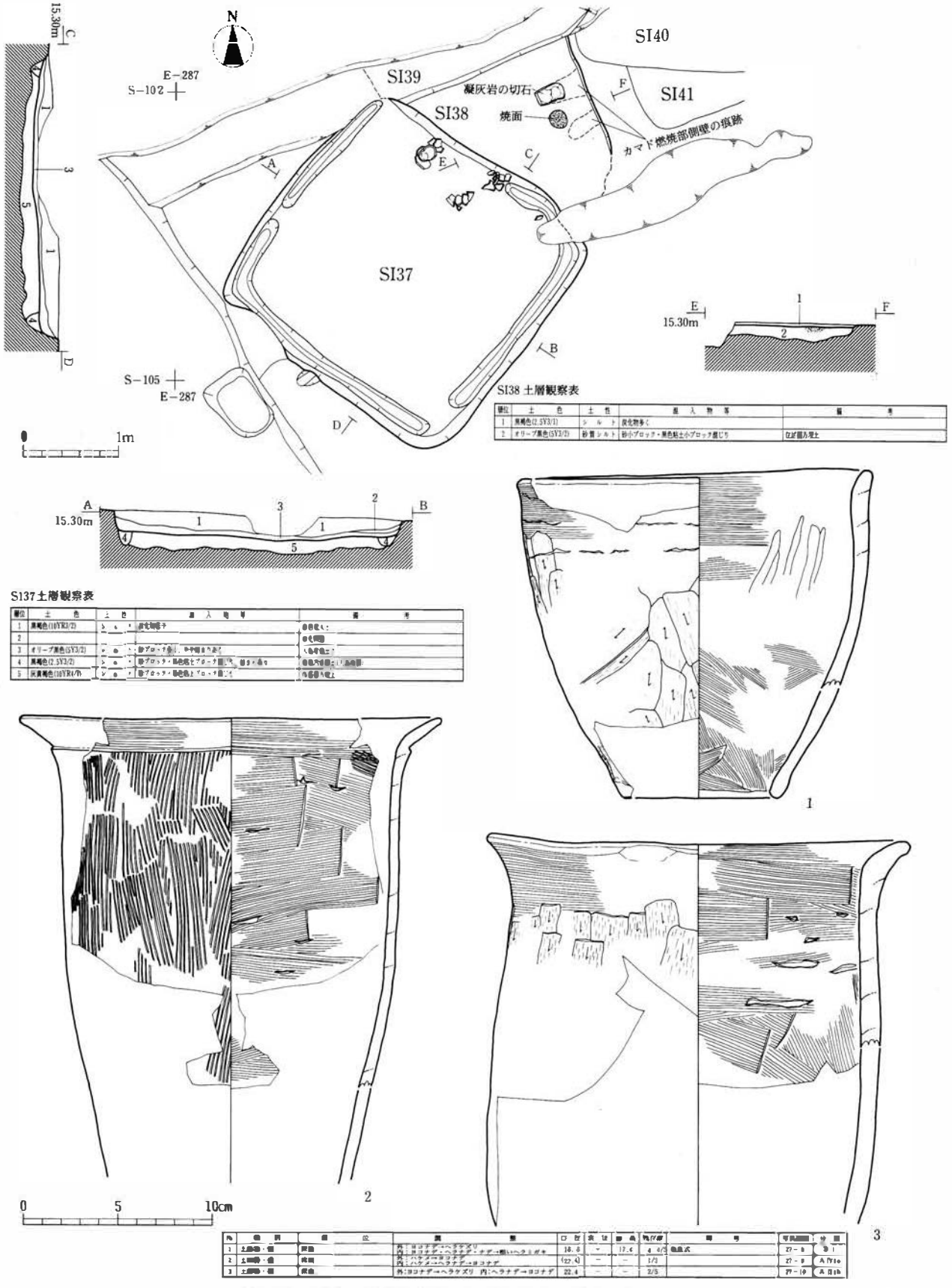
［平面形･規模］住居の大部分がSI37･39 住居跡と攪乱によって壊されているため全体の規模は不明であるが、東西1.8m 以上×南北1.7m 以上で方形を基調としていると考えられる。

［堆積土］炭化物を多く含む黒褐色土1 層のみである。

［壁］地山を壁としており、東壁が高さ3 cm程残るのみである。

［床］掘方埋土を床としており、床面にはやや凹凸がある。

［カマド］東辺に付設されており、燃焼部側壁の痕跡と焼け面が残る。左側壁の焚き口部には凝灰岩の切石が残存している。焼け面は直径20cmの円形を呈し、平坦である。



第55図　SI37・38 住居跡および SI37 住居跡出土遺物

［出土遺物］床面直上から土師器の小破片が若干出土したのみである。

【SI39 住居跡】（第56図）

［位置・確認面］II区の東寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

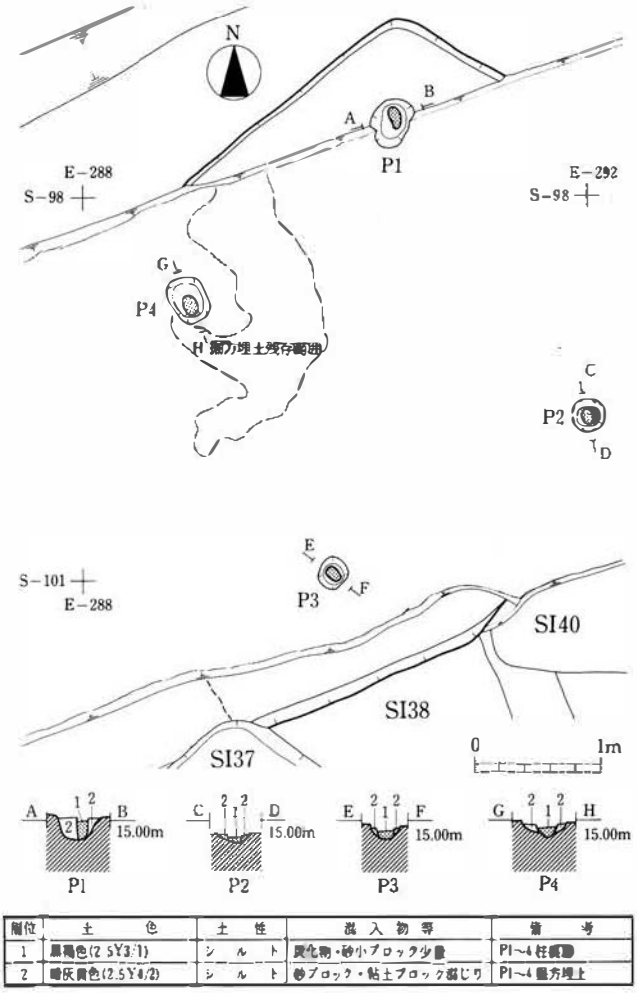
［重複］SI37・38住居跡と重複しており、前者よりも古く、後者よりも新しい。また、SI40住居跡とも重複しているとみられるが、重複部分が攪乱によって壊されて、その前後関係は不明である。

［平面形・規模］住居の大部分が攪乱によって壊されて、北東・南西部が残るのみである。このため全体の規模は不明であるが、東西4.8m以上×南北4.1m以上で方形を基調としていると考えられる。

［堆積土］砂の小ブロックと炭化物を含む黒褐色土1層のみである。

［壁］基本的に地山を壁としているが、SI38住居跡と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面から住居外側へ若干開き気味に立ち上がり、高さ15cm程で残る。

［床］掘方埋土を床としており、床面にはやや凹凸がある。掘方埋土は砂のブロックを多量に含む褐灰色土で、締まりが強い。



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物・砂小ブロック少量	P1〜4柱痕跡
2	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	P1〜4掘方埋土

第56図　SI39住居跡

［柱穴］4個（P1〜4）検出された。P1は床面で、P2〜4は攪乱を除去した段階で確認されているが、これら4個の柱穴は住居平面形の対角線上に位置するものとみられ、SI39住居跡に伴う主柱穴の可能性が強い。いずれの柱穴にも15cm×10cmの隅丸長方形の柱痕跡が認められ、掘方の平面形は一辺または長辺が25〜40cm程の隅丸正方形もしくは長方形を呈し、深さ10〜20cmである。

［出土遺物］床面直上から内面にヘラミガキ・黒色処理が施された土師器坏の小破片が1点出土したのみである。

【SI40住居跡】（第57図）

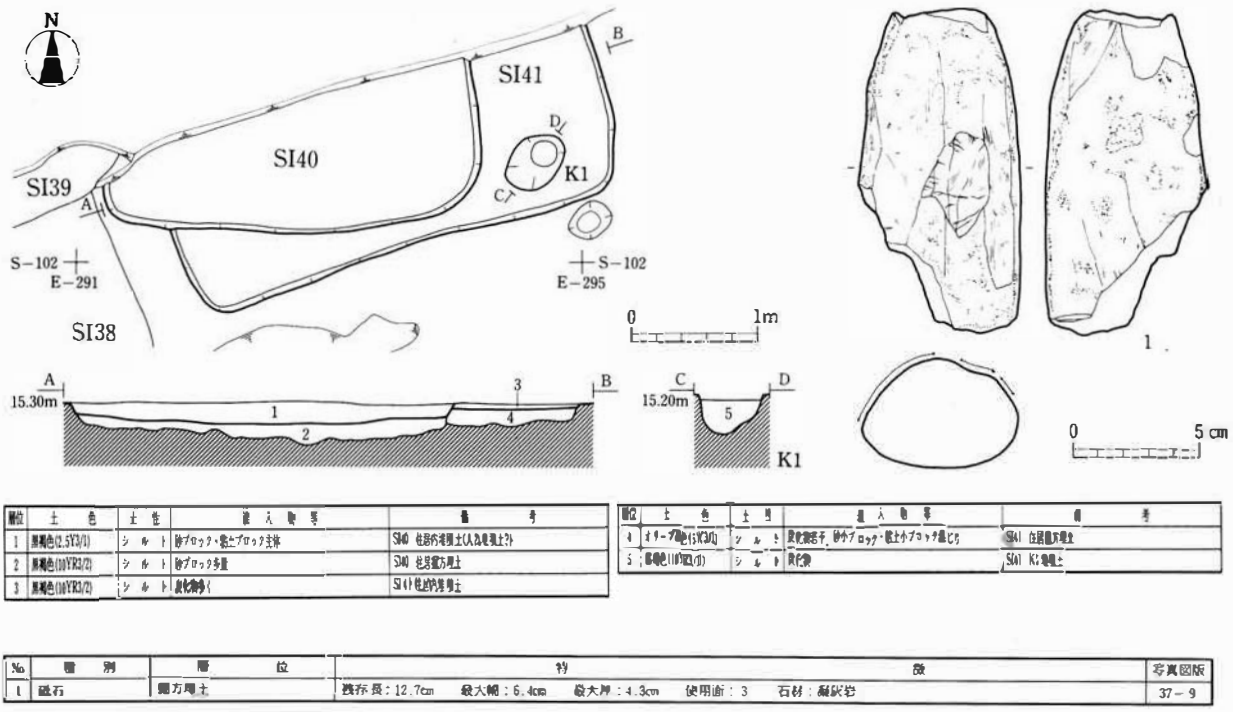
［位置・確認面］II区の東寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

［方向］住居の方向は、N−7°−Wである。

［重複］SI41住居跡と重複しており、これよりも新しい。また、SI39住居跡とも重複しているとみられるが、その前後関係は不明である。

［平面形・規模］住居の北半以上が攪乱によって壊されているため全体の規模は不明であるが、東西2.9m×南北1.1m以上で方形を基調とする。

［堆積土］砂と粘土のブロックを主体とした黒褐色土1層のみで、人為堆積と考えられる。



層位	土色	土性	遺入物等	備考
1	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	砂ブロック・焼土ブロック主体	SI40 住居内堆積土(人為堆積土?)
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	砂ブロック多量	SI40 住居覆土埋土
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物多く	SI41 住居内堆積土

層位	土色	土性	遺入物等	備考
4	オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト	炭化物粒子、砂ブロック・焼土小ブロック混じり	SI41 住居覆土埋土
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物	SI41 K1 埋土

No.	種別	層位	特徴	写真図版
1	砥石	掘方埋土	残存長：12.7cm　最大幅：6.4cm　最大厚：4.3cm　使用面：3　石材：凝灰岩	37−9

第57図　SI40・41 住居跡および SI41 住居跡出土遺物

[壁] SI41 住居跡と重複する部分ではその埋土を、他では地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁は高さ10cm程で残る。

[床] 掘方埋土を床としており、中央部がやや窪んでいる。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

【SI41 住居跡】(第57図)

[位置・確認面] II区の東寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

[方向] 住居の方向は、N−16°−W である。

[重複] SI40 住居跡と重複しており、これよりも古い。

[平面形・規模] 住居の大部分が SI40 住居跡と攪乱によって壊されているため全体の規模は不明であるが、東西3.5m×南北1.3m 以上で方形を基調とする。

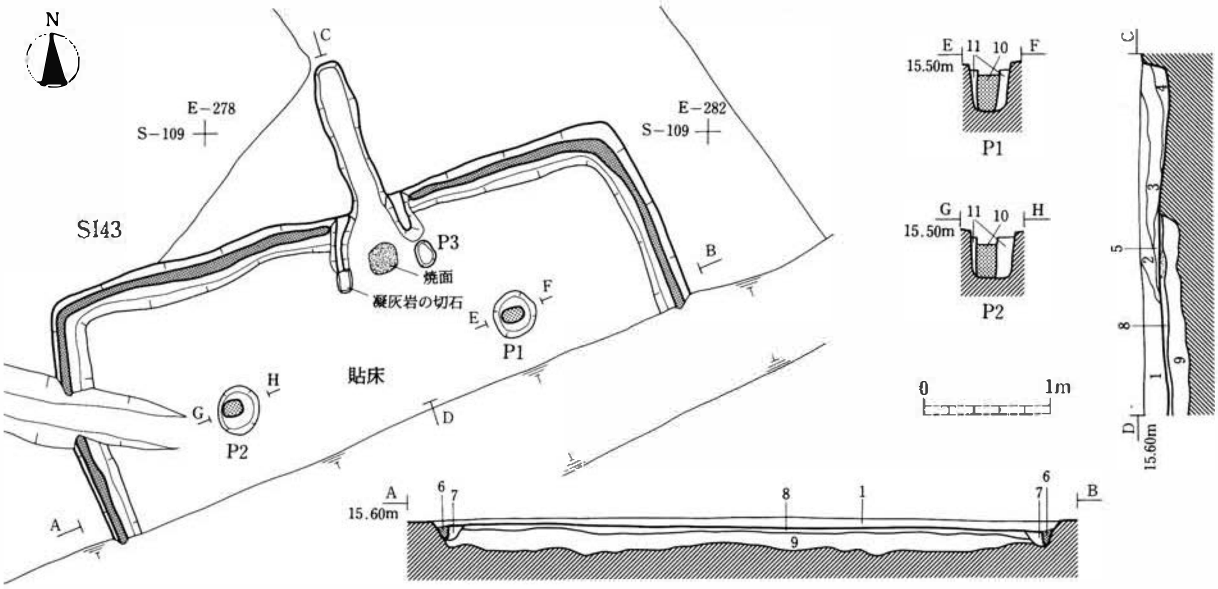
[堆積土] 炭化物を多く含む黒褐色土 1 層のみである。

[壁] 地山を壁としており、高さ 5 cm程残る。

[床] 掘方埋土を床としており、ほぼ平坦である。

[貯蔵穴状ピット] 住居南東隅の床面で検出された(K1)。平面形は50cm×35cmのやや不整な楕円形を呈し、深さは30cmである。堆積土は炭化物を含む黒褐色土 1 層である。

[出土遺物] 住居掘方埋土中から砥石 (第57図 1) と土師器甕の体部破片、須恵器の小破片数点が出土している。



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物	自然流入土
2	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	下部が焼けて赤変	カマド煙道～燃焼部崩壊土
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物	カマド煙道～燃焼部内堆積土
4				カマド燃焼部内堆積土(炭化物層、機能時の堆積)
5			焼土ブロック	カマド燃焼部内堆積土(灰層、機能時の堆積)
6	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物少量	壁材の痕跡

層位	土色	土性	混入物等	備考
7	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	砂ブロック・粘土ブロック、締まりあり	周溝埋土
8	黒褐色(10YR3/1)	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり、締まり強い	貼床
9	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	砂ブロック多量、黒色粘土ブロック	住居掘方埋土
10	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト		P1・2柱痕跡
11	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	砂ブロック・黒色粘土大ブロック	P1・2掘方埋土

第58図　SI42 住居跡

【SI42 住居跡】(第58図)

［位置・確認面］ II区のやや東寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

［方向］ 住居の方向は、N−20°−W である。

［重複］ SI43 住居跡と重複しており、これよりも新しい。

［平面形・規模］住居の南半以上が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、東西4.9m×南北1.9m以上で方形を基調とする。

［堆積土］ 5層認められ、1層は自然流入土である。2層はカマドの煙道から燃焼部にかけての崩壊土で、3～5層はその内部に堆積している。この内4・5層はそれぞれ炭化物・灰層で、カマド機能時の堆積と考えられる。

［壁］基本的に地山を壁としているが、SI43 住居跡と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面から住居外側へ若干開き気味に立ち上がり、壁高は残りの良い北壁で床面から15cmある。

［床］調査区内ではほぼ全面貼床されている。床面にはやや凹凸があり、南東方向へ若干傾斜している。

［柱穴］ 床面で2個（P1・2）検出された。P1・2は住居の北壁から1.2m 程内側の平行線上に位置しており、柱痕跡が認められる。掘方の平面形は直径が約35cmのやや不整な円形を呈し、深さは35cmである。柱痕跡は20cm×10cmの隅丸長方形を呈する。このP1・2は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］ 調査区内では壁の直下を巡っており、カマド下部で途切れる。上幅15～25cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂と黒色粘土のブロックを含み、締

まりのある黒褐色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内には壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅５～10cm、深さ10cm前後の締まりのない黒褐色土が堆積している。

［カマド］北辺中央やや東寄りに付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は黄灰色のシルトを積み上げて構築されており、その左焚き口部には凝灰岩の切石が残る。右側壁の焚き口部には20cm×10cmの隅丸長方形を呈し、深さ４cmの小ピット（P3）が認められ、取り払われているものの、同様に凝灰岩の切石が据えられていた可能性が強い。燃焼部底面はほぼ平坦で、中央部が強く焼けて赤変している。煙道は先端に向かって下やや向きに傾斜しており、長さ1.2mである。

［出土遺物］堆積土中から土師器の小破片が少量出土している。

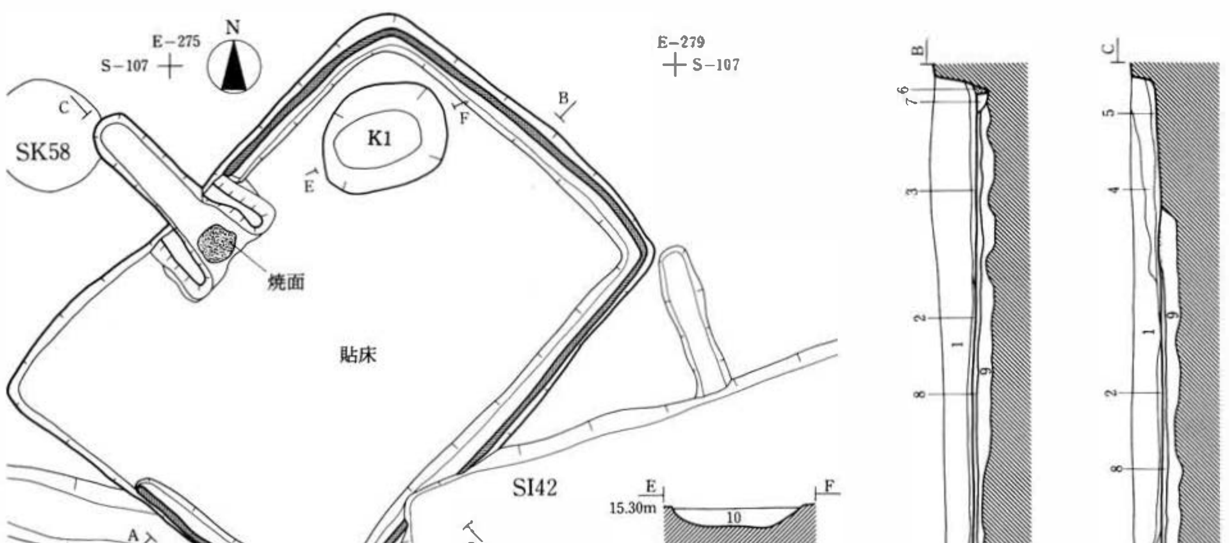
【SI43住居跡】（第59図）

［位置・確認面］II区のやや東寄りで検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

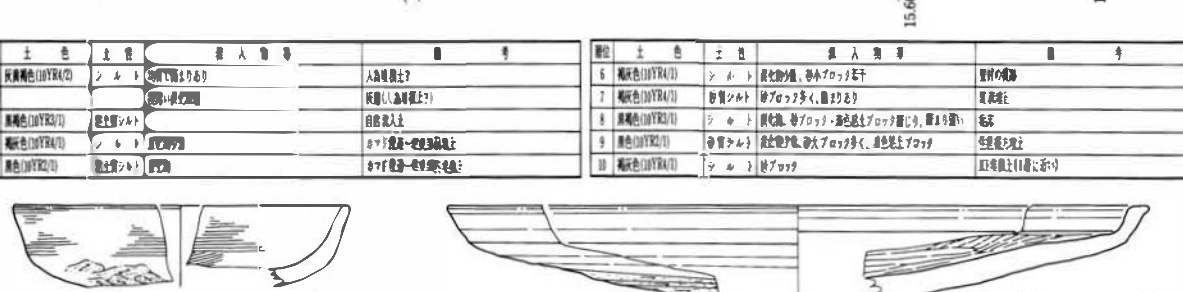
［方向］住居の方向は、N－50°－Wである。

［重複］SI42住居跡、SK58土壙と重複しており、前者よりも古く、後者よりも新しい。

［平面形・規模］SI42住居跡によって南辺の一部が壊されているものの、東西4.2m×南北3.1mの長



層位	土色	土質	混入物等	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	[illegible]	人為堆積土?
2			[illegible]	[illegible]
3	黒褐色(10YR3/1)	[illegible]シルト		自然流入土
4	褐灰色(10YR4/1)	シルト	[illegible]	カマド[illegible]
5	黒色(10YR2/1)	[illegible]シルト	[illegible]	カマド[illegible]
6	褐灰色(10YR4/1)	シルト	[illegible]、[illegible]ブロック若干	壁材の痕跡
7	褐灰色(10YR4/1)	[illegible]シルト	[illegible]ブロック多く、締まりあり	[illegible]
8	黒褐色(10YR3/1)	シルト	[illegible]ブロック・[illegible]ブロック[illegible]	[illegible]
9	黒色(10YR2/1)	[illegible]シルト	[illegible]ブロック多く、[illegible]ブロック	[illegible]
10	褐灰色(10YR4/1)	シルト	[illegible]ブロック	[illegible]



No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	[illegible]	外:ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内:ナデ・ヨコナデ	(13.4)	−	−	1/5			BⅠYb
2	[illegible]・[illegible]	[illegible]土	外:ロクロナデ→回転ヘラケズリ 内:ロクロナデ→ナデ	(27.8)	−	−	1/8	高盤?		

第59図　SI43住居跡および出土遺物

方形を呈する。

［堆積土］5層認められる。1層は均質で締まりのある灰黄褐色土、2層は極薄い炭化物層を含む灰層で、いずれも人為堆積と考えられる。3層は自然流入土とみられる。4層はカマドの煙道から燃焼部にかけての崩壊土で、5層はそのカマド内堆積土である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りの良い東壁で床面から35cmある。

［床］カマド部分を除くほぼ全面が貼床されている。床面にはやや凹凸があり、西半が若干高くなっている。

［周溝］北辺のカマド東脇から西辺の中央にかけて壁の直下を巡る。上幅10～25cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある褐灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内には壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅約5cm、深さ10cm前後の締まりのない褐灰色土が堆積している。

［カマド］北辺ほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は黒褐色のシルトを積み上げて構築されている。燃焼部底面は中央部が若干盛り上がり、強く焼けて赤変している。煙道はほぼ水平に延び、長さ1.0mである。

［貯蔵穴状ピット］カマド右脇にあたる住居北東隅の床面で検出された（K1）。平面形は100cm×80cmの不整形を呈し、深さは20cmである。堆積土は砂のブロックを含む褐灰色土で、住居堆積土の1層に近い。

［出土遺物］床面から土師器坏（第59図1）と土師器高坏・甕の破片が出土している。高坏は坏部の内面がヘラミガキ・黒色処理されており、甕には球胴形のものも認められる。また、堆積土中からは須恵器盤（第59図2）が出土している。

【SI44住居跡】（第60・61図）

［位置・確認面］II区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－41°－Wである。

［平面形・規模］住居の北東部が調査区外に及んでいるものの、東西5.0m×南北5.0mの正方形を呈する。

［堆積土］8層認められ、1・2層は自然流入土である。3・5層は砂のブロックを多く含む黒褐色土、4層はその間に入る炭化物層で、植物の繊維質が自然炭化したものとみられる。いずれの層も人為堆積の可能性がある。6層は住居壁の崩落土である。7・8層は東辺のカマドの煙道上部を崩して埋め戻した土とその煙道内堆積土である。

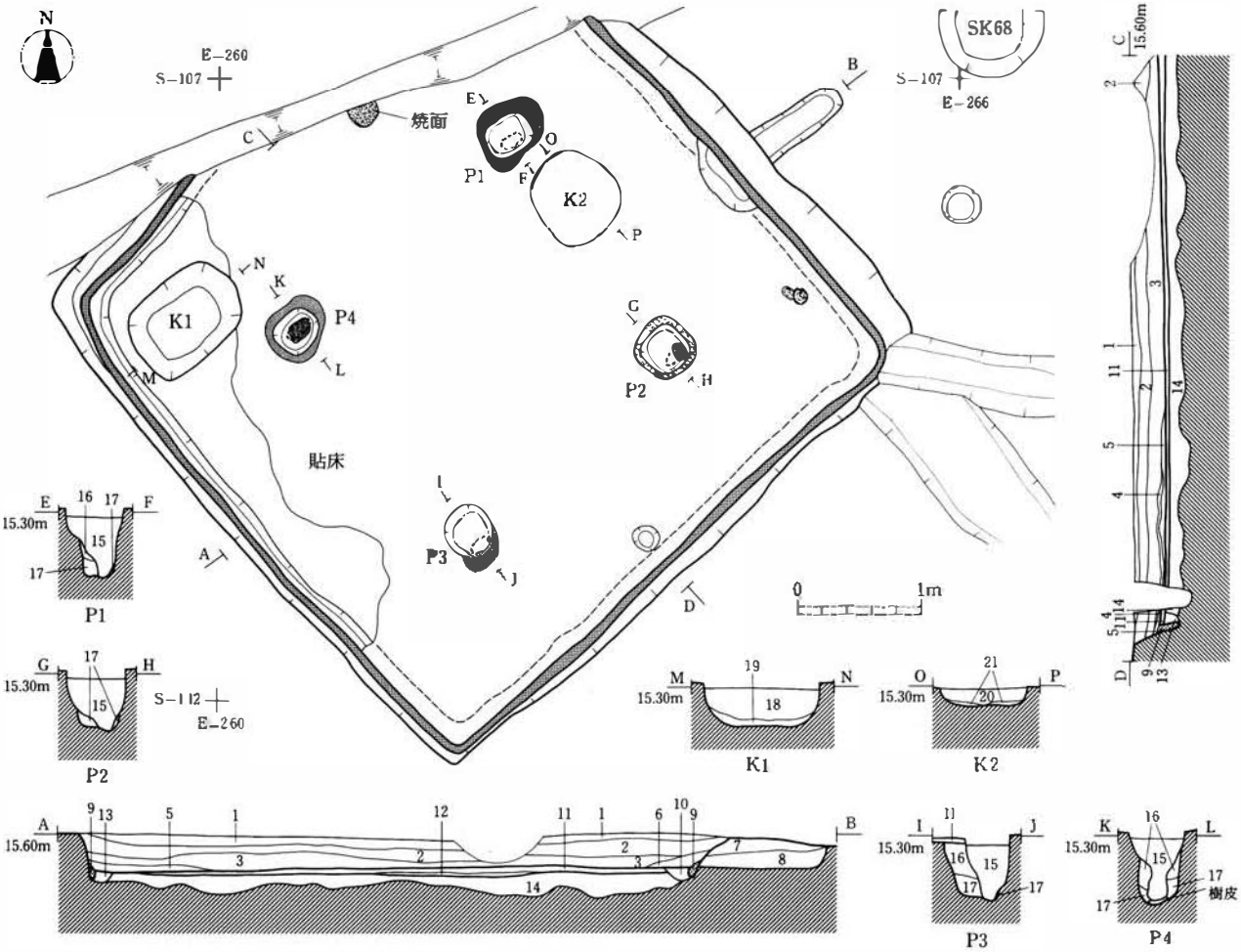
［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。なお、東壁は大きく崩れている。壁高は残りの良い西壁で床面から30cmある。

［床］住居北西部を除き貼床されている。貼床の下部には生活層とみられる炭化物や砂粒を含む薄い黒褐色土層（断面図の12層）が認められることから、住居構築時には掘方埋土を床としていたと考え

られる。なお、貼床はカマド改築時に行われた可能性もある。床面には若干凹凸がある。

［柱穴］床面で4個（P1～4）検出された。P1～4は住居平面形の対角線上に位置しており、柱抜き取り痕が認められる。掘方の平面形は一辺または長辺が35～40cmの隅丸正方形もしくは長方形を呈し、深さ50～60cmである。全ての柱穴底面では20cm×10cmの隅丸長方形を呈する柱押圧痕が確認されており、P2・4には柱の沈下を防ぐために敷かれたと推測される樹皮も残る。このP1～4は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

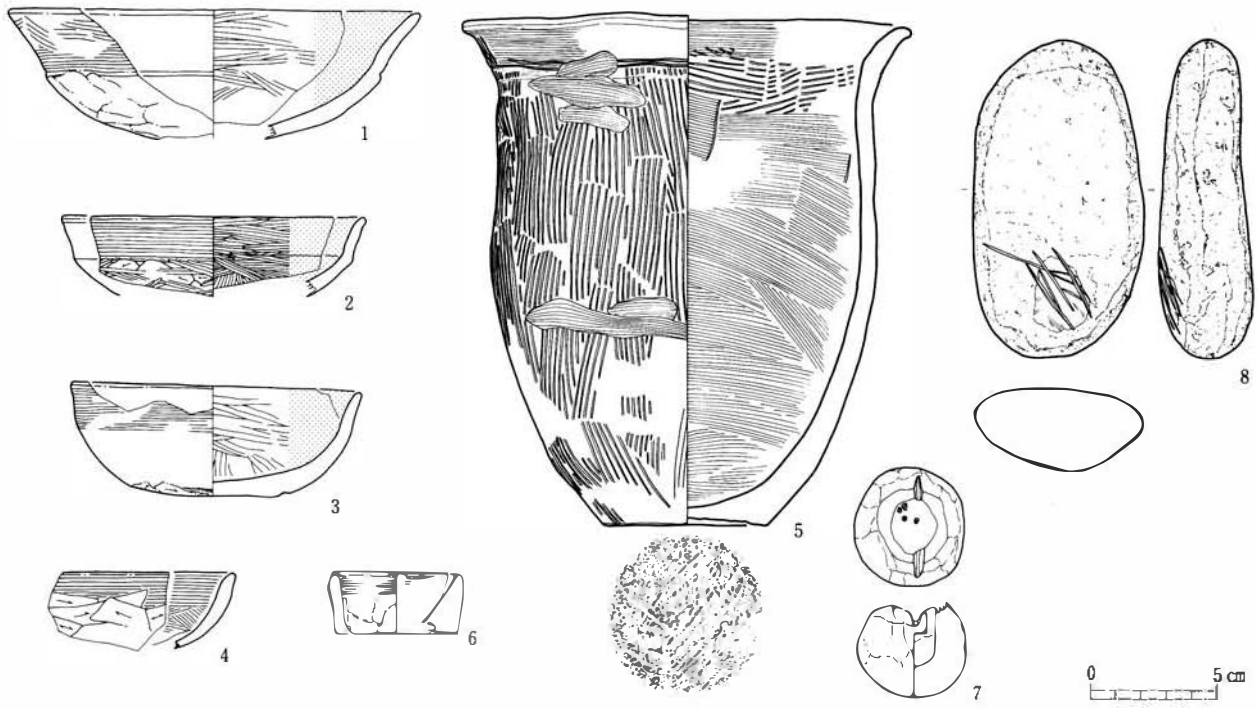
［周溝］調査区内では壁の直下を全周している。上幅15～20cm、深さ10～15cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含み、締まりのある黄灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。なお、東辺のカマド部分では周溝が掘り直されて、上幅25cmとやや幅広になっており、埋土は砂と黒色粘土のブロックが混じる黒褐色土である。周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えら



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	黄化物少量	自然流入土
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	黄化物少量	自然流入土
3	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	黄化物・砂ブロック多く	人為堆積土?
4				炭化物(植物)の繊維質が自然炭化?]
5	黒褐色(10YR2/2)	砂質シルト	砂ブロック多く	人為堆積土?
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	粘土・黄化物少量	柱足壁面落土
7	灰黒褐色(10YR4/2)	シルト	下部が掘りて赤変	カマド焼過堆土
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土大ブロック・炭化物	カマド堆過内堆積土(構築時の堆積)
9	黒褐色(5Y3/1)	粘土質シルト		壁材灰痕跡
10	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物、砂小ブロック・黒色粘土小ブロック混じり、締まりあり	周溝埋土
11	黒褐色(10YR2/2)	砂質シルト	炭化物、砂ブロック多く、締まり強い	貼床

層位	土色	土性	混入物等	備考
12	黒褐色(10YR3/1)	砂質シルト	黄化物・砂粒	炭焼以前の生活層
13	黒灰色(5Y4/1)	砂質シルト	炭化物少量、砂ブロック多く、締まりあり	貼床埋土
14	黄灰色(2.5Y4/3)	砂質シルト	砂ブロック多く、黒色粘土ブロック	住居壁方埋土
15	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	炭化物・砂ブロック・黒色粘土ブロック、白色粘土ブロック	P1～4柱抜き取り痕
16	黄灰色(2.5Y4/3)	粘土質シルト	炭化物若干、黒色粘土ブロック・白色粘土ブロック多く	P1・3・4壁方埋土
17	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質シルト	炭化物若干、黒色粘土ブロック主体	P1～4壁方埋土
18	黒褐色(2.5Y2/2)	シルト	炭化物、砂ブロック多く、黒色粘土小ブロック少量	K1堆積土(1層とは同一)
19	黒色(2.5Y2/1)	シルト	炭化物多く、黒色粘土小ブロック若干	K1堆積土
20	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	炭化物少量、黒褐色粘土大ブロック・黒色粘土ブロック多く	K2堆積土(人為堆積)
21	黄灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物少量	K2堆積土(構築時の堆積)

第60図　SI44 住居跡



No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	堆積土	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ?一部分的なヘラミガキ 内：ヘラミガキ・黒色処理	(18.4)	—	(5.1)	1/4		28－1	A Ⅱa
2	土師器・坏	堆積土	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ一部分的なヘラミガキ 内：ヘラミガキ・黒色処理	(12.0)	—	—	1/6			A Ⅱb
3	土師器・坏	床面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ・黒色処理	(11.5)	—	4.4	4/5		28－2	A 1V2b
4	土師器・坏	床面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	—	—	—	一部			B Ⅳb
5	土師器・甕	K1堆積土	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ 最末端ハケメ	17.8	6.4	20.0	完形	胴部外面に沈線2本	28－4	A Ⅱ3a
6	ミニチュア土器	床面	外：ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	(5.1)	4.8	2.4	1/4			A
No.	種別	層位	特徴							写真図版
7	不明土製品	K1堆積土	外：オサエ・ナデ 内：ナデ、穿突4	溝行り(2箇所)						36－8
8	砥石	床配	最大長：12.5cm	最大幅：6.8cm	最大厚：3.7cm	使用面：1	石材：安山岩			37－10

第61図　SI44 住居跡出土遺物

れる幅5～10cm、深さ10～15cmの黒褐色の堆積土が認められる。

［カマド］東辺中央やや南寄りで検出された。燃焼部が除去されており、煙道が残るのみである。長さ1.0mの煙道はほぼ水平に延び、上部が意識的に崩されて埋め戻されていたと考えられる。また、北辺中央やや東寄りの壁際では直径25cmの不整な円形を呈する焼け面が検出されており、周辺にはカマド燃焼部の崩壊土とみられる焼土や粘土のブロックと薄い炭化物層が残存している。よって、調査区側溝によって壊されているが、この位置にもカマドが付設されおり、状況から東辺のカマドよりも新しいと考えられる。

［貯蔵穴状ピット］2個（K1・2）検出された。K1は北西隅の床面に位置しており、平面形が95cm×70cmの隅丸長方形で、深さは35cmある。堆積土は2層認められ、上層は住居堆積土3層とほぼ同一の黒褐色土、下層は炭化物を多く含む黒色土である。また、東辺カマドの左脇に位置するK2は貼床を除去した段階で確認されており、平面形は75cm×65cmのやや不整な隅丸長方形を呈し、深さ15cmである。堆積土は2層認められ、上層は粘土ブロックを多く含む黒褐色土で、人為的に埋め戻されている。下層は炭化物を多量に含む褐灰色土で、機能時の堆積と考えられる。

［出土遺物］床面やK1堆積土中から土師器坏（第61図3・4）・甕（第61図5）、ミニチュア土器（第61図6）、不明土製品（第61図7）、砥石（第61図8）が出土している。この他にも床面からは内面がヘラミガキ・黒色処理された土師器坏や長胴形の土師器甕の破片が多く出土している。甕の体部外面

の調整はハケメが主体である。また、堆積土中からは土師器坏（第61図１・２）が出土している。

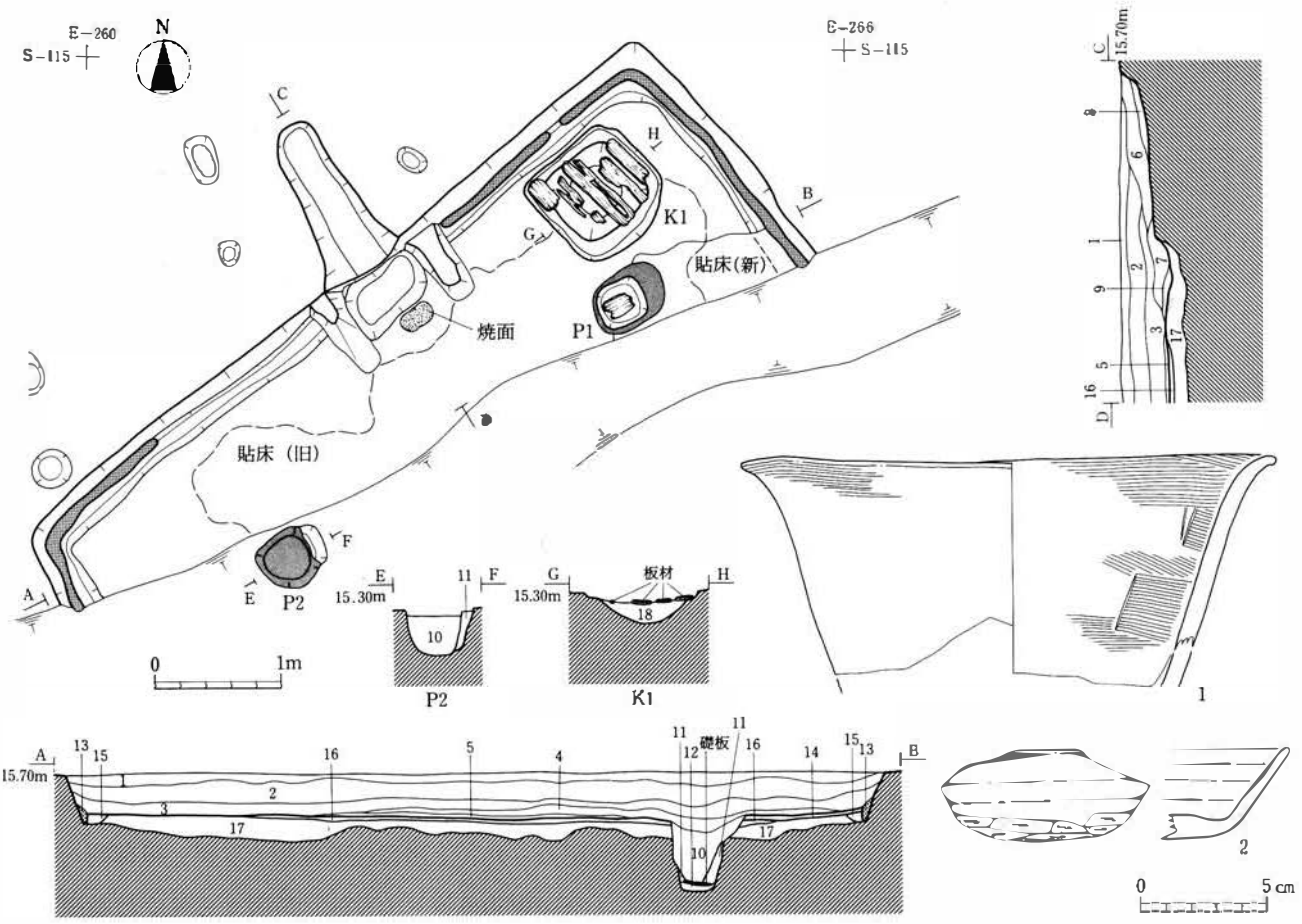
【SI45 住居跡】（第62図）

［位置・確認面］ II区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、緩やかに東側へ傾斜している。

［方向］ 住居の方向は、N－42°－Wである。

［平面形・規模］ 住居の南半以上が調査区外に及ぶことから全体の規模は不明であるが、東西6.2m×南北2.2m 以上で方形を基調とする。

［堆積土］ 9層認められ、1～3層は自然流入土である。4層は砂と黒色粘土のブロック混じりの層で、人為堆積と考えられる。5層は床面に堆積した薄い炭化物層である。6・7層はカマドの煙道・燃焼部の崩壊土で、8・9層はその内部に堆積している。この内9層は灰層で、カマド機能時の堆積と考えられる。



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物	自然流入土
2	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	炭化物	自然流入土
3	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物少量	自然流入土
4	灰色(5Y5/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	人為堆積土？
5				薄い炭化物層
6	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	焼土・炭化物少量、砂ブロック	カマド煙道と燃焼部土
7	にぶい褐色(7.5YR6/3)	粘土質シルト	炭化物少量、焼土大ブロック・黒褐色粘土大ブロック混じり	カマド煙道壁面焼土
8	黒褐色(5YR3/1)	シルト	焼土少量、炭化物多く	カマド煙道内堆積土
9			焼土・炭化物少量	カマド燃焼部の堆積土(灰層、焼焼部の堆積)

層位	土色	土性	混入物等	備考
10	灰色(N6)	シルト	炭化物、砂ブロック・粘土ブロック混じり	P1・2 柱盗を取り損
11	黒褐灰色(7.5GY4/1)	砂質シルト	砂大ブロック・黒色粘土大ブロック混じり	P1・2 個方埋土
12	暗灰色(7.5GY5/1)	砂		P1 堆方埋土
13	黒色(7.5YR2/1)	粘土質シルト	炭化物少量	焼土の崩壊
14	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質シルト	炭化物少量、黒褐色粘土大ブロック多量、焼まり薄い	粘床
15	オリーブ黒色(10Y3/1)	シルト	炭化物少量、砂ブロック・黒色粘土ブロック多く、焼まりあり	焼面焼土
16	灰色(5Y4/1)	砂質シルト	炭化物若干、砂ブロック主体、黒褐色粘土ブロック少量	粘床
17	緑灰色(7.5GY5/1)	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	住居跡方埋土
18	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物	K1 堆積土(3層に近い)

No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・鍋	カマド燃焼部崩壊土	外：ヨコナデ　内：ヘラナデ→ヨコナデ	(21.1)	－	－	1/2	受熱による内外面の剥落著しい		A
2	須恵器・坏	堆積土	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内：ロクロナデ	－	－	3.6	1/6			

第62図　SI45 住居跡および出土遺物

［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は最も残りの良い北西隅で床面から35cmある。

［床］調査区内では大部分が貼床されており、壁際は掘方埋土を床としている。床面にはやや凹凸があり、壁際が若干高くなっている。なお、貼床が2枚認められることから、床面が1回補修されていることがわかる。

［柱穴］2個（P1･2）検出された。P1は床面、P2は調査区側溝の底面で確認されているが、これら2個の柱穴は住居の北壁から1.4m程内側の平行線上に位置しており、SI45住居跡に伴う主柱穴と考えられる。いずれの柱穴にも柱抜き取り痕が認められ、掘方の平面形は一辺が40cm程の隅丸正方形を呈し、深さ約60cmである。なお、P1の掘方底面近くには厚さ2cmの礎板が残る。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っており、カマド下部で途切れる。上幅15～25cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂と黒色粘土のブロックを多く含み、締まりのあるオリーブ黒色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅5～10cm、深さ10cm前後の黒色の堆積土が断続的に認められる。

［カマド］北辺中央やや東寄りに付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は褐灰色シルトを5cm程の厚さで住居の壁から床にかけ「L」字状に貼り付け、その上に黄褐色粘土主体の土を積み上げるかたちで構築されている。燃焼部底面は奥壁寄りが浅く窪み、中央やや焚き口寄りが強く焼けて赤変している。底面と煙道の間には5cmの段がつく。煙道は先端に向かってやや上向きに傾斜しており、長さ1.3mである。

［貯蔵穴状ピット］住居北東隅の床面で検出された（K1）。平面形は一辺が70cmの隅丸正方形を呈し、深さは20cmある。堆積土は締まりのない黒褐色土で、住居堆積土の3層に近い。このK1の上には長さ85cm×幅15cm×厚さ2cm程度の大きさの板材5枚が並べられており（残存状態は悪い）、蓋として利用されていたと考えられる。また、板材の据え方も認められ、その平面形は一辺が95cmの正方形を呈し、深さは4cmである。

［出土遺物］カマド燃焼部崩壊土中から土師器甑（第62図1）が出土している他、床面や床面直上、カマド燃焼部内から土師器坏・高坏・甕の破片が出土している。坏には内面がヘラミガキ・黒色処理されているものとナデ調整のものがある。高坏は脚部の破片で、甕は体部外面の調整がハケメもしくはヘラケズリである。また、堆積土中からは須恵器坏（第62図2）が出土している。

【SI47住居跡】（第63図）

［位置・確認面］II区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、ほぼ平坦である。

［方向］住居の方向は、N－40°－Wである。

［平面形・規模］攪乱によって一部壊されているものの、東西2.7m×南北2.7mの正方形を呈する。

［堆積土］7層認められ、1・2層は自然流入土である。3・4層はカマドの煙道・燃焼部の崩壊土で、5～7層はその内部に堆積している。この内6・7層はそれぞれ灰・炭化物層で、カマド機能時の堆積と考えられる。

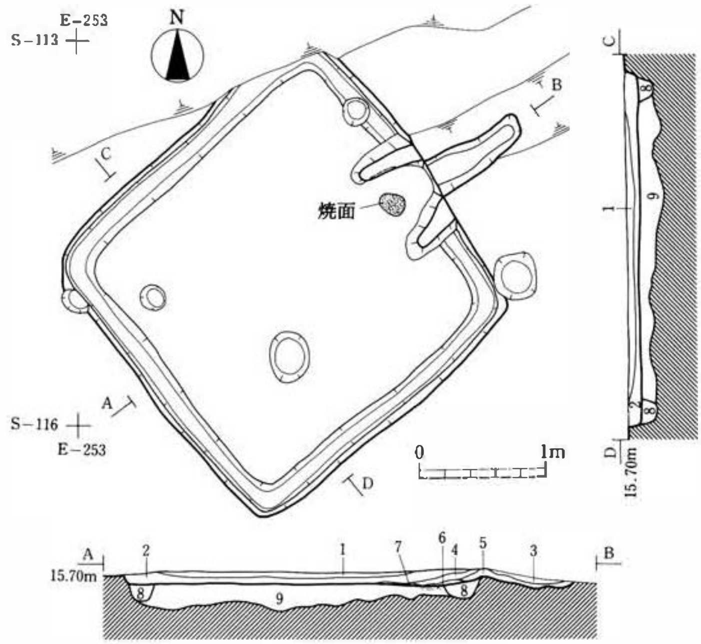
［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へ若干開き気味に立ち上がる。壁は高さ10cm程で残る。

［床］掘方埋土を床としている。床面にはやや凹凸があり、南側へ僅かに傾斜している。

［周溝］壁の直下を全周している。上幅15〜20cm、深さ10cm前後で、断面は「U」字状を呈する。堆積土は砂と黒色粘土のブロックが混じる黒褐色土で、締まりもあることから人為堆積と考えられる。

［カマド］東辺ほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は灰色のシルトを積み上げて構築されている。燃焼部底面は中央部が若干窪み、強く焼けて赤変している。底面と煙道の間には3cmの段がつく。煙道は先端に向かって下向きに傾斜しており、長さ80cmである。

［出土遺物］床面やカマド燃焼部内から内面にヘラミガキ・黒色処理が施された土師器坏や土師器甕の破片が数点出土している。



層位	土色	土質	混入物	備考
1	黒褐色(2.5Y3/1)	[illegible]	[illegible]	自然流入土
2	黒褐色(10YR3/2)	[illegible]	[illegible]	自然流入土
3	暗褐色(10YR3/3)	[illegible]	下位に焼土ブロック	カマド煙道上部崩落土
4	オリーブ黒色(5Y3/2)	[illegible]	焼土ブロック	カマド燃焼部崩壊土
5	極暗褐色(7.5YR2/3)	[illegible]	[illegible]	カマド煙道〜燃焼部内堆積土
6			焼土小ブロック若干	カマド燃焼部内堆積土(灰層、機能時の堆積)
7				カマド燃焼部内堆積土(炭化物層、機能時の堆積)
8	黒褐色(2.5Y3/2)	[illegible]	[illegible]	周溝内堆積土(人為堆積)
9	褐灰色(10YR4/1)	[illegible]	[illegible]	住居掘方埋土

第63図　SI47住居跡

【SI48住居跡】（第64図）

［位置・確認面］II区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、ほぼ平坦である。

［方向］住居の方向は、N−18°−Eである。

［重複］SI49住居跡と重複しており、これよりも新しい。

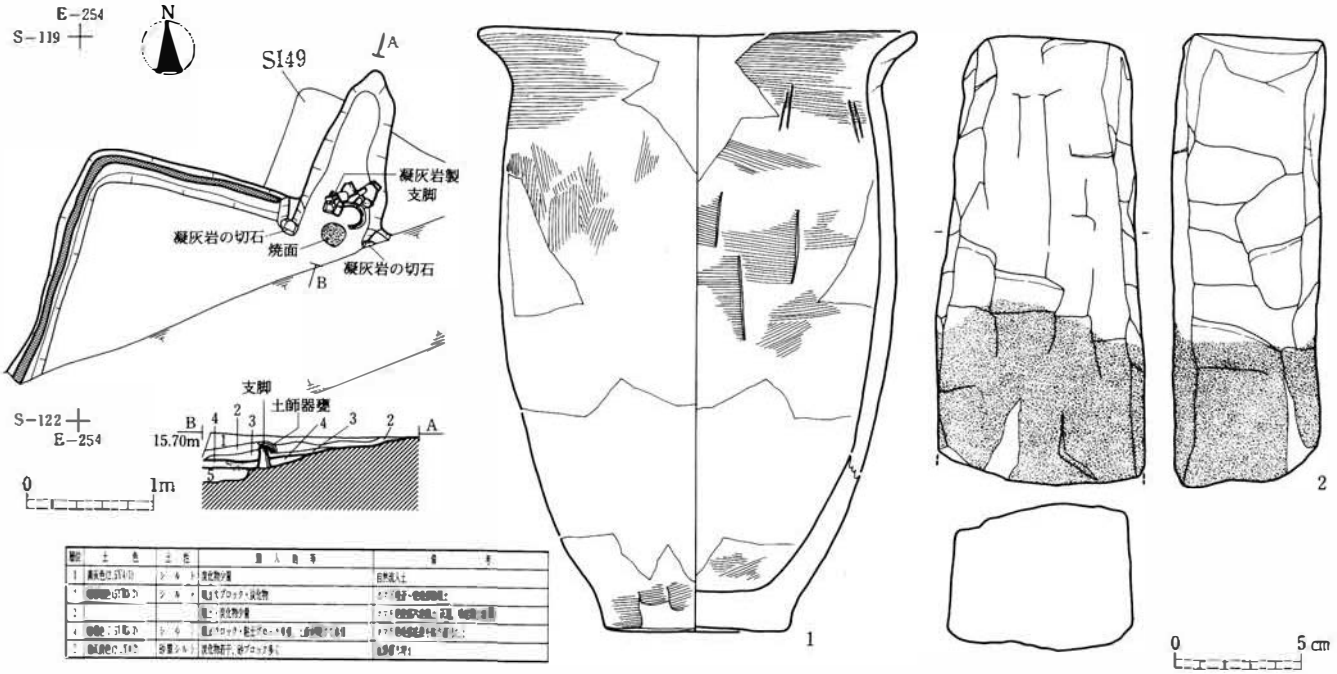
［平面形・規模］調査区内で確認されたのは住居北西部のみで、全体の規模は不明であるが、東西2.4m以上×南北1.9m以上で方形を基調とする。

［堆積土］4層認められ、1層は自然流入土である。2層はカマドの煙道から燃焼部にかけての崩壊土、3層はその内部に堆積した灰主体の層で、機能時の堆積とみられる。4層は焼土と粘土のブロックを多量に含む暗褐色土で、締まりが強く上面が焼けて赤変していることから、カマド燃焼部底面を貼り直した土と考えられる。

［壁］SI49住居跡と重複する部分ではその埋土を、他では地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁は高さ15cm程で残る。

［床］掘方埋土を床としており、床面にはやや凹凸がある。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っており、カマド下部で途切れる。上幅15〜20cm、深さ10cm前後



No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	現存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・甕	カマド燃焼部崩壊土	外：ヨコナデ・ナデ 内：ナデ・ヘラナデ→ヨコナデ 底：木葉痕	(17.4)	7.2	23.6	2/3		28－5	A 112c
No	種別	層位	特徴							写真図版
2	凝灰岩製支脚	カマド燃焼部支脚	残存長：17.5cm　最大幅：8.2cm　最大厚：5.8cm　スクリーントーン部分は焼けて赤変							

第64図　SI48住居跡および出土遺物

で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂と粘土のブロックを含み、締まりのある灰黄褐色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。また、周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅約5㎝、深さ10cm前後の褐灰色の堆積土が認められる。

［カマド］北辺に付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は黒褐色のシルトを積み上げて構築されており、その焚き口部には凝灰岩の切石が左右1個ずつ据えられている。燃焼部底面には機能面が2面認められ、いずれの面も焚き口側へ傾斜し、中央付近が強く焼けて赤変している。また、上面には下面の段階で据えられていた可能性もある凝灰岩製の支脚（第64図2）が残っており、その位置から燃焼部が住居壁をやや掘り込んで構築されていたことが窺われる。燃焼部から煙道へはそのまま至り、煙道は先端に向かって上向きに傾斜して、長さ90cm程である。

［出土遺物］カマド燃焼部の崩壊土中から土師器甕（第64図1）と長胴・球胴形の甕の破片がまとまって出土している。体部破片が多く、その外面にはハケメが認められる。

【SI49住居跡】（第65図）

［位置・確認面］II区の中央部で検出された。確認面は⑩層上面で、ほぼ平坦である。

［方向］住居の方向は、N−25°−Eである。

［重複］SI48住居跡と重複しており、これよりも古い。

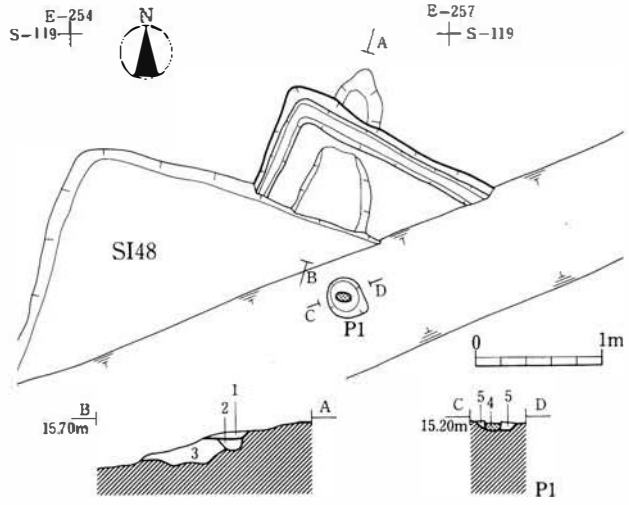
［平面形・規模］調査区内に掛かるのは住居北西部のみで、SI48住居跡によってその大部分が壊されている。全体の規模は不明であるが、東西1.7m以上×南北1.4m以上で方形を基調とする。

［堆積土］炭化物を含む暗灰黄色土１層のみである。

［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へやや開き気味に立ち上がる。壁は高さ10cm程で残る。

［床］掘方埋土を床としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］調査区側溝の底面で１個（P1）検出された。P1は住居の北西隅から1.5m程中央寄りに位置しており、柱痕跡が認められる。掘方の平面形は35cm×30cmの不整形を呈し、深さ8cmで残る。柱痕跡は15cm×10cmの隅丸長方形を呈する。この柱穴は、その位置からみてSI49住居跡に伴う主柱穴の可能性がある。



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	炭化物	
2	黄灰色(2.5Y5/1)	砂質シルト	炭化物少量、砂小ブロック多く、締まりあり	掘方内埋没土(人為堆積)
3	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	炭化物若干、砂ブロック多く	住居掘方埋土
4	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	炭化物	P1 住居跡
5	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	砂ブロック・粘土大ブロック混じり	P1 掘方埋土

第65図　SI49住居跡

［周溝］残存する壁の直下を巡る。上幅10～15cm、深さ10cm前後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は砂のブロックを多く含む黄灰色土で、締まりもあることから人為堆積と考えられる。

［出土遺物］堆積土中から土師器の小破片が少量出土したのみである。

【SI51住居跡】（第66図）

［位置・確認面］II区の西寄りで検出された。確認面は⑨層上面で、緩やかに南東方向へ傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－35°－Wである。

［重複］SI52住居跡と重複しており、これよりも新しい。

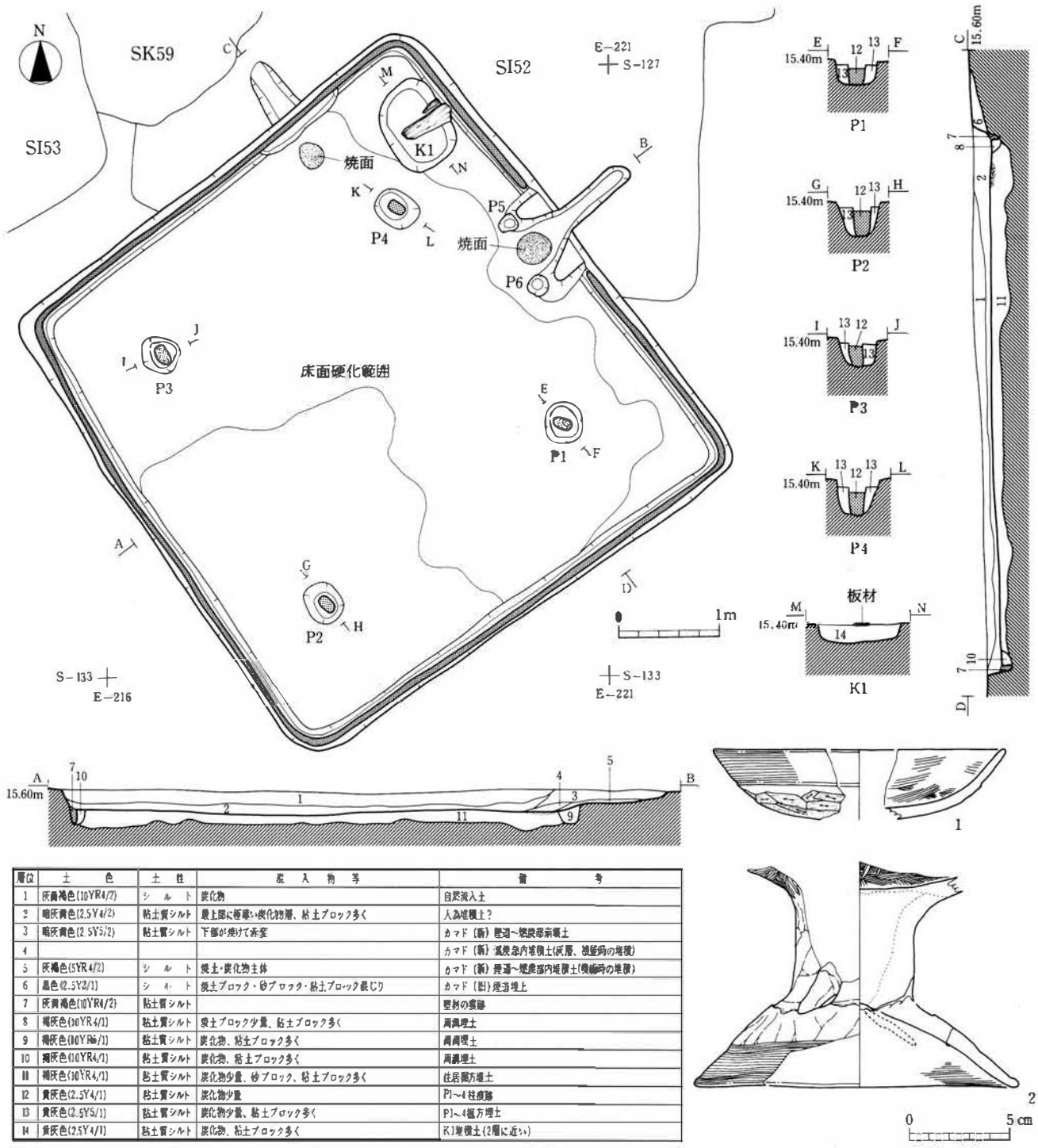
［平面形・規模］東西5.2m×南北5.4mの正方形を呈する。

［堆積土］６層認められ、１層は自然流入土である。２層は粘土ブロックを多く含む暗灰黄色土で、人為堆積の可能性がある。また、１・２層の間には極薄い炭化物層が認められる。３層は新しいカマドの煙道から燃焼部にかけての崩壊土、４・５層はその内部に堆積した灰層と焼土・炭化物層で、機能時の堆積とみられる。６層は古いカマドの煙道上部を崩して埋め戻した土と考えられる。

［壁］SI52住居跡と重複する部分ではその埋土を、他では地山を壁としており、床面から住居外側へ若干開き気味に立ち上がる。壁高は最も残りの良い北西隅で床面から25cmある。

［床］掘方埋土を床としている。床面には凹凸があり、南側へやや傾斜している。また、新旧のカマド周辺を中心に床面の硬化範囲が広がる。

［柱穴］床面で４個（P1～4）検出された。P1～4は住居平面形の対角線上に位置しており、全てに柱痕跡が認められる。掘方の平面形は一辺または長辺が35～40cmの隅丸正方形もしくは長方形を呈し、深さ25～35cmである。柱痕跡は20cm×10cmの隅丸長方形を呈する。このＰ１～４は、その位置・形状・



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	灰褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物	自然流入土
2	暗灰黄色(2.5Y4/2)	粘土質シルト	最上部に極細い炭化物層、粘土ブロック多く	人為堆積土?
3	暗灰黄色(2.5Y5/2)	粘土質シルト	下部が焼けて赤変	カマド(新)煙道~燃焼部崩壊土
4				カマド(新)燃焼部内堆積土(灰層、被熱時の堆積)
5	灰褐色(5YR4/2)	シルト	焼土・炭化物主体	カマド(新)煙道~燃焼部内堆積土(構築時の堆積)
6	黒色(2.5Y2/1)	シルト	焼土ブロック・砂ブロック・粘土ブロック混じり	カマド(旧)煙道埋土
7	灰褐色(10YR4/2)	粘土質シルト		壁材の痕跡
8	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	焼土ブロック少量、粘土ブロック多く	周溝埋土
9	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	炭化物、粘土ブロック多く	周溝埋土
10	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	炭化物、粘土ブロック多く	周溝埋土
11	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	炭化物少量、砂ブロック、粘土ブロック多く	住居関方埋土
12	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	炭化物少量	P1~4柱痕跡
13	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土質シルト	炭化物少量、粘土ブロック多く	P1~4掘方埋土
14	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	炭化物、粘土ブロック多く	K1堆積土(2層に近い)

No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分割
1	土師器・坏	底面	外:ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内:ヘラミガキ	(14.6)	-	-	1/4	黒色処理黒色?		A II b
2	土師器・高坏	底面	外:細いナデ→ヨコナデ・ヘラミガキ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ	-	-	-	脚部のみ	黒色処理黒色?.透かし孔4箇所	28-6	

第66図　SI51 住居跡および出土遺物

規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］壁の直下を全周している。上幅10～20cm、深さ10～20cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は粘土ブロックを多く含み、締まりのある褐灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。なお、新旧のカマド部分では改築時に周溝が掘り直されており、やや幅広で、埋土も若干異なる。新し

いカマド部分を除く周溝内では壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅約5cm、深さ10～20cmの灰黄褐色の堆積土が認められる。

［カマド］東辺ほぼ中央と北辺やや東寄りで新旧2つのカマドが検出された。東辺のものが新しく、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は暗灰黄色の粘土質シルトを積み上げて構築されており、その焚き口部では構築もしくは補強材の据え方とみられる小ピットが左右1個ずつ確認されている（P5･6）。P5･6は直径20cm程の不整な円形を呈し、深さ約3cmである。燃焼部底面は焚き口側へ傾斜しており、中央部が強く焼けて赤変している。煙道は先端に向かってやや上向きに傾斜しており、長さ85cmである。また、北辺の古いカマドでは燃焼部側壁が取り払われて、直径25cmの円形の焼け面と煙道の一部が残る。長さ60cm程残存する煙道は先端に向かって上向きに傾斜しており、上部が意識的に崩されて埋め戻されていたと考えられる。

［貯蔵穴状ピット］住居北東隅の床面で検出された（K1）。平面形は85cm×65cmの隅丸長方形を呈し、深さは20cmある。堆積土は炭化物を含む黄灰色土で、住居堆積土の2層に近い。このK1の上には長さ60cm×幅20cm×厚さ2cm程の大きさの朽ちた板材が残存しており、蓋として利用されていた可能性がある。

［出土遺物］床面や床面直上から土師器坏（第66図1）･高坏（第66図2）が出土している他、床面直上の遺物には土師器坏・甕、須恵器壺・甕の破片も認められる。土師器坏には内面がヘラミガキ・黒色処理されたものとナデ調整のものがあり、須恵器甕には口縁部外面に櫛描き波状文が施されたものもある。

【SI52住居跡】（第67図）

［位置･確認面］II区の西寄りで検出された。確認面は⑨層上面で、緩やかに南東方向へ傾斜している。

［方向］住居の方向は、N－13°－Eである。

［重複］SI51住居跡、SK59土壙と重複しており、いずれよりも古い。

［平面形･規模］SI51住居跡、SK59土壙によって壊され、さらに北西部が調査区外に及んでいるものの、東西5.6m×南北5.2mのやや歪んだ正方形を呈する。

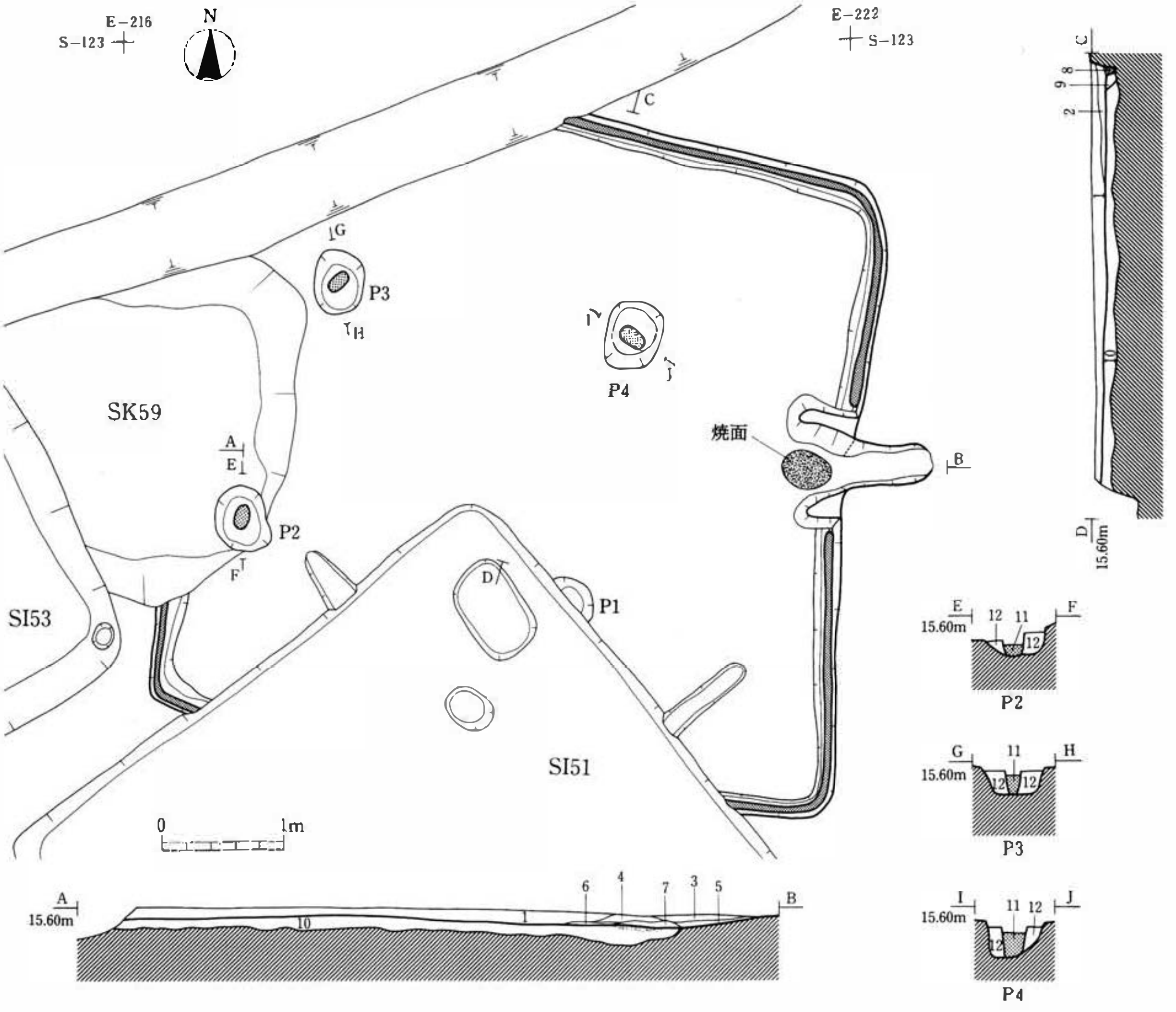
［堆積土］7層認められる。1層は粘土ブロックを多く含む灰黄褐色土で、人為堆積の可能性がある。2層は住居壁の崩落土とみられる。3・4層はカマドの煙道・燃焼部の崩壊土で、5～7層はその内部に堆積している。この内7層は焼土粒を含む灰層で、カマド機能時の堆積と考えられる。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁は高さ10cm程で残る。

［床］掘方埋土を床としている。床面には凹凸があり、中央部がやや高くなっている。

［柱穴］床面で4個（P1～4）検出された。P1～4は住居平面形のほぼ対角線上に位置しており、P2～4には柱痕跡が認められる。P1はSI51住居跡によって壊されて掘方の一部が残るのみである。掘方の平面形は長辺が約55cmの不整な隅丸長方形を呈し、深さ25～30cmである。柱痕跡は20cm×10cmの隅丸長方形を呈する。このP1～4は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］調査区内では残存する壁の直下を巡り、カマド下部で途切れる。上幅10～25cm、深さ10cm前



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物、粘土ブロック多く	人為堆積土?
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト		住居廃絶後堆積土
3	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	下面が焼けて赤変	カマド燃焼部底面貼土
4	黒褐色(2.5YR2/2)	シルト	下位に焼土ブロック多く	カマド燃焼部堆積土
5	黒色(2.5Y2/1)	シルト	焼土・粘土ブロック・炭化物・灰多く	カマド煙道内堆積土
6	黒色(2.5Y2/1)	シルト	焼土・炭化物・灰多く	カマド燃焼部内堆積土
7			粘土	カマド燃焼部側壁構築土(天井、袖部天井の崩落)
8	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		壁材の痕跡
9	褐灰色(10YR4/1)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック、締まりあり	周溝堆積土
10	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	炭化物・砂ブロック・粘土ブロック混じり	住居掘方埋土
11	黒褐色(10YR3/1)	シルト		P2〜4 柱痕跡
12	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	P2〜4 掘方埋土

第67図　SI52住居跡

後で、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈する。堆積土は締まりのある褐灰色土で、人為的に埋め戻されていたとみられる。周溝内には壁側に沿って壁材の痕跡と考えられる幅5〜10cm、深さ10cm前後の締まりのない灰黄褐色土が堆積している。

［カマド］東辺中央やや北寄りに付設されており、燃焼部と煙道の一部が残る。燃焼部側壁は暗灰黄色のシルトを積み上げて構築されている。燃焼部底面は奥壁側へ緩やかに傾斜しており、中央部が強く焼けて赤変している。煙道は先端に向かって上向きに傾斜し、長さ70cm程残存する。

［出土遺物］床面から内面の調整がヘラミガキ・黒色処理の土師器坏と土師器甕の破片が少量出土している。

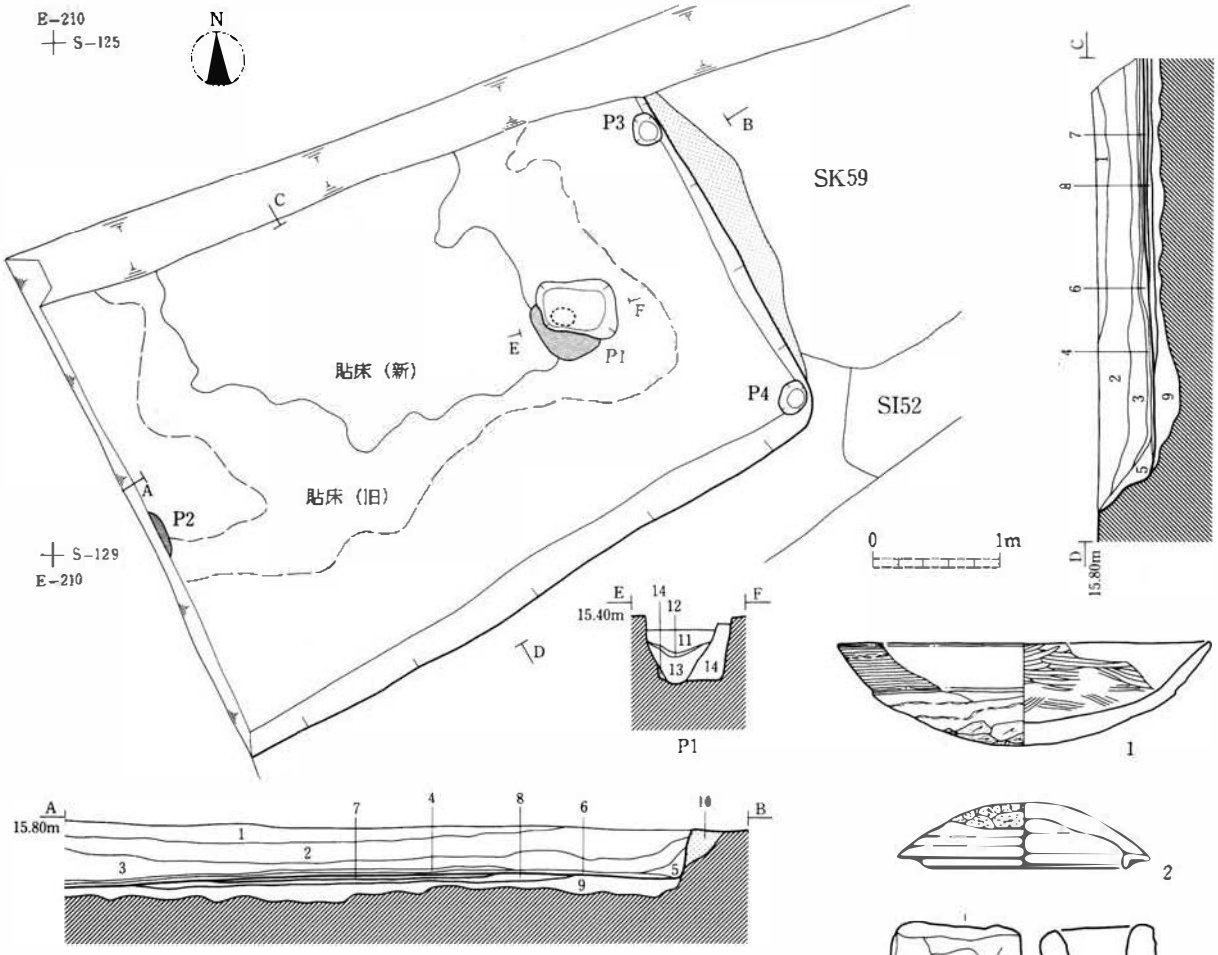
【SI53 住居跡】（第68図）

［位置･確認面］ II区の西端で検出された。確認面は⑨層上面で、緩やかに南東方向へ傾斜している。

［方向］ 住居の方向は、N－28°－W である。

［重複］ SK59 土壙と重複しており、これよりも新しい。また、住居の位置から SI01 住居跡とも重複していると考えられるが、重複部分の調査ができなかったため、その前後関係は不明である。

［平面形・規模］ 住居北半が調査区外へ及び、西部が未調査のため全体の規模は不明であるが、東西



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土ブロック・極薄い炭化物層・粘土ブロック	廃絶後の住居内に捨てられた土?
2	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	均質で締まりあり	人為堆積土?
3	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土質シルト	炭化物少量・粘土大ブロック主体	人為堆積土?
4				薄い炭化物層(植物の繊維質が自然炭化?)
5	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト		住居壁崩落土
6	暗灰黄色(2.5Y5/1)	砂質シルト	極薄い炭化物層	生活層
7	灰色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	砂小ブロック・粘土小ブロック混じり、締まり強い	貼床
8	オリーブ黒色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	砂小ブロック、粘土小ブロック主体、締まり強い	貼床
9	黒色(2.5Y2/1)	シルト	砂ブロック多く、粘土ブロック	住居掘方埋土
10	黄褐色(2.5Y5/3)	粘土質シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	埋土(住居壁の補修?)
11	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	粘土大ブロック多く	P1柱抜き取り痕(3層に対応)
12				P1柱抜き取り痕(薄い炭化物層、4層に対応)
13	オリーブ黒色(7.5Y3/2)	砂質シルト	砂ブロック多く、粘土ブロック	P1柱抜き取り痕
14	オリーブ黒色(7.5Y3/2)	砂質シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	P1掘方埋土

No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	床面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ	(14.8)	—	4.1	1/3	黒色処理脱色?	28－3	A II b
2	須恵器・壺	堆積土	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ・ナデ 内：ロクロナデ	—	8.0	2.6	4/5		28－?	

No.	種別	層位	特徴	写真図版
3	土製支脚	堆積土	残存長：8.0cm 径：4.7cm 調整：ナデ 法量1本	36－6

第68図　SI53 住居跡および出土遺物

5.1m以上×南北3.7m以上で方形を基調とする。

［堆積土］6層認められる。1層は焼土や粘土のブロックと極薄い炭化物層を多量に含む黒褐色土で、廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。2層は均質で締まりのある褐灰色土、3層は粘土の大ブロックを主体とする黄灰色土で、いずれも人為堆積と考えられる。4層は炭化物層で、植物の繊維質が自然炭化したものとみられる。5層は住居壁の崩落土、6層は床面に薄く堆積した生活層である。

［壁］基本的に地山を壁としており、床面から住居外側へ開き気味に立ち上がる。SK59土壙と重複する部分では埋土（スクリーントーン部分）を壁としており、埋土（断面10層）の状況から機能時に壁が1度崩れていたことが窺われる。壁高は南壁で床面から40cmある。

［床］中央部を中心に貼床されており、その他では掘方埋土を床としている。床面には若干凹凸があり、中央部がやや高くなっている。なお、貼床が2枚認められることから、床面が1回補修されていることがわかる。

［柱穴］床面で1個（P1）検出された。P1は住居の南東隅から1.9m程中央寄りに位置しており、柱抜き取り痕が認められる。掘方の平面形は65cm×45cmの隅丸長方形を呈し、深さは50cmで、掘方底面には長軸20cmの楕円形を呈する柱押圧痕が残る。この柱穴は、その位置から主柱穴と考えられる。また、調査区西壁直下の床面で確認されたP2は、位置・堆積土からみて主柱の抜き取り穴の可能性が強い。

［その他のピット］東壁の直下で2個（P3・4）検出された。平面形は25cm×20cmの不整形を呈し、深さ20～30cmである。このP3・4は、その位置からみて壁柱の抜き取り穴の可能性がある。

［出土遺物］床面直上から土師器坏（第68図1）と、坏・高坏・甕の破片が出土している。坏は内面がヘラミガキ・黒色処理されており、高坏は脚部の小破片である。また、堆積土中の遺物には須恵器蓋（第68図2）や外面に平行タタキ目、内面に同心円アテ具痕が残る須恵器甕の体部破片、土製支脚（第68図3）なども認められる。なお、床面からモモの種子1点、堆積土中からクルミの種子1点が出土している。

【SI54住居跡】（第69図）

［位置・確認面］II区の西寄りで検出された。確認面は⑨層上面で、緩やかに南東方向へ傾斜している。

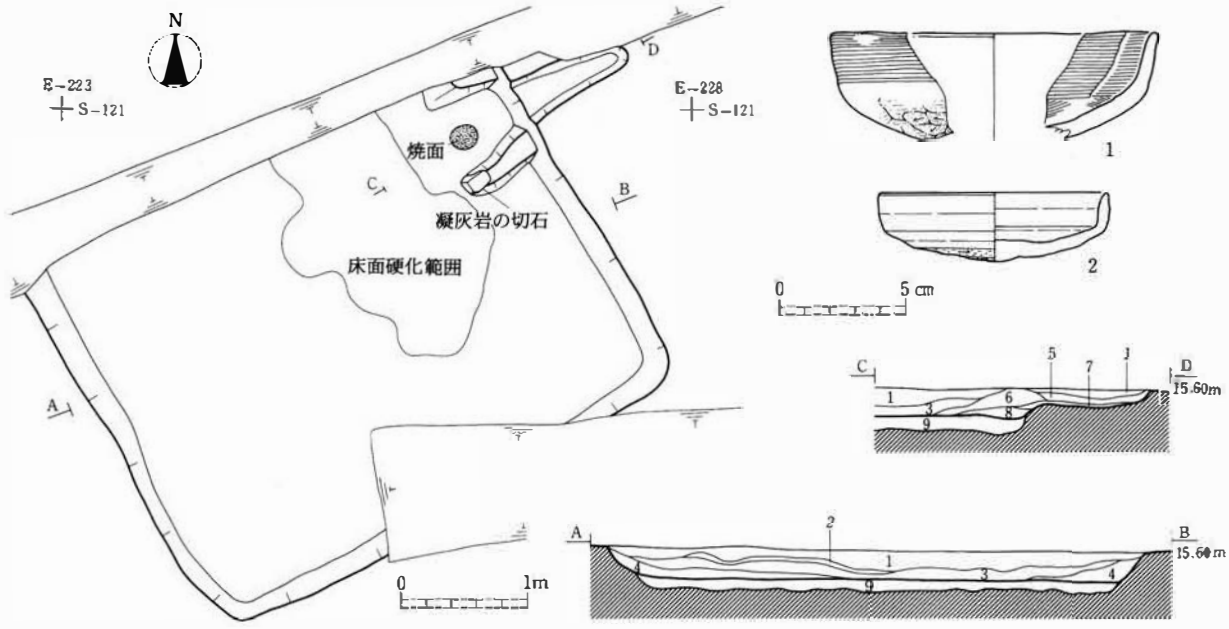
［方向］住居の方向は、N－30°－Wである。

［平面形・規模］攪乱によって南辺が壊され、さらに北部が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、東西3.9m×南北3.1m以上で方形を基調とする。

［堆積土］8層認められ、1層は自然流入土である。2層は炭化物層、3層は人為堆積とみられる砂と粘土のブロック混じりの層、4層は住居壁の崩落土である。5・6層はカマドの煙道・燃焼部の崩壊土で、7・8層はその内部に堆積している。この内8層は灰主体の層で、カマド機能時の堆積と考えられる。

［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へ開いて立ち上がる。壁は高さ20cm程で残る。

［床］掘方埋土を床としており、床面にはやや凹凸がある。なお、カマド焚き口付近から住居中央部



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	炭化物	自然流入土
2				炭化物層
3	C.ロ[illegible]黒色(10YR4/3)	シルト	指薄い炭化物層、砂ブロック・粘土ブロック混じり	人為堆積土?
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物少量	住居硬膜基土
5	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	粘土ブロック	カマド[illegible]基土

層位	土色	土性	混入物等	備考
6	灰褐色(7.5YR4/2)	粘土質シルト	粘土大ブロック多く、炭化物	カマド[illegible]基土
7	褐灰色(10YR4/1)	シルト	粘土・炭化物	カマド[illegible]基土
8			粘土・炭化物少量	カマド[illegible]基土(灰層、[illegible])
9	暗灰黄色(10YR4/2)	シルト	炭化物若干、砂ブロック・粘土ブロック混じり	住居硬膜基土

No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	堆積土	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	(13.0)	−	−	1/5			B IV b
2	須恵器・坏	堆積土	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ	9.2	−	2.7	完形		28−8	A II a

第69図　SI54 住居跡および出土遺物

にかけては床面が強く硬化している。

［カマド］東辺に付設されており、調査区側溝によって壊されて、燃焼部・煙道の一部が残る。燃焼部側壁は灰褐色の粘土質シルトを積み上げて構築されており、右側壁の焚き口部には凝灰岩の切石が残存している。燃焼部底面は奥壁寄りが若干窪み、中央やや焚き口寄りが強く焼けて赤変している。底面と煙道の間には10cmの段がつく。煙道はほぼ水平に延び、長さ90cmである。

［出土遺物］床面や床面直上からは土師器甕の破片が数点出土しているのみである。堆積土中からは土師器坏（第69図１）、須恵器坏（第69図２）が出土している。

【SI80 住居跡】（第70・71図）

［位置・確認面］III区で検出された。確認面は⑩層上面で、南西方向へ緩やかに傾斜している。

［方向］住居の方向は、N−44°−W である。

［平面形・規模］東西3.8m×南北4.1m の正方形を呈する。

［堆積土］13層認められる。１・２層は焼土ブロックと炭化物を多量に含む黒褐色・黒色土で、いずれの層も土器片を多く含み、廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。３層は自然流入土である。４・６層は砂と粘土のブロック混じり、７層は白色粘土ブロック主体の層で、人為堆積土の可能性がある。５層は植物の繊維質が自然炭化したものとみられる薄い炭化物層である。８〜10層はカマドの

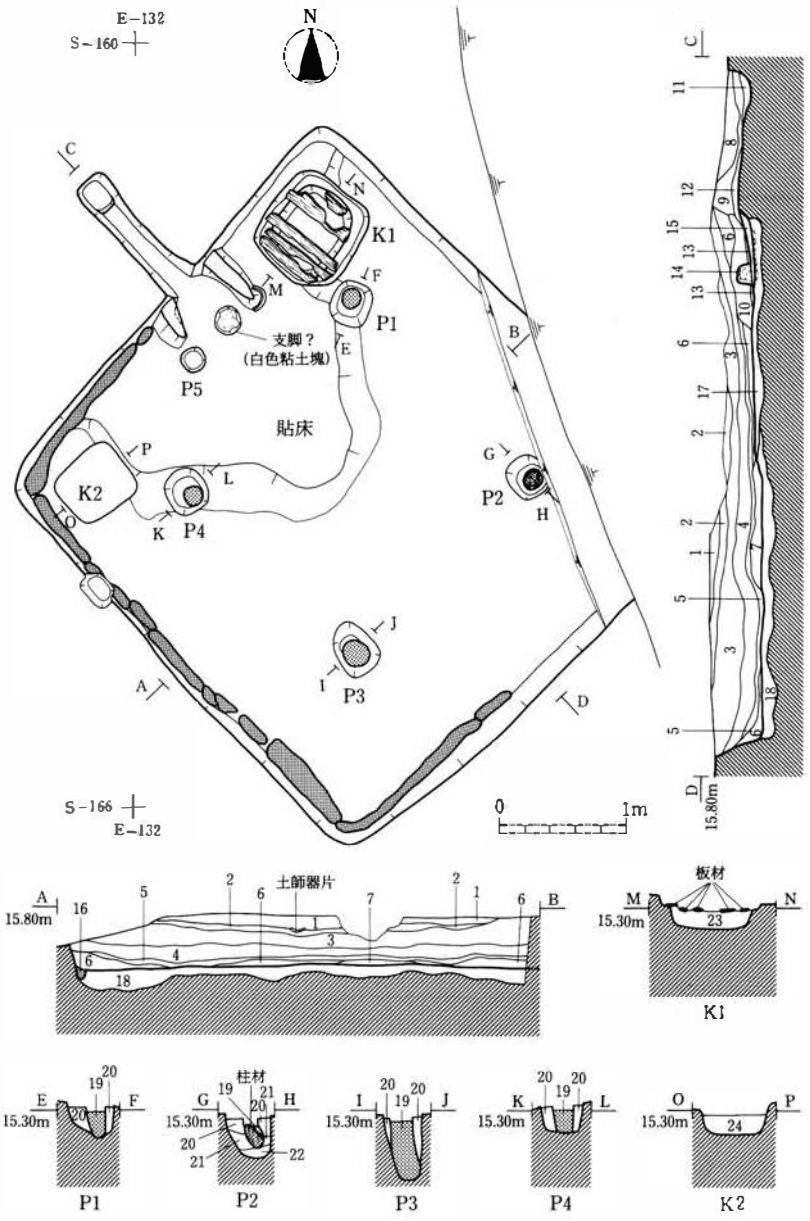
煙道から燃焼部にかけての崩壊土、11～13層はその内部に堆積した炭化物もしくは灰を主体とする層で、機能時の堆積と考えられる。

［壁］地山を壁としており、床面から住居外側へ若干開き気味に立ち上がる。壁高は残りの良い南壁で床面から40cmある。

［床］カマド部分から中央部にかけて貼床されており、その他では掘方埋土を床としている。床面には若干凹凸があり、貼床された部分が段状に高くなっている。

［柱穴］床面で4個（P1～4）検出された。P1～4は住居平面形の対角線上に位置しており、全てに柱痕跡が認められる。なお、P2には柱材の一部も残る。掘方の平面形は一辺または長辺が35～40cmの隅丸正方形もしくは長方形を呈し、深さ20～50cmである。柱痕跡は直径15～20cmの不整な円形を呈する。このP1～4は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］北辺のカマド西脇から南辺中央にかけて壁の直下を断続的に巡る。上幅5～20cm、深さ5～10cmで、断面は住居内側へやや開く変形「U」字状を呈し、底面の凹凸が著しい。堆積土は締まりのない灰色土である。その規模や堆積土の状況か

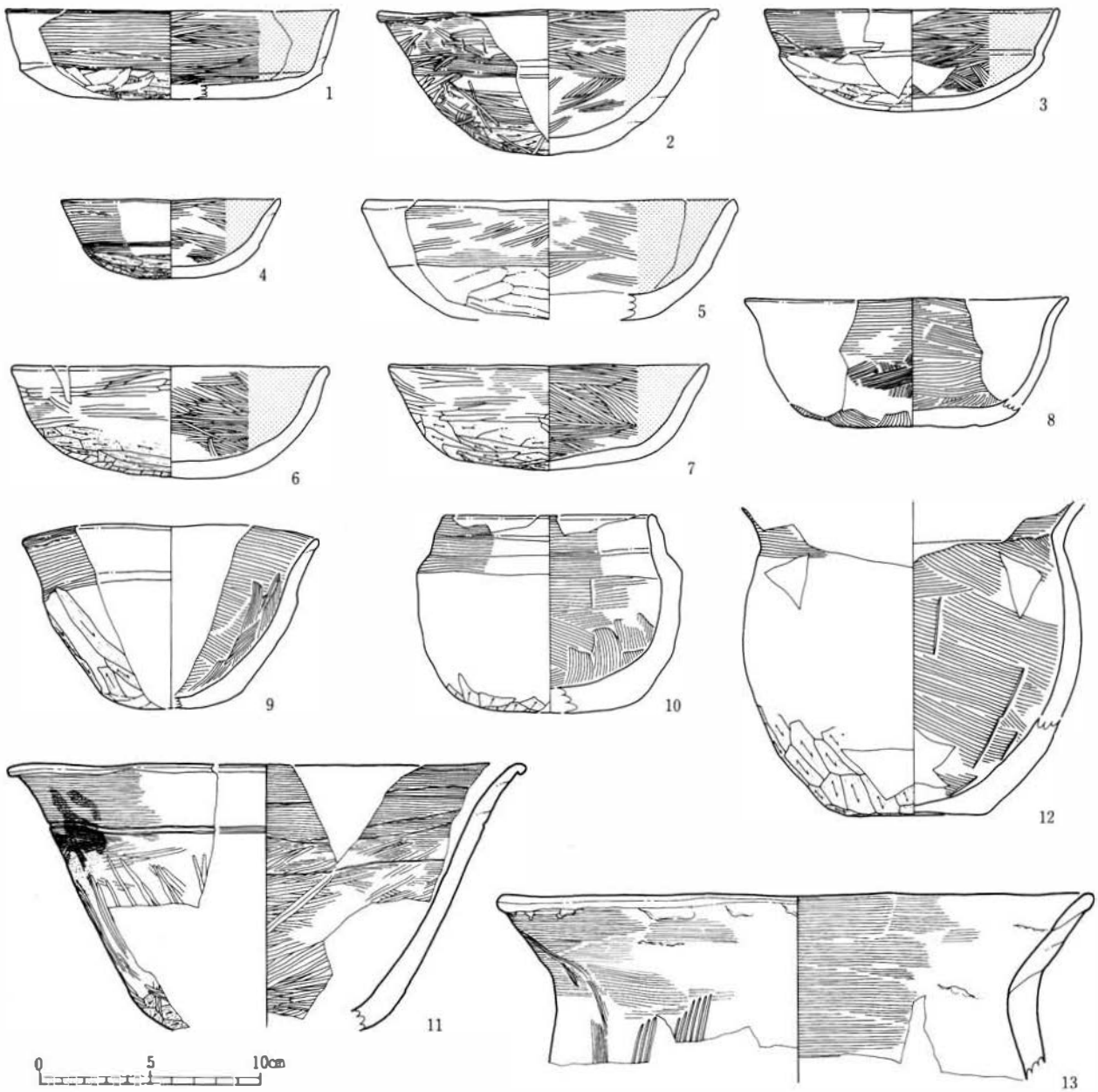


層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	炭化物・土師片多く	廃絶後の住居内に捨てられた土？
2	黒色(10YR2/1)	シルト	焼土ブロック・炭化物多量、土師片多く	廃絶後の住居内に捨てられた土？
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト		自然流入土
4	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	砂質シルト	砂ブロック・粘土ブロック混じり	人為堆積土？
5				青い炭化物層（植物の繊維質が白炭化？）
6	黒色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	炭化物、砂ブロック・粘土ブロック混じり	人為堆積土？
	黒色(10YR3/1)	粘土質シルト	白色粘土大ブロック主体	人為堆積土？
	黒色(10YR4/1)	シルト		カマド煙道上部崩落土
	黒色(7.5YR2/1)	シルト	焼土ブロック多量、炭化物	カマド煙道上部崩落土
10	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	下位に焼土ブロック多量、炭化物	カマド燃焼部崩壊土
11	黒色(7.5YR1.7/1)	シルト	炭化物主体	カマド煙道内堆積土（機能時の堆積）
12	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	焼土小ブロック、炭化物主体	カマド煙道内堆積土（機能時の堆積）
13			焼土・炭化物少量	カマド燃焼部内堆積土（灰層、機能時の堆積）
14	灰黄色(2.5Y7/2)	粘土	側面が焼けて硬変	カマド燃焼部天井？（白色粘土塊）
15	灰色(N5/1)	シルト	焼土小ブロック・炭化物・灰・粘土ブロック混じり	カマド燃焼部底面を貼り置した土
16	灰色(N4/1)	シルト		壁材の崩落
17	灰色(N5/)	砂質シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり、締まり強い	貼床
18	オリーブ灰色(2.5GY5/1)	砂質シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり、白色粘土少量	住居掘方埋土
19	オリーブ黒色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	砂小ブロック・黒色粘土小ブロック	P1～4柱痕跡
20	黒色(5Y2/1)	シルト	砂ブロック多く	P1～4掘方埋土
21	灰色(7.5Y4/1)	粘土質シルト	砂小ブロック・黒色粘土小ブロック混じり	P2掘方埋土
22	黒色(5Y2/1)	シルト	砂ブロック多く	P2掘方埋土
23	灰色(N4/)	シルト	炭化物、砂小ブロック・粘土ブロック多く	K1堆積土（6層に近い）
24	黒褐灰色(5G4/1)	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック多量、白色粘土ブロック少量	K2堆積土（人為堆積）

第70図　SI80住居跡

ら壁材の痕跡である可能性が強い。

［カマド］北辺ほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は暗灰黄色のシルトを積み上げて構築されており、その右焚き口部には心材として用いられたと考えられる土師器甕の一部が残る。また、左側壁の焚き口部でも補強材の据え方とみられる小ピット（P5）が確認されている。



No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	カマド煙道内堆積土	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヘラミガキ・黒色処理	(15.1)	−	4.0	1/4			A I c
2	土師器・坏	堆積土2層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いヘラミガキ 内：ヘラミガキ・黒色処理	(15.5)	−	6.5	1/4		28−9	A II a
3	土師器・坏	床面	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヘラミガキ・黒色処理	13.4	−	4.5	3/4		28−10	A I b
4	土師器・坏	堆積土2層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ・黒色処理	(10.0)	−	3.5	2/5	外面に浅い沈線巡る	28−11	A II b
5	土師器・坏	堆積土2層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いヘラミガキ 内：ヨコナデ→ヘラミガキ・黒色処理	(17.1)	−	(5.5)	1/5			A III b
6	土師器・坏	堆積土1・2層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いヘラミガキ 内：ヘラミガキ・黒色処理	14.4	−	5.1	3/4		28−12	A IV1b
7	土師器・坏	堆積土1・2層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いヘラミガキ 内：ヘラミガキ・黒色処理	14.5	−	4.6	3/5		28−13	A IV2b
8	土師器・坏	堆積土2層	外：ヨコナデ→ハケメ→ナデ　内：ヨコナデ→ナデ	(14.7)	−	5.8	1/3		28−14	B IV a
9	土師器・鉢	堆積土1・2層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→ナデ 内：ヨコナデ→ナデ	(13.4)	−	(8.3)	1/4		28−15	C II
10	土師器・鉢	堆積土1・2層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラナデ→ヨコナデ・ナデ	(9.7)	−	8.9	3/4		29−1	A I
11	土師器・瓶	堆積土1・2層	外：ヨコナデ・ヘラケズリ→軽いヘラミガキ 内：ヨコナデ→ヘラミガキ	23.5	−	−	1/4	外面頸部に沈線、外面に漆付着（スクリーントーン部分）	29−2	A
12	土師器・甕	堆積土1・2層	外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ→ヘラナデ　底：ヘラケズリ	−	6.3	−	2/3		29−3	B3b
13	土師器・甕	堆積土1・2層	外：ヨコナデ・ナデ　ハケメ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	(27.1)	−	−	一部			

第71図　SI80 住居跡出土遺物

燃焼部底面には機能面が2面認められ、いずれの面も焚き口側へ緩やかに傾斜し、下面の中央付近は強く焼けて赤変している。上面の焚き口寄りには支脚として利用されたと考えられる白色粘土の塊が円柱状に残存しており、その側面は焼けて赤変している。長さ1.1mの煙道は先端に向かってやや下向きに傾斜しており、先端部は30cm×25cmの隅丸長方形を呈するピット状である。

［貯蔵穴状ピット］床面で2個（K1・2）検出された。K1はカマド右脇にあたる住居北東隅に位置している。平面形は65cm×55cmの隅丸長方形を呈し、深さは15cmある。堆積土は締まりのない灰色土で、住居堆積土の6層に近い。このK1の上には長さ70cm×幅10cm×厚さ1cm程度の大きさの板材5枚が残っており(残存状態は悪い)、蓋として利用されていたものの一部と考えられる。なお、板材の据え方も認められ、その平面形は80cm×75cmの隅丸正方形で、深さは4～8cmある。また、北西隅に位置するK2は55cm×50cmの隅丸正方形を呈し、深さ20cmである。堆積土は砂と粘土のブロックを多量に含む暗緑灰色土で、人為的に埋め戻されていたと考えられる。

［出土遺物］床面やカマド煙道内堆積土中から土師器坏（第71図1・3）が出土している他、床面直上やカマド燃焼部側壁中の遺物には土師器甕の体部破片がある。また、堆積土1・2層からは土師器坏（第71図2・4～8）・鉢（第71図9・10）・甑（第71図11）・甕（第71図12・13）が一括して出土しており、この他にも内面がヘラミガキ・黒色処理された坏や鉢・甕の破片が多く認められる。

③ 区画施設

材木塀跡2条と溝跡1条がある。

【SA34a・b材木塀跡】（第72～74図）

II区の東寄りを南北方向に延びる材木塀で、長さ11.0m分を検出した。確認面は⑩層上面で、緩やかに南東方向へ傾斜している。材木塀は布掘りの中に材木を立て並べたもので、ほぼ同位置で1度造り替えられている。ここでは、古い方をSA34a、新しい方をSA34bとする。塀の方向は、N－43°－Wである。

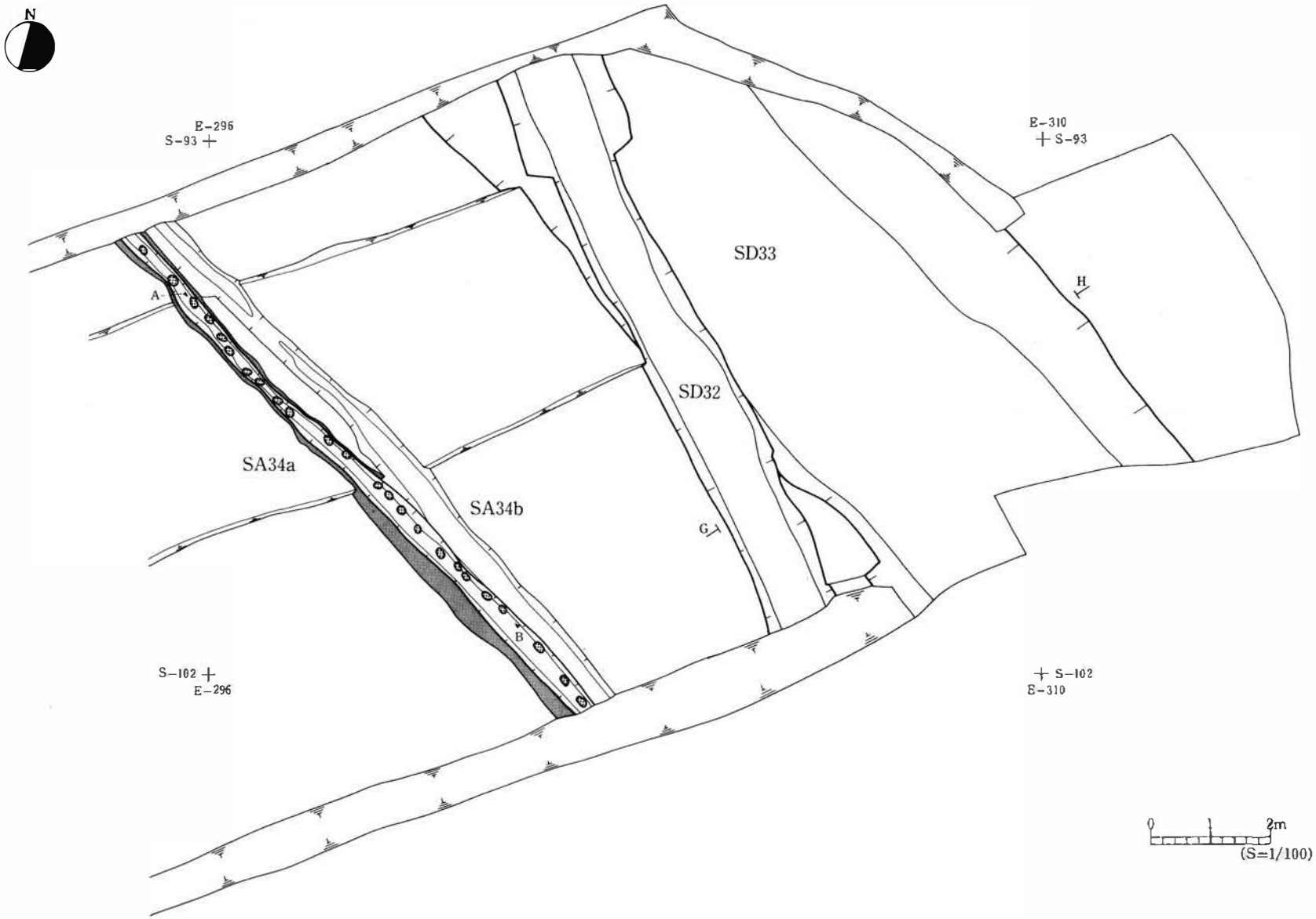
なお、この材木塀はSD33溝跡の内側(西側)にあり、これとともに西側に展開する竪穴住居群を区画していると考えられる。SA34a・b材木塀跡とSD33溝跡の間隔は心々で約7.4m・7.0mである。

《SA34a材木塀跡》（第72・74図）

掘方（布掘り）は、柱切り取り溝やSA34b材木塀跡によって壊されているものの、上幅15～50cm、下幅10～40cmで、深さは最も深い部分で65cmある。断面は「U」字状で、側壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面には凹凸がある。埋土は2層認められ、いずれも砂と黒色粘土のブロックが混じる黒褐色もしくは褐灰色のシルトである。

柱痕跡は、布掘りの東側壁に沿って確認されており、長軸10～20cmの楕円形または隅丸長方形を呈し、痕跡中に材の一部が残るものもある。間隔は20～80cmと幅があるが、40cm前後の部分が多い。

遺物は出土していない。

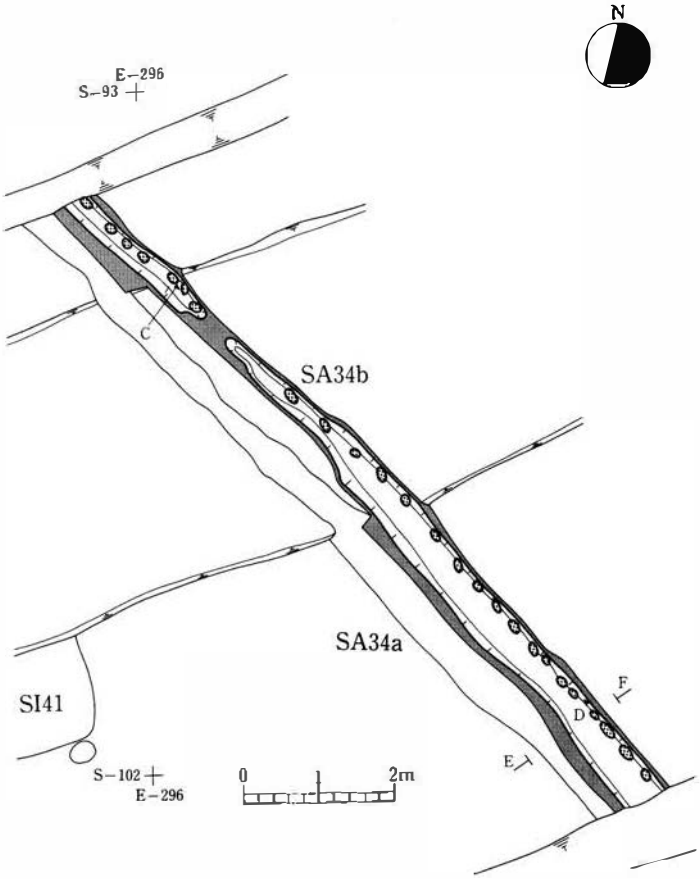


第72図　SA34a 材木塀跡、SD32・33 溝跡

《SA34b 材木塀跡》（第73・74図）

掘方（布掘り）は、柱切り取り溝によって壊されているものの、上幅15～55cm、下幅10～45cmで、深さは最も深い部分で55cmある。断面は「U」字状で、側壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面には凹凸がある。調査区北寄りで40cm程途切れているが、切り取り溝に食われた可能性もある。埋土は砂と黒色粘土のブロックが混じる黄灰色のシルトである。

柱痕跡は、長軸10～20cmの楕円形または隅丸長方形を呈し、柱材自体（割材）が残るものも多い。柱材の一部を樹種同定したところ、いずれもクリであった。柱の間隔は20～170cmと幅があるが、40～50cmの部分が多い。柱材には布掘り底面より下へ5～20cm食い込んでいるものもある。また、布掘り中では柱材の固定や沈下防止のために利用された可能性がある割材や丸木も確認されている。



第73図　SA34b材木塀跡

遺物は、柱切り取り溝から土師器甕の体部破片数点と住居カマドの構築材として利用されていたとみられる凝灰岩の切石1点が出土したのみである。

【SD33 溝跡】（第72・74～80図）

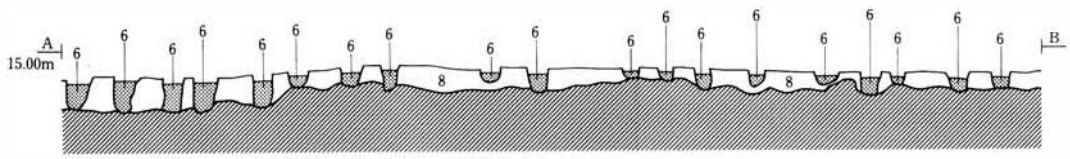
II区の東端を南北方向に延びる溝で、長さ11.4m分を検出した。確認面は⑩層上面で、緩やかに南東方向へ傾斜している。SD32 溝跡と重複しており、これよりも古い。溝の方向は、N－43°－Wで、SA34a・b 材木塀跡と平行して延びる。上幅約5.5m、下幅3.2～4.0mで、深さは最も深い部分で0.9mある。断面は逆台形状で、側壁は緩やかに傾斜しており、底面にはやや凹凸がある。堆積土は12層に分けられ、基本的に自然堆積とみられる。

溝の断面を観察すると、少なくとも8層（断面図10層）以下は機能時の堆積で、8・10層（断面図10・12層）には機能時の流水を窺わせるスクモと薄い粘土の互層が形成されている。また、9層（断面図11層）は下位の層の上部を切るような形で側壁付近に厚く堆積する粘土主体の層で、堆積状況や土性が他の層と比べやや異質であり、この層の下部を境として側壁上方が外側へ開く部分も認められる。よって、9層下の段階で溝が一度浚われている可能性がある。なお、3層（断面図5層）は溝が機能しなくなった後の窪みにできた自然の流水跡、1層（断面図3層）は最終的な窪みに堆積した基本層序⑧層を起源とするにぶい黄色土で、廃絶後の埋没が比較的早く進んだことが読みとれる。

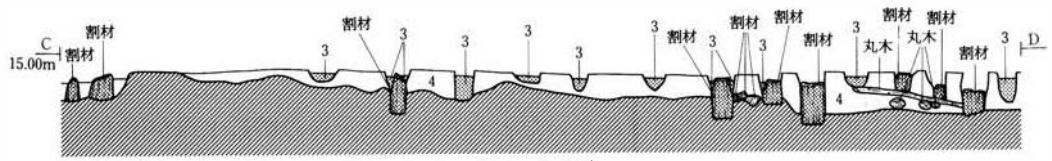
遺物の出土層位は２層、４～７層、８～10層の３層に大別される。

２層からは須恵器坏（第75図１・２）・甕（第75図３・４）が出土しており、他にも土師器坏・鉢・甕、須恵器壺・甕の破片が認められる。土師器坏には内面がヘラミガキ・黒色処理されているものとナデ調整のものがある。土師器甕は長胴形もしくは球胴形の体部破片が多く、外面の調整はハケメ・ヘラケズリを主体としている。須恵器甕の体部破片には外面に平行タタキ目、内面に同心円アテ具痕が残る。なお、モモの種子も出土している。

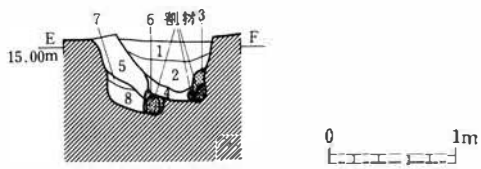
４～７層からは土師器坏（第76図１～７）・鉢（第76図８）・甑（第77図１～３）・甕（第77図４～７、第78図１～３）、須恵器坏（第77図８・９）・壺（第77図10、第78図５）・甑（第78図４）、ミニチュア土器（第76図９・10）、土錘（第78図６）、不明石製品（第78図７）が出土している。この他にも土師器坏・鉢・甕、須恵器坏・甕の破片が多量に認められる。土師器坏には内面の調整がヘラミガキ・黒色処理のものとナデ調整のものがある。土師器甕は長胴形のものが多く、体部外面の調整はハケメを主体としている。須恵器甕は外面に平行タタキ目、内面に同心円アテ具痕が残る体部破片である。な



SA34a縦断面

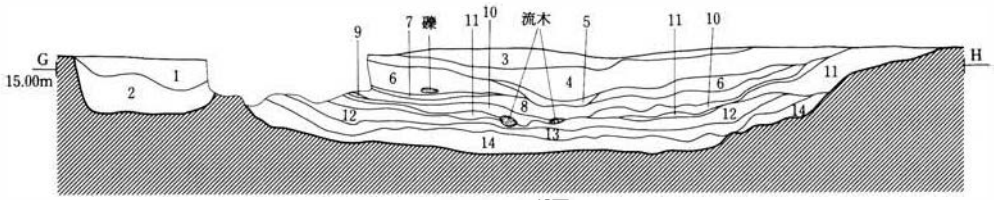


SA34b 縦断面



SA34a・b 断面

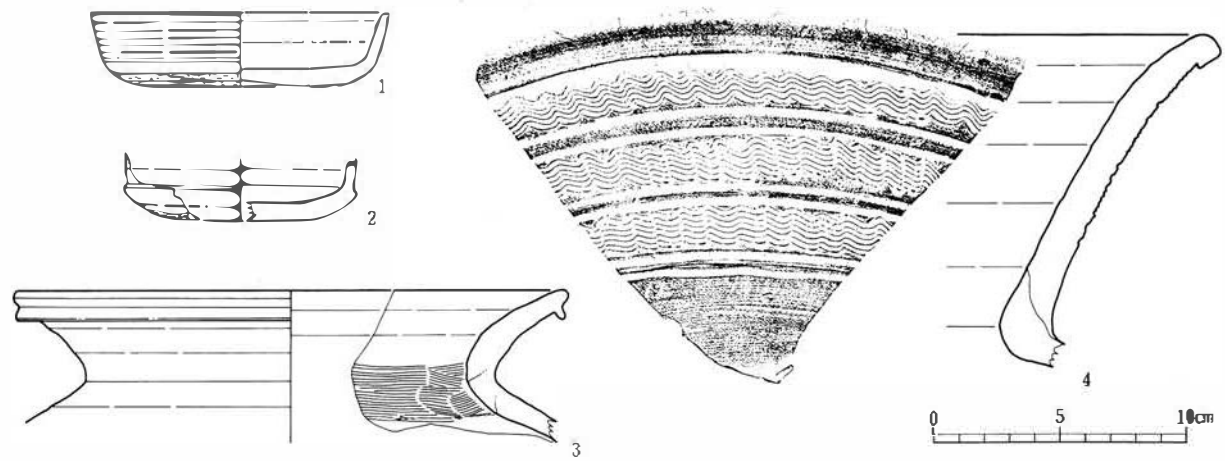
層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	炭化物、砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	SA34b 柱切り取り溝堆積土
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	砂小ブロック・黒色粘土小ブロック	SA34b 柱切り取り溝堆積土
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	黒色粘土小ブロック若干	SA34b 柱根跡
4	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	SA34b 掘方埋土
5	灰色(5Y4/1)	シルト	砂ブロック・粘土ブロック多量	SA34a 柱切り取り溝埋土
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト		SA34a 柱根跡
7	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	砂ブロック、黒色粘土ブロック多く	SA34a 掘方埋土
8	褐灰色(10YR4/1)	シルト	砂ブロック・黒色粘土ブロック混じり	SA34a 掘方埋土



SD32・33断面

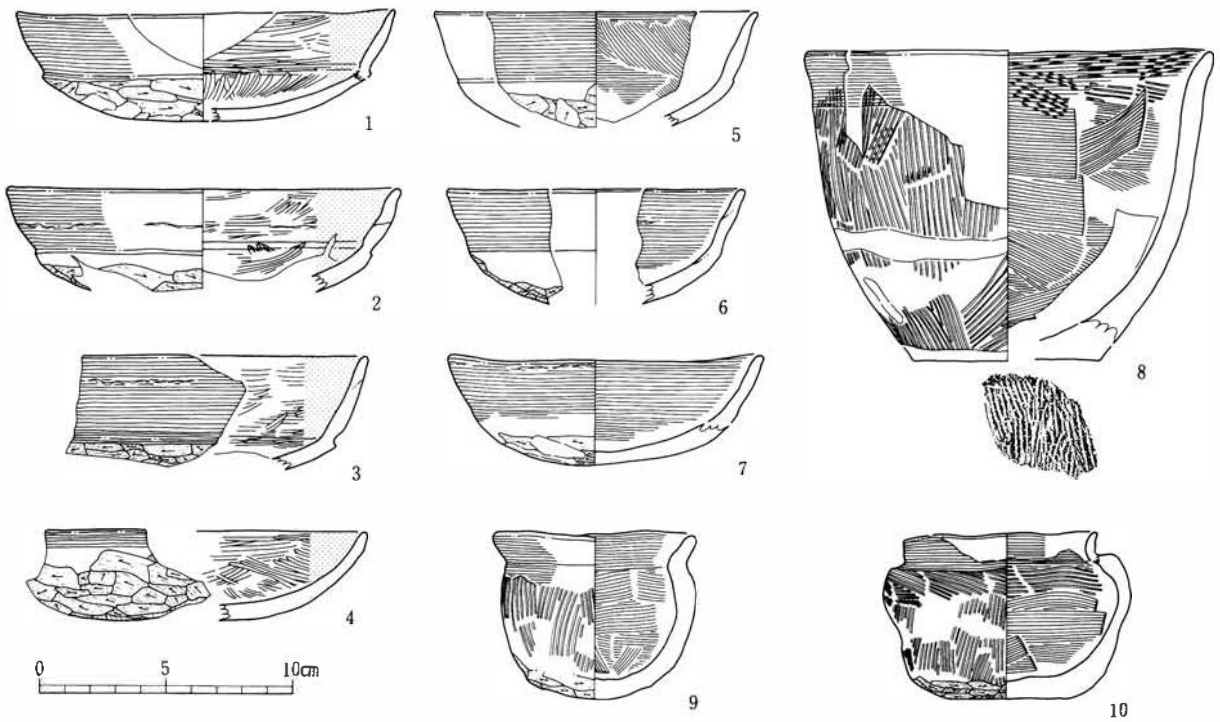
層位	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	砂ブロックを周囲り状、縁まりあり	SD32堆積土1層(人為堆積?)
2	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	黒色粘土ブロック	SD32堆積土2層
3	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	炭化物少量	SD33堆積土1層
4	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物・砂粒	SD33堆積土2層
5	灰色(5Y4/1)	砂質シルト	極細い砂層と黄灰色土が互層をなす	SD33堆積土3層
6	灰色(5Y4/1)	粘土質シルト		SD33堆積土4層
7	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	炭化物多く	SD33堆積土5層
8	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	炭化物	SD33堆積土6層
9	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	砂小ブロック・粘土小ブロック	SD33堆積土7層
10	黒褐色(2.5Y3/2)	スタモ	極細い粘土層散状、下部に流木多い	SD33堆積土8層
11	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	炭化物、粘土主体	SD33堆積土9層(波われた土の崩れ?)
12	黒褐色(2.5Y3/2)	スタモ	極細い粘土層散状、上部に流木多い	SD33堆積土10層
13	黒色(10YR2/1)	粘土	炭化物	SD33堆積土11層
14	黒色(10YR1/1)	粘土	黒色粘土ブロック・淡黒色粘土ブロック	SD33堆積土12層

第74図　SA34a・b 材木塀跡、SD32・33 溝跡断面



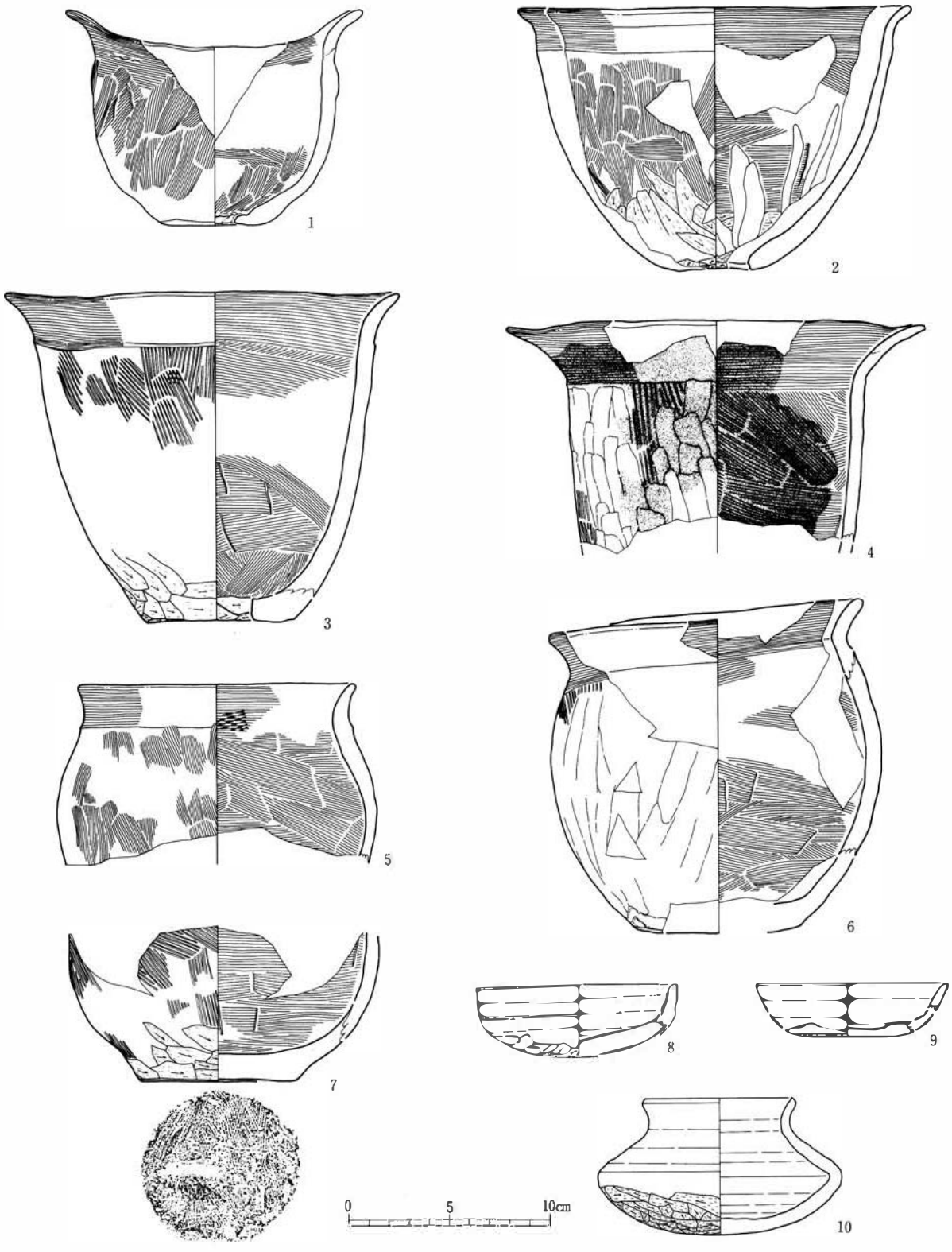
No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	須恵器・坏	堆積土2層	外：ロクロナデ→切り離し不明→回転ヘラケズリ 内：ロクロナデ	(11.8)	—	2.9	3/8		29－5	A III
2	須恵器・坏	堆積土2層	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 内：ロクロナデ	—	—	—	一部			A Ib
3	須恵器・壺	堆積土2層	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ→ナデ	22.0	—	—	一部	自然釉	29－4	B
4	須恵器・壺	堆積土2層	外：ロクロナデ→平行沈線→櫛描波状文 内：ロクロナデ	—	—	—	一部	胎土が緻密で焼成も堅緻	29－6	A

第75図　SD33 溝跡出土遺物（2層）



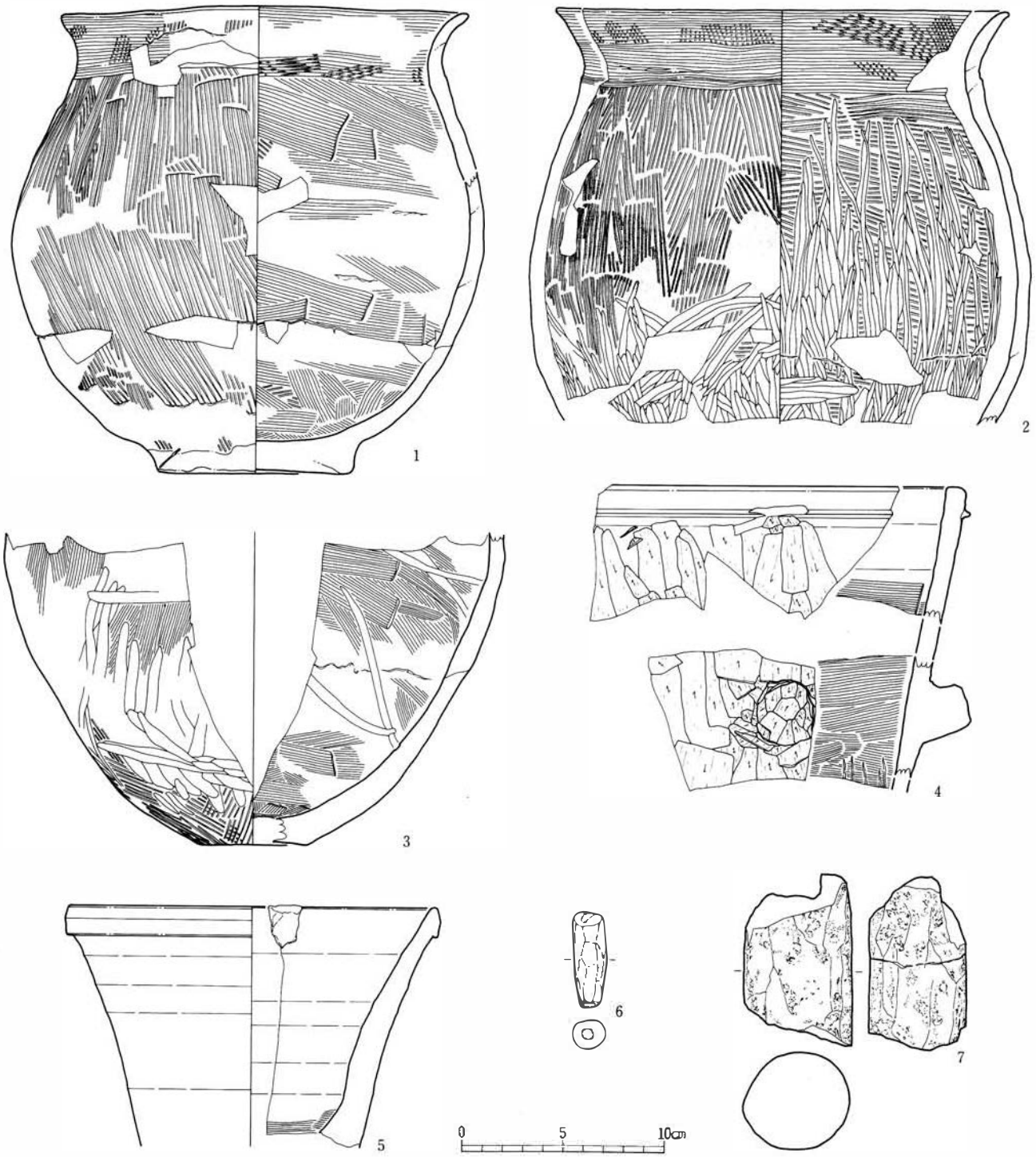
No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	堆積土6層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(15.1)	—	4.3	2/3		29－7	A Ib
2	土師器・坏	堆積土4～7層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(15.6)	—	—	1/4			A Ib
3	土師器・坏	堆積土6層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	—	—	—	1/7			A Ic
4	土師器・坏	堆積土4層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	—	—	—	1/6			AIVIb
5	土師器・坏	堆積土4～7層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヨコナデ・ナデ	(12.8)	—	—	1/8			B III b
6	土師器・坏	堆積土6層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ　内：ヨコナデ	(11.8)	—	—	1/5			B1Vb
7	土師器・坏	堆積土4層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内：ヨコナデ	(12.5)	—	4.3	3/5		29－8	B1Vb
8	土師器・鉢	堆積土6層	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ　底：ハケメ	(16.2)	(7.5)	12.3	1/2		29－11	C I
9	ミニチュア土器	堆積土4層	外：ヨコナデ→ハケメ→手持ちヘラケズリ 内：ヨコナデ→ナデ・ヘラナデ	8.6	—	6.6	完形		29－9	B
10	ミニチュア土器	堆積土6層	外：ハケメ→ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ　底：手持ちヘラケズリ	(7.6)	4.8	6.4	ほぼ完形		29－10	B

第76図　SD33 溝跡出土遺物（4～7層、その1）



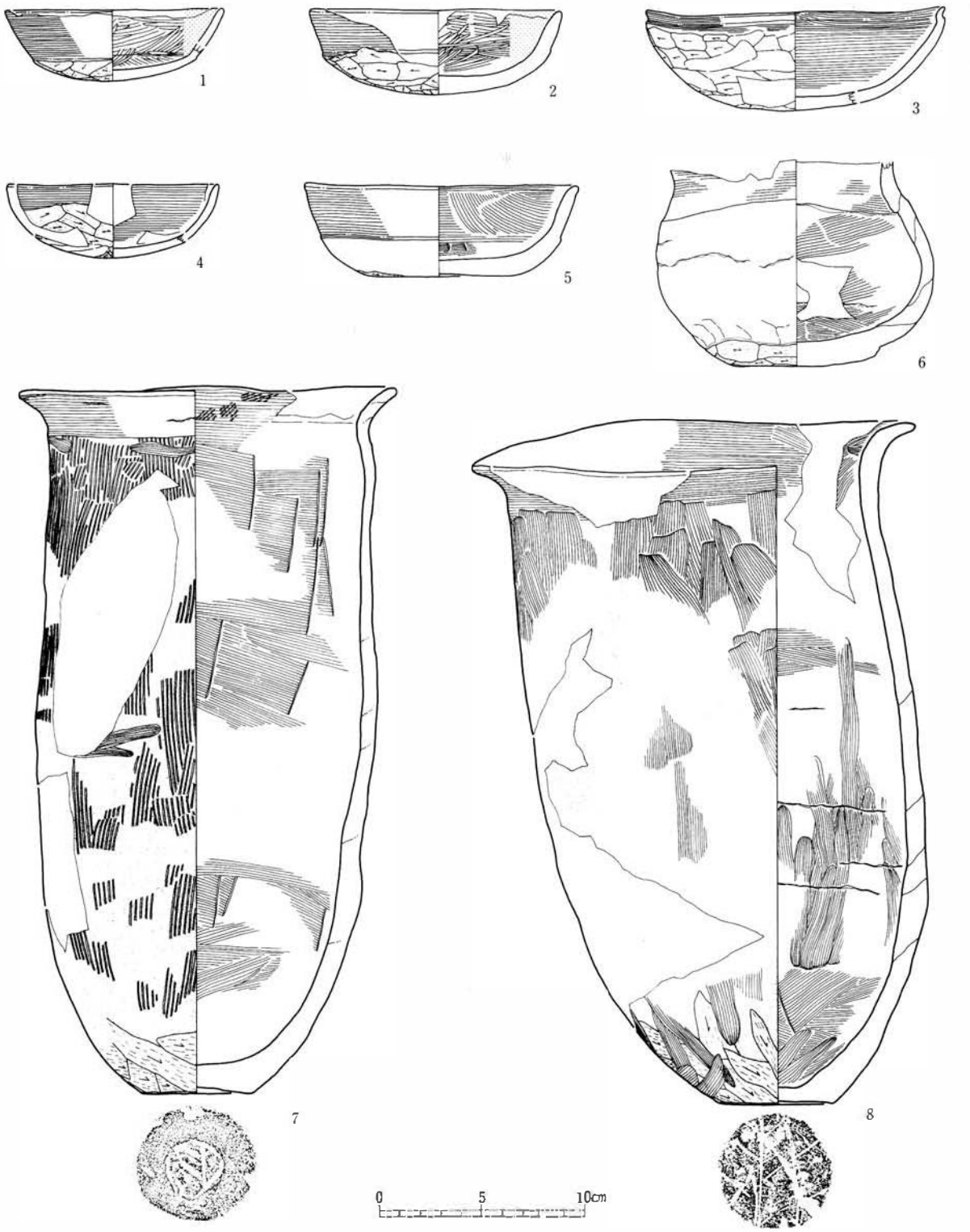
No	種別	層位	調整	口径	底径	圏高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・甑	堆積土6層	外:ヨコナデ→ナデ 内:ヨコナデ・ナデ 底:ナデ	(14.8)	(5.6)	(10.6)	1/4	単孔式	30－1	B II
2	土師器・甑	堆積土6層	外:ヨコナデ・ヘラナデ→ヘラケズリ 内:ヘラナデ→ヨコナデ・ヘラケズリ→粗いヘラミガキ	19.6	－	13.0	1/3	無底式	30－2	B I
3	土師器・甑	堆積土4～7層	外:ヨコナデ・ハケメ→ヘラケズリ 内:ヨコナデ・ヘラナデ 底:ヘラケズリ	19.6	－	16.4	ほぼ完全	単孔式	30－3	B II
4	土師器・甕	堆積土4～7層	外:ハケメ→ヨコナデ→軽いナデ 内:ヘラナデ→ヨコナデ	(20.8)	－	－	1/6	内外面面縦付着(スクリーントーン部分内)	30－4	A Vc
5	土師器・甕	堆積土6層	外:ヨコナデ・ナデ 内:ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ	13.9	－	－	1/4		30－5	B3c
6	土師器・甕	堆積土6層	外:ハケメ→ヨコナデ・軽いナデ 内:ヘラナデ→ナデ 底:ナデ	(15.8)	(8.3)	(16.6)	3/4		30－6	B3c
7	土師器・甕	堆積土4層	外:ハケメ→ヘラケズリ 内:ヘラナデ 底:ハケメ	－	7.8	－	一部	底部のハケメの写真有り	30－7	
8	須恵器・坏	堆積土6層	外:ロクロナデ→切り離し不明→手持ちヘラケズリ→軽いナデ 内:ロクロナデ	(9.9)	－	3.6	4/5		30－8	A I a
9	須恵器・坏	堆積土6層	外:ロクロナデ→切り離し不明→回転ヘラケズリ 内:ロクロナデ	(9.6)	4.2	2.7	1/3		30－9	B I
10	須恵器・広口壺	堆積土4層	外:ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 内:ロクロナデ	(7.6)	－	(6.7)	1/2		31－1	

第77図　SD33 溝跡出土遺物（4～7層、その2）



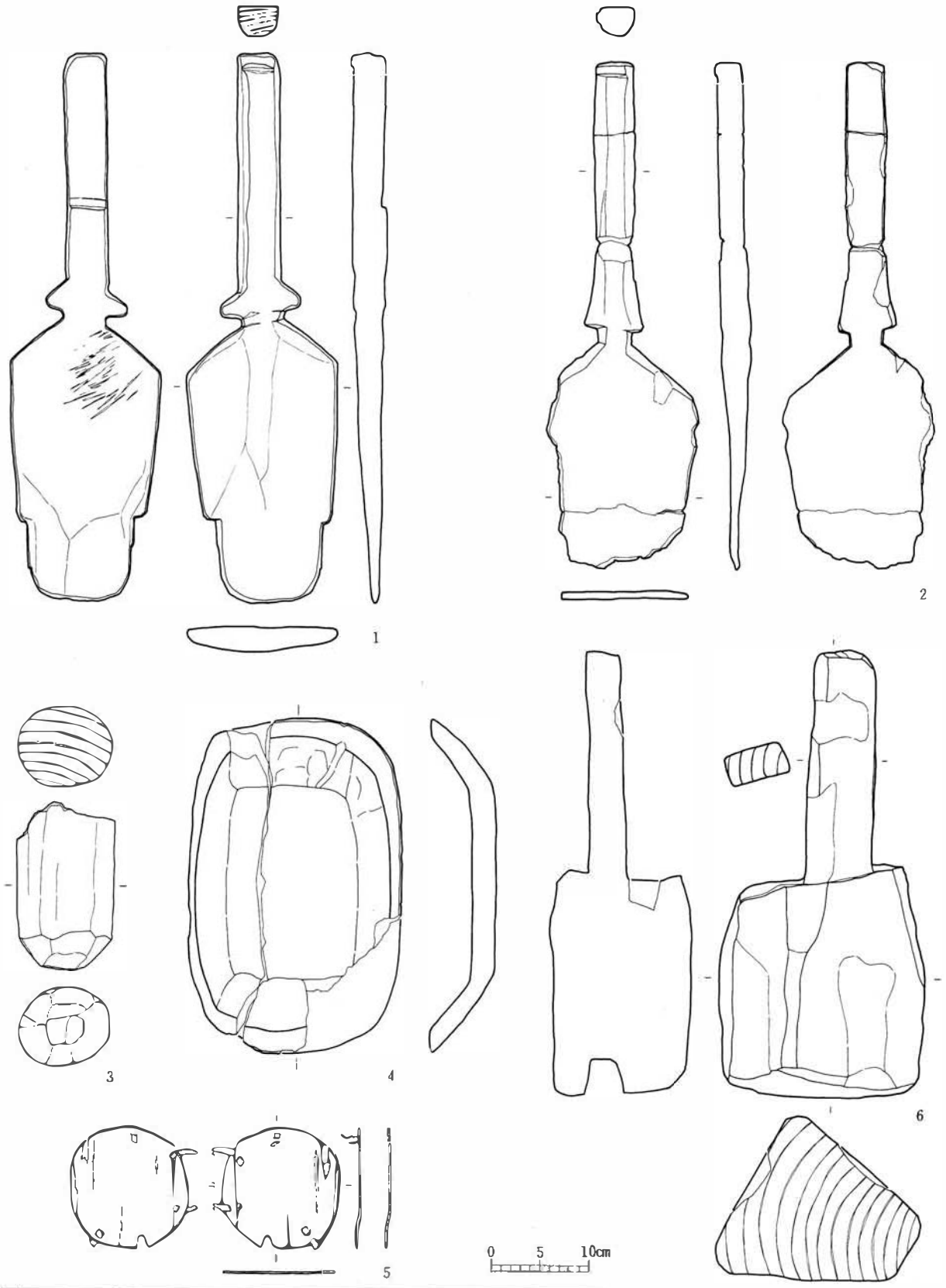
No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・甕	堆積土6層	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヘラナデ→ヨコナデ　底：木葉痕	(20.2)	9.6	23.0	3/4	体部中位の接合部に接合沈線（写真図）。	31－2	B2a
2	土師器・甕	堆積土4～7層	外：ハケメ→ヨコナデ・ヘラミガキ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラミガキ	22.5	—	—	1/5	外面に煤付着（スクリーントーン部分）。頸の可能性もあるか？	31－3	B2d
3	土師器・甕	堆積土6層	外：ナデ・ハケメ→細いヘラミガキ 内：ヘラナデ　底：木葉痕	—	5.4	—	1/4			B1d
4	須恵器・甕	堆積土6層	外：ロクロナデ→ヘラケズリ 内：ロクロナデ→ヘラナデ	—	—	—	一部		31－4	
5	須恵器・壺	堆積土6層	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ→ナデ	(18.2)	—	—	一部	外面に自然釉、内面に粘土魂	31－5	
No.	種別	層位	特徴							写真図版
6	土錘	堆積土4～7層	形状：管状　長さ：4.7cm　幅：1.7cm　孔径：0.5cm　調整：ナデ							36－7
7	不明石製品	堆積土6層	扁物？　残存長：8.5cm　径：4.8～5.2cm　石材：安山岩							37－12

第78図　SD33 溝跡出土遺物（4～7層、その3）



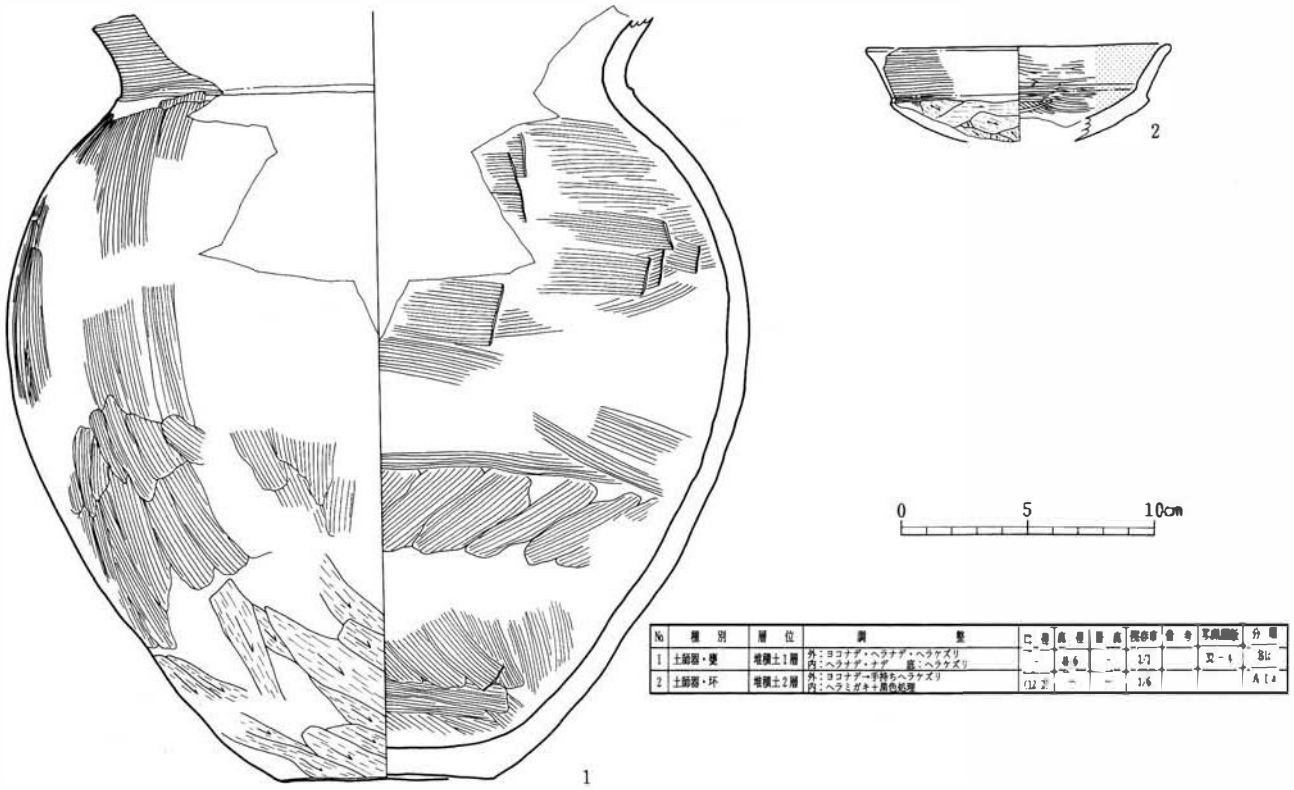
No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・杯	堆積土8層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(10.7)	—	3.4	4/5		31－6	A1b
2	土師器・坏	堆積土8層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	12.3	—	4.1	4/5		31－7	A1Ib
3	土師器・坏	堆積土8層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ→粗雑ナデ 内：ヨコナデ	(14.8)	—	4.9	1/3		31－8	B11
4	土師器・坏	堆積土8層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ→粗雑ナデ 内：ヨコナデ	(10.6)	—	4.6	1/2		31－9	B1Vb
5	土師器・坏	堆積土10層	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 底：ヘラナデ→ヨコナデ	13.4	—	4.5	ほぼ完形		31－10	B111b
6	土師器・甕	堆積土8層	外：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ 内：ナデ・ヘラナデ	—	7.3	—	9/10	内外面の摩滅・剥落著しい	32－3	B3c
7	土師器・壺	堆積土9層	外：ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ハケメ→ヨコナデ→ヘラナデ 底：木葉痕→粗いケズリ	18.5	5.7	34.4	7/8	胴に煤付着(幕クリーントーン)	32－1	A1a
8	土師器・壺	堆積土9層	外：ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ・ナデ 内：ヨコナデ→ヘラナデ・ナデ 底：木葉痕	21.9	5.5	33.2	7/8	外側に煤付着(スクリーントーン処理)	32－2	A1c

第79図　SD33溝跡出土遺物（8～10層、その1）



No	種別	層位	特徴	彩真図版
1	鍬	堆積土8～10層	最大長：55.6cm　最大幅：15.4cm　最大厚：3.6cm　樹種：クヌギ節　完形	36－1
2	鍬	堆積土8～10層	残存長：51.5cm　最大幅：15.2cm　最大厚：3.1cm　樹種：クヌギ節	36－2
3	突杵	堆積土10層	残存長：17.1cm　残存幅：9.9cm　残存厚：8.2cm　樹種：アサダ	
4	槽	堆積土10層	最大長：33.1cm　最大幅：14.3cm　高さ：6.9cm　樹種：ケヤキ	36－3
5	円形曲物の底	堆積土10層	径：12.2cm　厚：0.3cm　樹種：樹皮	36－4
6	建築部材?	堆積土8層	最大長：45.3cm　最大幅：21.1cm　最大厚：17.2cm　樹種：クリ	

第80図　SD33溝跡出土遺物（8～10層、その2）



No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・甕	堆積土1層	外：ヨコナデ・ヘラナデ・ヘラケズリ 内：ヘラナデ・ナデ　底：ヘラケズリ	-	8.6	-	1/7		17-4	B1c
2	土師器・坏	堆積土2層	外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(12.2)	-	-	1/6			A1a

第81図　SD32 溝跡出土遺物

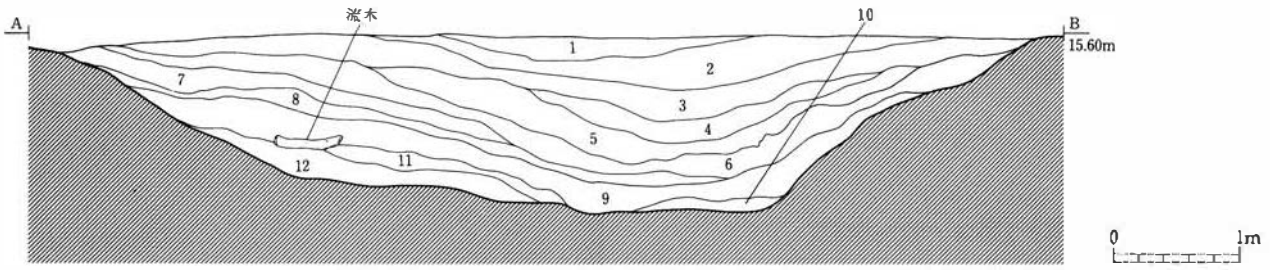
お、クルミ・モモの種子も出土している。

8～10層からは土師器坏（第79図1～5）・甕（第79図6～8）の他、内面がヘラミガキ・黒色処理されている土師器坏や土師器甕、須恵器甕の破片が出土している。土師器甕は長胴形のものが主体で、外面の調整はハケメ・ヘラケズリが多い。須恵器甕の体部破片には外面に平行タタキ目、内面に同心円アテ具痕が認められる。また、組合せ式の鍬（第80図1・2）・竪杵（第80図3）・槽（第80図4）・曲物（写真図版17）・樹皮製の円形曲物の底（第80図5）・建築部材？（第80図6）などの木製品や、クルミ・モモ・ウリの種子、動物遺体なども出土している。なお、曲物は土圧で潰れており、腐食も著しく取り上げることができなかった。

● 溝跡

【SD32 溝跡】（第72・74・81図）

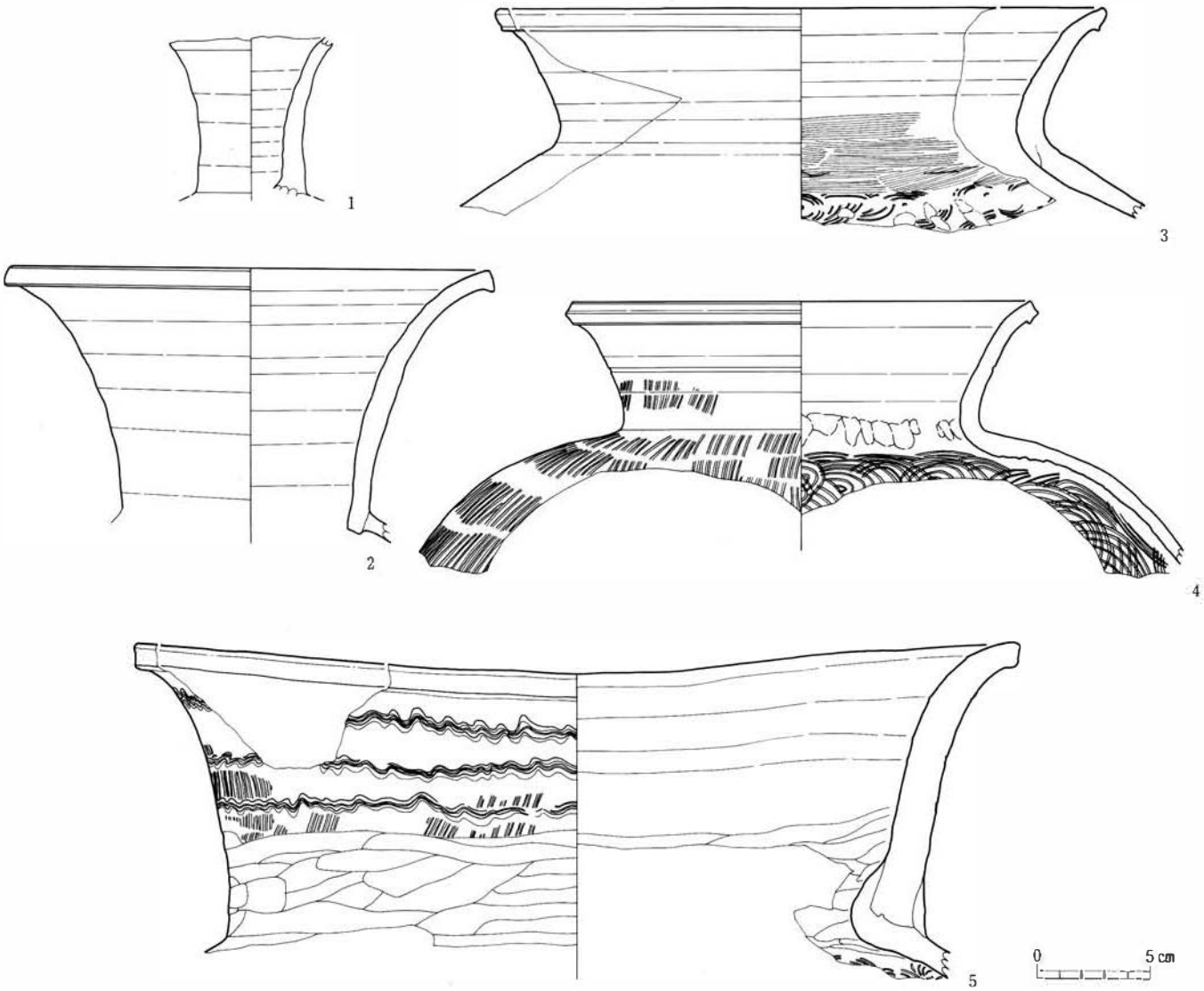
II区の東部を南北方向に延びる溝で、長さ10.5m分を検出した。確認面は⑩層上面で、緩やかに南東方向へ傾斜している。SD33 溝跡と重複しており、これよりも新しい。溝の方向は、N－27°－Wである。上幅1.1～2.0m、下幅0.7～1.0mで、深さは最も深い部分で0.6mある。断面は両側へやや開く「U」字状で、側壁は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分けられる。1層は砂ブロックを霜降り状に含む黒褐色の粘土質シルトで、締まりもあることから溝を埋め戻した土の可能性がある。2層は黒色粘土ブロックを含む黒褐色の粘土質シルトで、自然堆積とみられる。



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	炭化物	自然堆積
2	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物	自然堆積
3	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	炭化物	自然堆積
4	灰色(7.5Y4/1)	砂質シルト	中央部に極薄いスクモ層散在	自然堆積
5	暗灰色(10GY5/1)	砂	砂主体、極薄いスクモ層散在	自然堆積
6	オリーブ黒色(5Y3/2)	シルト	炭化物、中央部に薄いスクモ層を形成	自然堆積

層位	土色	土性	混入物等	備考
7	暗灰色(2.5GY5/1)	粘土質シルト	炭化物	自然堆積
8	オリーブ黒色(5Y3/2)	粘土質シルト	炭化物、中央部に薄いスクモ層を形成	自然堆積
9	オリーブ黒色(5Y3/1)	砂質シルト	砂主体、中央部にスクモ層を形成	自然堆積
10	暗オリーブ灰色(5GY4/1)	砂	砂主体、薄いスクモ層散在	自然堆積
11	暗灰色(10GY5/1)	砂	砂主体、薄いスクモ・粘土層散在	自然堆積
12	暗緑灰色(7.5GY4/1)	砂	砂主体、薄いスクモ・粘土層散在	自然堆積

第82図　SD50 河川跡断面



No.	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	須恵器・壺	堆積土1・2層	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ	—	—	—	一部		33－3	
2	須恵器・壺	堆積土1・2層	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ	21.8	—	—	1/5		33－2	
3	須恵器・壺	堆積土1・2層	外：ロクロナデ 内：同心円アテ具→ロクロナデ→ナデ	(27.1)	—	—	一部	外面に自然軸	33－1	B
4	須恵器・壺	堆積土1・2層	外：平行タタキ→ロクロナデ 内：同心円アテ具→ロクロナデ→ナデ	(21.0)	—	—	1/10		33－4	B
5	須恵器・壺	堆積土1・2層	外：平行タタキ→ロクロナデ→櫛描波状文・ナデ 内：同心円アテ具→ロクロナデ→ナデ	(40.0)	—	—	一部	頸部に補強帯?	33－5	A

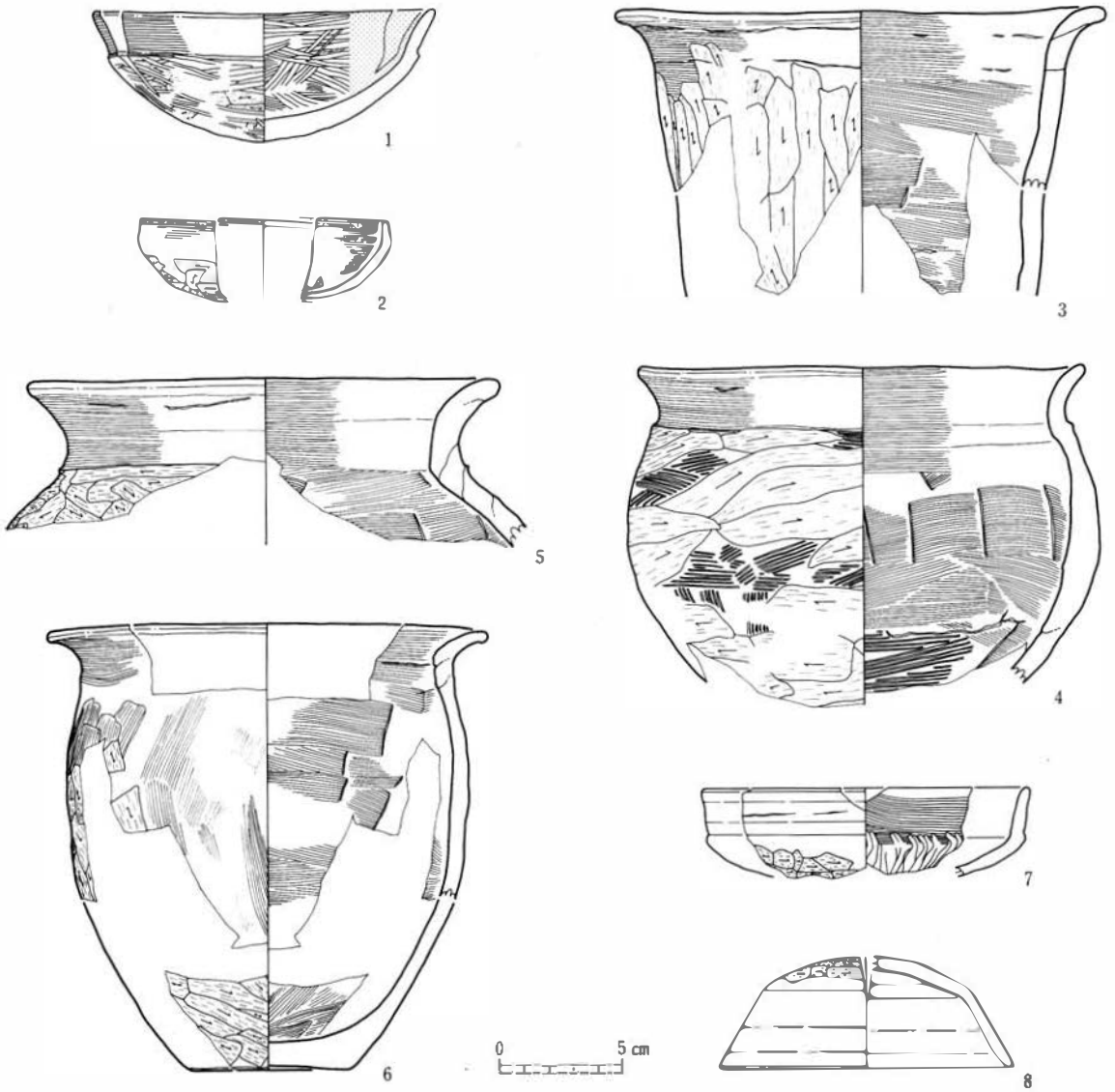
第83図　SD50 河川跡出土遺物（1）

遺物は1層から土師器甕（第81図1）、2層から土師器坏（第81図2）が出土している。この他にも1層からは内面がナデ調整された土師器坏や土師器甕、須恵器甕の破片が少量出土している。

⑤ 河川跡

【SD50 河川跡】（第14・82～84図）

II区の西寄りを南北方向に延び、南端でやや西側へ回り込む河川で、長さ13m 程が調査区にかかる。確認面は⑨層もしくは⑩層上面であるが、実際の河川の落ちは更に上層からの可能性がある。上幅6.5～7.0m、下幅3.4～3.8m で、深さは最も深い部分で1.5m ある。堆積土は12層に分けられる。1～3



No	種別	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	堆積土4・5層	外：ヨコナデ・ヘラケズリ→荒いヘラミガキ 内：ヨコナデ→ヘラミガキ→黒色処理	(14.0)	—	5.3	1/3		34－1	A II a
2	土師器・坏	堆積土4・5層	外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ	(10.2)	—	(3.3)	1/5		34－2	B 1 2
3	土師器・甕	堆積土4・5層	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	(20.0)	—	—	1/8		34－3	A V b
4	土師器・甕	堆積土4・5層	外：ハラナデ・ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ナデ→ヘラナデ→ヨコナデ	18.2	—	—	1/2		34－4	B3b
5	土師器・甕	堆積土6～12層	外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ヘラナデ→ヨコナデ	(19.3)	—	—	一部		34－5	B2b
6	土師器・甕	堆積土6～12層	外：ヨコナデ・ナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ	(18.0)	(6.6)	18.2	1/3	底：ヘラケズリ	34－6	A II3b
7	須恵器・坏	堆積土6～12層	外：ロクロナデ・ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ロクロナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	(13.4)	—	—	1/10			A III
8	須恵器・甕	堆積土6～12層	外：ロクロナデ→ヘラケズリ 内：ロクロナデ	(12.0)	—	(4.6)	1/2		34－7	

第84図　SD50 河川跡出土遺物（2）

層は黄褐色系のシルトで、最終段階に河川の窪みとして残った部分に溜まった土とみられる。4～12層は粗砂を主体としており、各層中には極薄いスクモ層や粘土層が数枚形成されている。いずれの層も自然堆積とみられる。

遺物の出土層位は1・2層、4・5層、6～12層の3層に大別される。

1・2層からは須恵器壺（第83図1・2）・甕（第83図3～5）が出土している他に、外面に段がつき、内面がヘラミガキ・黒色処理された土師器坏や土師器鉢・甕などの破片が認められる。

4・5層からは土師器坏（第84図1・2）・甕（第84図3・4）と、土師器坏・鉢・甕の小破片が出土している。

6～12層からは土師器甕（第84図5・6）、須恵器坏（第84図7）・蓋（第84図8）が出土している。この他、外面に段がつき、内面がヘラミガキ・黒色処理されている土師器坏や土師器鉢、長胴形の土師器甕などの破片とモモの種子が認められる。

⑥ 土壙（第14図、第3表）

検出された土壙は19基ある。確認面は⑨層または⑩層上面で、SK18土壙を除いて遺物は殆ど出土していない。平面形や規模に偏りは認められず、堆積土は黒褐色もしくは暗褐色のシルトを主体とするものが多い。これらの土壙の特徴については第3表にまとめた。

【SK18土壙】（第85図）

Ⅰ区西寄りの調査区南壁際で検出された。確認面は⑩層上面であるが、堆積土に灰白色火山灰層が認められることから更に上層から掘り込まれていた可能性がある。SI19住居跡と重複しており、これよりも新しい。土壙の南半が調査区外へ及び、また一部が灰白色火山灰降灰以降の河道によって壊されているため平面形は明らかでないが、長軸2.6m以上、短軸2.4m以上で不整形を呈するものと推測される。深さは65cmあり、底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は5層認められ、い

遺構番号	規模（長軸cm×短軸cm）	深さ（cm）	平面形	重複	堆積土	備考
SK18	260×240	65	不整形	SI19より新	緑黒色シルト主体	灰白色火山灰降灰以降の河川に壊される。堆積土上位に灰白色火山灰層を含む
SK20	170×90以上	45	不整な楕円形	SI15より新	黒褐色シルト主体	
SK28	80×65	10	不整な隅丸長方形	SI08より旧	黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト	
SK31	85×45以上	27	不整な楕円形？		黒褐色(10YR3/2)シルト	
SK56	75以上×70	20	不整形	SI05より新	黒褐色(2.5Y3/1)シルト	
SK58	90×80	30	不整な円形	SI43より新	黒褐色(2.5Y3/2)シルト	
SK59	270以上×250以上	22	不整形	SI52より新、SI53より旧	黒褐色シルト主体	
SK60	80以上×80	32	不整形		褐色(7.5YR4/4)シルト	
SK61	165×80以上	26	不整な長方形？		黒褐色(2.5Y3/1)シルト	
SK62	55以上×65	22	方形基調		黒褐色(7.5YR3/2)シルト	
SK63	100×100	22	隅丸正方形		暗褐色(7.5YR3/3)シルト	
SK64	80×75	17	不整な円形		暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト	
SK65	80×80	34	不整な円形		暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト	灰白色火山灰降灰以降の河川に壊される
SK66	120×50	20	不整形		黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト	薄い炭化物層を含む、カクランに壊される
SK67	85以上×100	17	不整な隅丸長方形		黒褐色(2.5Y3/1)シルト	
SK68	90×85	21	不整な円形		黒褐色(10YR3/2)シルト	
SK69	90×65	8	不整形		暗褐色(10YR3/3)シルト	最上部に薄い炭化物層を含む、新しい溝に壊される
SK70	65以上×65	23	長方形	柱穴に壊される	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト	
SK71	110×65	35	長方形	SI87より旧	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	

第3表　土壙一覧表

ずれも自然流入土とみられる。なお、2層は灰白色火山灰層である。

遺物は堆積土中から土師器坏（第85図1）・甕（第85図4）、須恵器坏（第85図2・3）が出土している他、土師器坏・甕の破片が少量認められる。

⑦ その他の出土遺物（写真図版37）

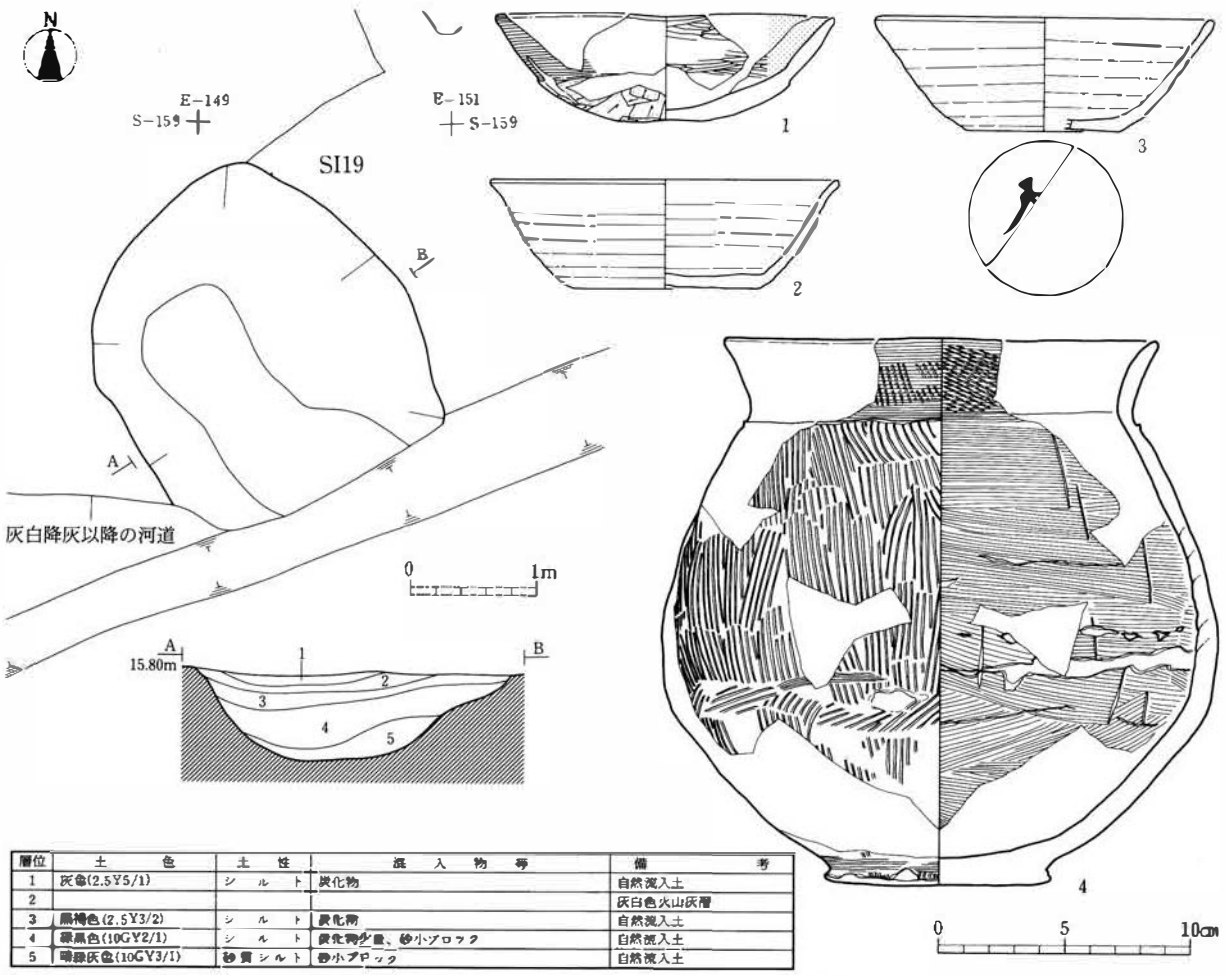
遺構確認の段階で出土した主な遺物には、ミニチュア土器（写真図版37−16･17）、土製紡錘車（写真図版37−18）、縄文土器（写真図版37−19）、石匙（写真図版37−20）などがある。

ミニチュア土器2点は、いずれも内外面の調整がオサエとナデである。写真図版37−17は口径3.0cm・底径2.8cm・器高4.7cmで、外面がやや摩滅している。

土製紡錘車は上端径3.0cm・下端径4.2cm・高さ1.9cm・孔径0.8cmで、表面はオサエ・ナデ後、ヘラミガキされている。

縄文土器は深鉢の破片とみられ、RL縄文が残る。

石匙は最大長7.4cm・最大幅2.5cm・最大厚0.7cmの頁岩製で、剥片を素材としている。



層位	土色	土性	混入物等	備考
1	灰色(2.5Y5/1)	シルト	炭化物	自然流入土
2				灰白色火山灰層
3	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	炭化物	自然流入土
4	緑黒色(10GY2/1)	シルト	炭化物少量、砂小ブロック	自然流入土
5	暗緑灰色(10GY3/1)	砂質シルト	砂小ブロック	自然流入土

No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	備考	写真図版	分類
1	土師器・坏	堆積土	外：ヨコナデ・手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理	(13.4)	−	(4.3)	1/4		34−8	A II b
2	須恵器・坏	堆積土	外：ロクロナデ→ヘラ切り　内：ロクロナデ	(13.9)	(7.2)	4.3	1/4		34−9	B II
3	須恵器・坏	堆積土	外：ロクロナデ→回転糸切り　内：ロクロナデ	(13.5)	(6.0)	4.5	2/5	底部に墨書「大」（写真有り）	34−10	B II
4	土師器・甕	堆積土	外：ハケメ→ヨコナデ・ナデ→ハケメ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ　底：木葉痕	(17.2)	9.0	21.6	2/5	外面の体部中位に最終調整のハケメ（写真有り）	34−11	B2a

第85図　SK18土壙および出土遺物

第V章　考察

第44・47次調査で発見した遺構には、掘立柱建物跡、柱穴列、竪穴住居跡、材木塀跡、溝跡、河川跡、小溝状遺構群、土壙などがあり、土師器、須恵器、木製品、土製品、石器などの遺物が出土している。

第44次調査区と第47次調査区は約600m離れており、44次調査区では建物を中心とする遺構編成で須恵器を多く出土しているのに対し、47次調査区では竪穴住居群を主体とする遺構構成で、出土遺物も土師器中心である。このような状況から、両区は遺跡内でも遺構の性格や遺物の年代観の異なる区域と考えられる。よって、調査区別に遺物や遺構の検討を行い、その概要をまとめることにする。

1．第44次調査区

① 出土土器の特徴と年代について

遺物の出土量が少なく、土器で図示できたものは、土師器坏1点、須恵器坏10点・稜埦1点・高台坏1点・壺2点である。この中で、遺構から出土しているものは須恵器坏4点・稜埦1点・高台坏1点・壺？1点と更に少なく、まとまった検出例もない。よって、出土土器の遺構ごとの比較や共伴関係を考えることは難しく、その特徴から個別に年代を検討するに止める。

土師器には破片資料を含めると坏・鉢・甕が認められ、製作にロクロを使用していないものと使用しているものがある。図示できた坏1点(第13図1)は製作にロクロを使用しており、東北地方南部の土師器編年の中で、最終型式にあたる表杉ノ入式(氏家：1957)に比定される。「表杉ノ入式」期はほぼ平安時代全般に対応するものと考えられているが、第13図1は底径が大きく、底部の切り離しはヘラ切りで、再調整に手持ちヘラケズリが施されるなど、9世紀中葉頃までの比較的早い段階の特徴を示している。

須恵器はやや出土量が多く、坏・稜埦・高台坏・壺・甕などの器種がみられる。しかし、器形全体の特徴が捉えられるのは坏5点(第13図2～6)のみである。第13図2～4は逆台形状を呈し、底部の切り離しが回転糸切りもしくはヘラ切り、第13図5・6は底径が小さく底部から内彎気味に立ち上がり口縁部で外傾・外反気味となる器形を呈し、底部の切り離しが回転糸切りである。前者の特徴は8世紀後葉頃、後者は9世紀前葉頃を中心とした時期にみられるものである。

② 遺構について(第86図)

検出された遺構には掘立柱建物跡、柱穴列、材木塀跡、溝跡、小溝状遺構群、土壙などがある。この中で主なものとして建物跡6棟、柱穴列2列、材木塀跡1条が挙げられるが、調査区の制約があり、規模が判明しているのは建物3棟(SB05・08が桁行3間・梁行2間、SB16が桁行2間・梁行2間)のみである。建物、柱穴列の属性については第4表にまとめた。

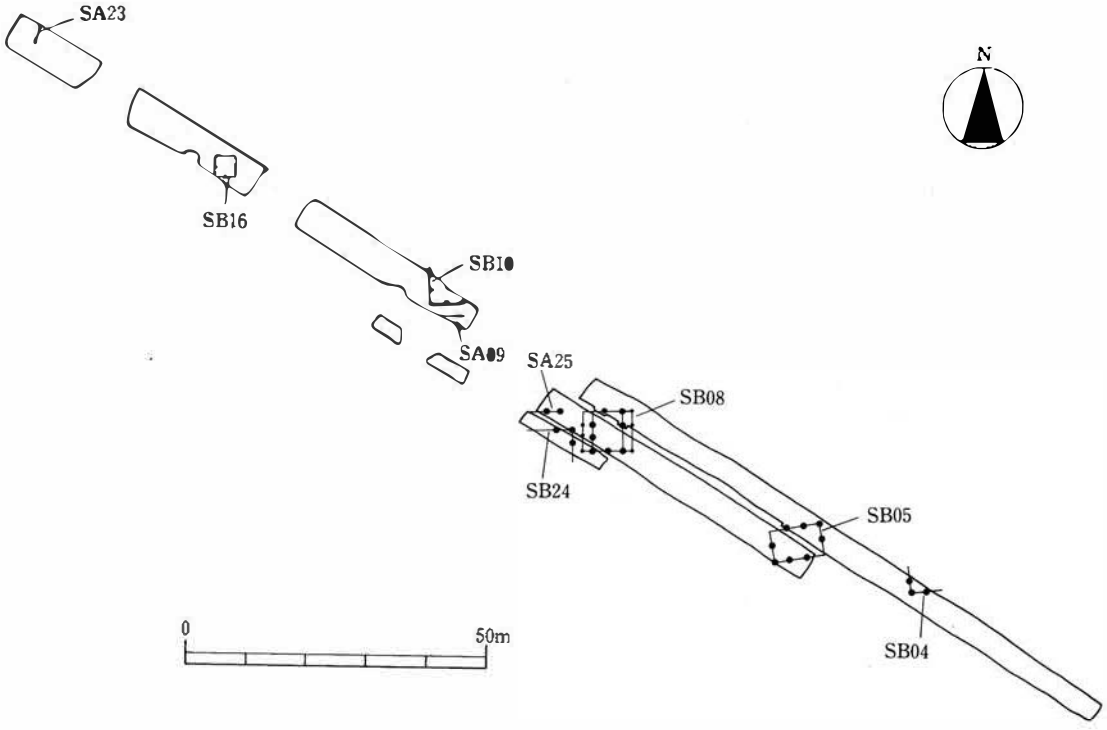
建物の分布をみると東西120m、南北70mの範囲で確認されており、更に四方、特に南北方向へ広がる可能性がある。建物の方向は北に対して10°西に振れるSB05を除き、ほぼ真東・北方向で、東西・

建物番号	規模(東西×南北)	方　向	柱間寸法(東西m・南北m)	柱穴平面形	柱穴の平面規模(cm)、深さ(cm)	柱痕跡の形状	柱痕跡の規模(cm)	備　考
SB04	1間以上×1間以上	N－2°－W	2.8・1.9	隅丸長方形	長軸90～100・短軸65～75、46～55		－	抜き
SB05	3間(8.3m)×2間(5.0m)	E－10°－N	2.6～2.9・2.3～2.7	正方形	一辺100～120、40～50	円形	直径20	抜き、礎板
SB08	2間(4.9m)×3間(6.3m)	N－2°－W	2.3～2.6・2.1	正方形	一辺80～100、40～60	円形	直径15～20	東西に廂、(抜取?)、柱痕跡中に灰白色火山灰粒
SB10	2間以上×2間以上	N－2°－W	2.7～2.8・2.2～2.4	正方形	一辺50～100、30～60	円形	直径15～20	柱痕跡中に焼土・炭化物粒
SB16	2間(3.2m)×2間(3.0m)	E－1°－N	1.5～1.7・1.4～1.6	隅丸方形基調	一辺30～40、15～25	円形	直径10～15	
SB24	1間以上×1間以上	N－1°－W	2.2・2.1	正方形	一辺50～70、40～60	円形	直径15～20	
SA09	東西2間以上	E－1°－N	1.8	隅丸正方形	一辺35～40、20～30	円形	直径10～15	
SA25	東西1間以上	E－2°－N	2.7	長方形	長軸90～100・短軸60～70、30	円形	直径15	

第４表　第44次調査区掘立柱建物一覧表

南北棟の違いはあるものの、大部分が真北を基準に配置されていることが窺われる。規模は柱間寸法が2.1～2.9m で、掘方の一辺もしくは長辺が60～120cm の大型のもの(SB04・05・08・10、SA24・25)と、柱間寸法が1.4～1.8m で、掘方が30～40cm の小型のもの(SB16、SA09)に分けられる。なお、SA09についてはSB10 の南廂となる可能性もある。大型の建物は柱穴掘方平面形が四隅にしっかりした角が付く正方形で、東西85m、南北50m の範囲に集中して分布する傾向にあり、廂が付くもの(SB08)も検出されている。また、建物には殆ど重複関係が認められず、建て替えが行われているものもない(SB08の廂部分を除く)。

SA23 材木塀跡はこれら建物群の西側で南北に延びる。確認されている西端の建物(SB16)との距離が30m 程あり、方向は北から東へ12° 振れている。SA23 の位置は遺跡の北西隅近くにあたり、これより西側の遺跡縁辺の地形は米軍が撮影した昭和23年の空中写真(写真図版１－１)を見ると、北側を東流する善川の氾濫原と考えられる一段低い部分が多く、以前から河川の影響を受けやすい場所であったことが窺われる。よって、SA23 の西側には当時も遺構が展開するスペースは少ないと思われ、方向がやや異なり、建物との距離もあるものの、この塀は東側に展開する建物群を画するものであった可能性が高い。なお、建物群の東側を区画する塀は検出されていないが、東側にあたるⅠ・II区の地山



第86図　第44次調査区掘立柱建物跡の配置

はローム層下の粘土で、上部が大きく削平されたと考えられることから、実際には存在していた可能性も残る。

以上の特徴をみると、44次調査区周辺は材木塀で区画された主に真北方向を基準に配置される大型の建物によって構成される区域と言える。建物群には方向が若干異なるものや配置から同時存在が難しいものもあるが、殆ど重複・建て替えが認められず、明確な時期変遷は捉えられない。本調査区の南西約650mに位置する第12・18・25・29次調査区では、材木塀や溝によって区画された内部で計画的に配された建物群が検出されている。建物の規模は44次調査区の大型のものよりも更に大きく、総柱の建物や床束・土居桁を伴う建物が主体で、8世紀後半から9世紀初頭頃の郡衙に付随する「倉庫院」の可能性が指摘されている。本調査区の遺構はこの官衙ブロックとは明らかに性格が異なるが、区画施設内に建物群が計画的に配置されている点では共通している。よって、出土遺物の年代観を加味すると、8世紀後葉から9世紀中葉頃の間で、比較的短期間利用された官衙に関連する施設と考えられる。

2．第47次調査区

① 出土遺物について

出土遺物の大半は土師器、須恵器の土器類である。ここでは、それらのうち図示できたものを中心に整理・分類し、組合せや特徴から年代について検討する。

（a）出土土器の特徴と分類

【土師器】

出土した土師器はいずれも製作にロクロを使用していない。器種には坏・高坏・盤・鉢・甑・甕・ミニチュア土器があり、量的には坏・甕が圧倒的に多い。

《坏》（第87図）

図示できたものは101点で、いずれも器形・器面調整の特徴が捉えられる程度残存している。内面の黒色処理の有無でA・Bに大別される。

A類：内面に黒色処理が施されているもので、器内外に段・沈線・稜などの区切りをもつものや屈曲をもたないものがある。口縁部形態は外反（a）・直線的もしくは内弯気味の外傾（b）・直立気味（c）・内傾（d）に細分される。内面の器面調整はヘラミガキであるが、部分的に前調整のヨコナデが残るものもある。また、内面の黒色が再酸化により脱色しているものも見受けられる。

Ⅰ．外面の中位もしくは下位に段が巡り、対応する内面にも軽い段や稜をもつものである。段は主に中位につき、底部は概ね丸底で、丸味が強いものが多い。口縁部形態には（a）・（b）・（c）がある。外面の器面調整は段以上がヨコナデ、以下がヘラケズリで、最終調整に軽いナデが施されているものも認められる。

Ⅱ．外面の中位もしくは下位に段または沈線が巡るが、内面には特に屈曲が認められないものであ

る。段・沈線は主に中位を巡り、底部は概ね丸底で、丸味が強いものが多い。口縁部形態には(a)・(b)がある。外面の器面調整は段・沈線以上がヨコナデ、以下がヘラケズリで、最終調整に粗いヘラミガキが施されているものも認められる。

III. 外面の中位に稜が形成されるものである。底部は丸底で、丸味が強いものが多い。口縁部形態には(a)・(b)・(c)・(d)がある。外面の器面調整は稜以上がヨコナデ、以下がハケメ・ヘラケズリで、最終調整に粗いヘラミガキや軽いナデが施されているものも認められる。

IV. 内外面ともに段・沈線・稜などの屈曲をもたないものである。底部は丸底のもの(1)と平底状のもの(2)がある。口縁部形態には(a)・(b)がある。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、これ以下がヘラケズリで、最終調整に粗いヘラミガキや軽いナデが施されているものも認められる。

B類：内面に黒色処理が施されていないもので、器形の特徴によって細分される。口縁部形態には外反(a)・直線的もしくは内弯気味の外傾(b)・直立気味(c)・内傾(d)のものがある。内面の器面調整はナデ調整であるが、その後部分的にヘラミガキが施されているものも少量ある。

I. 外面の上位に段もしくは稜がつき、段・稜以上の口縁部が短く屈曲して外反するもので、底部は丸底となる。段が巡るもの(1)と稜が形成されるもの(2)に細分する。外面の器面調整は段以上がヨコナデ、以下がヘラケズリで、最終調整に軽いナデが施されているものも認められる。

II. 外面の上位に稜が形成され、稜以上の口縁部が短く内傾もしくは直立気味に立ち上がるもので、底部は丸底となる。口縁部が短く内傾するもの(1)と短く直立気味のもの(2)に細分される。外面の器面調整は稜以上がヨコナデ、以下がヘラケズリである。

III. 外面の中位に段もしくは沈線が巡るものである。底部はわずかに平底状を呈するものもあるが、概ね丸底である。口縁部形態には(a)・(b)・(c)がある。外面の器面調整は段以上がヨコナデ、以下がヘラケズリで、最終調整に軽いナデが施されているものも認められる。

IV. 外面に段・沈線・稜などの強い屈曲が認められないものである。底部はわずかに平底状を呈するものもあるが、概ね丸底である。口縁部形態には(a)・(b)・(c)・(d)がある。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、これ以下は主にヘラケズリで、ハケメのものも少量ある。最終調整に軽いナデが施されているものも認められる。

V. 口縁部が「く」字状に屈曲し、対応する内面に稜をもつものである。1点のみの破片資料で、底部形態は不明である。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリである。

《高坏》

図示できた1点の他にも4点出土しているが、いずれも脚部の破片で坏部の形状は不明である。図示できたもの(第66図2)は脚上部が中実棒状、下部が円錐状となっており、その境界部分には透かし孔が4箇所認められる。脚部外面には軽いナデが施され、裾部の内外面はヨコナデされている。残存する坏底部内外面にはヘラミガキが認められ、内面の黒色処理は脱色していると考えられる。また、図示できなかった4点のうち2点は短い脚部に坏を乗せたものとみられ、坏底部の内面にはヘラミガ

キ・黒色処理が施されている。

《盤》

図示できたものは2点(第45図14・第48図7)ある。いずれも破片資料であるが、外面に段がつき、対応する内面に稜が形成されている。段より上の口縁部は短く外傾している。器面調整は外面の段以上がヨコナデ、以下がハケメ・ヘラケズリで、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

《鉢》 (第87図)

図示できた土師器の中で鉢として扱ったものは15点あり、この内器形の特徴が捉えられるのは14点である。器形の特徴から以下のように分類した。

A類：体部に膨らみをもつ椀状のものである。口縁下部に稜が形成され、稜より上の口縁が内傾するもの2点(I)と、口縁部が短く屈曲して外反するもの1点(II)に分けられる。底部は丸底もしくは平底状である。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデで、外面の体・底部はヘラケズリ・軽いナデ、内面はヘラナデ・ナデである。

B類：底部から体部にかけ半球状を呈し、口縁部が外反もしくは外傾するもので、5点ある。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデで、外面の体・底部はヘラケズリ後軽いナデが施されている。内面はナデ調整で、前段階のハケメが残るものも認められる。

C類：体部がやや丸味をもって立ち上がり、口縁部で外傾するものである。法量から大2点(I)・小1点(II)に分けられる。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデで、外面の体・底部はハケメもしくはヘラケズリ、内面はヘラナデ・ナデである。なお、内面には前段階のハケメが残るものも認められる。

D類：体上部に膨らみをもつもので、口縁部はそのまま内弯している。1点のみで、底部は平底状である。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデで、外面の体・底部はヘラケズリ、内面はヘラナデ・ナデである。なお、体部外面の上部にはヘラケズリ後、軽いナデが施されている。

E類：体下部に膨らみをもつもので、口縁部は直立気味に立ち上がる。1点のみで、底部は平底状である。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデで、体部外面にはハケメ後軽いナデ、底部にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが認められる。

《甑》

図示できたものは8点で、器形の特徴から2類に分けられる。

A類：胴部があまり膨らまず直線的に外傾しているもので、口縁部は更に開いて外傾もしくは端部で外反している。4点あり、底部まで残存するものはいずれも無底式である。また、頸部に沈線が巡るもの1点(第71図11)と体下端部に1箇所穿孔が認められるもの1点(第30図5)がある。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面がハケメもしくはヘラケズリ、内面がナデ・ヘラナデ・ヘラケズリで、内外面の最終調整にヘラミガキが施されているものもある。

B類：胴部にやや膨らみをもつもので、口縁部は端部で短く外傾もしくは外反している。4点認められ、底部形態の違いから無底式2点(Ⅰ)と単孔式2点(II)に細分される。II類の1点には頸部に軽い段が認められる。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部内外面がハケメ・ナデ・ヘラケズリで、内面の最終調整にヘラミガキが施されているものもある。

《壺》（第88図）

図示できたものは49点で、この内器形・器面調整の特徴が捉えられるのは39点である。器形の特徴と法量から細分される。法量では器高が30cm以上のものを大型、20～30cmのものを中型、20cm未満のものを小型とした。また、器面調整をみると胴部外面の最終調整はハケメ(a)・ヘラケズリ(b)・ナデ(c)・ヘラミガキ(d)に分けられる。口縁部の内外面はヨコナデ、胴部内面にはナデ・ヘラナデが施されており、前段階のハケメが残るものや最終調整として部分的なヘラミガキが認められるものもある。底部に再調整が施される場合はヘラケズリもしくはナデが殆どで、ハケメのものも3点ある。

A類：長胴形を呈するもので、胴部の形態によって細分される。

Ⅰ．胴下部にやや膨らみをもつ大型のもので、口縁部は外反もしくは外傾し、頸部外面に軽い段が巡る。胴部外面の最終調整には(a)・(c)がある。

II．胴部が張りの弱い縦長の楕円形を呈し、大型(1)・中型(2)・小型(3)の別がある。口縁部形態には外反、直線的に外傾し端部で外反、外傾、器厚が途中で厚くなりそこから端部に向かって短く外傾するものがあり、頸部外面に軽い段・沈線が巡るものも少量認められる。胴部外面の最終調整には(a)・(b)・(c)がある。

III．上半に胴部最大径をもち、以下はさほど屈曲なく徐々にすぼまりながら底部に至る大型のものである。1点のみで、口縁部は外傾し端部で短く外反している。頸部外面に段・沈線は認められない。胴部外面の最終調整はハケメである。

IV．胴部上半は円筒状を成し、下半はさほど屈曲なく徐々にすぼまりながら底部に至るもので、大型(1)・中型(2)の別がある。口縁部形態には大きく開いて外反、直線的に外傾し端部で外反、外傾するものがあり、頸部外面に段が巡るものも認められる。胴部外面の最終調整には(a)・(b)・(c)がある。

V．胴部が上端から徐々にすぼまりながら下部へ移行していく中型のもので、口縁部は外傾もしくは端部で外反しており、頸部外面に段・沈線は認められない。胴部外面の最終調整には(b)・(c)がある。

B類：球胴形を呈するもので、大型(1)・中型(2)・小型(3)の別がある。口縁部が残存するものは外反もしくは外傾しており、頸部外面に段を巡らすものが比較的多い。胴部外面の最終調整には(a)・(b)・(c)・(d)がある。

C類：胴部が算盤玉状を呈する小型のものである。1点のみで、口縁部は外傾し、頸部の相対する位置に2箇所穿孔が認められる。胴部外面の最終調整はヘラケズリである。

《ミニチュア土器》（第87図）

通常の土器より小形の土器をミニチュア土器として一括した。図示できたものは10点で、器面調整の特徴から2類に分けられる。

A類：器面調整がナデ・オサエのみのもので、3点ある。形状はいずれも坏状である。

B類：丁寧な器面調整が施されるもので、7点ある。口縁部にはヨコナデ、外面にハケメ・ヘラケズリ・ヘラミガキ、内面にヘラミガキなどの調整が残る。形状にはバラエティーがあり、坏状・壺状・コップ状のものが認められる。個々の法量にもやや差がある。

【須恵器】

器種には坏・盤・蓋・壺・甑・甕がある。

《坏》（第87図）

図示できたものは11点で、この内法量・器形の特徴が捉えられるのは10点である。底部が丸底状のもの(A)と平底のもの(B)に大別される。

A類：丸底状のもので、外面に段または稜が認められる。法量・器形の特徴によって細分される。

Ⅰ．外面に段が巡る小型(口径10cm 未満)のもので、器高が低いもの1点(a)と高いもの1点(b)がある。いずれも段より上の口縁部は直立気味に立ち上がり、再調整に回転ヘラケズリもしくは手持ちヘラケズリが施されている。

II．外面に稜がつく小型(口径10cm 未満)のもので、器高が低いもの1点(a)と高いもの1点(b)がある。いずれも稜より上の口縁部は直立気味に立ち上がり、再調整に回転ヘラケズリが施されている。

III．外面に段が巡る大型(口径10cm 以上)で、器高が低いものである。2点あり、段より上の口縁部は直立気味に立ち上がる。第75図1は丸底状のものに含めたが平底に近い。再調整には回転ヘラケズリもしくは手持ちヘラケズリが施されており、第84図7には内面にナデ・ヘラミガキも認められる。

B類：底部が平底のもので、法量・器形の特徴によって細分される。

Ⅰ．小型(口径10cm 未満)で器高が低く、皿状のものである。1点のみで、底部の切り離しは不明であるが、再調整に回転ヘラケズリが施されている。

II．大型(口径10cm 以上)で器高が高く、底部から若干内弯気味に外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に至るかもしくは口縁端部で外反しているものである。2点あり、底部の切り離しはヘラ切りまたは回転糸切りで、再調整は施されていない。第85図3の底部には墨書「大」が認められる。

《盤》

2点出土している。いずれも破片資料で、稜より上は短く外傾し、口縁端部が平坦に仕上げられて

いる。また、底部外面には再調整として回転ヘラケズリが施されている。なお、第59図２は底部の形態から高盤の可能性があり、内面に再調整の軽いナデも認められる。

《蓋》

４点出土している。内面にカエリをもつもの２点と内面にカエリをもたないもの１点があり、さらに１点は宝珠形のつまみ部分の破片である。カエリが大きく突出する１点(第68図２)は、口径が小さく、天井部に丸味がある。ロクロ調整後、天井部には手持ちヘラケズリが施されており、つまみは付かない。もう１点(第46図２)はカエリが小さい口縁部の破片で、天井部の状況は明らかでない。カエリをもたない１点(第84図８)は器高が高く、天井部に丸味があり、口縁部が直線的に外傾している。天井部には手持ちヘラケズリが認められ、つまみは付かない。

《壺》

図示できたものは５点で、内４点は口縁部のみの資料である。残り１点(第77図10)は小型の広口壺で、算盤玉状の体部から「く」字状に屈曲して、短く外傾する口縁に至る。底部は丸底で、体下部から底部にかけてヘラケズリが施されている。また、口縁部資料中の１点(第45図16)はその器形・法量からみて平瓶の口縁部破片の可能性があり、内外面には漆が付着している。

《甑》

１点(第78図４)出土している。口縁と耳の部分の破片資料で、口縁部には突帯が巡る。ロクロ調整後、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。

《甕》

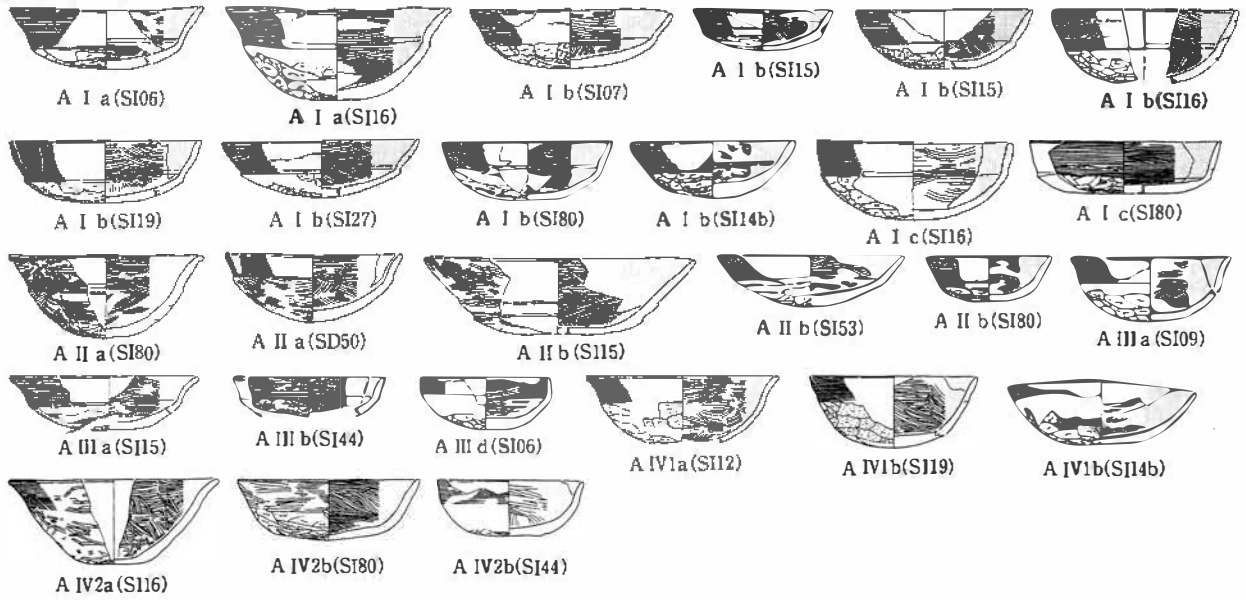
図示できたのは６点で、大部分が口縁部資料である。口径の法量をみると大(A)・中(B)・小(C)の別がある。なお、体部破片も出土しており、外面に平行タタキ目、内面に同心円アテ具痕が残るものが多い。

A類：口径が30cmを超えると推定される大型のもので、２点ある。１点(第75図４)は口頸部に櫛描き波状文と平行沈線文が施され、胎土が緻密で焼成も堅緻である。もう１点(第83図５)は櫛描き波状文が施され、頸部に補強帯(?)が認められる。いずれも口縁端部は四角く仕上げられている。

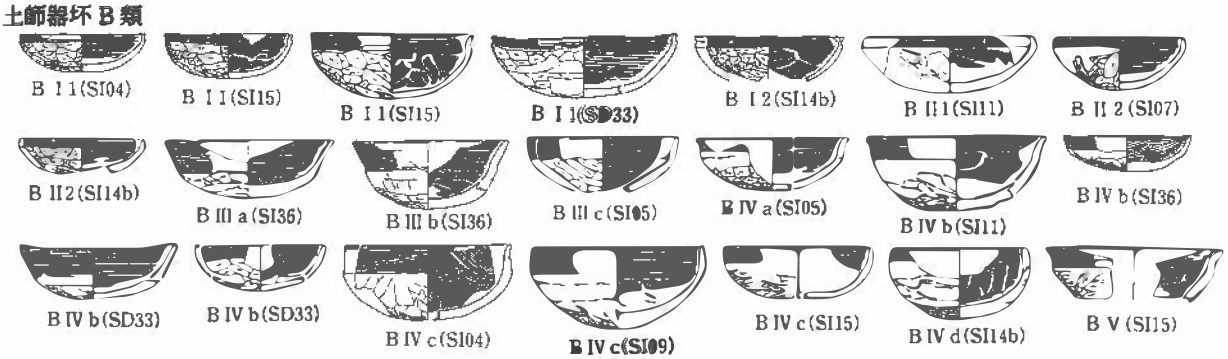
B類：口径20～30cmの中型のもので、３点ある。口頸部には文様をもたず、口縁端部の下端を引き出して口縁帯を形成しているものもある。頸部の内面にはナデが施され、体部の外面に平行タタキ目、内面に同心円アテ具痕が残る。

C類：口径20cm未満と推定される小型のもので、１点ある。第27図４はカマドの燃焼部支脚に転用された破片資料で、底部は丸底である。体部外面には平行タタキ目、内面には同心円アテ具痕が残る。

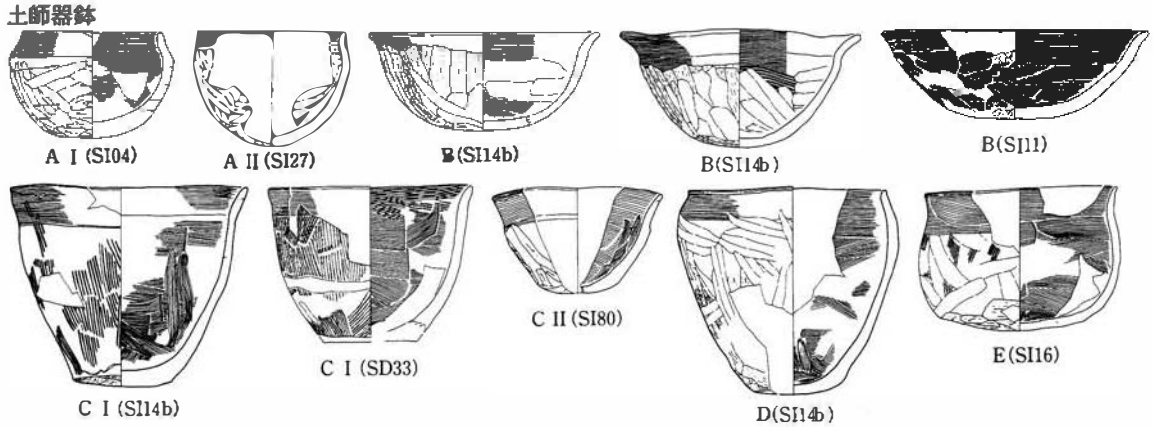
土師器坏A類



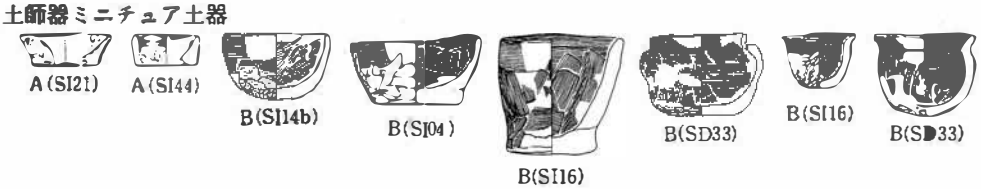
土師器坏B類



土師器鉢

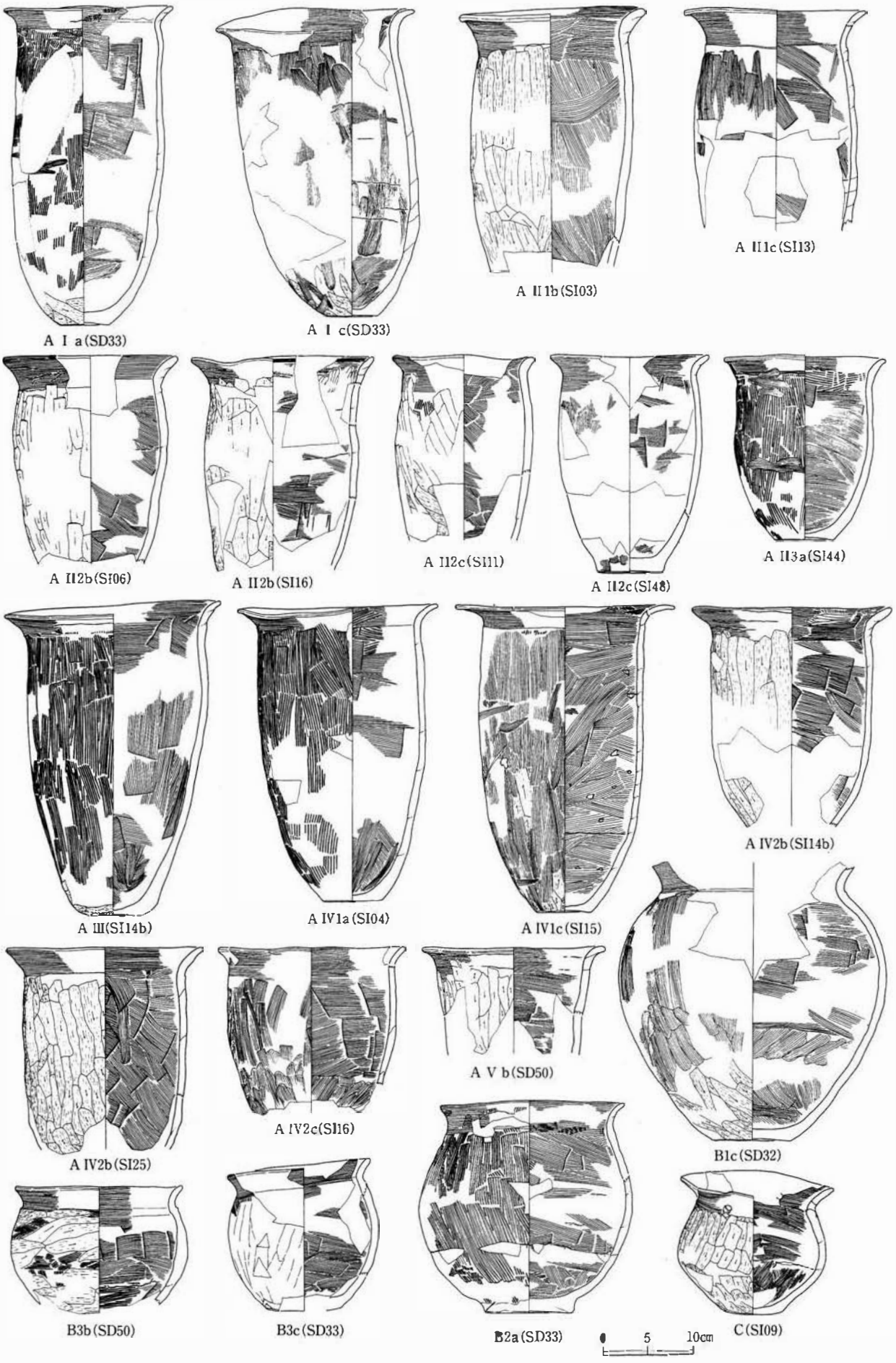


土師器ミニチュア土器



須恵器坏

第87図　土師器坏・鉢・ミニチュア土器、須恵器坏の各類



第88図　土師器甕の各類

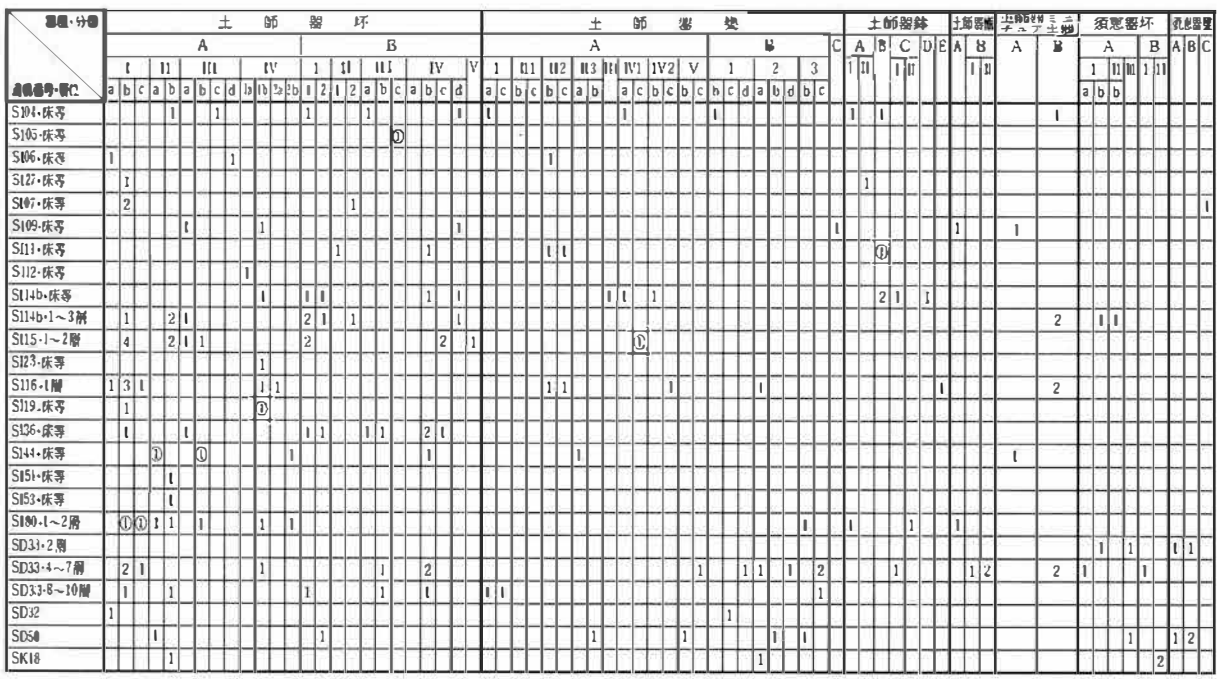
（b）出土土器の組合せ

前項で分類された土器各類の出土状況を図示資料からみると第5表のようになる。この表では共伴関係がある程度保証される住居床面や床面直上、カマド、貯蔵穴状ピット、柱抜き取り穴等の遺物もしくは堆積土の一括遺物を中心に掲載している。出土量の割には各遺構の共伴資料が少なく、各類型の共伴関係も貧弱なものが多いことがわかる。また、共伴する須恵器は少量で、土師器坏・甕を主体とした土器群である。このような中で比較的まとまった共伴・一括資料として、SI04・11・14b・36住居跡の床面等出土遺物、SI14b・15・16・80住居跡の堆積土一括遺物が挙げられる。SI14bの1～3層はいずれも焼土・炭化物・灰等を多量に含む人為堆積土で、廃絶後ある程度埋没した住居内に廃棄された土と考えられる。この中で灰を主体とする2層(最大厚2cm程)が比較的厚かったため3層に細分したが、1・3層中にも極薄い灰層は何枚も含まれており、また間層として自然流入土等が認識できないことからも本来は短期間に連続して形成された層と考えられる。よって、1・3層から出土した遺物を一括資料として扱うことにした。同様に、SI15・80の1・2層も土色の違いによって細分したものの、下層の自然流入土とは明らかに異なる連続堆積の人為堆積土(焼土・炭化物・灰等を多量に含み、廃絶後の住居内に廃棄された土)であることから出土遺物を一括して扱っている。

以下ではこれらの資料を中心に比較的量の多い土師器坏・甕の共伴関係を手懸かりとして、出土土器のまとまりを検討してみたい。

坏にはA・B類の二者がある。A類は内面がヘラミガキ・黒色処理されている宮城県をはじめ東北地方に広く分布する在地の土器であり、B類は内面が黒色処理されずナデ調整によって仕上げられている関東系土師器と呼ばれるもので、在地の土器とは区別される異系統の土器群である。

まずA類についてみると、AⅠ類もしくはAⅡ類がSI11・14b床面等出土遺物を除く各資料から出土しており、SI14b・15堆積土一括遺物では両類が共伴している。A類の中で主体を占めているのはこ



※　○印の数字は堆積土もしくは別層の遺物点数

第5表　土器各類の出土状況

の両類で、特にＡⅠｂ・ＡⅡｂ類に偏る傾向がある。ＡⅢ類はSI04・36床面等出土遺物、SI14b・15・80堆積土一括遺物に、ＡⅣ類はSI14b床面等出土遺物、SI16・80堆積土一括遺物に認められる。

Ｂ類ではＢⅠ・ＢⅣ類を含むものが多く、SI14b・36床面等出土遺物、SI14b・15堆積土一括遺物では両類が共伴している。また、ＢⅠ類は堆積土の遺物も含めてみるとSI11床面等出土遺物、SI16・80堆積土一括遺物を除く全て、ＢⅣ類はSI16・80堆積土一括遺物を除く全ての資料の共通項となる。ＢⅡ類はSI11床面等出土遺物、SI14b堆積土一括遺物のみに含まれる。ＢⅢ類はSI04・36床面等出土遺物に認められるが、Ｂ類の中で主体となるものではない。ＢⅤ類は1点のみの出土で、SI15堆積土一括遺物に含まれる。

甕をみると共伴資料が非常に少なく、土器群設定のための要素を抽出することが難しい。但し、図示した甕全体をみると大・中型では長胴形のもの(Ａ類)が主体で、球胴形のもの(Ｂ類)は少ない。小型にはバラエティーがあり、Ｃ類のような特殊な土器も出土している。全体としては大・中型の量が多く、中型の量がやや勝る。また、器形上の区別とは別に胴部外面の器面調整による違いが認められる。調整技法としてはハケメ・ヘラケズリ・ナデ・ヘラミガキがあり、それらが同一土器に併用される場合もあるが、最終調整で区別すると大型ではハケメのものがやや多く、中・小型ではヘラケズリ・ナデのものが多い。形態と器面調整の相関関係をみると、中型の長胴甕(ＡⅡ2・ＡⅣ2・ＡⅤ類)にはヘラケズリまたはナデが施されており、ハケメのものは認められないことや、胴部のヘラミガキは大・中型の球胴甕(B1・B2類)に限られることなどの要素はあるが、その共伴関係が希薄なため土器群を設定する要因となり得ない。

以上のように土師器坏・甕の各類型の共伴関係をまとまりのある資料を中心に検討したが、甕では土器群設定の要因となるまとまりが見出せなかった。また、坏をみてもＡⅠ・ＡⅡ・ＢⅠ・ＢⅣ類を含む資料が多く、それぞれの共伴関係を補完するとこれらの各類は全て共伴することがわかる。つまり、各資料は一つの土器群のまとまりとして捉えられる。

(c) 出土土器の年代について

土器群の主な特徴は、以下のようにまとめられる。

1．土師器を主体とする土器群で、これに少量の須恵器が伴う。土師器の中では坏・甕の量が多く、特に坏の量が卓越している。
2．土師器では製作にロクロを使用していない。
3．土師器坏には内面が黒色処理される在地の土器であるＡ類と内面がナデ調整によって仕上げられる関東系土師器のＢ類がある。
4．土師器坏Ａ類では、丸底で外面の中位に段をもち、段以上の口縁部が直線的もしくは内弯気味に外傾するもの(ＡⅠｂ・ＡⅡｂ類)が主体で、この中には段の位置がやや下方に下がり、段や底部の丸味が弱くなるものも認められる。また、外面に段・稜などの屈曲をもたないもの(ＡⅣ類)も含まれる。
5．土師器坏Ｂ類では、外面の上位に段もしくは稜が形成され、これ以上の口縁部が短く屈曲して外

反する丸底もの(B Ⅰ類)と外面に段・稜などの強い屈曲をもたない丸底のもの(B Ⅳ類)が多い。また、B Ⅰ類には口径10.0～11.8cmの小型のものと口径12.8～16.2cmの大型のものがあり、小型のものには法量の斉一性が窺われ、大型のものは比較的器壁が薄手である。

6．土師器甕は基本的に長胴形を指向しており、中型のものが多くなる傾向にある。頸部に軽い段をもつものともたないものがあるが、後者が多く、口縁部は外傾もしくは外反している。長胴のものでは、胴部が張りの弱い縦長の楕円形(A Ⅱ類)・胴部上半が円筒状のもの(A Ⅳ類)が主体で、胴下部にやや膨らみをもつもの(A Ⅰ類)は大型甕に限られる。また、体部外面の調整にはハケメだけでなくヘラケズリ・ナデが最終調整として多用されている。

7．この他に、土師器では鉢・甑・盤・ミニチュア土器が共伴している。

8．須恵器では、口縁部の器壁が薄い小型丸底状で、外面に段または稜が形成されている坏(A Ⅰ b・A Ⅱ b類)や蓋・壺などが共伴している。

このような特徴の土師器は東北地方南部の土器圏に含まれるもので、その土師器編年(氏家：1957)と比較すると、坏B類を除いては概ね栗囲式から国分寺下層式の中で捉えられるものである。

類似資料としては、一里塚遺跡3次調査区SI11住居跡(手塚他：1990)、名取市清水遺跡第V群土器(丹羽他：1981)、仙台市中田南遺跡第III群土器(太田：1994)、仙台市郡山遺跡SD35外郭大溝1層(木村他：1981・1985)、色麻町色麻古墳群第1・2段階(古川他：1985)、古川市名生館遺跡SI1255b住居跡(鈴木：1992)などの土器群が挙げられる。各資料については清水遺跡第V群土器・色麻古墳群第1段階に7世紀後半、郡山遺跡SD35外郭大溝1層・一里塚遺跡3次調査区SI11住居跡・色麻古墳群第2段階・名生館遺跡SI1255b住居跡に7世紀末から8世紀初頭、中田南遺跡第III群土器に7世紀末から8世紀前半頃の年代が与えられている。以下ではこれらの資料と対比しながら本土器群の位置付けを試みる。

まず土師器坏A類をみると、A Ⅰ・A Ⅱ類には清水遺跡第V群土器で特徴的な口縁部が外反するものが殆ど含まれず、段以上の口縁部が直線的もしくは内弯気味に外傾するものが主体で、色麻古墳群第1段階や郡山遺跡SD35外郭大溝1層・一里塚遺跡3次調査区SI11住居跡の土器と共通している。また、外面の段がやや不明瞭なものがある点や、外面に稜をもつ丸底のA III類・段や稜をもたないA IV類が共伴する点は色麻古墳群第2段階・郡山遺跡の土器群にみられる傾向と一致する。名生館遺跡SI1255b住居跡・中田南遺跡第III群土器とも共通する特徴が多いが、これらの土器群では有段坏の底部の丸味が弱まる形態のものが多い。

土師器坏B類は関東系土師器に属する。関東系土師器とは製作技法において東北地方で発展する内面のヘラミガキ・黒色処理技法を取り入れず、ナデ調整によって内面が仕上げられる坏を代表とする関東地方に起源をもつ土器群を指し、仙台・大崎平野を中心とした地域に7世紀から8世紀前半にかけみられるものである。今回の調査で出土した坏B類の胎土・焼成を観察する限り、坏A類を含む他の土師器と殆ど差異が認められず、関東地方からの搬入品は含まれていないと考えられるが、胎土分析を含む比較検討を行っていないため客観的証拠はない。なお、坏B Ⅰ類には色調がにぶい橙色で、他の土器よりもやや赤味が強いものが特徴的に存在している。これらの土器には意識的に胎土に鉄分

を多く含ませている可能性があり、留意しておきたい。

坏ＢⅠ類は、中田南遺跡第III群土器を除く全ての資料に類例が認められる。中でも、外面の上位に段がつくもの(ＢⅠ1類)と稜が形成されるもの(ＢⅠ2類)の両方が共伴する点は色麻古墳群第1段階と共通しており、その法量に大・小の別が認められる点では後続する色麻古墳群第2段階の要素を合わせもっている。色麻古墳群で小型とされるＢIII・BIII1類の法量をみると口径が11.0～12.0cmの間にまとまる傾向があり、本遺跡と同様の法量の斉一性が窺われる。このような法量の大・小の別は一里塚遺跡3次調査区SI11住居跡においても認められる。また、名生館遺跡SI1255b住居跡のII A類とも共通点が多いが、名生館遺跡の土器に平底のものが含まれることや口縁部の法量が大きくなる傾向にあることなど相違点もみられる。このような坏ＢⅠ類については各資料で関東地方各地の土器と比較検討が行われており、埼玉県北部を中心に分布する北武蔵の在地産暗文土器と器形面で類似することが指摘されている(鈴木：1992)。在地産暗文土器は畿内産暗文土器との併行関係から7世紀後半代の中で理解されており、2時期の変遷が考えられている(田中：1991)。

坏ＢII類には短い口縁部が内傾するもの(ＢII1類)と直立気味のもの(ＢII2類)があり、類似するものは郡山遺跡・名生館遺跡でも認められる。類例を関東地方に求めると、埼玉県上里町八幡太神南遺跡A地点1号住居跡・立野南遺跡2号住居跡・本庄市今井遺跡群G区5号住居跡(富田他：1985)などの出土土器に器形・器面調整の特徴が類似している。これらの資料では短い口縁部が内傾する坏と直立気味の坏が共伴している点でも本群と共通性があり、口縁部が内傾する坏を「北武蔵型坏」の祖型として捉え、その系統が直立へと連続的に変化することを指摘している。両類を含む土器群については7世紀後葉から8世紀初頭の中で位置付けされている。

ＢIII類は「須恵器坏蓋模倣坏」の系譜を引くものと考えられ、色麻古墳群にも認められる。ＢIV・ＢV類については類例を見出し難いが、上記以外の土器群でみると、志波姫町御駒堂遺跡第2群土器(小井川他：1982)の第6号住居跡などに代表されるまとまりの中に幾つかＢIV類と類似するものがある。

土師器甕についてはまとまった共伴例が少ないが、比較的量の多い清水遺跡第V群土器・一里塚遺跡3次調査区SI11住居跡・名生館遺跡SI1255b住居跡・中田南遺跡第III群土器でみると、組成における欠落はあるものの、器形の特徴は本群とほぼ同様の傾向を示している。但し、清水遺跡の胴下部に膨らみをもつ甕は本遺跡のものよりも張りが強い。また細部の器形に着眼すると、本群A III類(第42図2)の上半に胴部最大径をもち短めの口縁部が外反する特徴、A II2c類の1点(第35図4)にみられる口縁部の器厚が途中で厚くなりそこから端部へ向かって短く外傾する特徴は他の土器群には認められない。別に類例をあたると、御駒堂遺跡で関東系土器から構成される第2群土器に含まれる甕A II1a類の特徴と通じるものがある。なお、名生館遺跡でみられる東北地方北部の系統に属する甕は本群には含まれていない。

器面調整をみると、体部外面の最終調整にハケメだけでなくヘラケズリ・ナデが多用されている点で本群は他の土器群とやや異なる。ヘラケズリは一里塚遺跡3次・中田南遺跡で比較的多く認められるが、双方が多用され、ハケメと同等に施されている例は無く、本遺跡のこの傾向は出土した甕全体で観察しても変わらない。また、該期で在地の土器から構成される蔵王町塩沢北遺跡第1・2号住居

跡(小川：1980)の甕をみると体部外面の最終調整は殆どハケメである。県内では比較できる同時期の土器群が少ないため、はっきりしたことはわからないが、ヘラケズリ・ナデの調整技法は在地においては客体的な存在と考えられる。資料の充実している福島県中通り中・南部地域の甕をみても胴部外面の調整は基本的にハケメである。これに対して、関東地方の甕胴部の調整技法は古墳時代後期から末期にかけてヘラケズリが主体で、下野国ではナデ仕上げのものも多いことが指摘されており(山口：1998)、本群の器面調整の特徴を理解する上で注目される。更に、A II2b・A IV2b 類の各1点(第49図1・第42図4)に施されている口縁部内面の沈線や部分的なヘラミガキも在地の甕には認められない。

土師器では他に鉢・甑・盤・ミニチュア土器が共伴しており、甑は清水遺跡・一里塚遺跡3次・中田南遺跡、盤は中田南遺跡(註1)、ミニチュア土器は名生館遺跡に共伴例がある。鉢・ミニチュア土器の量が多いことも本群の特徴で、ミニチュア土器には器面調整がナデ・オサエのみのもの(A類)とハケメ・ヘラケズリ・ヘラミガキなどによって丁寧に仕上げられているもの(B類)に二極化される傾向が認められる。

須恵器をみると、坏A I b類は清水遺跡第V群土器・郡山遺跡SD35外郭大溝1層・中田南遺跡第III群土器に、坏A II b類は名生館遺跡SI1255b住居跡に類例が認められるが、細部ではやや相違点もある。坏の類例を生産遺跡に求めると福島県相馬市善光寺窯跡(福島他：1988)が挙げられ、本群のA I b類は善光寺の坏E、A II b類は坏Dに対応する。坏Eは善光寺3型式において特徴的な坏で、在地の土師器の影響を受けて生み出され、福島県や宮城県地方に分布する地域色の濃い器種と考えられている。坏Dは善光寺2・3型式にみられるもので、3型式において主流となる。この2類が共伴する善光寺3型式の土器群は、須恵器蓋を中心とする近畿地方の各編年との対比から中村編年III型式2段階、奈文研編年飛鳥IIIに当てられており、暦年代の検討を経て650年代～670年代の実年代が与えられている(註2)。本群の坏も同様に7世紀中葉を上限とするものと考えられるが、坏E・Dよりも小振りで、再調整に回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリが施される点、A I b類についてはより器高が高く、段直上のロクロ目が強く残る点など細部の形態や再調整に異なる特徴が認められ、宮城県域においてより地域色が強まったものの可能性がある。よって、善光寺窯跡の坏よりもやや新しく捉えておきたい。

以上、各器種での対比をみてくると本土器群の土師器は色麻古墳群第1・2段階、郡山遺跡SD35外郭大溝1層、一里塚遺跡3次調査区SI11住居跡との共通項が多い。清水遺跡・郡山遺跡は溝跡や遺物包含層の土器を基礎資料としていること、色麻古墳群は古墳の供献土器によって段階が設定されていること、中田南遺跡では住居資料を中心としながらも他の遺物が含まれることなど対比した各資料には厳密な意味での一括性や性格の違いといった問題点が含まれる。しかし、それを考慮しても本群の位置付けは変わらない。よって、総合すると7世紀後葉から8世紀初頭頃の年代が与えられる。これは須恵器の年代観とも矛盾せず、仮に関東地方の土師器編年に当てたとしても妥当なものと考えられる。

また、ここで取り上げた一括資料以外の土師器をみると、資料に含まれる器種・類型のいずれかと共伴関係にあり、器形・器面調整の特徴が大きく異なるものは認められないことから、本土器群の範

疇の中で理解できるものと考えられる。なお、留意するものとして鉢A II類(第26図5)と甕A IV1c類(第45図15)がある。鉢A II類の類例としては色麻古墳群第1段階にみられる椀B類が挙げられ、坏B I・II類同様、北武蔵地域に器形・器面調整の特徴が類似するものがある。甕A IV1c類の口縁部が大きく開いて外反する器形も在地の甕からは看取できない特徴である。

須恵器についても坏B II類の2点を除いて、対比した各資料に類例が求められるものが多く、土師器の年代観から逸脱するものではない。しかし、小型で天井部に丸味があり、内面のカエリが大きく突出する蓋(第68図2)や、器高が低い丸底状で外面に段もしくは稜が形成される小型の坏A I a・A II a類など単体としてみた場合、7世紀中葉頃まで遡ることのできる古い要素をもつ遺物も含まれている。なお坏B II類の2点(第85図2・3)については、その器形や底部の切り離しがヘラ切り・回転糸切りで再調整が施されていないなどの特徴から8世紀後葉から9世紀前葉頃のものと考えられる。

(d) 住居共伴・堆積土一括資料の土器組成について

住居共伴資料の土器組成に注目すると、SI11・14b床面等出土遺物には坏A類が殆ど含まれず、SI04・36床面等出土遺物には坏A・B類がほぼ対等(量比が1:1に近い)に共伴していることに気付く。これは資料単位で坏A・B類の出土量比に差があることを示しており、この量比の変化は在地の坏と関東系の坏の占める割合の変化に置換できる。坏以外の関東系土師器を識別することは難しく、この変化が土師器全体を通じて看取できるか検証するのは困難だが、甕でみるとSI11・14b床面等出土遺物には胴部外面の最終調整がヘラケズリ・ナデのものが多く、在地で認められない胴・口縁部の特徴をもつA III・A II2c・A IV2b類も含まれている。SI04・36床面等出土遺物ではハケメが胴部外面の最終調整の主体となっている。甕胴部の調整という限られた要素ではあるが、坏の組成比と呼応する変化が窺われる。また、SI16・80堆積土一括遺物には坏B類が殆ど含まれず、甕胴部の最終調整はハケメの占める割合が高い。

そこで、より正確な傾向を出すためにある程度まとまって出土している住居共伴・堆積土一括資料の図示土器に個体の別を認識できる口縁部破片を加えて坏A・B類の量比を第6表に示した。更に、甕胴部外面の最終調整についても個体の識別が可能な口縁から胴部にかけて残存する破片を加えて集

遺構番号・層位		SI04・床等	SI11・床等	SI14b・床等	SI14b・堆積土一括	SI15・堆積土一括	SI16・堆積土一括	SI36・床等	SI80・堆積土一括
土師器坏A類	実測点数	2	0	1	4	7(1)	7(1)	2	5
	破片点数	3	0	0	15	5	10	5	13
	計	5	0	1	19	12(1)	17(1)	7	18
土師器坏B類	実測点数	2	2	4	5	5	0	7	1
	破片点数	3	0	5	9	5	3	0	2
	計	5	2	9	14	10	3	7	3

※ ( ) 内は土師器鉢の点数

第6表 住居共伴・堆積土一括資料における土師器坏A・B類の集計

遺構番号・層位		SI04・床等	SI11・床等	SI14b・床等	SI14b・堆積土一括	SI15・堆積土一括	SI16・堆積土一括	SI36・床等	SI80・堆積土一括
ハケメ	実測点数	3	0	2	0	0	1	1	1
	破片点数	3	0	1	1	3	5	0	2
	計	6	0	3	1	3	6	1	3
ヘラケズリ	実測点数	1	1	2	0	0	1	0	1
	破片点数	1	2	2	0	1	1	0	0
	計	2	3	4	0	1	2	0	1
ナデ	実測点数	0	2	0	0	0	3	0	0
	破片点数	0	0	0	0	1	0	1	1
	計	0	2	0	0	1	3	1	1

第7表 住居共伴・堆積土一括資料における土師器甕胴部外面の最終調整の集計

計してみた(第7表)。表に明らかなように、各資料での坏A・B類の量比には大きな差があり、この差をよりどころとすると以下の3グループに編成できる。甕胴部の最終調整では坏ほど顕著な偏りは認められないが、ヘラケズリ・ナデとハケメの量比は坏の組成比と呼応して変化する傾向にある。つまり、坏A・B類の量比の変化は在地の土師器と関東系土師器の占める割合の変化を反映している可能性があり、7世紀後葉から8世紀初頭頃という短い期間の中で異なる二地域の技術で製作された土器が混在することを顕著に示している。

第1グループ：坏B類を主体とし、A類を少量含むもの。

…SI11・14b住居跡床面等出土遺物

第2グループ：坏A・B類がほぼ対等(量比が1：1に近い)に共伴しているもの。

…SI04・36住居跡床面等出土遺物、SI14b・15住居跡堆積土一括遺物

第3グループ：坏A類を主体とし、B類を少量含むもの。

…SI16・80住居跡堆積土一括遺物

なお、第3グループについては堆積土一括遺物のみから構成されている。堆積土一括遺物は埋没途中の住居内に一度もしくは数度に廃棄された土器のまとまりで、使用時の組成を反映していない可能性がある。しかし、廃棄された土師器に坏A類が含まれ、坏B類が殆ど含まれない理由を意図的もしくは偶発的なものとして理解するのは難しく、元々坏B類が含まれていなかったと考えるのが妥当と思われる。土器点数がやや少ないものの同じ組成を示す住居共伴資料がSI19・44・53住居跡に認められることも含め、このグループを設定した。

グループ間の相違は一定期間内での更に細かい時間差や居住者の出身地の違い、土器供給源の違いなどから生じた可能性があり、これらの要素が複合された結果とも考えられる。その起因を土器の検討のみから特定することは難しい。但し第1グループのSI14b床面等出土遺物と第2グループに含まれるSI14b堆積土一括遺物には、同一住居の共伴資料と堆積土一括資料の関係であるものの、両者の間に少なくとも厚さ5～20cmの自然流入土1層が挟まれており、時間差が存在する。よって、この2グループ間に前後関係が成立する可能性がある。

(註1) 一里塚遺跡3次調査SI11住居跡で、高坏とされている坏部破片(第18図9)とも器形・器面調整の特徴は類似する。

(註2) 善光寺窯跡の須恵器は木本元治氏(1989)によって再検討されており、本遺跡のＡⅠb・ＡⅡb類の類例を含むⅡB群は田辺編年陶邑Ⅲ期のTK46、奈文研編年飛鳥Ⅲに対比され、650年代～660年代前半頃の実年代が与えられている。いずれにしても7世紀中葉を遡るものではない。

② 遺構について

今回検出された遺構には、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柱穴列、材木塀跡、溝跡、河川跡、土壙、小溝状遺構群などがある。主な遺構は住居跡45軒とこれらを区画する材木塀跡2条(SA34a・b)・大溝跡1条(SD33)で、いずれも出土遺物の年代観から7世紀後葉から8世紀初頭頃のものである。

また、土壙は遺物が殆ど出土していないものの、SK18土壙を除き、基本層序⑨・⑩層より上層を起源とする堆積土を含まず、住居跡より古いものはSK28土壙のみで、これ以外については住居群とほぼ

同時期の枠内で理解できる。SK18 土壙は灰白色火山灰降灰以前のもので、出土遺物に須恵器坏ＢⅡ類が含まれる点から８世紀後葉から９世紀前葉頃の年代を考えておきたい。SD32 溝跡は SD33 溝跡よりは新しいが、遺物が少ないため時期を特定できない。建物跡・柱穴列も遺物は認められないが、住居跡と重複する場合はこれよりもすべて新しく、掘方埋土に基本層序⑥〜⑧層起源の黄褐色土ブロックを含むものが多い。よって、住居群よりも新しい時期の遺構と考えられる。なお、SB22 建物跡については柱穴埋土に⑥〜⑧層起源の黄褐色土ブロックが含まれず、住居群と同時期に機能していた可能性もある。小溝状遺構群は奈良・平安時代もしくはそれ以降の畑跡である。SD50 河川跡は⑨・⑩層上面で確認しているが、この部分では⑥〜⑧層が乱れており、実際の河川の落ちは更に上層に求められる。出土遺物は住居群と同時期のものであるが、集落廃絶後にできた小河川と考えられる。

本節では住居跡とその区画施設を中心に特徴をまとめ、同様の遺構が検出されている３次調査Ｃ区を含めて遺構の性格を考えてみたい。

（ａ）47次調査で検出された竪穴住居の特徴

47次調査では45軒の住居跡が検出されており、その概要は第８表に示すとおりである。以下、その特徴について項目立ててまとめる。

住居番号	平面形	規模(東西m×南北m)	面積(㎡)	主軸方向	埋め戻し土	床面直上の人為堆積土	床(貼床枚数)	主柱穴(柱痕跡の平面形・規模cm)	周溝(壁材の痕跡)	カマドの位置	貯蔵穴状ピット(位置)	主な重複関係
S101	方形基調	4.6〜×4.6	(23.0)	N−15°−E	×	×	掘方埋土	3(隅丸長方形・20×15)				(SI53)
SI02	正方形	3.5×3.7	13.0	N−14°−W	×	○	掘方埋土	無	カマド除き壁下全周(○)	北辺中央	無	SI03・27・30→SI02
SI03	正方形	5.3×5.5	29.2	N−19°−W	×	○(上位に炭化物層)	貼床2・掘方埋土	4(円形・直径12、礎板)	カマド除き壁下ほぼ全周	北辺やや東寄り→東辺中央	2(南東隅→旧カマド右脇)	SI30→SI03→SI02
SI08	方形基調	4.2〜×3.9〜	(16.4)			−	(掘方埋土)	4(円形・直径15)				SI30→SI02・03
SI04	正方形	6.0×6.1	36.6	N−33°−E	×	○	貼床1・掘方埋土	4(円形・直径15)	壁下ほぼ全周(○)	北辺中央	3(カマド脇もしくは北西隅)	SI05・06・25・27→SI04
SI05	方形基調	5.5×2.1〜	(30.3)	N−30°−W	○	×	貼床1・掘方埋土	4(円形・直径15)	壁下巡る(○)			SI06・25→SI05→SI04
SI25	方形基調	3.1×0.5〜	(9.6)		●	×	掘方埋土		壁下巡る(○)			SI06→SI25→SI04・06
SI06	方形基調	3.2〜×3.6〜	(13.0)	N−34°−W	○	×	貼床2・掘方埋土	3(円形・直径15)		東辺南寄り→東辺中央	1(旧カマド左脇)	SI27→SI06→SI04・05・25
SI27	方形基調	1.9〜×2.8	(7.8)		●	×	貼床1・掘方埋土		壁下巡る(○)			SI27→SI02・04・06
SI07	正方形	2.7×2.8	7.6	N−16°−E	×	×	貼床1・掘方埋土	無	北辺除き壁下巡る	北辺やや東寄り	1(カマド右脇)	SI10・29→SI07
SI08	長方形	5.4×4.5	24.3	N−15°−E	×	○(上位に炭化物層)	貼床1・掘方埋土	3(板材・20×10、下に礎石)	壁下巡る		2(北東隅→北西隅)	SI09→SI08
SI09	方形基調	3.3×2.8〜	11.0	N−29°−W	×	○	貼床1・掘方埋土	無	カマド除き壁下巡る	東辺南寄り	1(カマド右脇)	SI09→SI08
SI10	正方形	5.2×5.5	29.6	N−10°−W	×	○	掘方埋土	4(隅丸長方形・20×10)	カマド除き壁下ほぼ全周	北辺中央	2(北東隅→北西隅)	SI11→SI10→SI07
SI29	方形基調	4.1〜×3.7〜	(16.8)			−	(掘方埋土)	4(隅丸長方形・15×10)				SI29→SI07・10
SI11	方形基調	5.8×5.1〜	(33.6)	N−29°−W	×	○(上位に炭化物層)	貼床2・掘方埋土	4(丸材・直径20)	壁下巡る(○)	北辺中央→東辺中央	2(北東隅→旧カマド右脇)	SI26→SI11→SI10
SI26		−	−			−		4(円形・直径15)			1	SI26→SI11
SI12	方形基調	6.3×2.7〜	(39.7)	N−16°−W	×	○(上位に炭化物層)	貼床3	12(円形・直径20)	壁下巡る(○)	東辺中央		
SI13	正方形	4.8×5.1	24.5	N−27°−W	×	×	貼床1	4(円形・直径15)	無	北辺やや東寄り	無	
SI14a	方形基調	5.1×4.2〜	(26.0)	N−16°−W	○	×	貼床1・掘方埋土	3(板材・20×10)	壁下断続的に巡る	北辺中央		SI14a→SI14b
SI14b	方形基調	5.8×4.4〜	(33.8)	N−16°−W	×	×	貼床1・掘方埋土	3(板材・20×10)	カマド除き壁下巡る	北辺中央	1(北東隅)	SI14a→SI14b
SI15	正方形	5.7×5.6	32.0	N−32°−W	×	○(中位に炭化物層)	掘方埋土	4(隅丸長方形・13×10)	断続的に巡る			SI23→SI15
SI23	方形基調	4.5〜×1.7〜	−	N−8°−W	○	○(中位に炭化物層)	貼床1・掘方埋土	6(円形・直径12、礎板)	南壁下	東辺中央	1(カマド右脇)	SI23→SI15
SI16	正方形	4.6×4.6	21.1	N−30°−W	×	○	貼床1・掘方埋土	4(隅丸長方形・15×10)	壁下全周(○)	北辺中央→北辺やや東寄り	1(旧カマド右脇)	
SI19	方形基調	4.6〜×3.0〜	−	N−32°−W	×	○(中位に炭化物層)	掘方埋土→貼床1・掘方埋土	4(隅丸長方形・15×10)	壁下巡る(○)	北辺やや東寄り		
SI21	方形基調	5.0〜×1.6〜	−	N−4°−W	×	○	掘方埋土		壁下巡る(○)			
SI36	正方形	6.8×6.7	45.6	N−33°−W	×	×	貼床1・掘方埋土	4(板材・20×10、下に礎石)	壁下巡る(○)	北辺やや東寄り→東辺やや南寄り	無	SI37・55→SI36
SI55	方形基調	2.7×1.5〜	(7.3)	N−36°−W	○	×	掘方埋土	無	カマド除き壁下巡る(○)	東辺中央		SI55→SI36
SI37	正方形	2.9×2.8	8.1	N−36°−E	×	○(上位に炭化物層)	貼床1・掘方埋土	無	壁下断続的に巡る	無	無	SI38・39→SI37→SI36
SI38	方形基調	1.8〜×1.7	−	N−22°−W	×	×	掘方埋土	無		東辺		SI38→SI37・39
SI39	方形基調	4.8〜×4.1〜	−		×	×	掘方埋土	4(隅丸長方形・15×10)				SI38→SI39→SI37,(SI40)
SI40	方形基調	2.9×1.1〜	(8.4)	N−7°−W	○?	×	掘方埋土	無				SI41→SI40,(SI38)
SI41	方形基調	3.5×1.2〜	(12.3)	N−16°−W	○?	×	掘方埋土	無			1(南東隅)	SI41→SI40
S142	方形基調	4.9×1.9〜	(24.0)	N−20°−W	×	×	貼床1	2(隅丸長方形・20×10)	カマド除き壁下巡る(○)	北辺中央		SI43→SI42
SI43	長方形	4.2×3.1	13.0	N−50°−W	○	×	貼床1	無	壁下を3/4巡る(○)	北辺中央	1(カマド右脇)	SI43→SI42
SI44	正方形	5.0×5.0	25.0	N−41°−W	×	○(中位に炭化物層)	掘方埋土→貼床1・掘方埋土	4(隅丸長方形・20×10)	壁下巡る(○)	東辺中央→北辺中央	2(旧カマド左脇→北西隅)	
SI45	方形基調	6.2×2.2〜	(38.4)	N−42°−W	×	○(下位に炭化物層)	貼床2・掘方埋土	2(不明、礎板)	カマド除き壁下巡る(○)	北辺中央	1(カマド右脇)	
SI47	正方形	2.7×2.7	7.3	N−40°−W	×	×	掘方埋土	無	壁下全周	東辺中央	無	
SI48	方形基調	2.4〜×1.9〜	−	N−16°−E	×	×	掘方埋土		カマド除き壁下巡る(○)	北辺		SI49→SI48
SI49	方形基調	1.7〜×1.4〜	−	N−25°−E	○?	×	掘方埋土	1(隅丸長方形・15×10)	壁下巡る			SI49→SI48
SI51	正方形	5.2×5.4	28.1	N−35°−W	×	○(上位に炭化物層)	貼床1・掘方埋土	4(隅丸長方形・20×10)	壁下全周(○)	北辺東寄り→東辺中央	1(北東隅)	SI52→SI51
SI52	正方形	5.6×5.2	29.1	N−13°−E	○	×	掘方埋土	4(隅丸長方形・20×10)	カマド除き壁下巡る(○)	東辺やや北寄り	無	SI52→SI51
SI53	方形基調	5.1〜×3.7〜	−	N−28°−W	×	○(下位に炭化物層)	貼床2・掘方埋土	2(楕円形・長軸20)				(SI01)
SI54	方形基調	3.9×3.1〜	(15.2)	N−30°−W	×	○(上位に炭化物層)	掘方埋土	無?		東辺		
SI50	正方形	3.8×4.1	15.6	N−14°−W	×	○(中位に炭化物層)	貼床1・掘方埋土	4(円形・直径15〜20)	壁材痕のみが西壁下巡る	北辺中央	2(北西隅→カマド右脇)	

第８表　第47次調査区竪穴住居一覧表

【立地】

一里塚遺跡は吉田川左岸に形成された河岸段丘の最低位段丘面に位置しており、中でも47次調査区はその南端にあたる。米軍が昭和23年に撮影した空中写真(写真図版1-1)をみると、現在の吉田川流路の北側には段丘面よりも更に一段低くなる氾濫原が認められ、本調査区はこの部分に含まれている。調査区の南西隅では灰白色火山灰降灰以降の河道が一部確認されており、確認調査の成果から更に西側はその河道によって遺構が失われ、調査区東側は湿地状で遺構は検出されていない。竪穴住居群が展開した当時も周辺の流路は大きくかけ離れたものではなかったと考えられ、河川の影響を受けやすい立地であったことが窺われる。実際、遺構確認面の直上にあたる基本層序⑥～⑧層は河川の氾濫によって一度に堆積した可能性が強く、上部にある灰白色火山灰との関係からその堆積は比較的遺構期に近い時期と考えられる。

【重複】

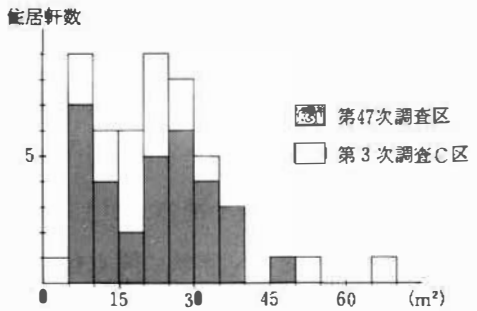
住居は調査面積約2,230m²の中で45軒検出されており、非常に密度が濃い。当然、重複関係にあるものが多く最大で5軒(SI27 → SI06 → SI25 → SI05 → SI04)の重複関係が認められ、同時存在が難しい住居も含めればそれ以上の変遷が予想される。

【平面形・規模・方向】

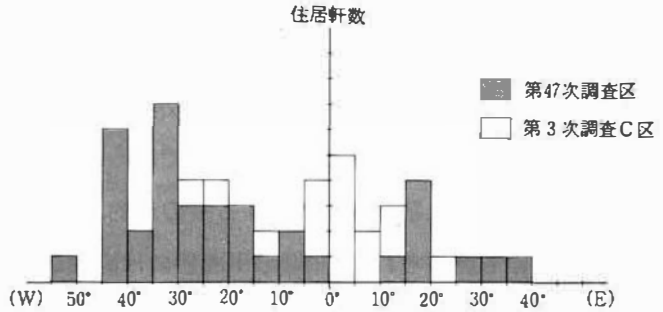
平面形態は全て方形を基調としており、明確に形態が把握できるものはSI45(長方形)を除いて正方形である。規模については第89図に住居平面積(註1)の分布を示してみたが、7.3～45.6m²と幅があり、面積の分布に大きなまとまりは見出せない。15m²未満の小型、15～30m²の中型、30m²以上の大型に分けると、小・中型のものが多く、7.3～9.6m²の小型の住居が目立つ。40m²を越えるのはSI36(45.6m²)のみである。方向は南北軸を主軸として第90図に表した。北から東西に大きく振れるものが主体で、真北方向を中心とした主軸をもつものは少ない。西側に振れるものが圧倒的に多い。

【堆積土】

堆積土をみると、床面直上に砂・粘土ブロック混じり層の認められる住居が20軒ある。この層は住居床面を覆うかたちでほぼ全体に分布しており、壁際がやや厚くなる。層の上・下もしくは層中には植物の繊維質が自然炭化したと考えられる薄い炭化物層が特徴的に含まれる(14軒)。炭化物層も住居



第89図　竪穴住居跡の面積



第90図　竪穴住居跡の方向

全体に広がって、壁際では床面から浮き上がるような堆積状況を示している。この床面直上堆積層については住居屋根に用いられた葺き土や周堤の一部、炭化物層については草葺き部分の痕跡の可能性が考えられるが、いずれも洪水による住居埋没を示す堆積層の可能性も残される。また、廃絶時もしくはそれ以後に埋め戻されている住居も13軒認められ、住居が多数重複する部分では古い住居が埋め戻される場合が多い。

【床・主柱穴】

床は基本的に掘方埋土の整地により構築されており、中央部を中心に貼床される場合が多い。SI03・06・11・12・(19)・(44)・45・53では貼床が2枚以上認められ、床面の補修・改築が行われていたと考えられる。主柱穴は全体が調査区内に掛かる住居では4個検出されており、平面形の対角線上やや隅寄りに位置している。柱痕跡は直径15～20cmの円形を呈するものが11軒、15～20cm×10cmの隅丸長方形のものが17軒で、後者を主体とする。後者の中には材自体が残存するもの(SI08・14a・14b・36)も認められ、主柱が割材であったことがわかる。割材を主柱とする場合、長辺を東西軸に揃えるものがやや多い(註2)。柱下には礎板(SI03・23・45)もしくは樹皮(SI08・36)が敷かれていた例もあり、柱の沈下防止を目的としていたと考えられる。なお、面積が15m²未満の小型の住居は基本的に主柱をもたない(註3)。

【周溝・壁材・壁柱穴】

周溝は殆どの住居で検出されており、多くはカマド部分を除いて壁の直下を巡る。周溝内の壁側に沿って幅5～10cmの壁材の痕跡が確認される場合が多く、周溝は主に壁材の据え方であったと考えられる。壁材の状況は把握しかねるが、SI80では痕跡が長さ15～30cmの単位で連続して並んでおり、割材を密に立て並べたものであった可能性がある。壁柱穴もしくはその可能性があるピットはSI12・16・53で検出されたのみである。

【カマド】

残存するカマドについて詳細な特徴を第9表にまとめた。

カマドが付設されるのは住居の北・東辺に限られ、主に北辺中央付近に構築されている。改築が認められる場合もあり、北辺→東辺に付け替えられるもの(SI03・11・36・51)が多いが、東辺→北辺(SI44)、北辺→北辺(SI16・19)、東辺→東辺(SI06)の付け替えもある。なお、カマドが付設されない住居(S137)も存在する。

カマドの構造をみると、住居壁に取り付くかたちで内側に付設されるものが殆どで、壁を掘り込んで燃焼部奥壁としているのはSI02・48のみである(註4)。燃焼部側壁は主に粘土質の土を積み上げて構築されており、黄褐色粘土を主体とするものが約30%ある。焚き口部分に構築材や補強材が1対据えられているものも認められる。側壁の平面形には両袖が平行するもの(I類)と「ハ」字状に開くもの(II類)があり、前者が約70%を占めている。燃焼部に支脚が残存する場合は、全て中央部に1個である。

住居番号	カマド平面形	構築土	焚き口構築材(袖心材)	燃焼部中心幅(cm)	焚き口幅(cm)	燃焼部奥行き(cm)	掛口の形状(面数)	掛口(幅cm×奥行きcm)	支脚	燃焼部と煙道の段差(cm)	備考
SI02	I(奥壁20cm)	灰褐色粘土質シルト		37.5	(42.0)	(48.0)	不整な円形(1)	36.0×36.0		有(5)	
SI03	I	黄褐色粘土	凝灰岩切石－左・右	53.0	60.0	66.5	不整な円形(1)	36.0×35.0	凝灰岩製支脚	(有)	
SI04				－	－	－	楕円形(1)	38.0×30.0			
SI06	I(新)	黄褐色粘土	凝灰岩切石－左・右	59.0	58.5	64.0	不整形(1)	36.5×32.0	凝灰岩製支脚	有(5)	
SI07	II	暗オリーブ灰色粘土質シルト		45.5	(51.0)	(43.5)	不整な円形(1)	33.0×33.0	須恵器甕	有(5)	
SI09	II	灰色土(砂ブロック含む)	(ピット－左・右)	46.5	(55.0)	(63.5)	不整な円形(2)	28.0×30.0	礫？(上面)	(有)	
SI10	I	暗灰黄色土(砂ブロック含む)	(土師器甕－左・右)	－	49.5	(59.0)	不整形(1)	(25.0×25.0)		(有)	
SI11	I(新)	黄褐色粘土		36.0	39.5	60.0	隅丸正方形(2)	27.5×27.0(下面)	土師器甕	(有)	
SI12	(II)	暗灰黄色土(砂・粘土ブロック含む)		－	－	－	不整形？(1)	－		(有)	
SI13	I	オリーブ褐色土(砂・粘土ブロック含む)	(土師器甕－右)	(33.5)	－	(69.0)	不整な円形(2)	22.5×26.0(上面)		無	
SI14b	I	黄褐色粘土	(土師器甕・円筒形土製品－右)	48.0	(58.5)	(77.5)	不整な円形(1)	30.0×35.5	土製支脚	無	
SI23	II	黄灰色粘土質シルト	凝灰岩切石－右	－	－	－		－			
SI16	I(新)	黄褐色粘土		39.0	(40.5)	(42.5)	不整形(1)	25.5×24.0		有(5)	
SI19	I(新)	灰黄褐色土(白色粘土ブロック含む)		50.5	(54.0)	45.0	不整形(1)	－		無	
SI36	I(新)	黄褐色粘土		19.0	(21.5)	(50.5)		－		(有)	
SI35		(黄褐色粘土)		－	－	－	不整な円形(1)	27.5×26.0	凝灰岩製支脚	(有)	
SI38			凝灰岩切石－左	－	－	－	不整な円形(1)	20.0×18.0		(有)	
SI42	II	黄灰色シルト	凝灰岩切石－左・(ピット－右)	49.0	(54.0)	55.0	不整形(1)	23.0×24.0		無	天井部の自然崩落土有り？
SI43	I	黒褐色シルト		39.5	(48.0)	(51.5)	不整形(1)	35.0×27.0		無	
SI45	I	黄褐色粘土(下地に褐灰色シルト)		69.5	(72.0)	(62.0)	楕円形(1)	28.0×18.5		有(5)	
SI47	I	灰色シルト		51.0	(54.0)	52.5	不整形(1)	20.0×12.0		有(3)	
SI48	I(奥壁35cm)	黒褐色シルト	凝灰岩切石－左・右	51.0	51.0	(53.0)	不整な円形(1)	19.5×18.0(上面)	凝灰岩製支脚	無	
SI51	II(新)	暗灰黄色粘土質シルト	(ピット－左・右)	48.0	(50.5)	(60.0)	不整な円形(1)	30.5×35.0		無	天井部の自然崩落土有り？
SI52	(II)	暗灰黄色シルト		42.0	(48.5)	(50.0)	楕円形(1)	30.0×42.0		無	天井部の自然崩落土有り
SI54	I	灰褐色粘土質シルト	凝灰岩切石－右	53.0	(55.5)	59.0	不整な円形(1)	19.0×22.0		有(10)	
SI80	I	暗灰黄色シルト	(ピット－左)・土師器甕－右	46.5	(47.0)	(55.0)	不整な円形(2)	－	白色粘土塊？	無	天井部の自然崩落土有り？

第9表　住居カマド属性表

カマド本体の天井部が残存する例はなく、内部の堆積土をみると、底面(火床部)は焼けて赤変し、その直上には機能時の堆積と考えられる焼土・灰・炭化物層が残るものが多い。更に上部には天井部崩壊土とみられる粘土質土のブロックが堆積しているものの、下面が焼けて赤変するブロックが面的な広がりで確認されたのはSI42・51・52・80のみで、他は焼土ブロックや炭化物と混入する状況を示す。また、この層自体が薄いものや燃焼部外へ大きく広がって分布するものも比較的多く、天井部が意図的に壊されていたことが窺われる。なお、SI42・51・80のカマドについても焚き口部構築材または袖心材が一部取り払われており、廃絶時に壊されていた可能性が残る。このような住居廃絶時のカマドに対する人為的な破壊の目的については、構築材の再利用や据え付けていた甕の取り外しなどが考えられる。煙道の長さは0.7～1.5mで、1.0～1.2mの間にまとまる傾向があり、改築される際は古い煙道は埋め戻されている。

【貯蔵穴状ピット】

貯蔵穴状ピットについて詳細な特徴を第10表に示した。

貯蔵穴状ピットは18軒で検出されており、位置はカマド両脇もしくは住居隅に限られる。カマドとの位置関係が判明しているものではカマド右脇に設けられる例が13軒と圧倒的に多い(註5)。また全体が調査区内に掛かる住居16軒の中で、貯蔵穴状ピットをもたないものは6軒(SI02・13・36・37・47・52)あり、比較的多いことが分かる。6軒の属性をみると住居規模は大型1軒・中型2軒・小型3軒、カマドも認められないのは1軒で、貯蔵穴状ピットの有無と住居規模の相関関係やカマドとの強いセット関係は窺われない。貯蔵穴状ピットが2個以上認められる住居も7軒(SI03・08・10・11・44・80は2個で、SI04は5個)あり、基本的に住居廃絶時の段階で機能していたもの以外はそれ以前に埋め戻されていたと考えられる。この内SI11・44ではカマドの改築に伴ってその位置が移動している可

住居番号	貯蔵穴番号	平面形	平面規模(長軸×短軸)	断面形	深さ(cm)	堆積土	出土遺物	備　考
SI03	K1	隅丸正方形	75×70	「U」字状	25	2(2層は炭化物層)		
SI03	K2	不整形	70×60	開いた「V」字状	40	1(人為堆積土)		
SI04	K1	隅丸長方形	60×50	皿状	15	1		
SI04	K2	隅丸長方形	73×56	「U」字状	33	2(人為堆積土)	層中から土師器ミニチュア土器1点	
SI04	K3	不整形	75×54	「U」字状	23	1(人為堆積土)		
SI04	K4	隅丸正方形	62×60	「U」字状	30	1(人為堆積土)		
SI04	K5	隅丸長方形	87×62	逆台形状	50	1(人為堆積土)		
SI06	K1	隅丸長方形	70×40	「U」字状	35	1		
SI07	K1	隅丸正方形	35×35	皿状	10	1	底面から土師器坏2点	
SI08	K1	円形	直径70	逆台形状	15	1		
SI08	K2	楕円形	100×70	「U」字状	50	3(最上層は人為堆積土)		
SI09	K1	隅丸長方形	70×50	皿状	10	1		
SI10	K1	隅丸長方形	70×45	「U」字状	20	2		
SI10	K2	楕円形	80×45	逆台形状	15	1(人為堆積土)		
SI11	K1	隅丸長方形	70×50	開いた「V」字状	25	2		
SI11	K2	隅丸長方形	55×40	逆台形状	30	1(人為堆積土)		
SI26	K1	不整形	(70×60)	「U」字状	(20)	1		
SI14b	K1	円形	直径60	逆台形状	25	2		木蓋(長さ80cm×幅40cm×厚さ3cmの板材2枚)、蓋据え方(95cm×80cmの長方形×深さ4cm)
SI23	K1	楕円形	90×55	「U」字状	20	1		
SI16	K1	正方形	60×60	逆台形状	25	2		
SI41	K1	楕円形	50×35	「U」字状	30	1		
SI43	K1	不整形	100×80	「U」字状	20	1		
SI44	K1	隅丸長方形	95×70	「U」字状	35	2	層中から土師器甕1点・不明土製品1点	
SI44	K2	隅丸長方形	75×65	「U」字状	15	2(上層は人為堆積土)		
SI45	K1	隅丸正方形	70×70	開いた「V」字状	20	1		木蓋(長さ85cm×幅15cm×厚さ2cmの板材5枚)、蓋据え方(一辺95cmの正方形×深さ4cm)
SI51	K1	隅丸長方形	85×65	逆台形状	20	1		木蓋(長さ60cm×幅20cm×厚さ2cmの板材残る)
SI80	K1	隅丸長方形	65×55	逆台形状	15	1		木蓋(長さ70cm×幅10cm×厚さ1cmの板材5枚以上)、蓋据え方(80cm×75cmの隅丸正方形×深さ4～8cm)
SI80	K2	隅丸正方形	55×50	逆台形状	20	1(人為堆積土)		

第10表　住居貯蔵穴状ピット属性表

能性がある。平面形は隅丸正方形・長方形を呈するものが約64%と主体で、断面形は「U」字状が約46%、逆台形状が約32%を占める。第94図をみると上場の長軸は60～75cm、短軸は50～70cm にまとまる傾向があり、深さは20～30cm のものが多い。長軸の方向はカマドと併存する場合、カマドが付設される辺に平行する事例が殆どである。貯蔵穴状ピットの上部に木製の蓋とその据え方となる浅い段が巡るもの(SI14b・45・51・80)も認められる。内部から遺物が出土したのは3例(SI04・07・44 の各 K1)で、底面からの出土例は SI07 のみである。

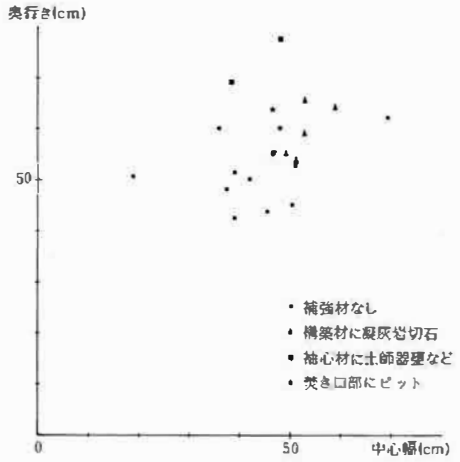
通観すると貯蔵穴状ピットは主にカマド右脇に位置し、その平面形や規模にもある程度の斉一性が窺われる。一般的にカマド導入以降の貯蔵穴状ピットについては、カマドの用途に関連する貯蔵施設であるという推定の下に、カマド脇に設けられると考えられている。古墳時代後期にはカマド右脇に位置する例が顕著となることは、関東地方では地域単位の集成・検討(小林：1997、高橋：1999など)から指摘されており、平面形・規模が定型化する傾向にあることも触れられている。このような現象は本遺跡を含めた宮城県内の遺跡を概観しても看取されるもので、具体的な資料の集成を経て言及すべきであるが、一地域を越えたより広範囲の共通性の可能性がある。

(b) 竪穴住居のカマド構築方法と蓋・蓋据え方をもつ貯蔵穴状ピットについて

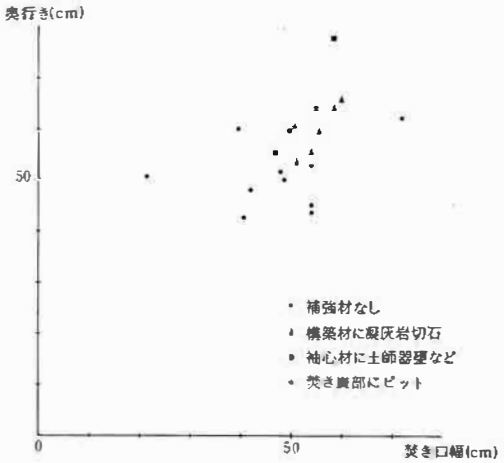
ここでは、項目別まとめた竪穴住居の特徴の中からカマド焚き口部の構築方法の違いと蓋・蓋の据え方をもつ貯蔵穴状ピットに注目して考察を加える。

【カマド焚き口部の構築方法の相違について】

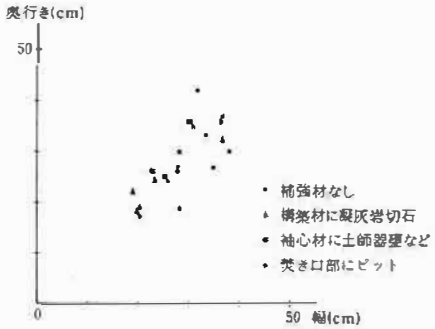
カマド焚き口部の構築方法に注目すると、カマド両袖の焚き口部に構築・補強材を据える構造のも



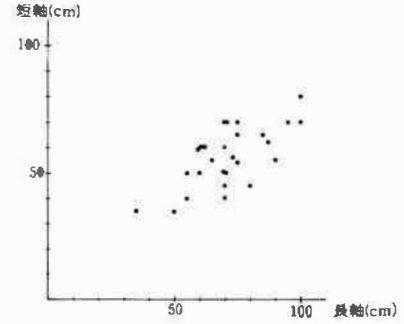
第91図　カマド燃焼部の奥行き・中心幅相関分布図



第92図　カマド燃焼部の奥行き・焚き口幅相関分布図



第93図　カマド焼け面の奥行き・幅相関分布図



第94図　貯蔵穴状ピットの短軸・長軸相関分布図

のが認められる。更に、その構築方法は土師器甕(SI10・13・80)、土師器甕と円筒形土製品(SI14b)、凝灰岩の切石(SI03・06・23・38・42・48・54)を利用する3種類に分けられ、いずれかを据えたとみられるピットが残る住居(SI09・51)もある。なお、焚き口上部の部材が使用時のまま残存するものはなかった。

焚き口構築法の相違がカマド本体構造の違いに起因する可能性について、燃焼部の形態・規模の比較から検討してみた。第9表から分かるように、焚き口部の構築方法とカマド平面形に関連性は認められない。また、燃焼部の中心幅と奥行き・焚き口幅と奥行き、焼け面の幅と奥行きの関係を表した第91～93図をみても両者の相関関係を示す要素は見出せない。逆に、全体的な傾向としてカマド燃焼部の平面形は奥壁に向かって直線的で、やや縦長となり、焼け面は同心円状に広がることが読みとれる。現状で焚き口が絞られているものも看取できない。燃焼部中心幅は45～55cm、焚き口幅は47～55cm、奥行きは50～65cmに収まるものが多く、焼け面の規模にはややばらつきがある。以上、47次調査の住居カマドをみる限り、焚き口構築法が異なっていても本体構造・規模に大きな違いは認められない。そこで、焚き口部の構築方法の相違が何に起因しているか個別に考えてみる。

《土師器甕を用いる構築方法》

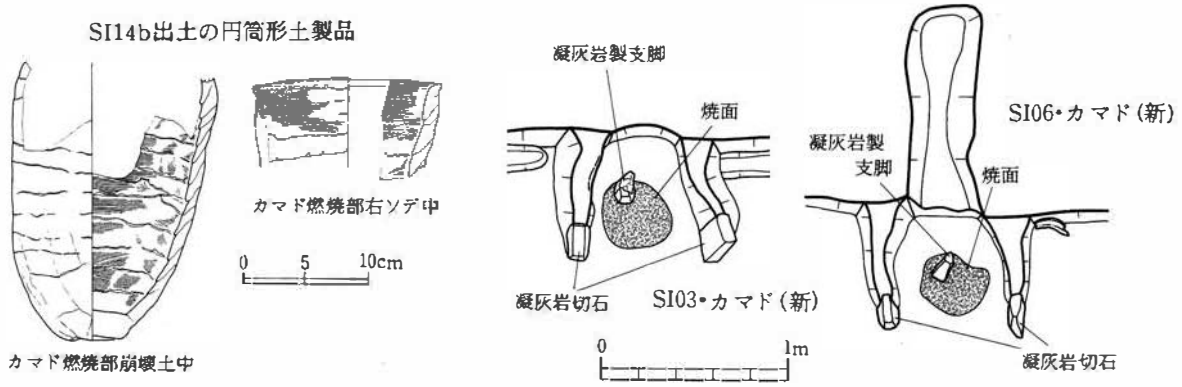
土師器甕を利用する構築方法では、甕は基本的に袖の内部に埋め込まれており、袖の心材として用いられていたことが分かる。このような利用法は宮城県内の住居カマドにおいて比較的多く認められるもので、カマド袖の焚き口部を補強する際の一般的な工法と考えられる。

《円筒形土製品を用いる構築方法》（第95図）

円筒形土製品はSI14b住居跡のカマド燃焼部右袖と燃焼部崩壊土中から各1点出土している。いずれも完形ではないが、円筒状の胴部をもち、作りが粗く、内面に輪積み痕を残す。外面にはナデ・ヘラケズリ、内面にはナデが施されているが、器面調整も雑である。なお、第41図11の外面は火ハネによる器面の剥落が著しい。検出状況からみて第41図10はカマド袖の心材、第41図11はカマド焚き口の天井部もしくは袖の構築材として用いられていたと考えられ、袖心材には土師器甕も併用されている。

このような特徴をもつ円筒形土製品は山梨・長野県を中心とする甲信地域に出土例が多く、両県の様相については西山克己氏が詳細にまとめている(1995・1996)。この論考によると、円筒形土製品は6世紀末から7世紀全般にわたって多用され、山梨県では東八代郡域、長野県では千曲川中流域を中心に松本平付近に分布域のまとまりが看取される。また、使用に関しては全てに共通してカマドの構築材として作られ、カマドの天井部材・袖心材・煙道に用いられた可能性が指摘されている。また、北陸・関東地方にも類例がみられ、関東地方では栃木・群馬県など北関東での出土事例が多く、栃木県内のものについては山口耕一氏(1998)が集成している。それによると、6世紀後半から8世紀初頭の遺構から出土しており、出土地点は県中部周辺にまとまる傾向がある。用途については山梨・長野県同様カマド構築材の可能性があり、当時の同地域(下野国)では非主体的なハケメ調整を施す土師器甕と共伴する事例が多いことも指摘されている。

東北地方での類例をみると、宮城県内では管見の限り仙台市南小泉遺跡第22次調査区SD3溝跡3層(斎野：1994)から出土した2点のみである(註6)。外面の調整にヘラミガキが施されている点で本遺跡のものとは異なるが、受熱による器面の剥落が認められることから本来は住居のカマドで使用されていた可能性があり、用途は共通するものと思われる。なお、SD3溝跡は郡山遺跡Ⅰ期官衙と関連した集落を区画する大溝で、関東地方に出自をもつ土器が多数出土している。他県では福島県郡山市東丸山遺跡(鈴木：1987)・福島市岩崎町遺跡(児玉他：1992)・保原町桐ノ木遺跡(土沼：1992)、秋田県能代市十二林遺跡(高橋：1989)、青森県八戸市根城跡(宇部他：1983)などに類例がみられ、住居のカマドもしくはその周辺からの出土で、カマド構築材であった可能性が強い。いずれにしても東北地方では出土例が少ない。山梨・長野県の甲信地域を中心に栃木・群馬県など北関東まで出土頻度が多く、この地域に出自が求められる遺物である。よって、これをカマド部材・補強材として用いる構築方法につ



第95図　円筒形土製品と焚き口構築材に凝灰岩切石を用いるカマド

いても同地域と強い繋がりがあると考えられる。

《凝灰岩切石を用いる構築方法》（第95図）

凝灰岩の切石をみると、燃焼部内側にあたる面が焼けて赤変もしくは剥落しており、強く火を受けていたことが窺われる。また据えられた状態を観察すると、側壁として積み上げられた粘土質の土は立て並べた1対の切石の外面・後面に張り付くかたちで残存しており、凝灰岩がカマド袖の心材や焚き口部手前の押さえではなく、焚き口部自体を構成する部材であったことがわかる。SA34b材木塀跡の柱切り取り溝からは長さ43.0cm以上×幅14.0cm×厚さ10.5cmで、一面が火を受け煤けた凝灰岩切石1点が出土している。これは住居カマドの焚き口部構築材が廃棄されたものとみられ、その大きさから袖材ではなく天井部材と考えられる。失われているものの上部にも切石を渡して焚き口部が「Π」字状に組まれていた可能性もある。焚き口の規模を切石の残存状態が良好なSI03・06から推定すると、内法で幅約60cm・高さ30～35cm程度である。また、凝灰岩を焚き口部部材とするカマドで支脚が残存する場合は全て凝灰岩を加工したもの(SI03・06・48)であり、そのセット関係も窺われる。

そこで凝灰岩切石を焚き口部部材として利用したカマド構築例を当たると、石材が入手し易い地域が多いにも拘わらず宮城県内にはあまり認められないもので、仙台市郡山遺跡SI1267(斎野：1990)、志波姫町御駒堂遺跡第14・20号住居跡(小井川他：1982)などにみられる程度である(註7)。

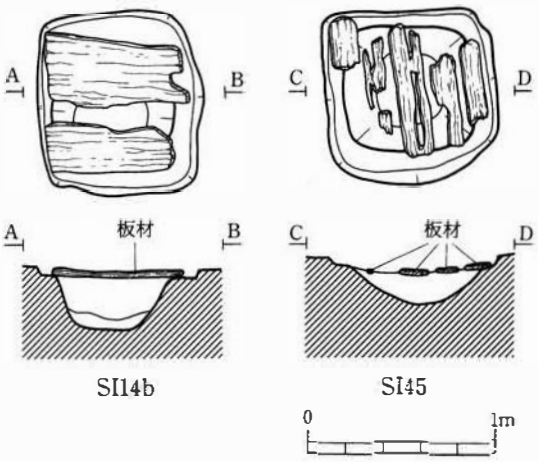
他地域に類例を求めると、茨城県東海村石神外宿B遺跡(渡辺：1983)・那珂町森戸遺跡(西野他：1990)・ひたちなか市三反田下高井遺跡(田所他：1998)、福島県東村佐平林遺跡(目黒他：1978・大越他：1980)・石川町薬師堂遺跡(大越他：1983)・天栄村山崎遺跡(菅原他：1992)など茨城県中央部の沿岸地域や福島県中通り中・南部地域で多く確認されている(註8)。石材に恵まれた古墳時代後期の北関東では凝灰岩に限らず、切石や自然礫を焚き口部部材や支脚とするカマド構築法が多用されることが指摘されており(谷：1995)、山梨・長野両県では主体的な構築法とされている(加藤他：1999)。逆に、南関東では石を利用する構築例が客体的であることも示唆されている(青木：1999、大上他：1999)。

以上のようにカマドの構築方法で、焚き口部部材として凝灰岩切石を用いる例は同時期の宮城県内には殆どみられない特殊なもので、北関東や福島県中・南部に類例が多く、この地域と系統的な繋がりをもつ可能性がある。本遺跡を含め郡山遺跡や御駒堂遺跡で関東系土師器が出土している点も興味深い。

【蓋とその据え方をもつ貯蔵穴状ピットについて】（第96図）

本項では貯蔵穴状ピットの上部に木製の蓋とその据え方が残るもの(SI14b・45・51・80)に着目した。蓋には幅40cm以上・厚さ3cm程の板材2枚を用いる例(SI14b)と幅10～15cm・厚さ1～2cmの板材を数枚並べる例(SI45は5枚、SI80は5枚以上)があるが(註9)、残存状況ではこれらの板材が繋がれていたかどうかは分からず、把手も認められない。また、蓋の据え方はSI51以外で検出されており、貯蔵穴状ピット本体部分の周囲が床面から一段掘り下げられて、幅5～15cm、深さ4～8cmの浅い段状にこれを取り巻く構造である。平面形態は隅丸正方形もしくは長方形を呈している。

このような蓋と蓋の据え方をもつ構造の貯蔵穴状ピットは、管見の限り同時期の宮城県内では検出されていない。但し、御駒堂遺跡第12号住居跡の土壙aは周囲に段状の浅い窪みが巡っており、蓋の据え方をもっていた可能性もあると思われる。周辺地域にも類例は殆ど認められないが、群馬県吉井町多比良追部野遺跡(石守：1997)や栃木県小山市八幡根遺跡(飯塚他：1997)・野木町清六III遺跡(上原他：1998・1999)・上三川町磯岡遺跡(塚原：1999)、茨城県つくば市熊の山遺跡(新井他：1997)・谷和原村前田村遺跡(小林他：1999)など同時期の北関東では類似した構造の貯蔵穴状ピットが多く検出されている。いずれの遺跡でも蓋材は残存しないが、本体の周囲を隅丸正方形・長方形に巡る段状の窪みが多くの住居で確認されており、蓋の据え方と考えられている(註10)。

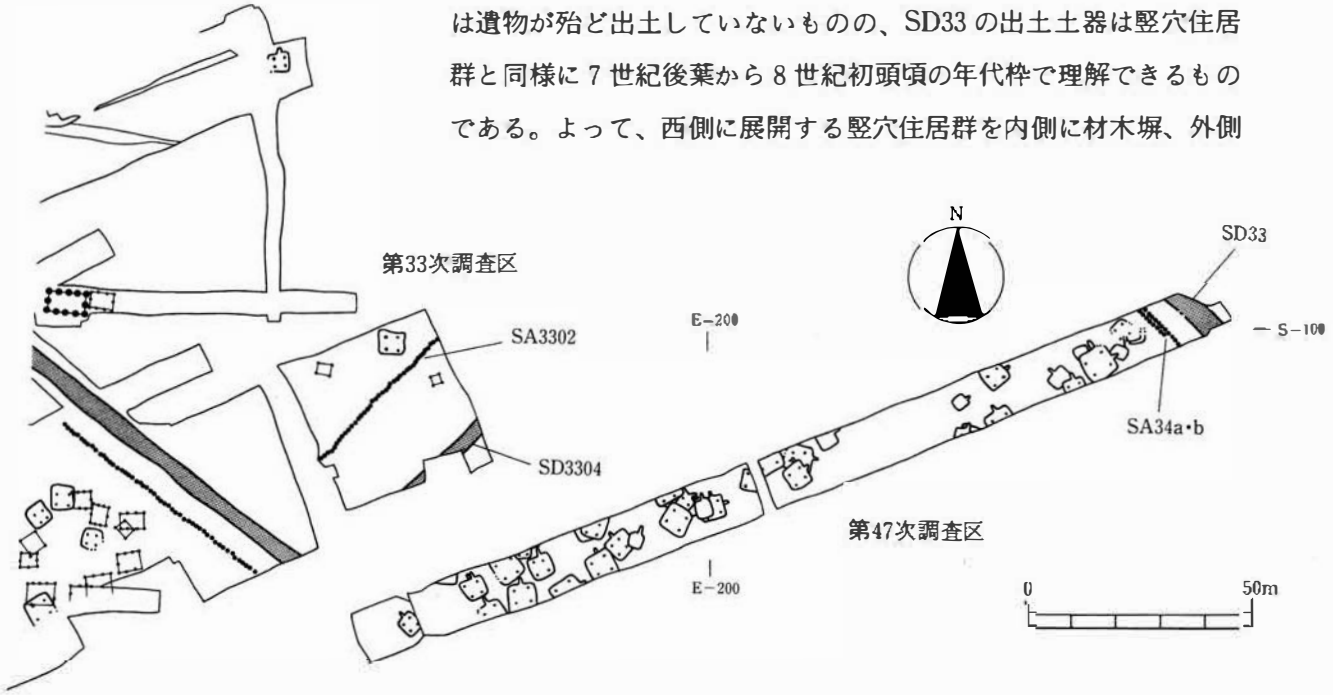


第96図　蓋とその据え方をもつ貯蔵穴状ピット

(c) 区画施設と内部の様相

【第47次調査区の状況】

47次調査で検出された区画施設としてはSA34a・b材木塀跡とSD33溝跡が挙げられる(第97図)。SA34a・bとSD33はN−43°−Wの方向で平行して南北に延び、心々間隔が約7.4m・7.0mある。両者の間では同時期の遺構が検出されていないことや、SA34の改築に伴うと考えられる溝浚いがSD33で確認されていることも含め、これらは一対の区画施設と考えられる。施設の両側をみると、西側には竪穴住居群が密集して分布するが、東側は湿地状で遺構が検出されていない。また、SA34a・bからは遺物が殆ど出土していないものの、SD33の出土土器は竪穴住居群と同様に7世紀後葉から8世紀初頭頃の年代枠で理解できるものである。よって、西側に展開する竪穴住居群を内側に材木塀、外側



第97図　第33・47次調査区遺構配置図

に大溝を配して区画していると考えられ、その機能期間は住居群の存続期と対応すると推定される。

区画内部はほぼ竪穴住居群のみで構成される点に最大の特徴がある。検出された住居跡は45軒で、各住居の機能期間は出土遺物の年代観から7世紀後葉から8世紀初頭頃の間に収まると考えられる。住居跡には重複するものや配置から同時存在が難しいものも多く、同時存在を捉えて段階を設定するならば数段階の変遷が予想されるが、遺物の検討から時期差を抽出することはできなかった。しかし、共伴資料の土師器坏A・B類の組成比の相違から3つのグループに分けられる。住居機能時をある程度反映すると考えられる床面や床面近くの土器を中心に、土師器坏A・B類の実測・口縁部破片点数の集計値を示した第11表を基にすると、帰属グループが判明しているのは下記の住居である。帰属グループを判断する際、住居に共伴する土師器甕胴部外面の最終調整(第12表)についても検討を加えた。

第1グループ：SI(03)・05・11・14b・(54)住居跡

第2グループ：SI02・04・(07)・(09)・36・45・51住居跡

第3グループ：SI19・44・53住居跡

※（　）付のものは土師器坏の点数が少なく、やや帰属グループが不明瞭なもの

このグループ間で住居の特徴を比較すると、その配置や規模に偏りは認められず、基本的な構造も共通している。方向も区画施設と同様に北から西へ振れるものが殆どである。但し、カマドの構築方法で焚き口部部材や支脚に凝灰岩切石を使用する例と袖心材などに円筒形土製品を用いる例は第1グループに限られ、このグループとの強い繋がりが窺われる。貯蔵穴状ピットに蓋とその据え方がつくものは第1・2グループに認められるが、第3グループでは検出されていない。なお、SI14bでは円筒

住居番号		SI01	SI02	SI03	SI30	SI04	SI05	SI25	SI06	SI27	SI07	SI08	SI09	SI10	SI29	SI11	SI26	SI12	SI13	SI14a	SI14b	SI15	SI23
土師器坏A類	実測点数	0	0	1	0	2	0	0	2	1	2	0	2	0	0	0	0	1	1	0	1	1	1
	破片点数	0	5	0	0	3	0(1)	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	計	0	5	1	0	5	0(1)	0	2	2	2	0	2	0	0	0	0	1	2	0	1	1	1
土師器坏B類	実測点数	0	0	1	0	2	1	0	0	0	1	0	1	0	0	2	0	0	0	0	4	0	0
	破片点数	0	5	2	0	3	2	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	1	0	5	0	0
	計	0	5	3	0	5	3	0	0	0	1	1	1	1	0	2	0	2	1	0	9	0	0

住居番号		SI16	SI19	SI21	SI36	SI55	SI37	SI38	SI39	SI40	SI41	SI42	SI43	SI44	SI45	SI47	SI48	SI49	SI51	SI52	SI53	SI54	SI80
土師器坏A類	実測点数	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1(1)	0	1	0	2
	破片点数	0	1	1	5	0	1	0	1	0	0	0	0(1)	2	4	1	0	0	3	1	2(1)	0	0
	計	0	2	1	7	0	1	0	1	0	0	0	0(1)	3	4	1	0	0	4(1)	1	3(1)	0	2
土師器坏B類	実測点数	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	破片点数	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	2	0	0	1	0
	計	1	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	2	0	0	1	0

※（　）内は土師器高坏の点数

第11表　住居共伴資料における土師器坏A・B類の集計

住居番号		SI01	SI02	SI03	SI30	SI04	SI05	SI25	SI06	SI27	SI07	SI08	SI09	SI10	SI29	SI11	SI26	SI12	SI13	SI14a	SI14b	SI15	SI23
ハケメ	実測点数	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0
	破片点数	0	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	計	0	0	0	0	6	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	3	0	0
ヘラケズリ	実測点数	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	2	0	0
	破片点数	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	0	2	0	1	1	0	2	0	0
	計	0	0	1	0	2	0	1	1	0	0	1	3	1	0	3	0	1	1	0	4	0	0
ナデ	実測点数	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	1	0
	破片点数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	1	0

住居番号		SI16	SI19	SI21	SI36	SI55	SI37	SI38	SI39	SI40	SI41	SI42	SI43	SI44	SI45	SI47	SI48	SI49	SI51	SI52	SI53	SI54	SI80
ハケメ	実測点数	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	破片点数	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	2	0	2	0	1	0	0	0	2
	計	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	6	2	0	2	0	1	0	0	0	2
ヘラケズリ	実測点数	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	破片点数	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	0	0	1	0	0	1	0
	計	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	2	1	0	0	1	0	0	1	0
ナデ	実測点数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	破片点数	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0

第12表　住居共伴資料における土師器甕胴部外面の最終調整の集計

形土製品を利用したカマドと蓋・蓋据え方をもつ貯蔵穴状ピットの両要素が共伴している。凝灰岩を使用したカマドと蓋・蓋据え方をもつ貯蔵穴状ピットの共伴例は確認されていない。

【SA34a・b 材木塀跡と SD33 溝跡の延びと区画範囲】

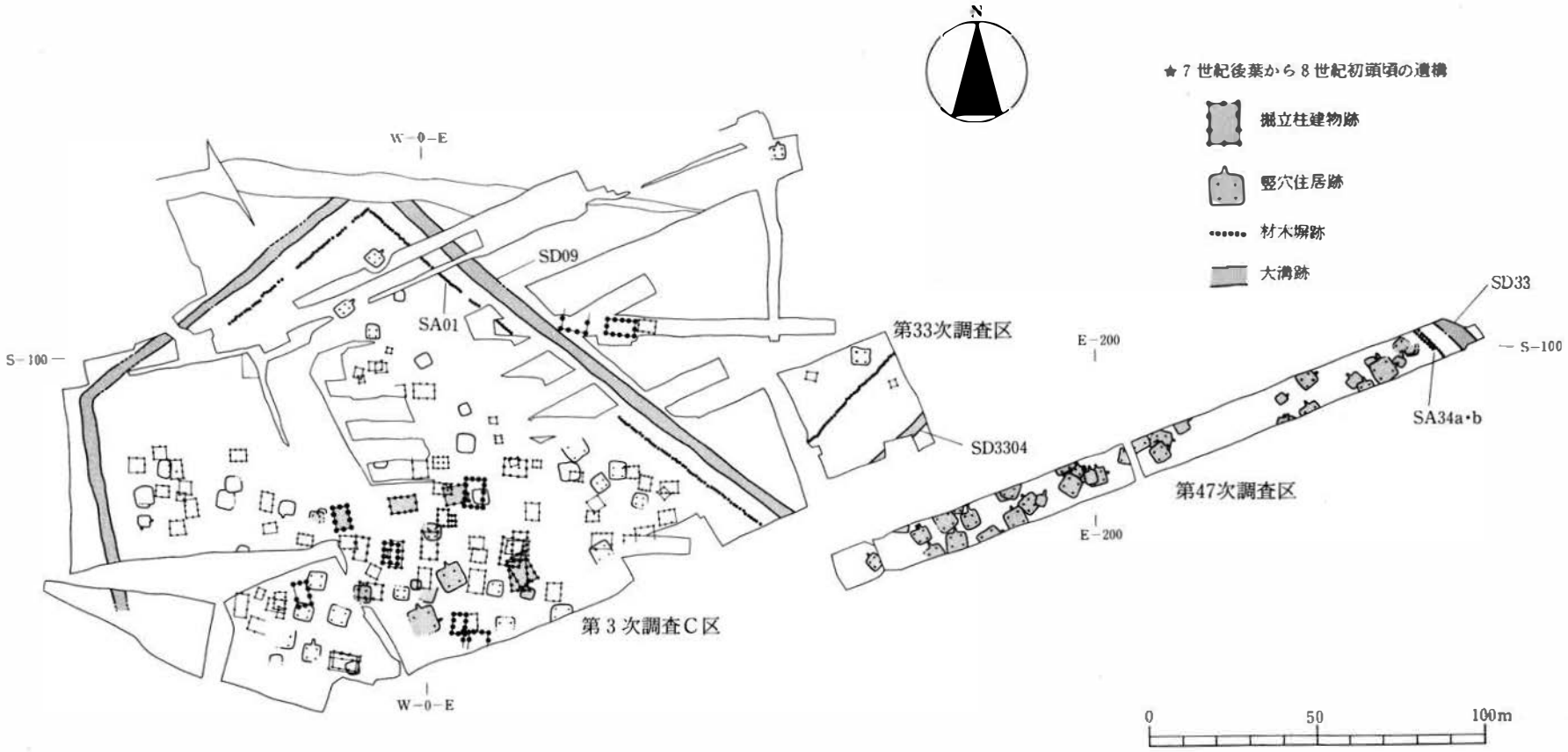
次に、SA34a・b と SD33 の延びとその区画範囲について47次調査以前の成果も踏まえて検討する。これまでの調査成果を記した周辺の遺構全体図(第 4 ・97図)をみると、本調査 I 区東寄りの県道を挟んで北側に位置する33次調査区で検出された東西に延びる大溝(SD3304)がまず注目される。SD3304は確認面では上幅約3.0m・深さ約40cm であるが、調査区東壁の断面観察から更に上面まで立ち上がり、上幅5.0m・深さ1.1m で、断面が逆台形状を呈することが判明している。出土遺物は極少量で、その年代を捉えることは難しいが、本調査の土器群とほぼ同時期と考えられる関東系土師器が 1 点出土している。また、堆積土の観察から機能中に流水があったことも理解される。このような特徴は47次調査区の SD33 と共通するものであり、双方は同一の大溝と考えられる。SD3304 の南側で SA34 に対応する材木塀が検出されていない点に問題は残るが、塀と大溝がほぼ等間隔で巡るとすれば、SD3304 から南へ 5 m程しか及んでいない33次調査区内に塀は掛かってこない。なお、SD3304 の北側でこれに平行して延びる材木塀跡(SA3302)が確認されているが、両者の心々間隔は約20m もあり、一対の区画施設とは考え難い。SD3304 の方向は N−45°−E で、SD33 とほぼ直交する方向を示していることを踏まえると、SD33 は本調査区北端から80m 程北に延び、そこでほぼ直角に西側へ折れ曲がった後 SD3304 と繋がって、更に西へ延びると推測される。

東・北の区画線についてはある程度判明したが、西・南側の区画施設は現在のところ検出されていない。周辺の地形に注目すると、立地で説明したように47次調査区の南西隅で東西に延びる灰白色火山灰降灰後の旧河道が確認されており、現在も東流する吉田川に47次調査区の南側は画されている。河川の流路は区画施設が機能していた当時から大きく変化していないと推定されることから、南側に敢えて塀と溝を巡らす必要はなく、河道を区画線として利用していたことが予想される。つまり、少なくとも SA34・SD33 はそのまま南へ延びて当時の河道に取り付く形で終わっていたと考えられる。

【第 3 次調査 C 区との対比】

一里塚遺跡では以前にも外郭に区画施設を伴う集落域が検出されている。 1 ～ 3 ・15・31・34次調査、主に 3 次調査 C 区(手塚他：1990)で検出されている一連の区画施設(SA01 材木塀跡と SD09 溝跡)とその内部に展開する竪穴住居・掘立柱建物群がこれにあたる(第 4 ・98図)。この集落域は47次調査区の北西に近接しており、東・北・西の 3 辺を台形状に巡る区画が判明している(註11)。SA01・SD09 の規模・構造は47次調査区の SA34・SD33(SD3304)と殆ど一致しており、その存続期についても重なる期間が多い。しかし、SD33 から SD3304 へはほぼ直角に屈曲するのに対し、SD09 は北東隅で約100°、北西隅で約120°と開き気味に屈曲していること、SD09 の堆積土にやや新しい時期の遺物と灰白色火山灰が含まれることなど相違点もある。

区画内部は竪穴住居と掘立柱建物が共存している点に最大の特徴がある。遺構の重複関係と出土遺



第98図　外郭に区画施設を伴う集落域の全体図

物の検討を経て、7世紀末から8世紀中葉頃の間で6段階の変遷が設定されている。遺物の年代観からみると、第1～3段階が47次調査区の区画内部と重なる時期にあたる。この段階には方向が北から西へ振れる住居・建物跡が多く、関東系土師器も出土しており、47次調査区の様相と共通する点がある。しかし、面積が45.0m²を越える大型住居(C区SI04・11)や区画内中央部に逆「L」字状に配された建物4棟(C区SB06・18・22・27)が存在し、居住者の性格や使われ方が47次調査区とは異なっていたことを明示している。住居は47次調査区のように密集・重複しておらず、カマドの構築方法で焚き口部部材・袖心材に凝灰岩切石・円筒形土製品を利用するものや蓋とその据え方をもつ貯蔵穴状ピットも現在のところ確認されていない。

3次調査C区の第4～6段階についてみると、方向がほぼ真北方向を向く小規模の建物群を主体とし、これに少数の住居群を伴う遺構が8世紀前半から中葉頃に展開している。真北方向を基準とした建物の配置は、12・18・25・29次調査区を中心に直ぐ北側で検出されている官衙施設や区画外周辺の多くの建物に共通する特徴で、区画内部に留まらず周辺地域を含めた建物方向の斉一性が窺われる。区画線やこの段階以前の住居・建物の方向が北から西へ振れることを鑑みると、第4～6段階には区画が解消されていた可能性がある。

以上、隣接する47次調査区と3次調査C区の集落域を対比すると、集落の存続期間と区画施設の規模・構造がほぼ一致しており、双方は一連の区画内部である可能性がある。しかし、二つの集落域が交差する部分が未調査のために両者の関係は不明瞭で、内部構成が大きく相違することを挙げれば、これらを少なくとも性格の異なる区域として捉えるのが妥当かもしれない。

(註1) 直交する2辺の規模が不明な住居については、1辺の規模が明らかな場合、正方形を呈すると仮定して面積を算出している。

(註2) 長辺を東西軸に揃えるものが9軒、南北軸に揃えるものが6軒で、軸線と揃わないものが1軒ある。

(註3) SI25で検出された柱穴(P1)は性格が不明である。なお、面積が15m²を越えるとみられるSI54(15.2m²)でも主柱穴は確認されていない。

(註4) SI02・48では住居壁を20cm・35cm掘り込んで燃焼部奥・側壁としているが、側壁の一部は他の住居同様に粘土質の土を積み上げて構築されている。

(註5) 13軒の内、SI10ではカマド左脇にも貯蔵穴状ピットが認められ、SI44では古いカマドの右脇と新しいカマドの左脇に設けられている。カマド左脇にのみ貯蔵穴状ピットが設置される例も2軒ある。

(註6) なお、円筒形土製品の可能性があるものとして仙台市郡山遺跡SI904竪穴住居跡床面から出土した土製品の破片(長島他：1992)が挙げられる。

(註7) 郡山遺跡では焚き口部両袖に円礫が据えられており、天井部にのみ凝灰岩の切石が用いられている。御駒堂遺跡第14・20号住居跡では焚き口の天井部材として利用されていたと考えられており、袖材は検出されていない(第14号住居跡の凝灰岩は焚き口部袖材の可能性も指摘されている)。なお、川原石など自然礫を焚き口部部材として使用するカマド構築例は名取市清水遺跡(丹羽他：1981)、仙台市栗遺跡(東北学院大学考古学研究部：1979・工藤他：1982)などにみられる。

(註8) カマド両袖の焚き口だけでなく上部にも凝灰岩切石を渡して焚き口部を「Π」字状に組んだ状態で残る構築例があり、凝灰岩製の支脚も出土している。

(註9) SI51では蓋として利用された板材が著しく朽ちており、本来の形状が分からない。また、この住居では床面と堆積土最下層(2層)の判別が難しく、蓋の据え方についても認識できなかった可能性がある。

(註10) 時期が異なるものの磯岡遺跡SI55火災住居(5世紀後葉)で、同構造をもつ貯蔵穴状ピットの上部から棒状と板状の炭化材が検出され、その上に置かれていた状況で完形に近い土師器坏4点と甕1点が出土していることは蓋とその据え方の存在を示す一例である。

(註11) 西辺では材木塀跡が検出されておらず、その状況は不明瞭である。

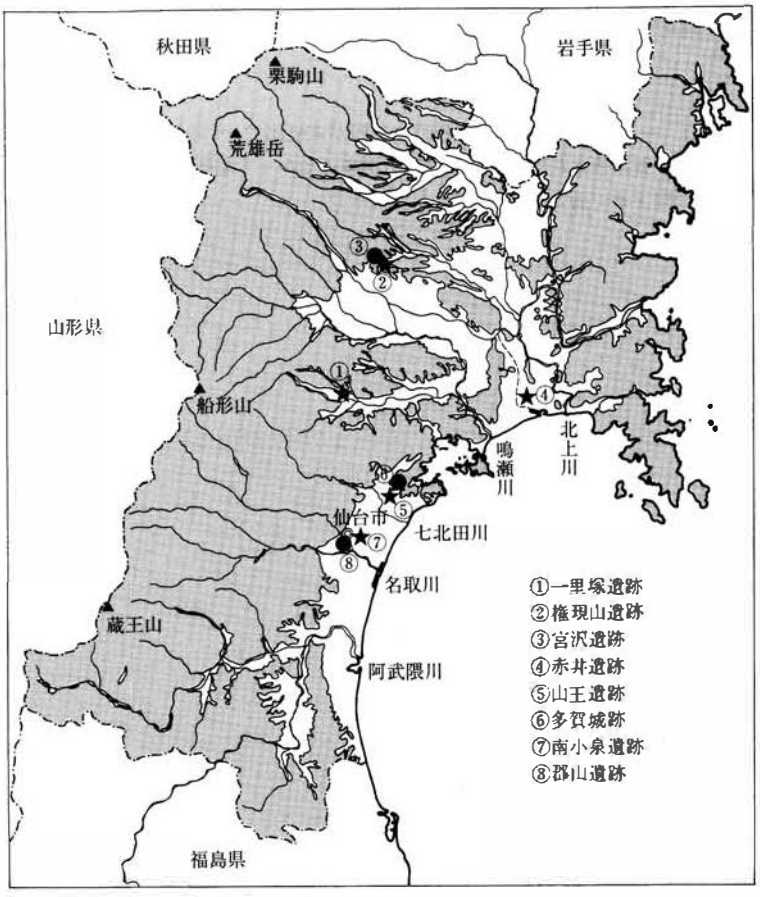
③ 外郭に区画施設を伴う集落域の性格について

最後に、47次調査区・3次調査C区を中心に検出されている外郭に区画施設を伴う集落域の性格について考えてみたい。

47次調査区の区画内部には関東系土師器を主に使用し、竪穴住居の構造にも関東地方の影響が窺われるグループ(第1グループ)が存在する。このような集団の存在は同地方からの直接的な「移住」を示唆するもので、律令体制にもとづく陸奥開拓の一連の流れの中に位置付けられるものと考えられている(小井川：1982・1991)。文献上、柵戸として陸奥に移住した坂東人の記載は靈亀元(715)年が初見であるが、7世紀後半の仙台市郡山遺跡・古川市名生館遺跡の設置を前提に、仙台平野・大崎平野には既に7世紀中葉・後半の段階で坂東から柵戸が移配されていたと考えられていること(今泉：1992)を踏まえると、このグループは律令制支配の北進にあたって坂東から移配された「移民」の可能性がある。移住者の出身地を特定することは難しいが、土器の型式的な類似性や住居構造の共通点から少なくとも甲信・北武蔵を含む北関東と思われる。また、集落内には関東系土師器と在地の土師器を併用するグループ(第2グループ)や在地土師器を主に使用するグループ(第3グループ)も存在し、北関東と東北地方南部の土器文化が混在する状況を示している。

3次調査C区の区画内部では竪穴住居と掘立柱建物が共存し、逆「L」字状に配された建物群や大型住居が検出されている。大型住居(C区SI11)の床面からは円面硯の脚部とみられる小片も出土しており、47次調査区とは内部の使われ方や居住者の性格が異なっていたと考えられる。

7・8世紀代で外郭に区画施設を伴う集落の類例をみると、仙台市南小泉遺跡第22次調査区(斎野：1994)、多賀城市山王遺跡八幡・伏石地区(佐藤則他：1997)、古川市権現山遺跡(高橋：1991)、矢本町赤井遺跡(佐藤敏他：1997)などがある。山王遺跡・権現山遺跡・赤井遺跡では材木塀と大溝、南小泉遺跡では大溝による区画が確認されており、権現山遺跡では掘立柱建物が構成の主体を占め、南小泉遺跡や赤井遺跡では竪穴住居が検出されている。赤井遺跡は言うまでもなく南小泉遺跡は郡山遺跡、山王遺跡は多賀城跡、権現山遺跡は宮沢遺跡といった城柵・官衙遺跡に近接しており、集落を河川に接する位置に設けて水上交通路を重視していることや外郭の区画が直線的であること、山王遺跡を除き関



第99図　外郭に区画施設を伴う集落と近接する城柵・官衙の位置

東系土師器が出土していることでも共通している。

集落の様相が具体的に報告されている南小泉遺跡では、郡山遺跡Ⅰ期官成立の前段階で集落が区画施設を伴う形態に変化しており、関東系土師器の安定した組成が認められるようになる。この時期には関東地方からの移住者の存在が明らかで、集落を区画する大溝が郡山Ⅰ期官衙の区画線の方向と一致することや郡山遺跡で同時期の集落が希薄であることを含めて、郡山Ⅰ期官衙との密接な関係が指摘されている。権現山遺跡・赤井遺跡では官衙成立前の段階に集落が突然出現しており、その関連性は明白である。山王遺跡については区画内部の様子が不明瞭で、集落自体は以前から長期間継続していることや関東系土師器が出土していないことなどを考慮すると、他の遺跡とは異なった性格も予想される。

以上、これらの集落は官衙と密接に関連した環濠集落で、一里塚遺跡の集落域についてもほぼ共通した特徴をもつことから同様の性格と考えられる。また、官衙成立の前段階に集落が出現もしくは区画を伴う形態に変化している点に注目すると、一里塚遺跡では集落と繋がる時期の官衙施設が未検出であるものの、周辺にその存在が予想される。なお、少なくとも8世紀後半から9世紀初頭頃の郡衙に付随する「倉庫院」の存在は明確で、この施設を含む官衙域全体(註1)を「黒川郡衙」とみれば、文献資料にある「黒川以北十郡」の記載から8世紀前葉の段階には建郡されていたと考えられる(今泉：1999)。多くの集落では構成員に関東地方からの移住者が含まれており、官衙成立期を境に集落が急速に衰退していく傾向にある。このような環濠集落は飛鳥・奈良時代に陸奥国の北辺であった宮城県域において特徴的に認められるもので、評・郡を設置して支配領域を北に拡大していった律令国家の辺境経営の在り方を具体的に示す一例として理解される。

(註1) 一里塚遺跡では官衙中枢部の施設が未検出で、その位置については「倉庫院」の東、環濠集落の北東にあたる未調査区域が有力視されている。「倉庫院」が東に向かって配置されていることや環濠集落が遺跡南西部に展開することはこれを示唆する一面と考えられる。

第VI章　まとめ

一里塚遺跡は黒川郡大和町大字吉岡・吉田に所在し、東流する吉田川の左岸に形成された河岸段丘の最低位段丘面に立地している。遺跡の範囲は東西約1.1km、南北約0.9km にも及ぶ広大なもので、遺跡西半部を中心にこれまで調査が進められてきた。その成果として、8 世紀後半から 9 世紀初頭頃の郡衙に付随する「倉庫院」と考えられる官衙施設や外郭に区画施設を伴う集落の存在などが判明している。第44次調査区は遺跡の東端部、第47次調査区は遺跡の南端部に位置し、直線距離にして600m 程離れており、遺跡内でも遺構の性格や出土遺物の年代観が異なる区域である。以下、第44・47次調査区の成果についてそれぞれまとめる。

【第44次調査区】

1．44次調査区は主に真北方向を基準に配置された大型の掘立柱建物群で構成される区域である。

2．調査区西端では南北に延びる材木塀跡が検出されており、建物群の西側を区画していた可能性がある。

3．建物には殆ど重複・建て替えが認められず、同時存在していたものが多いと推測される。

4．建物群は出土遺物の年代観を加味すると、8 世紀後葉から 9 世紀中葉頃の間で、比較的短期間利用された官衙に関連する施設と考えられる。

【第47次調査区】

1．47次調査区では外郭に材木塀と大溝の区画施設を伴う集落が検出された。集落はほぼ竪穴住居群のみで構成されており、出土遺物の年代観から 7 世紀後葉から 8 世紀初頭頃のものと考えられる。

2．区画が判明したのは北から西へ振れて直線的に延びる東側の区画線のみであるが、以前の調査成果を踏まえると、この東側区画線である大溝(SD33)は北へ約80m 延び、そこでほぼ直角に西側へ折れ曲がった後に33次調査区の SD3304 と繋がることが推定される。

3．住居は区画内部に密集する状況で分布しており、方向が区画施設と同様に西側へ振れるものが殆どである。重複関係にあるものや配置から同時存在が難しいものも多く、同時存在を捉えて段階設定するならば数段階の変遷が予想されるが、遺物の検討からは時期差を抽出できなかった。

4．住居に共伴する遺物の土器組成に注目すると、関東系土師器を主に使用するグループ、関東系土師器と在地土師器を併用するグループ、在地土師器を主に使用するグループの 3 グループに分けられる。これらが区画内部に共存する状況は正に関東地方と東北地方南部の土器文化の混在を示している。

5．関東系土師器を主に使用するグループの住居のカマドや貯蔵穴状ピットには関東地方のものと類似する構造が認められる。このグループについては関東からの移住者である可能性が強い。移住者の出身地を特定することは難しいが、土器の型式的な類似性や住居構造の共通点から少なくとも甲信・北武蔵を含む北関東と思われる。

6．47次調査区の北西に近接する3次調査C区でも同規模・同構造の区画施設が確認されており、内部は竪穴住居・掘立柱建物群で構成されている。遺構の存続期間もほぼ重なっており、一連の区画内部である可能性もあるが、接合部分が未調査のために両者の関係は不明瞭である。但し、内部の様相が大きく相違することから少なくとも使われ方や居住者の性格を異にする区域と考えられる。

7．外郭に区画施設を伴う集落域の性格について周辺の情勢を踏まえて検討すると、官衙と密接に関連した環濠集落と考えられる。このような環濠集落は飛鳥・奈良時代に陸奥国の北辺であった宮城県域において特徴的に認められるもので、評・郡を設置して支配領域を北に拡大していった律令国家の辺境経営の在り方を具体的に示す一例として理解される。

引用・参考文献

青木　敬　1999：「竈廃棄考 ― 多摩市和田西遺跡からみた検討 ―」『土壁』第3号　考古学を楽しむ会

新井・川村　1997：『(仮称)島名・福田坪真地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ ― 熊の山遺跡 ―』　茨城県教育財団文化財調査報告第120集　茨城県教育財団

飯塚・内山ほか　1997：『八幡根遺跡 ― 一般国道4号(新4号国道)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査』　栃木県埋蔵文化財調査報告第189集　栃木県教育委員会

石野博信　1990：『日本原始・古代住居の研究』　吉川弘文館

石本　弘　1995：「福島県における律令成立以前の土器様相とその背景」『東国土器研究』第4号　東国土器研究会

石守　晃　1997：『多比良追部野遺跡 ― 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第40集』　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第213集　群馬県教育委員会

今泉隆雄　1989：「8世紀前半以前の陸奥国と坂東」『地方史研究』第221号

今泉隆雄　1992：「律令国家とエミシ」　新版『古代の日本』第9巻 東北・北海道　角川書店

今泉隆雄　1999：「律令国家と蝦夷」　新版『県史』第4巻 宮城県の歴史　山川出版社

宇賀神・川崎・桜井・平出・柳沢　1999：『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17 ― 佐久市内 その3・小諸市内 その1(栗毛坂・長土呂・野火附・前田・宮ノ反A・下前田原・長野原・赤沼) ―』　長野県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書38　長野県教育委員会

上原・篠原　1998：『清六III遺跡　II ― 渡良瀬川下流流域下水道処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査(古墳時代編)』　栃木県埋蔵文化財調査報告第218集　栃木県教育委員会

上原・篠原　1999a：『清六III遺跡　III ― 渡良瀬川下流流域下水道処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査(古墳時代編)』　栃木県埋蔵文化財調査報告第227集　栃木県教育委員会

上原・麻生　1999b：『清六III遺跡　IV ― 渡良瀬川下流流域下水道処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査(古代・中世編)』　栃木県埋蔵文化財調査報告第228集　栃木県教育委員会

氏家和典　1957：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

宇部・高島・藤田　1983：『史跡根城跡発掘調査報告書V ― 昭和56・57年度』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第11集　青森県八戸市教育委員会

大上・加藤ほか　1999：「神奈川県におけるカマド構造の基礎的研究(3)」『かながわの考古学』研究紀要4　神奈川県立埋蔵文化財センター

大越道正ほか　1980：『佐平林遺跡(VII, VIII区)』『母畑地区遺跡発掘調査報告』III　福島県教育委員会

大越道正ほか　1983：「薬師堂遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告』13　福島県教育委員会

太田昭夫　1994：『中田南遺跡』　仙台市文化財調査報告書第182集　仙台市教育委員会

岡田・工藤ほか　1970：『日の出山窯跡群』　宮城県文化財調査報告書第22集　宮城県教育委員会

小川淳一　1980：「塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』III　宮城県文化財調査報告書第83集　宮城県教育委員会

加藤・阿部　1980：「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』IV　宮城県文化財調査報告書第72集　宮城県教育委員会

加藤道男　1989：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』II　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

木村・青沼・長島　1981：『郡山遺跡I』　仙台市文化財調査報告書第29集　仙台市教育委員会

木村浩二ほか　1985：『郡山遺跡V ― 昭和59年度発掘調査概報』　仙台市文化財調査報告書第74集　仙台市教育委員会

木村・長島　1991：「郡山遺跡発掘調査の成果 — 変遷と性格 —」『第17回 古代城柵官衙遺跡検討会』発表資料　古代城柵官衙遺跡検討会
木本元治　1989：「南東北地方における歴史時代の須恵器編年 I」『考古学古代史論攷』
工藤哲司ほか　1982：『栗遺跡』　仙台市文化財調査報告書第43集　仙台市教育委員会
小井川和夫　1981：「上新田遺跡」　宮城県文化財調査報告書第78集　宮城県教育委員会
小井川・小川　1982：「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』VI　宮城県文化財調査報告書第83集　宮城県教育委員会
小井川・村田　1991：「古代における東北地方南部の集落と生業 — 宮城県を中心として —」『北からの視点』 日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集
後藤・東理　1994：『山王遺跡八幡地区の調査 — 県道泉塩釜線関連調査報告書 1 —』　宮城県文化財調査報告書第162集　宮城県教育委員会
児玉・新堀　1992：『国道114号線国道改良工事関連埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書— 岩崎町遺跡』 福島市埋蔵文化財報告書第47集　福島市教育委員会
小林清隆　1989：「カマド内出土遺物の意味について」『研究連絡誌』第24号　千葉県文化財センター
小林清隆　1998：「竈と貯蔵穴 — 千葉市周辺地域の古墳時代の事例から」『研究連絡誌』第48号　千葉県文化財センター
小林・飯島　1999：『伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書5 — 前田村遺跡J・K区 —』 茨城県教育財団文化財調査報告第147集　茨城県教育財団
斎藤利昭　1994：『善慶寺旱道場遺跡 — 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第28集』 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第179集　群馬県教育委員会
斎藤吉弘　1990：「天皇寺遺跡」『寂光寺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第135集　宮城県教育委員会
斎野・結城　1994：『南小泉遺跡 — 第22・23次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第192集　仙台市教育委員会
佐藤敏幸ほか　1997：『赤井遺跡 — 牡鹿柵・郡家推定地 — 県道石巻・鹿島台・大衡線改良工事に伴う発掘調査概報II』 矢本町文化財調査報告書第7集　矢本町教育委員会
佐藤則之ほか　1997：『山王遺跡V』 宮城県文化財調査報告書第174集　宮城県教育委員会
佐藤憲幸ほか　1996：「東北の煮炊具」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4　煮炊具 —』 古代の土器研究会
佐藤憲幸　1997：「彦右エ門橋窯跡」『舟場遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第173集　宮城県教育委員会
白鳥良一　1997：「陸奥国における多賀城以前の様相」『古代の土器研究 — 律令的土器様式の西・東5　7世紀の土器 —』 古代の土器研究会
末木　健　1987：『姥塚遺跡・姥塚無名墳 — 山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第24集　山梨県教育委員会
菅原・石本　1992：「山崎遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告書』10　福島県教育委員会
鈴木勝彦　1992：『名生館官衙遺跡XI — 平成3年度発掘調査概報』 古川市文化財調査報告書第11集　古川市教育委員会
鈴木拓也　1998：『古代東北の支配構造』 吉川弘文館
鈴木雄三　1987：「東丸山遺跡」 郡山カルチャーパーク関連報告書第1集　福島県郡山市教育委員会
相馬・安永ほか　1997：『滝田本郷遺跡 — 一般国道294号鳥山バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査』 栃木県埋蔵文化財調査報告第199集　栃木県教育委員会
高橋栄一　1996：「彦右エ門橋窯跡」『下草古城跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第169集　宮城県教育委員会
高橋誠明　1991：「権現山遺跡の概要」『第17回 古代城柵官衙遺跡検討会』発表資料　古代城柵官衙遺跡検討会
高橋・村田　1996：「陸奥国における7世紀の様相」『飛鳥・奈良時代の諸問題 1』
高橋　学　1989：「一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II — 福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡 —』 秋田県文化財調査報告書第178集　秋田県教育委員会
高橋泰子　1999：「貯蔵穴の研究 — 武蔵国豊島郡内の竈付き竪穴住居跡にみられる貯蔵穴の分析について —」『土壁』第3号　考古学を楽しむ会
田所・川又　1998：『一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書IV — 三反田下高井遺跡 —』 茨城県教育財団文化財調査報告第128集　茨城県教育財団
田中広明　1991：「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給 — 有段口縁坏の展開と在地社会の動態 —」 『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中広明　1993：「補強帯のある大甕の生産と流通」『埼玉考古』第30号　埼玉考古学会
田中広明　1995：「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」『東国土器研究』第4号　東国土器研究会
田中広明　1996：「武蔵国の加美郡と陸奥国の賀美郡」『埼玉考古』第32号　埼玉考古学会
谷　旬　1990：「所謂「F類カマド」型の集落(上総西部編)」『研究連絡誌』第29号　千葉県文化財センター
塚原孝一　1999：『東谷・中島地区遺跡群 No.1　磯岡遺跡(I区)』 栃木県埋蔵文化財調査報告第229集　栃木県教育委員会
堤　隆　1995：「竈の廃棄プロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』第7号　山梨県考古学協会
土沼章一　1992：「桐ノ木遺跡」『二井田地区遺跡発掘調査報告』I　保原町教育委員会
手塚・加藤　1989：「一里塚遺跡」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第131集　宮城県教育委員会
手塚・加藤・岩見　1990：「一里塚遺跡」『寂光寺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第135集　宮城県教育委員会

東北学院大学考古学研究部　1975：「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告」『温故』９号
東北学院大学考古学研究部　1979：「仙台市中田栗遺跡発掘調査報告」『温故』11号
富田・赤熊・市川　1985：『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢―児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
中沢　悟　1986：『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡 ― 一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』　群馬県教育委員会
中沢　悟　1996：『矢田遺跡Ⅵ　古墳時代住居跡編(３) ― 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第34集』　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第197集　群馬県教育委員会
中沢・小林　1997：『矢田遺跡Ⅶ　古墳時代住居跡編(４)・奈良時代住居跡編・平安時代住居跡編(４) ― 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第45集』　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第220集　群馬県教育委員会
仲山英樹　1995：『馬門南遺跡 ― 県営農免農道佐野南部地区事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』　栃木県埋蔵文化財調査報告第165集　栃木県教育委員会
西野・浅井　1990：『一般国道349号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 ― 森戸遺跡 ― 』　茨城県教育財団文化財調査報告第55集　茨城県教育財団
西山・花岡　1995：「信州の６・７世紀の土器様相 ― 現時点の概略として ―」『東国土器研究』第４号　東国土器研究会
西山克己　1996：「７世紀代に用いられた円筒形土器」『長野県考古学会誌』79号　長野県考古学会
丹羽・小野寺・阿部　1981：「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅴ　宮城県文化財調査報告書第77集　宮城県教育委員会
長谷川厚　1992：「古墳時代後期土器の研究(４) ― 広域間の交流について ―」『神奈川考古』第28号　神奈川考古同人会
長谷川厚　1993：「関東から東北へ ― 律令制成立前後の関東地方と東北地方の関係について ―」『21世紀への考古学』　櫻井清彦先生古希記念論文集　雄山閣
長谷川厚　1995：「東国における律令制成立以前の土師器の特徴について ― 東国の土師器の画期と生産・流通のあり方を中心にして ―」『東国土器研究』第４号　東国土器研究会
平岡和夫　1990：『古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連狸沢遺跡・八木連荒畑遺跡 ― 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書』　群馬県教育委員会
吹野富美夫　1995：『(仮称)真壁町南椎尾地区住宅団地事業地内埋蔵文化財調査報告書―小山遺跡・八幡前遺跡 ―』　茨城県教育財団文化財調査報告第99集　茨城県教育財団
福島・木本ほか　1988：「善光寺遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ』　福島県教育委員会
古川一明　1983：『色麻古墳群 ― 宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和57年度) ―』　宮城県文化財調査報告書第95集　宮城県教育委員会
古川一明　1984：『色麻古墳群 ― 宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和58年度) ―』　宮城県文化財調査報告書第100集　宮城県教育委員会
古川一明　1985：『色麻古墳群 ― 宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和59年度) ―』　宮城県文化財調査報告書第103集　宮城県教育委員会
古川一明　1987：『色麻古墳群の諸問題」『北奥古代文化』第17号　北奥古代文化研究会
古川・太田　1993：『日の出山窯跡群』　色麻町文化財調査報告書第１集　色麻町教育委員会
真山　悟　1989：「彦右エ門橋窯跡」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第131集　宮城県教育委員会
宮城県教育委員会・大和町教育委員会　1994：「一里塚遺跡」『第20回 古代城柵官衙遺跡検討会」発表資料　古代城柵官衙遺跡検討会
宮本長二郎　1996：『日本原始古代の住居建築』　中央公論美術
村田晃一　1992：「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」「東日本における古代・中世窯業の諸問題」シンポジウム資料
村田晃一　1995a：『亀岡遺跡』　大衡村文化財調査報告書第１集　大衡村教育委員会
村田晃一　1995b：「萱刈場窯跡」『下草古城跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第166集　宮城県教育委員会
村田晃一　1995c：「宮城県における６・７世紀の土器様相」『東国土器研究』第４号　東国土器研究会
村田晃一　1998：「栗囲式土器の成立と展開」『考古学の方法』第２号　東北大学文学部考古学研究会会報
目黒吉明ほか　1978：「佐平林遺跡(Ⅰ～Ⅳ区)」『母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅱ　福島県教育委員会
山口耕一　1998：「古墳時代後期の円筒形土製品 ― 栃木県下の事例を中心に ―」『研究紀要』第６号　栃木県埋蔵文化財センター
山中敏史　1994：『古代地方官衙遺跡の研究』　塙書房
渡辺俊夫　1983：『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書７ ― 石神外宿Ｂ遺跡 ―』　茨城県教育財団文化財調査報告第23集　茨城県教育財団

付記　一里塚遺跡出土の動物遺体

1．はじめに

動物遺体は、7世紀後葉～8世紀初頭頃に年代付けられる大溝跡（SD33）と竪穴住居跡から出土した（第47次調査区）。このうち住居跡出土の動物遺体は、カマド内の土壌（灰層）を1 mmメッシュの試験フルイを用いて水洗した結果、抽出されたものである。土壌を採取した全ての住居跡（SI06・11・42・48・51・52・54・80）から検出された（註1）。

分析資料は、すべて火を受け白色灰化状態にあり、その多くが破損やひび割れ・ねじれを生じている。このため、属・種レベルまで同定できたものは少ないが、コイ科・ギギ科魚類、カエル類、イノシシなど破片数で124点におよぶ動物遺体が出土した（第13・14表）。

2．動物遺体の概要

（1）　魚類

コイ科2種とギギ科1種、合計93点が出土した。

量的にはコイ科魚類が多く、全ての竪穴住居跡から検出された。ウグイ属とフナ属が含まれており、咽頭骨、第1脊椎骨、擬鎖骨、第2背/臀鰭棘などによって、両者を分別した。ただし、出土魚骨の大半を占める椎体径2 mm程の小さな椎骨については、両者の区別が難しいことから、破損等により分別できない部位骨とともに、「コイ科種不明」として一括集計した。大きさは、両者とも体長13～14cm程と推定される。

ギギ科は胸鰭棘の先端破片が3点出土している。これ以外に頭骨などの部位骨は検出されなかったが、コイ科として分類した尾椎の中にギギ科が含まれている可能性がある（註2）。大きさは、体長15 cm前後の個体と推定される。

（2）　両生類

属・種とも不明であるが、アカガエル相当の大きさの下顎骨、椎骨、上腕骨、橈尺骨、指骨など25点が出土した。計測可能な上腕骨遠位端の最大幅で2.5mmを計る。大きさからみて、食料資源として、どれ程の利用価値があったのか疑問が残るが、土壌を採取した竪穴住居跡8軒のうち、4軒（SI06・51・54・80）で検出されており、単なる自然死や偶発的にカマド内に混入したとは考え難い。いずれも他の骨と同様に白色灰化状態にあり、コイ科やギギ科などと同様に食用に供されたものと思われる。

（3）　鳥類

指骨2点と四肢とみられる長管骨の破片が少量出土しているが、科・属・種とも同定不可能であった。

（4）　哺乳類

SD33からイノシシの左第2中手骨と右第5中手骨が出土している。竪穴住居跡のカマド内出土資料と同様に白色灰化状態にあり、ひび割れが顕著に認められる。このほか、SI06・52・54竪穴住居跡からは、ニホンジカもしくはイノシシのものとみられる四肢骨の小破片が少量出土している。

3．まとめ

今回出土した動物遺体は、一部を除き、竪穴住居跡のカマド内堆積土（灰層）を水洗選別することによって採集されたもので、フナ属・ウグイ属・ギギ科魚類やカエル類などの資料が得られた。これらの動物遺体が、カマド内に混入するに至った過程については明らかではないが、本来頻繁に掻き出されるはずのカマド内の、しかも層厚数cm足らずの灰の中に含まれていたことを考えれば、ごく短い時間幅の中で処理・廃棄されたものである可能性が高い。

出土した魚類は代表的な淡水魚で、内陸部に立地する遺跡からは普通に検出され、縄文時代以来重要な食料資源として利用されてきた魚種である。検出された魚類の大きさは、コイ科（フナ属・ウグイ属）が体長13～14cm、ギギ属が15cm前後で、比較的小形の個体が大半を占めている。これらの魚種は、いずれも河川・湖沼などの止水域や流れが緩やかな場所に生息する。初春水温が上がる頃から小川や田溝に入り、晩秋水温の低下に伴って降下し、深所に潜んで越冬するという生態的な特徴を有する。とくに、フナ属やウグイ属については、春から初夏にかけて産卵期を迎え、浅所に集合して産卵を行うという習性を持つ。検出された魚の大きさからみても、この時期には遺跡周辺の小川や水田および用水路などで、かなりの漁獲量が見込めたものと推測される。さらに、カマド内の灰の中からはカエル類も共伴して出土していることから、これらは水田に水が満たされる、初夏を中心とした時期に漁獲された可能性が高い。

今回の資料のみをもって、本遺跡における漁撈および狩猟活動のあり方を論ずることはできないが、捕獲された魚の体長や季節性などからみて、これらは稲作農耕の合間に行った副次的なものであったと推察される。弥生時代以降の漁撈活動については、一般的にコイ・フナ・ウナギなどの淡水魚の占める割合が高くなる傾向が認められ、水田稲作農耕の採用によって新たに獲得した生態系のもとでの漁撈（水田漁撈）が盛んに行われるようになったことによると考えられている（大阪府立弥生文化博物館：1995）。今回得られた資料は、あくまでもカマド内に掻き出されることなく残存した灰の中から抽出されたものである。当時の漁撈活動の実態を知る上においては極めて部分的な資料であるが、水田稲作の合間に少ない労力で得られるこれらの淡水魚は、本集落においても重要な食料資源であったと考えられ、生業活動全体の中で重要な位置を占めていたものと推察される。

（註１）　今回の調査において、土壌の採取および水洗は、カマド内に明瞭な灰の堆積が認められた８軒の竪穴住居跡の灰層に限って行われたものであり、カマド内の炭化物層や焼土層、また他の住居跡のカマド内堆積土中にも動物遺体が包含されていた可能性は否定できない。各住居跡の土壌サンプル量は、SI80が灰層の全堆積土にあたるが、これ以外の住居跡については、カマド半截後に採取したもので、灰層全体の約1/2の土量に相当する（第14表）。

（註２）　ギギ科の脊椎骨、とくに尾椎はコイ科との区別が難しい。しかも、今回の分析資料は、両者の分別に有効な神経および血管棘（岡山理科大富岡直人氏のご教示による）を欠くものが多く、分別が困難なことから、両者の分類は行わず、「コイ科種不明」として一括した。今回の資料の中に、コイ科との分別が可能なギギ科の腹椎は認められなかったが、コイ科尾椎としたものの中に、ギギ科の尾椎が含まれている可能性がある。

参考文献

大阪府立弥生文化博物館　1995：『弥生人の食卓 ― 米食事始め ―』
須藤隆ほか　1995：『縄文時代晩期貝塚の研究２　中沢目貝塚II』　東北大学文学部考古学研究室

脊椎動物門 Phylum Vertebrata
a 硬骨魚綱 ClassOsteichthyes
コイ科 Cyprinidae gen. et sp.indet
フナ属 Carassius gen. et sp.indet
ウグイ属 Tribolodo gen. et sp.indet
ギギ科 Bagridae gen. et sp.indet
b 両生綱 Class Amphibia
無尾目 Anura
アカガエル科? Ranidae gen.et sp.indet?
c 哺乳綱 Class Mammalia
イノシシ *Sus scrofa*

第13表 出土動物種名表

遺構	土量 (cc)	重量 (g)	魚綱					両生綱	鳥綱	哺乳綱	
			コイ科			ギギ科	種不明	無尾目(カエル類)	種不明	イノシシ	シカ/イノシシ
			ウグイ属	フナ属	コイ科種不明						
SI06	2,000	2.5			腹椎4			椎骨6	四肢破片		四肢破片
SI11	1,000	0.4	咽頭骨(R)1	擬鎖骨(R)1 第1背/臀鰭棘(?)1 第2背/臀鰭棘(?)1	腹椎2,尾椎2	胸鰭棘(?)1					
SI42	1,600	0.2			腹椎3,尾椎3		椎骨2				
SI48	700	1.2		第2背/臀鰭棘(?)1							
SI51	2,000	0.7			鰓蓋骨(R)1,腹椎1			橈尺骨(L)1	四肢破片, 指骨2		四肢破片
SI52	1,400	0.1	種・部位不明骨片								
SI54	2,000	0.3	咽頭骨(L)1 第1脊椎骨1		歯骨(L)2(R)1, 角骨L,基接舌骨1, 腹椎35,尾椎28	胸鰭棘(L)1(R)1		下顎骨(L)1,椎骨2,尾椎1, 上腕骨(L)1,橈尺骨(L)1, 指骨7			四肢破片
SI80	8,100	11.0					鰓条1	橈尺骨/脛腓骨(?)1,指骨4			
SD33 (8層)	−	−								第2中手骨(L)1, 第5中手骨(R)1	

※1 (L):左,(R):右,(?):左右不明
※2 「SI80」の土量はカマド内の灰層全体、これ以外は灰層の約1/2の堆積土に相当する。
※3 「SD33」出土のイノシシは、発掘時採集資料。

第14表 出土動物遺体一覧表

写　真　図　版

1．一里塚遺跡周辺の空中写真（昭和23年米極東空軍撮影、S＝1／16,130）

2．一里塚遺跡周辺の空中写真（平成5年建設省国土地理院撮影、S=1／25,000）

図版1

44次・調査区全景
（北西から）

44次・Ⅱ区
SB04建物跡
（北西から）

44次・Ⅱ区
SB05建物跡
（東から）

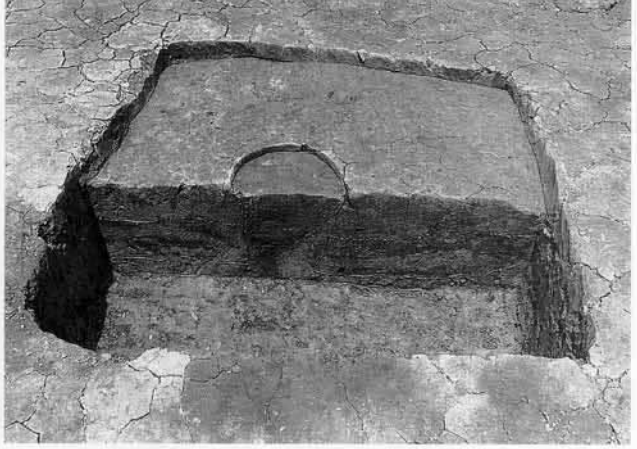
44次・Ⅱ区
SB08建物跡
（北から）

44次・Ⅲ区
SB10建物跡
（北から）

44次・Ⅴ区
SA23材木塀跡
（南から）

図版3

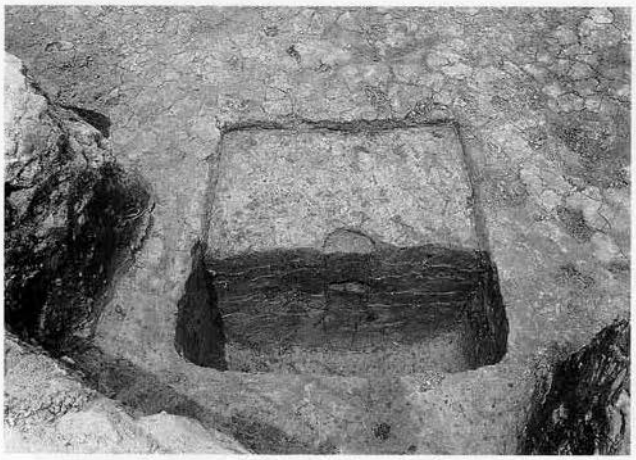
44次・SB04 建物跡柱穴断面（南西隅）



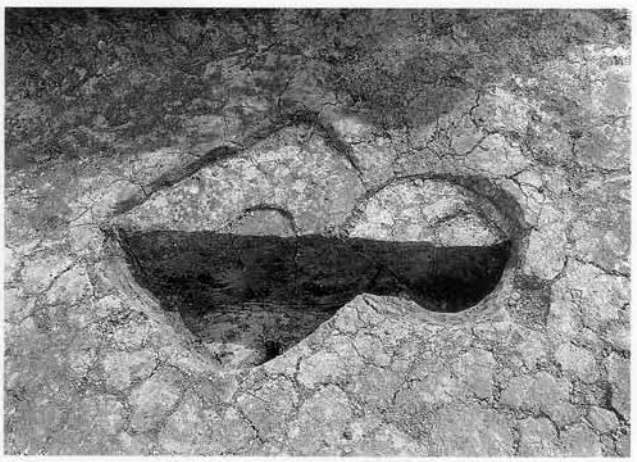
44次・SB05 建物跡柱穴断面（N1・E2）

44次・SB05 建物跡柱穴礎板（N2・E1）

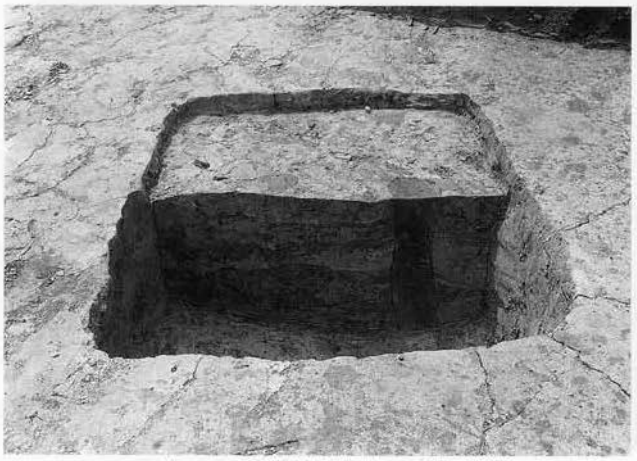
44次・SB08 建物跡柱穴断面（身舎北東隅）



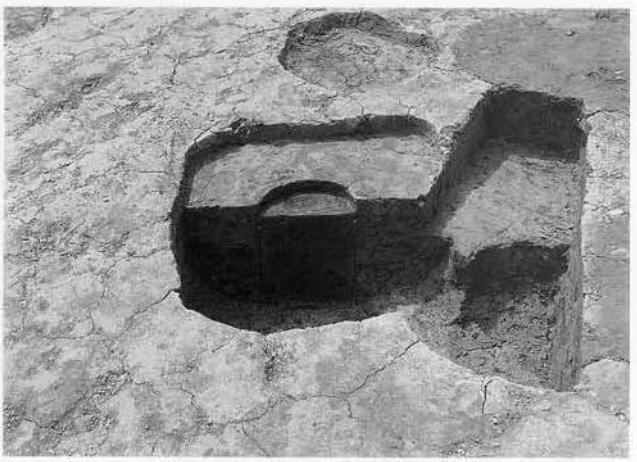
44次・SB08 建物跡柱穴断面（身舎N1・E2）



44次・SB08 建物跡柱穴断面（東廂N2）



44次・SB10建物跡柱穴断面（南西隅）



44次・SB10 建物跡柱穴断面（S1・W2）

図版4

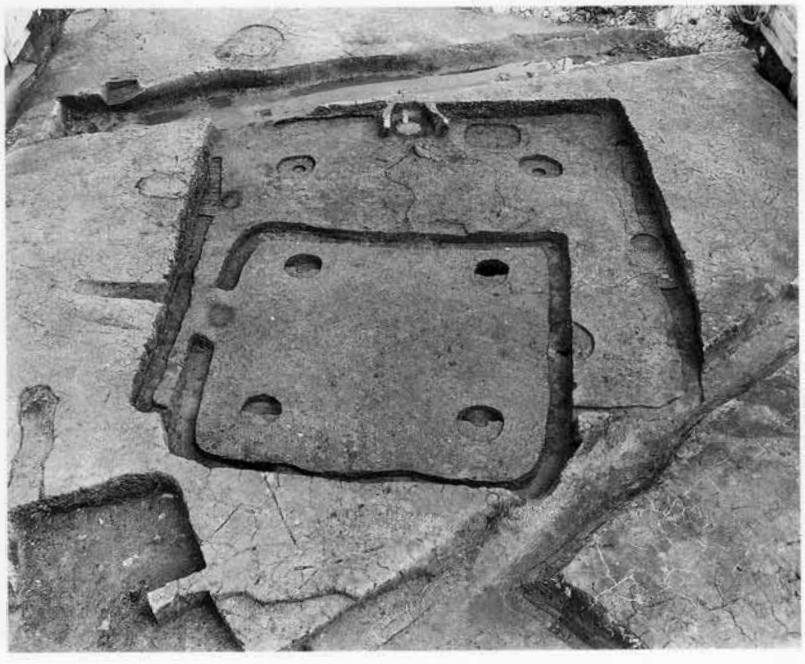
47次・調査Ⅰ区全景
（東から）

47次・調査Ⅰ区全景
（西から）

47次・調査Ⅱ区全景
（東から）

図版5

47次・調査Ⅱ区全景
（西から）



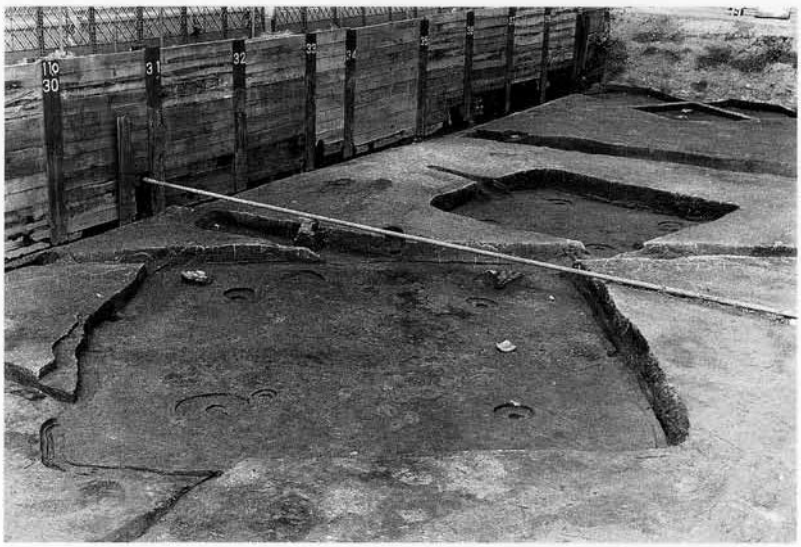
47次・Ⅰ区
SI02・03住居跡
（西から）

47次・SI03住居跡カマド

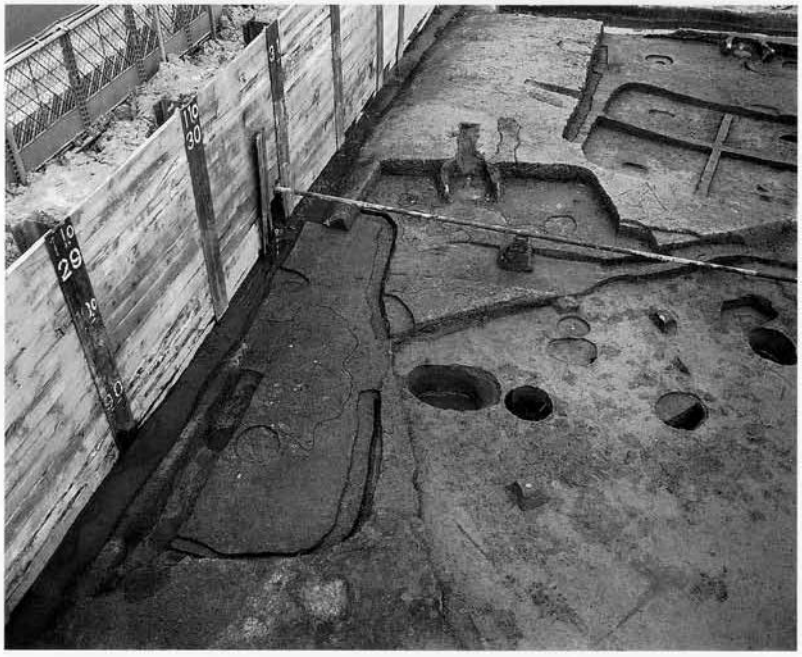
47次・SI03住居跡主柱穴礎板（P1）

図版6

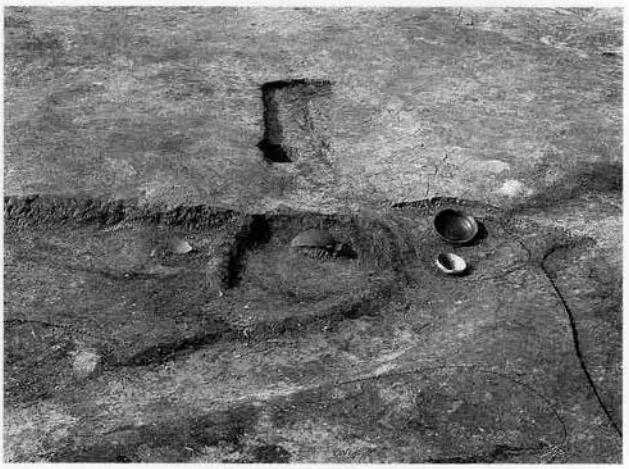
47次・I区
SI04住居跡
（南西から）



47次・I区
SI05・06・25住居跡
（西から）

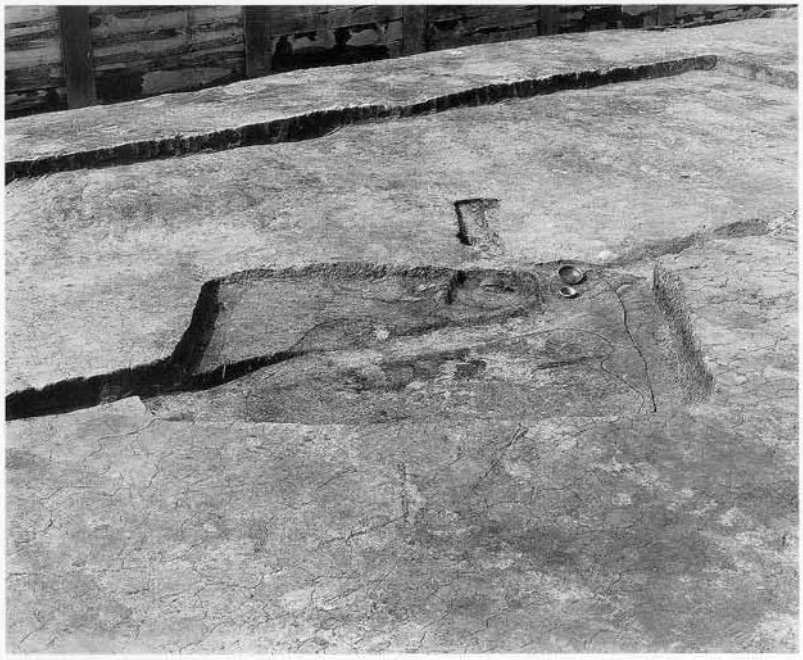


47次・SI06住居跡カマド（新・旧）



47次・SI07住居跡カマド

図版7



47次・Ⅰ区
SI07住居跡
（南から）

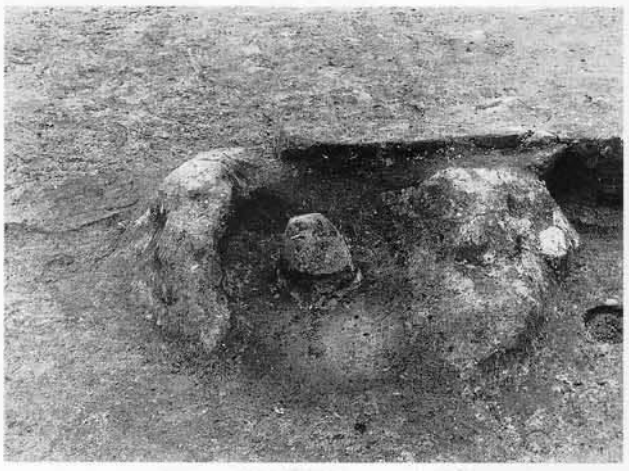
47次・Ⅰ区
SI08･09住居跡
（西から）

47次・Ⅰ区
SI10住居跡
（南東から）

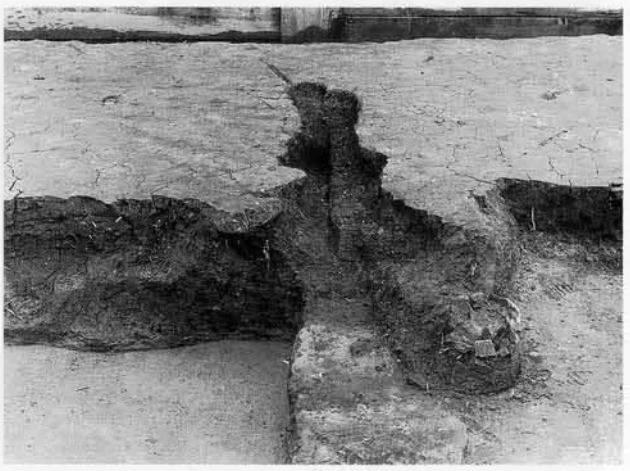
図版8

47次・I区
SI11住居跡
（南西から）

47次・I区
SI13住居跡
（南から）



47次・SI11住居跡カマド（新）



47次・SI13住居跡カマド

図版9

47次・I区
SI14a住居跡
（南から）

47次・I区
SI14b住居跡
（南から）

47次・I区
SI15住居跡
（南東から）

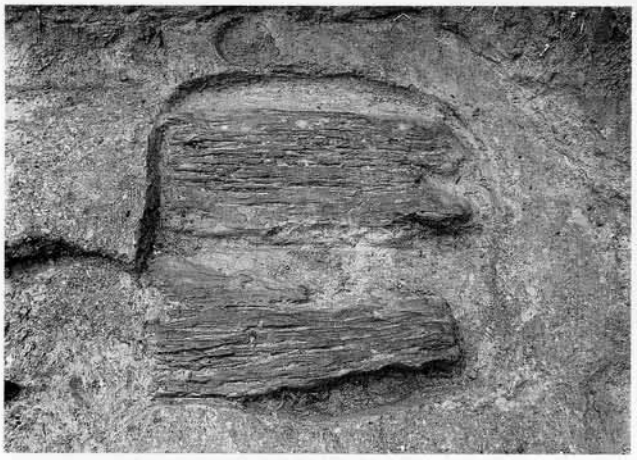
図版10

47次·SI08 住居跡主柱穴断面（P1）

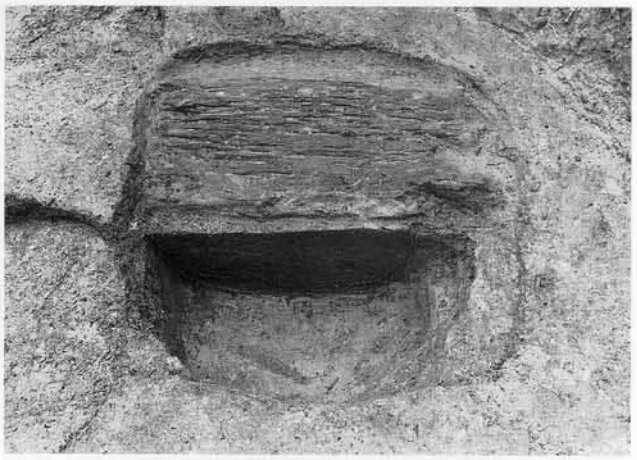
47次·SI11 住居跡主柱穴断面（P3）

47次・SI14b住居跡カマド断面

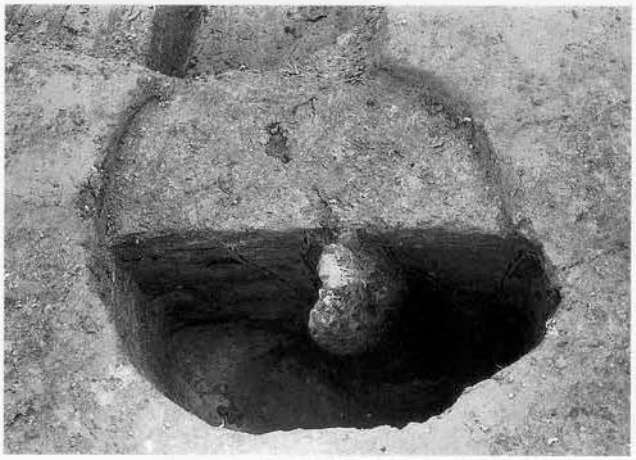
47次・SI14b住居跡カマド



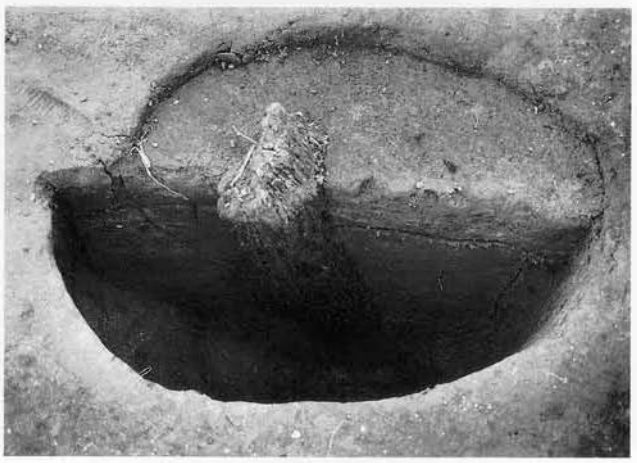
47次・SI14b 住居跡貯蔵穴状ピット（K1）



47次・SI14b 住居跡貯蔵穴状ピット断面（K1）



47次・SI14 住居跡主柱穴断面（P1）

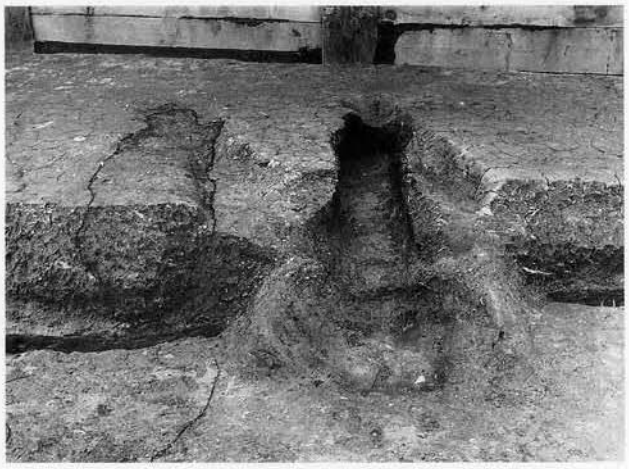


47次・SI14 住居跡主柱穴断面（P3）

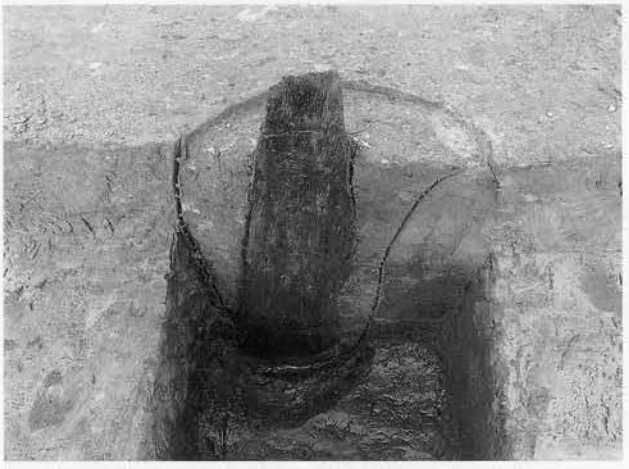
図版 11

47次・I区
SI16住居跡
（南東から）

47次・II区
SI36・37・55住居跡
（南西から）



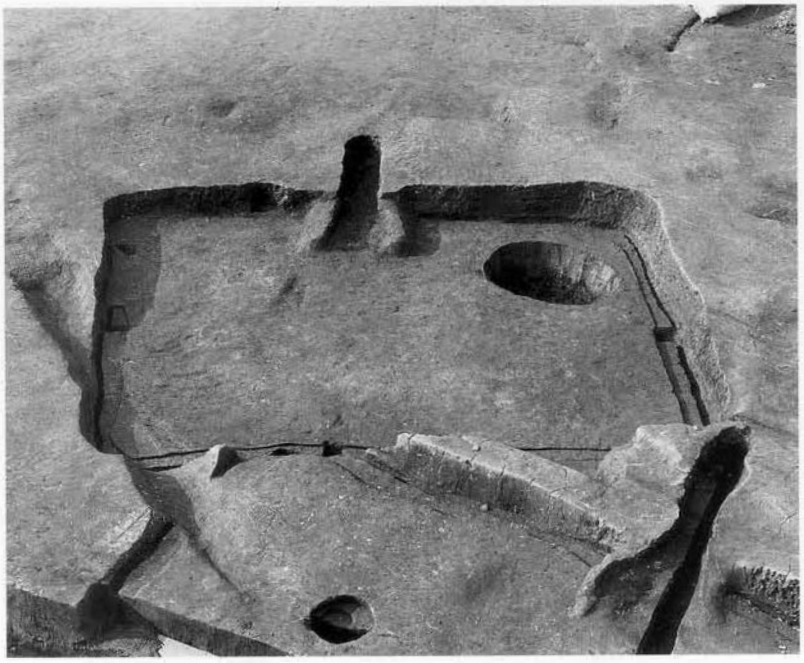
47次・SI16住居跡カマド（新・旧）



47次・SI36住居跡主柱穴断面（P4）

図版12

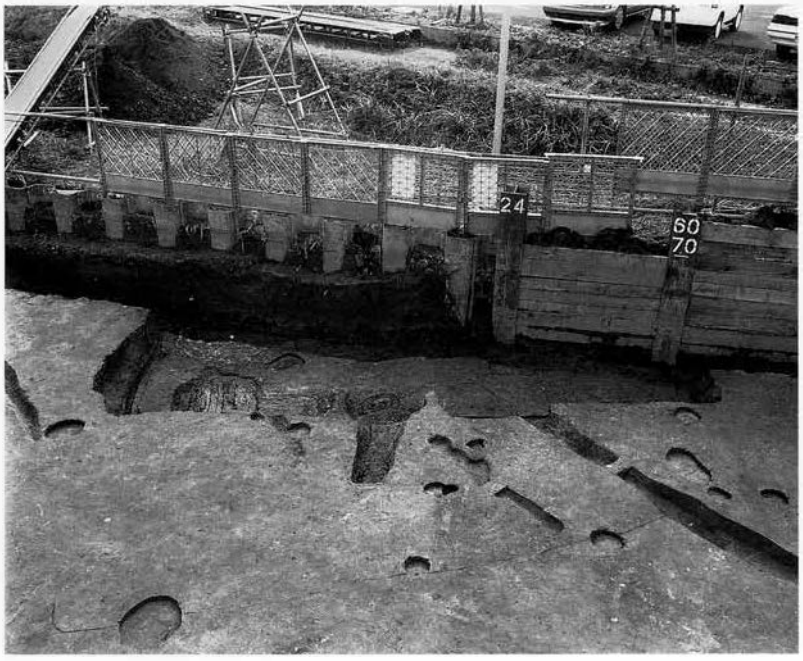
47次・Ⅱ区
SI42・43住居跡
（南東から）



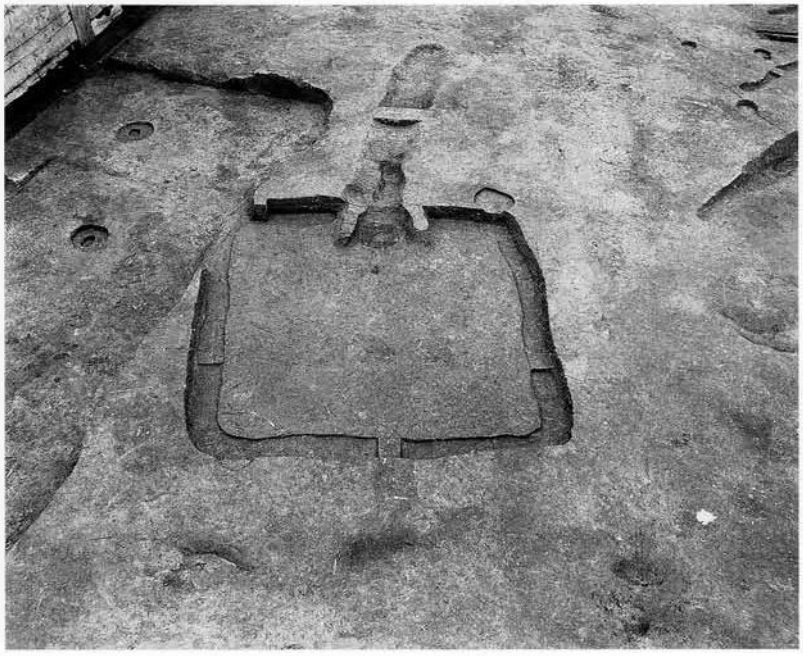
47次・Ⅱ区
SI44住居跡
（南西から）

47次・SI36住居跡主柱穴底面の樹皮（P3）

47次・SI36住居跡主柱穴底面の樹皮（アップ）



47次・Ⅱ区
SI45住居跡
（北から）



47次・Ⅱ区
SI47住居跡
（南西から）

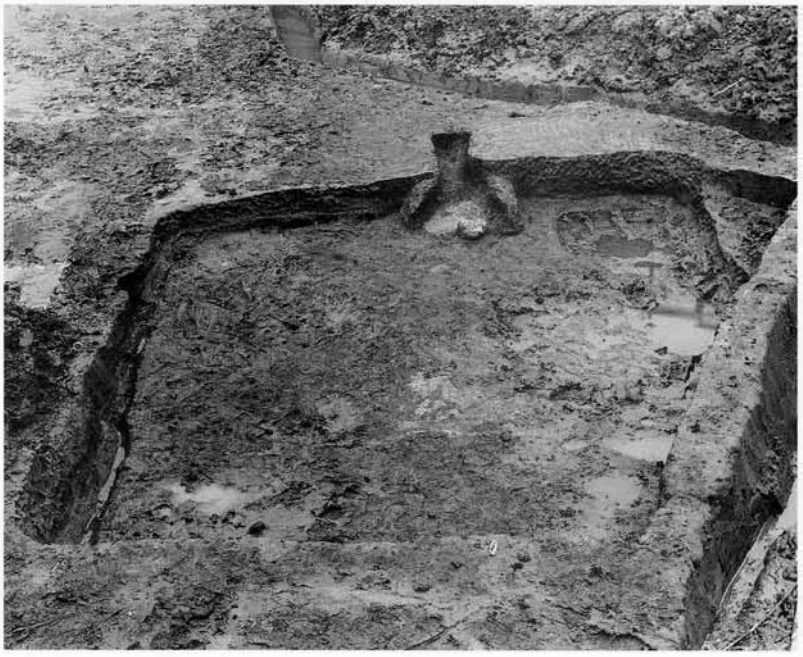
47次・SI45住居跡カマド

47次・SI45住居跡貯蔵穴状ピット（K1）

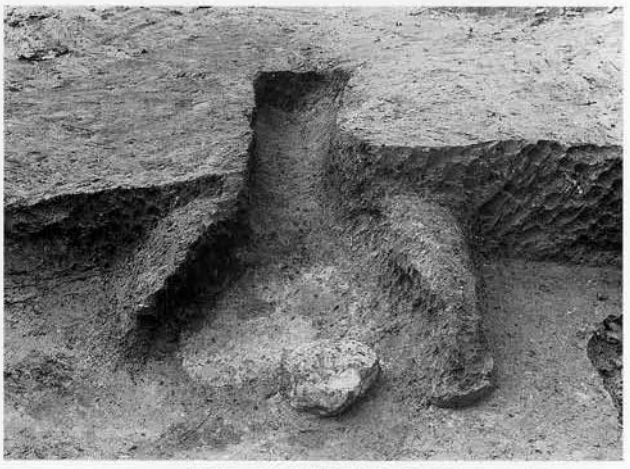
図版14

47次・Ⅱ区
SI51～54住居跡
SK59土壙
（西から）

47次・Ⅲ区
SI80住居跡
（南東から）



47次・SI51住居跡カマド



47次・SI80住居跡カマド

図版15

47次・Ⅱ区
SA34a・b材木塀跡
SD32・33溝跡
（南東から）

47次・Ⅱ区
SA34a・b材木塀跡断面

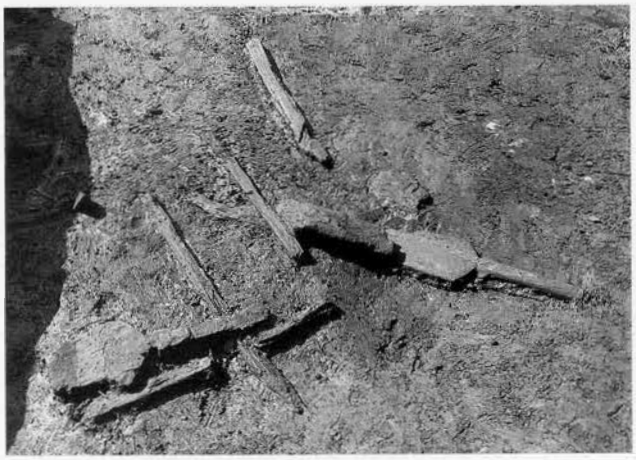
47次・Ⅱ区
SD32・33溝跡断面

47次・SA34a材木塀跡（南東から）

47次・SA34b材木塀跡（南東から）

47次・SA34a材木塀跡縦断面

47次・SA34b材木塀跡縦断面



47次・SD33溝跡木製品出土状況（鍬）

47次・SD33溝跡木製品出土状況（曲物）

47次・SD33溝跡木製品出土状況（樋）

47次・SD50河川跡（南から）

図版17

1

2

3

4

5

6

7

8

9

図版 18　44 次調査、47次 SI01·03 住居跡出土土器

1～5：44次
6・8：SI01
7・9：SI03

1

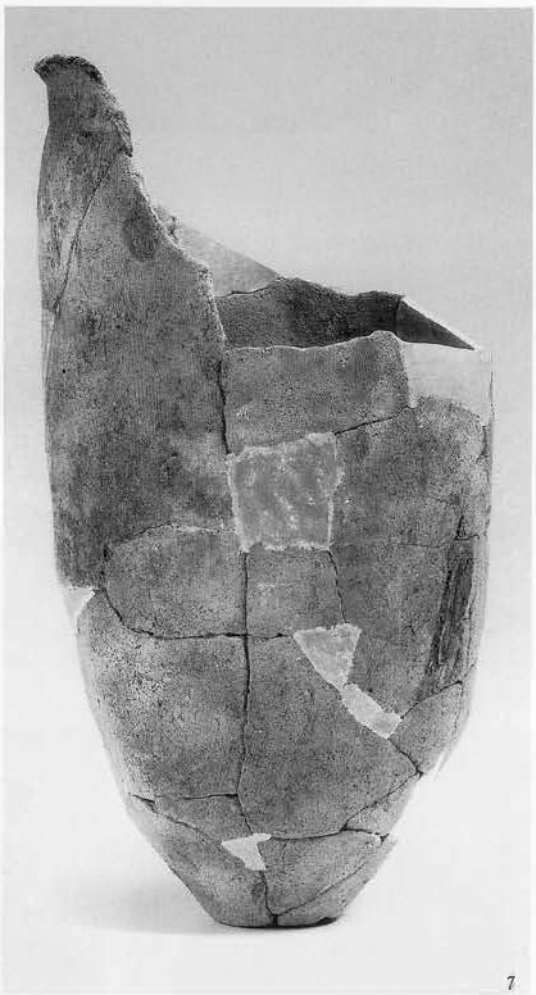
2

3

4

5

6


7

8

9

10

図版 19　47次 SI04·05·06 住居跡出土土器

1～7：SI04
8・9：SI05
10：SI06

1

2

3

4

5

6

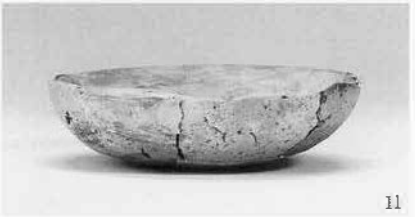
7

8

9a

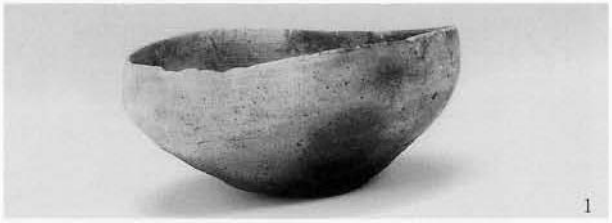
9b

10


11

図版20　47次 SI06·07·09·25·27 住居跡出土土器

1：SI25　2・3：SI06
4・5：SI27　6～9：SI07
10·11：SI09



図版21　47次 SI09·10·11住居跡出土土器

1～3：SI09
4・5：SI10
6～9：SI11

図版22　47次 SI11・13・14b 住居跡出土土器

1：SI11　2：SI13
3：SI12　4～10：SI14b

1b

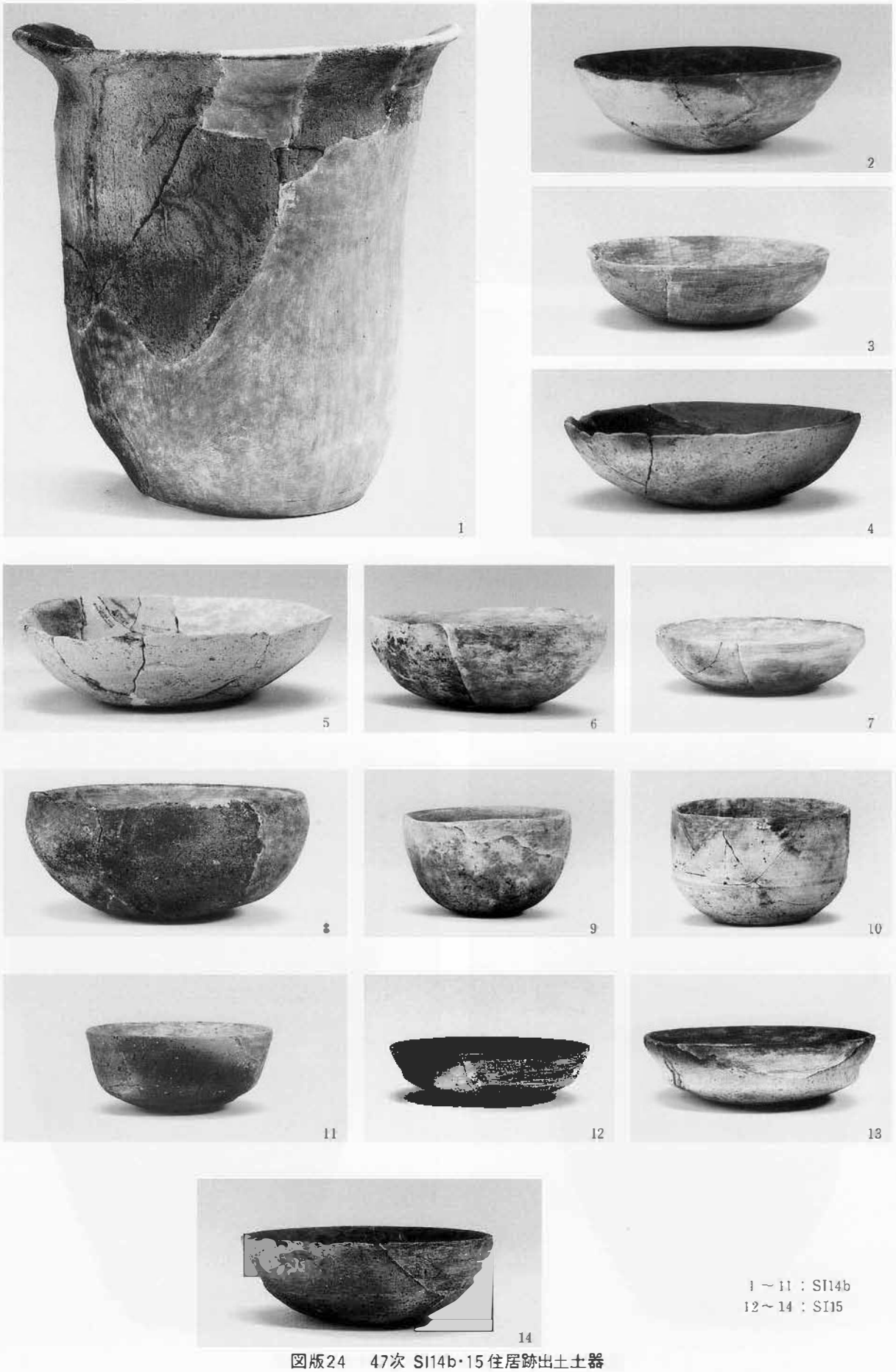
1a

2

3

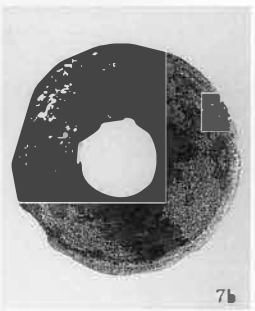
4

図版23　47次 SI14b 住居跡出土土器・土製品



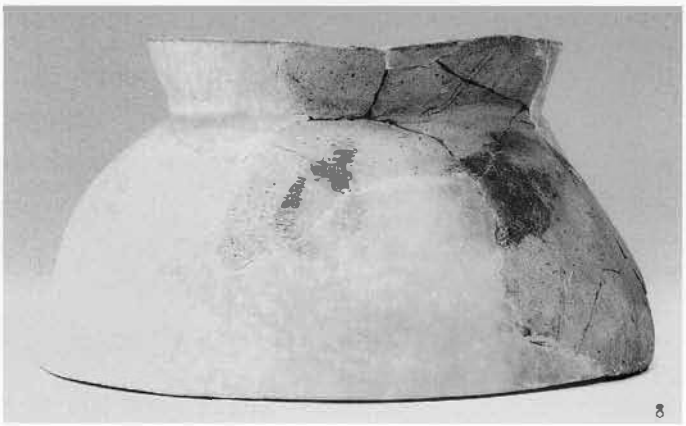
1～11：SI14b
12～14：SI15

図版24　47次 SI14b・15住居跡出土土器



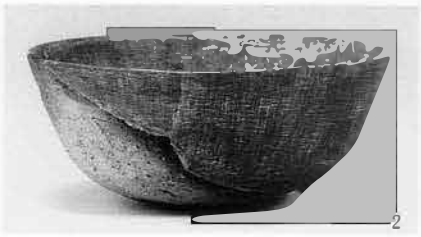
図版25　47次 SI15・16・23住居跡出土土器

1～7 : SI15
8 : SI23
9～12 : SI16



図版26　47次 SI16住居跡出土土器

1


2

3

4

5

6

7

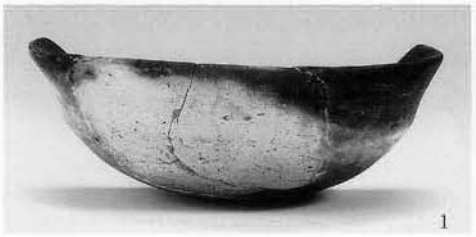
8

9

10

図版27　47次 SI19·36·37 住居跡出土土器

1・2：SI19
3～7：SI36
8～10：SI37



図版28　47次 SI44·48·51·53·54·80住居跡出土土器

1·2·4 : SI44　5 : SI48
3·7 : SI53　6 : SI51
8 : SI54　9~15 : SI80

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

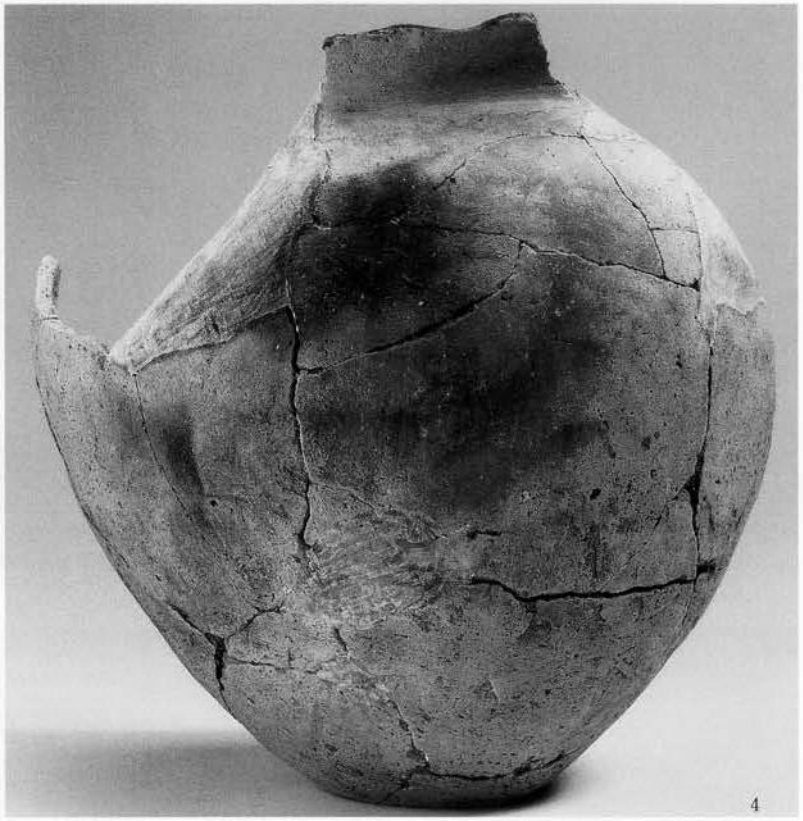
11

図版29　47次 SI80住居跡、SD33溝跡出土土器

1～3 ：SI80
4～11：SD33

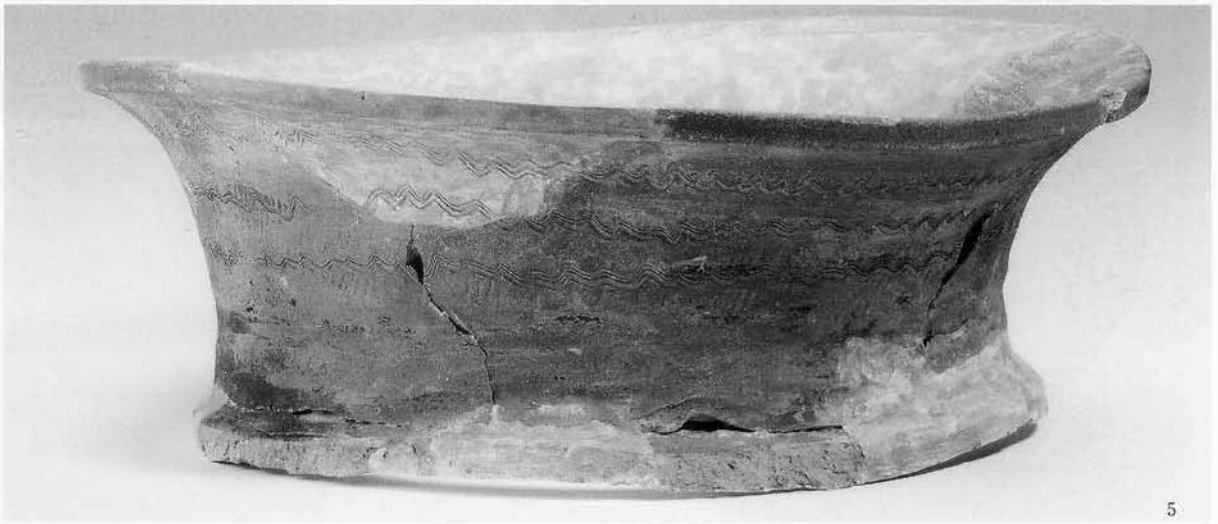
図版 30　47次 SD33 溝跡出土土器

図版31　47次 SD33溝跡出土土器



図版32　47次　SD32·33溝跡出土土器

1～3：SD33
4：SD32



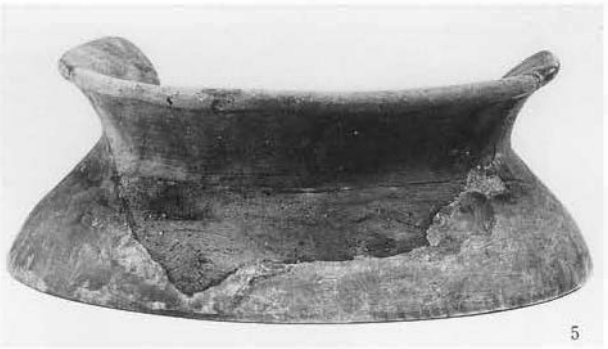
図版33　47次 SD50 河川跡出土土器

1

2

3

4


5

6

7

8

9

10a

11a

10b

11b

図版34　47次 SD50河川跡、SK18土壙出土土器

1~7 : SD50
8~11 : SK18

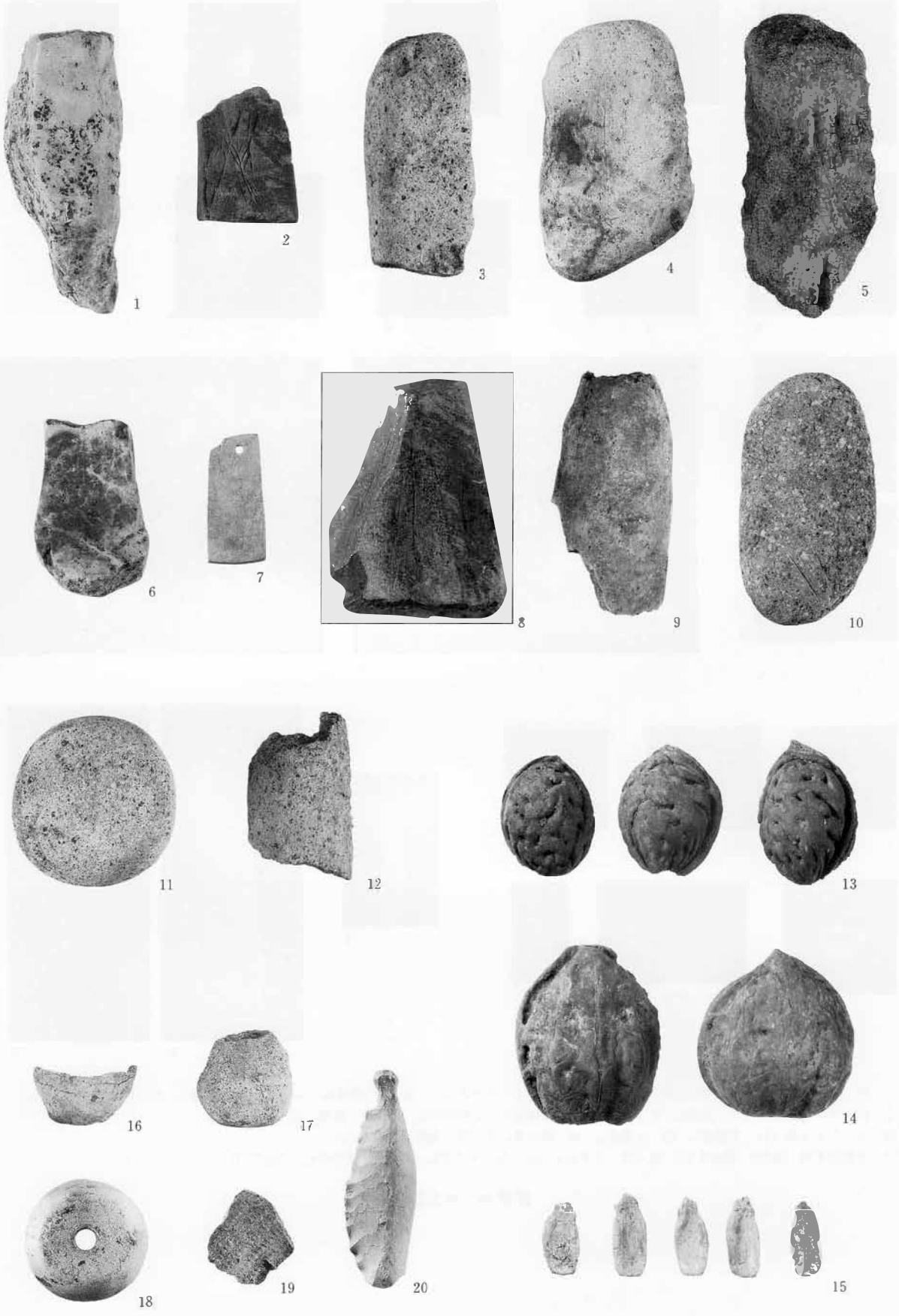
47次　SI14b 住居跡出土遺物

47次　SD33 溝跡出土遺物

図版35

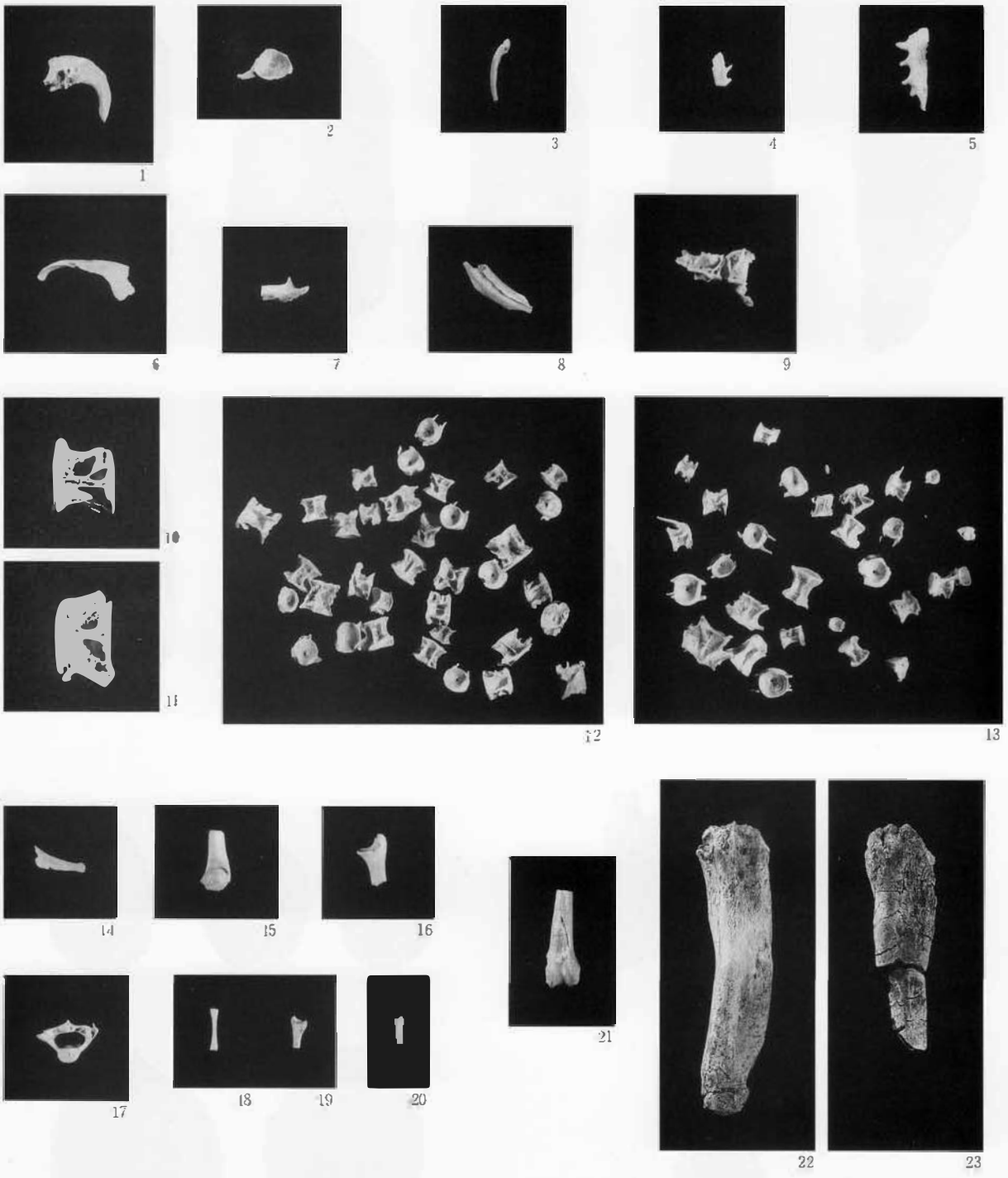
図版36　木製品、土製品、凝灰岩製支脚、凝灰岩の切石

7·8：S=1/2



図版37　石製品、種子類、その他の出土遺物

13～15：S=1/1
18～20：S=1/2



1・2　ウグイ属（1　鰓頭骨L、2　第1脊椎骨）、3・4　フナ属（3　第1背/臀鰭棘、4　第2背/臀鰭棘）、5　ギギ科（胸鰭棘L）、
6～13　コイ科種不明（6　歯骨L、7　角骨L、8　擬鎖骨R、9基後頭骨、10・12　腹椎、11・13　尾椎）、
14～20　カエル類（14　下顎骨L、15　上腕骨L、16　橈尺骨、18～20　指骨）（縮尺2/1）
21　鳥類種不明（指骨）（縮尺3/2）、22・23　イノシシ（22　第2中手骨L、23　第5中手骨R）（縮尺1/1）

図版38　出土動物遺体

付編　宮城県一里塚遺跡出土木製品の樹種同定

松葉礼子（パレオ・ラボ）

1．はじめに

宮城県黒川郡大和町吉岡にある一里塚遺跡から出土した木製品の樹種を同定した。これらの遺物は、7世紀後葉～8世紀初頭頃の遺構に付随するもので、木製品の年代もこれらに準じると考えられる。樹種を調べた製品は、柱・礎板など建築材と曲物・竪杵等である。これらの木製品の樹種を明らかにする事によって、本遺跡の性格を明らかにすることを目的として、樹種を調べた。

2．方法と記載

同定には、木製品から直接片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版ａ）、接線断面（板目と同義・写真図版ｂ）、放射断面（柾目と同義・写真図版ｃ）の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠を後述する。結果は、表1に示す。なお、作成した木材組織プレパラートは、㈱パレオ・ラボで保管されている。

表1　宮城県一里塚遺跡の樹種同定結果

MIG No.	樹　種	遺物番号	製　品　名	遺　構　名	層　序	備　考	日付
MIG 490	樹皮	6	円形曲物底板	47次 SD33	10層		971017
MIG 486	クヌギ節	2	鍬	47次 SD33	8～10層	（完形品）	97
MIG 487	クヌギ節	3	鍬	47次 SD33	8～10層		97
MIG 485	クリ	1	建築部材？	47次 SD33	8層		971009
MIG 489	ケヤキ	5	槽	47次 SD33	10層		971020
MIG 500	オニグルミ	16	礎板	47次 SI23		P1	970911
MIG 499	サクラ属	15	礎板	47次 SI03		P1	970829
MIG 501	サクラ属	17	礎板	47次 SI03		P3	970829
MIG 503	樹皮	19	礎板	47次 SI36		P3	971217
MIG 488	アサダ	4	竪杵	47次 SD33	10層		971020
MIG 505	ケヤキ	21	貯蔵穴状ピットの蓋板	47次 SI14b		K1	970909
MIG 492	クマノミズキ類	8	柱	47次 SI11		P3	970910
MIG 491	クリ	7	柱	47次 SI08		P1	970822
MIG 493	クリ	9	柱	47次 SA34b			97
MIG 494	クリ	10	柱	47次 SA34b			97
MIG 495	クリ	11	柱	47次 SA34b			97
MIG 496	クリ	12	柱	47次 SA34 b			97
MIG 497	クリ	13	柱	47次 SA34b			97
MIG 498	クリ	14	柱	47次 SA34 b			97
MIG 502	クリ	18	柱	47次 SI36		P4	971218
MIG 504	クリ	20	柱	47次 SI14b		P3	970912

同定根拠

オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. *var. sachalinensis*（Miyabe et Kudo）Kitamura

写真図版1a～1c：MIG500

中型で丸い道管がほぼ単独で散在する散孔材。道管径は、晩材部に移行するにつれ徐々に径を減じる。道管の穿孔は、単一。木部柔組織は主に短接線状に配列し、晩材部で顕著。放射組織は、1～5列程度の同性。

以上の形質により、クルミ科のオニグルミの材と同定された。オニグルミは、北海道～九州の暖帯

～温帯に分布し、川沿い等の湿気の多い所を好む落葉高木である。

アサダ　*Ostrya japonica* Sargent: *O.virginica* Wild. var. *japonica* Maxim. ex Sargent　BETULACEAE
写真図版2a～2c:MIG488

中～小型の壁の厚い道管が放射方向に複数複合し、散在する散孔材。晩材部に向って直径が小さくなり、密度も低くなる。道管の内壁には、微細な螺旋肥厚があり、道管の穿孔は単一。木部柔組織は短接線状。放射組織は1～3細胞幅、時に結晶を持つ。

以上の形質により、カバノキ科のアサダと同定した。アサダは、国内は北海道～九州の温帯から暖帯に分布する落葉高木である。

クリ　*Castanea creneta* Sieb. et Zucc.　FAGACEAE　写真図版3a～3c：MIG496

年輪の始めに、やや放射方向に伸びた大型の丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、小型で、薄壁の角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、晩材部で接線状から短接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は、対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは、北海道～九州までの温帯～暖帯にわたって広く分布する落葉性高木、あるいは中高木である。

コナラ属クヌギ節　*Quercus* Sect. *Cerris*　FAGACEAE　写真図版4a～4c：MIG487

年輪のはじめに丸い大道管が一列に並び、晩材部では徐々に径を減じた丸い道管が放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、放射組織は、複合放射組織と単列同性の物からなり、道管との壁孔は柵状。木部柔組織が、接線方向にほぼ帯状に分布する。

以上の形質により、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定した。クヌギ節は、いずれも落葉高木のクヌギ（岩手県以南～琉球）とアベマキ（山形県以西～九州）が含まれる。

ケヤキ　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino　ULMACEAE　写真図版5a～5c：MIG489

年輪の始めに大型で丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部で、薄壁の多角形の小道管が多数集合して接線方向～斜め接線方向に配列する。道管穿孔は単一、小道管内部には螺旋肥厚を持つ。木部柔組織は、周囲状～連合翼状を呈し、放射組織は1～8列程度の異性で、その上下端は時に大きめの結晶細胞が見られる。

以上の形質により、ニレ科のケヤキの材と同定した。ケヤキは、本州～九州の暖帯～温帯の谷あい、斜面などの適潤な肥沃地に広く分布する。材は、木目が美しく重硬で狂いが少なく、保存性が高い。

サクラ属　*Prunus*　ROSACEAE　写真図版6a～6c：MIG501

小型の丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁には明瞭な螺旋肥厚をもつ。放射組織は1～5細胞幅程度で、同性に近い異性。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定した。日本のサクラ属は、落葉・常緑の低木～高木の25種知られている。

クマノミズキ類 *Cornus* cf. *brachypoda* C.A.Meyer　CORNACEAE　写真図版7a～7c：MIG492

小型で丸い道管がほぼ単独で散在する散孔材。道管の穿孔は、20～30本程度の横棒からなる階段状。

放射組織は、異性で2～4細胞幅程度。上下に直立細胞を持つ紡錘形の物と、直立細胞のみからなる単列のものからなる。

以上の形質により、ミズキ科のクマノミズキ、もしくはヤマボウシの材と同定された。ミズキとは、道管が複合しない事から区別される。

3．結果と考察

今回確認された製品は、柱、礎板、鍬、竪杵、樋、曲物である。これらの製品毎に使用樹種を検討する。

柱は、計10点確認されているが、1点クマノミズキ類を除きすべてクリが使用されている。建築材にクリが多用される傾向は、中在家遺跡群で確認されて以降（鈴木ほか1996）、山王遺跡多賀前地区（松葉ほか1996）ほか、多くの遺跡で確認されている。これらの要因には、クリ材自体の材質が柱材に向いている事やヒノキなど近畿地方で多用されている樹種が自生していないことが考えられる。山王遺跡多賀前地区では、井戸枠などの製品にはモミ属が使用されているにも関わらず、柱には特徴的にクリ材の利用が多い。

一方、同じ建築材である礎板には雑多な樹種が入り混じっている。これは、礎板自体の機能が、底面積を広げる為だけであり、材質が考慮される必要が無かった為に生じた結果と考えられる。

農具には、鍬にクヌギ節が使用され、北関東や中在家遺跡と同様の傾向が見受けられる（鈴木ほか1996）。竪杵はアサダである。中在家遺跡でも鋤に1点アサダが確認されており、少数ながら宮城県には農具にアサダを利用することが確かめられた。

曲物は樹皮であった。曲物に樹皮が使用される事例は、無いわけではないが、類例は非常に少ない（秋田県添川の縄文時代晩期の戸平川遺跡（読売新聞 1996.9.5）、中世末の長崎県の今福遺跡、古墳時代の千葉県菅生遺跡（島地ほか 1989））。樹皮は、形成層の部分まで切れ込みを入れられれば、比較的楽に薄板状の素材が得られる上、木材を加工する際の副産物である。樹皮は従来遺物として検討されてこなかった為に確認点数が少ないと考えられ、類例は確認されている以上にあると考えられる。

本遺跡の建築材の特徴は、多賀城址周辺の官衙と類似し同様の選択性が見受けられる。農具にも同様の傾向が確認でき、この類似が官衙と密接に関連する本集落の性格から生じているのか、それとも一貫した県内の傾向であるのかは、今後の他地方の類例を待ちたい。

引用文献

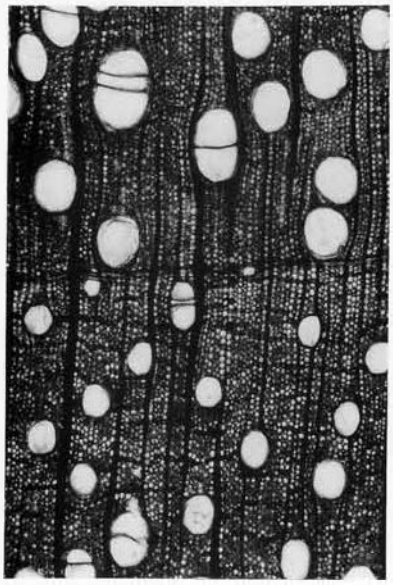
鈴木三男・能城修一・松葉礼子．1996．仙台市中在家遺跡群出土木材の樹種．中在家南遺跡他　仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書　第2分冊　分析・考察編，339-413，仙台市教育委員会．

松葉礼子・鈴木三男．1996．宮城県多賀城市山王遺跡多賀前地区出土木材の樹種．山王遺跡Ⅲ―仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書―多賀前地区遺物編．239-283，宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局．

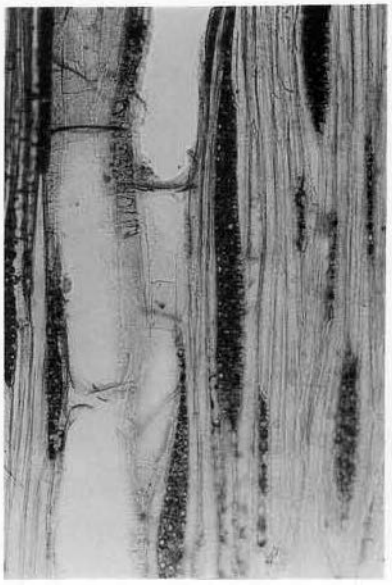
島地　謙・伊東隆夫・林　昭三・鈴木三男・
光谷拓実・布谷知夫・能城修一．1988．日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣．296pp．

図版1　一里塚遺跡出土木材組織顕微鏡写真

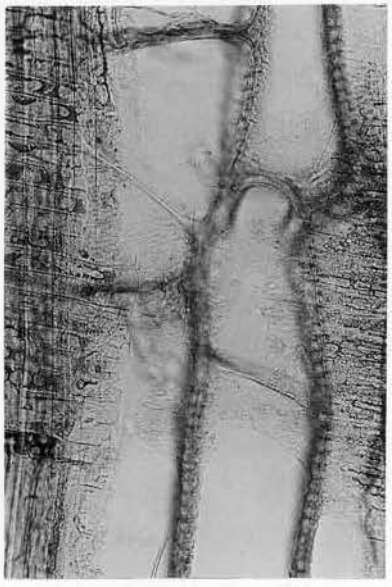
Bar:



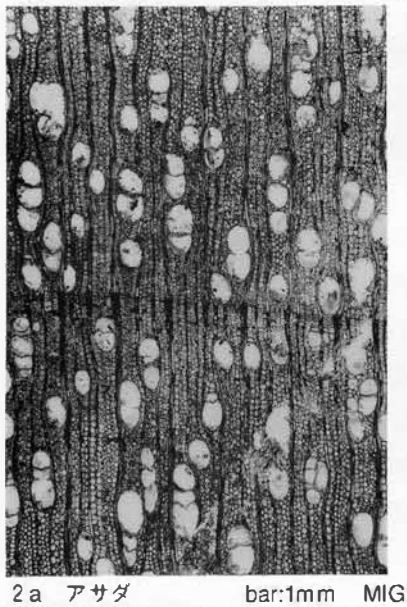
1a　オニグルミ　bar:1mm　MIG 500



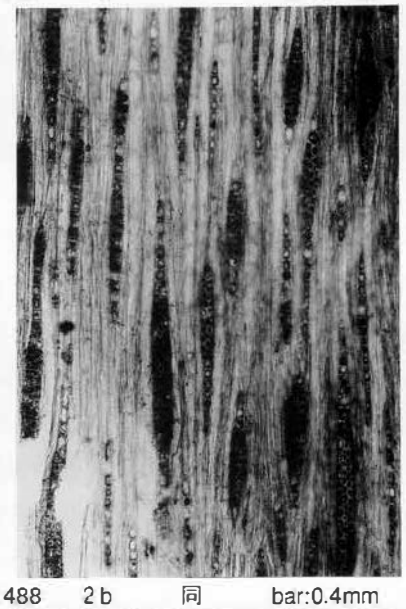
1b　同　bar:0.4mm



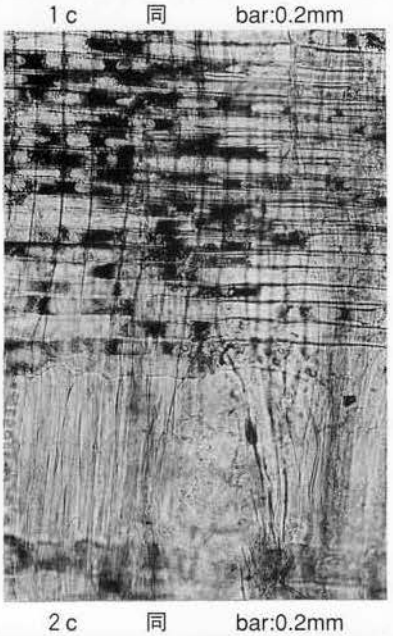
1c　同　bar:0.2mm



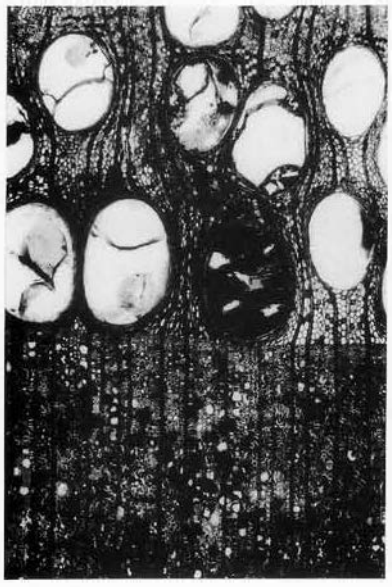
2a　アサダ　bar:1mm　MIG 488



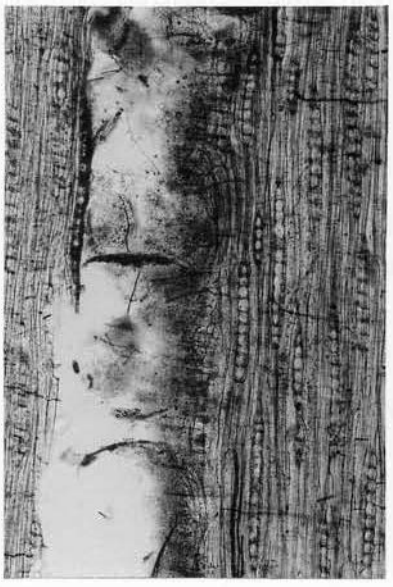
2b　同　bar:0.4mm



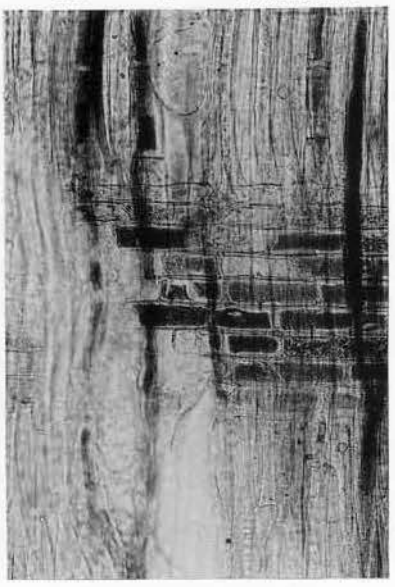
2c　同　bar:0.2mm



3a　クリ　bar:1mm　MIG 496



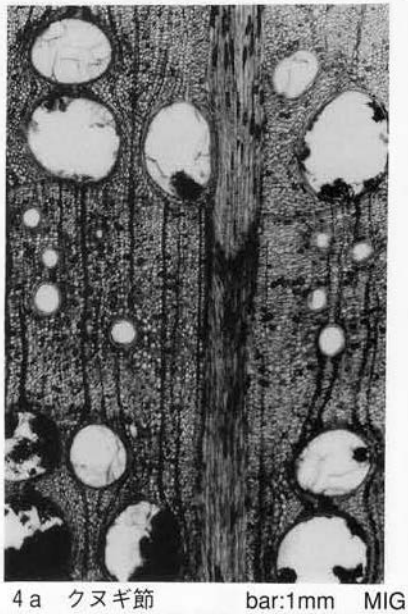
3b　同　bar:0.4mm



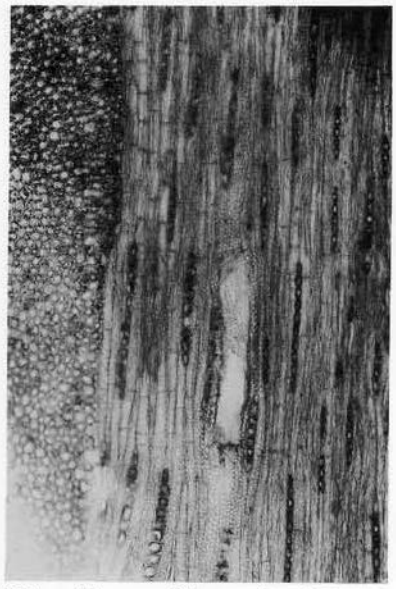
3c　同　bar:0.2mm

図版 2　一里塚遺跡出土木材組織顕微鏡写真

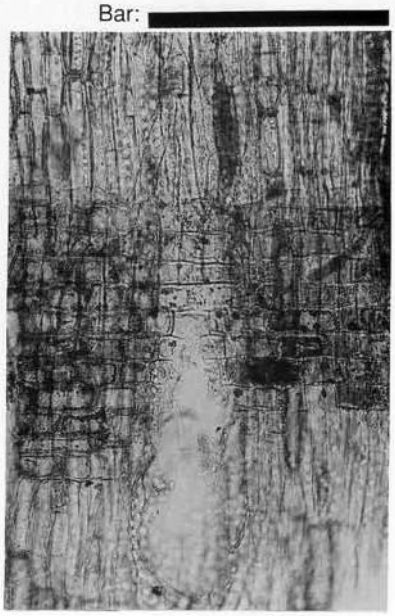
Bar:



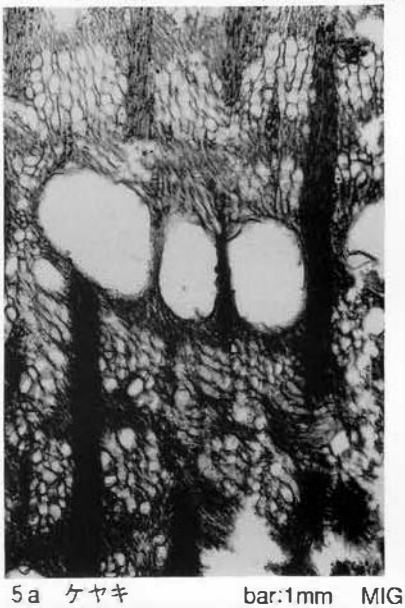
4 a　クヌギ節　bar:1mm　MIG 487



4 b　同　bar:0.4mm



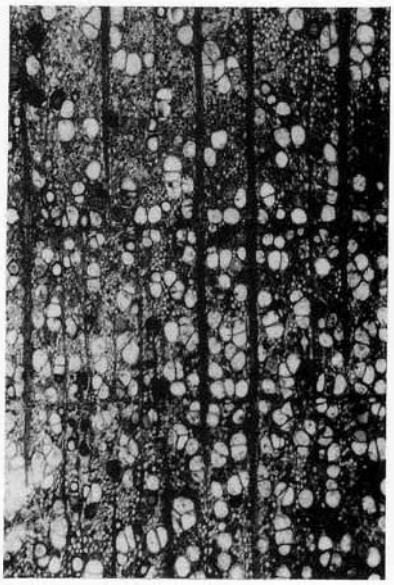
4 c　同　bar:0.2mm



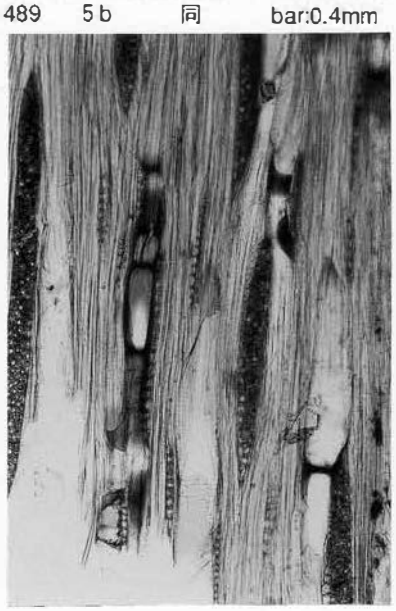
5 a　ケヤキ　bar:1mm　MIG 489

5 b　同　bar:0.4mm

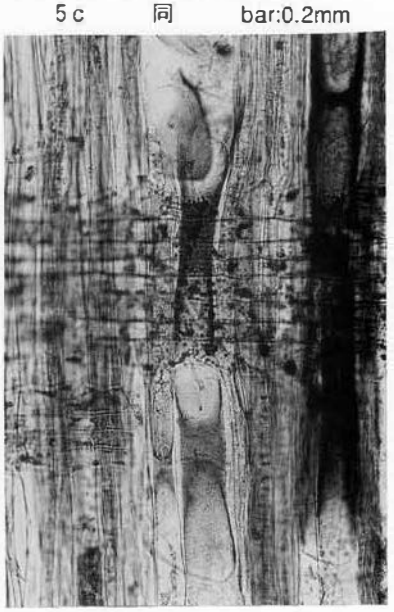
5 c　同　bar:0.2mm



6 a　サクラ属　bar:1mm　MIG 501

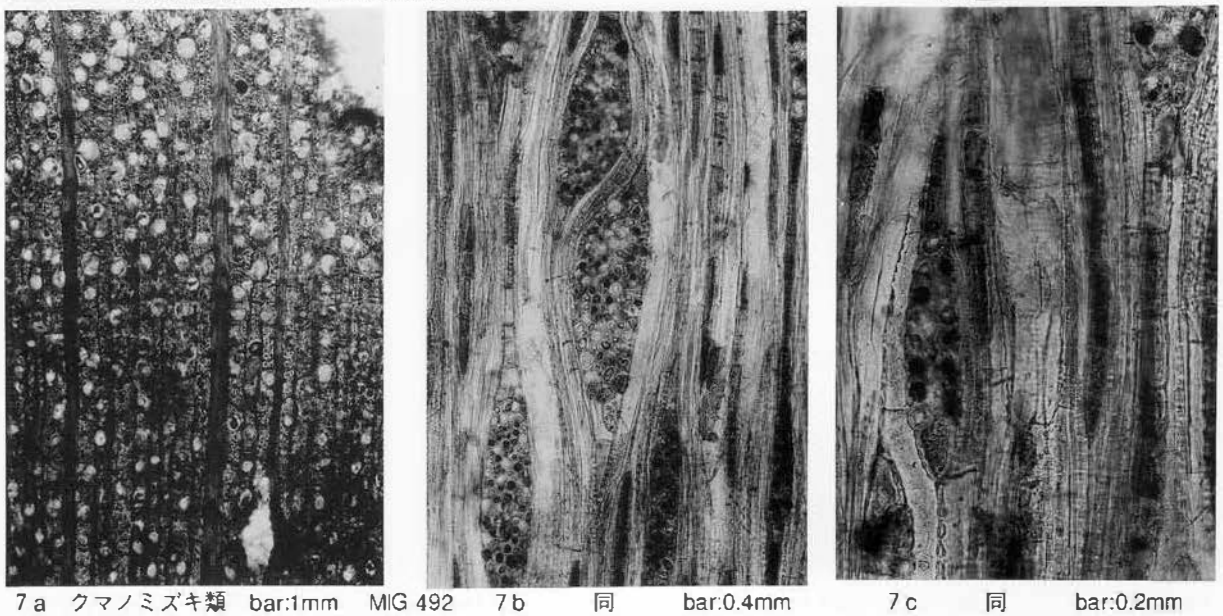


6 b　同　bar:0.4mm



6 c　同　bar:0.2mm

図版 3　一里塚遺跡出土木材組織顕微鏡写真　　Bar: ■■■■■■■■



7 a　クマノミズキ類　bar:1mm　MIG 492　7 b　同　bar:0.4mm　7 c　同　bar:0.2mm

報告書抄録

ふりがな	いちりづかいせき
書名	一里塚遺跡 －第44・47次発掘調査報告書－
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第179集
編著者名	三好秀樹・藤村博之
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8570　宮城県仙台市青葉区本町三丁目８－１
発行年月日	西暦　1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いちりづかいせき 一里塚遺跡	みやぎけんくろかわぐん 宮城県黒川郡 たいわちょう 大和町 おおあざよしおか 大字吉岡 あざひがししばざき 字東柴崎・ おおあざよしだ 大字吉田 あざひのきもない 字桧木地内 ほか	04421	23019	38度 26分 7秒	140度 53分 54秒	44次調査 1996年 05.08～06.04 11.06～11.08 1997年 03.06～03.07	約1,240 ㎡	県道吉岡・鶴巣線の拡幅工事
						47次調査 1997年 06.24～12.24 1998年 07.29～08.20	約2,230 ㎡	県道大和・松島線の拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一里塚遺跡 第44次調査	官衙関連施設	８世紀後葉～ ９世紀中葉頃	掘立柱建物跡６・柱穴列２・材木塀跡１・溝跡６・土壙５・小溝状遺構群ほか	土師器・須恵器・石製品ほか	材木塀による区画を伴い、真北方向を基準に配置された掘立柱建物群で構成される区域。
一里塚遺跡 第47次調査	環濠集落跡	７世紀後葉～ ８世紀初頭頃	掘立柱建物跡６・柱穴列１・竪穴住居跡45・材木塀跡２・溝跡２・河川跡１・土壙19・小溝状遺構群ほか	土師器・須恵器・木製品・土製品・石製品・種子・動物遺体ほか	材木塀と大溝で外郭が区画された集落域で、内部は竪穴住居群で構成されている。官衙と関連した環濠集落と考えられ、構成員には関東地方からの移住者が含まれる。

宮城県文化財調査報告書第179集

一里塚遺跡

—第44・47次発掘調査報告書—

平成11年3月25日印刷
平成11年3月31日発行
発行 宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町3丁目8番1号
印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24